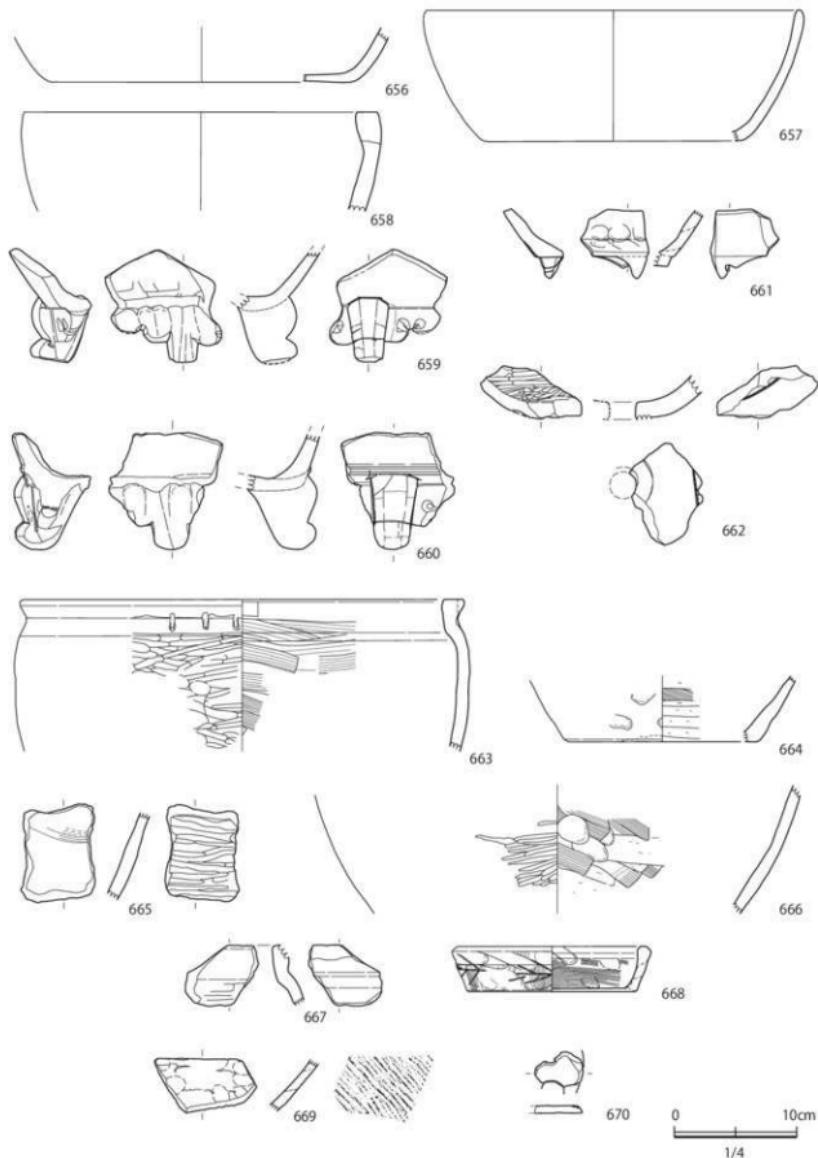
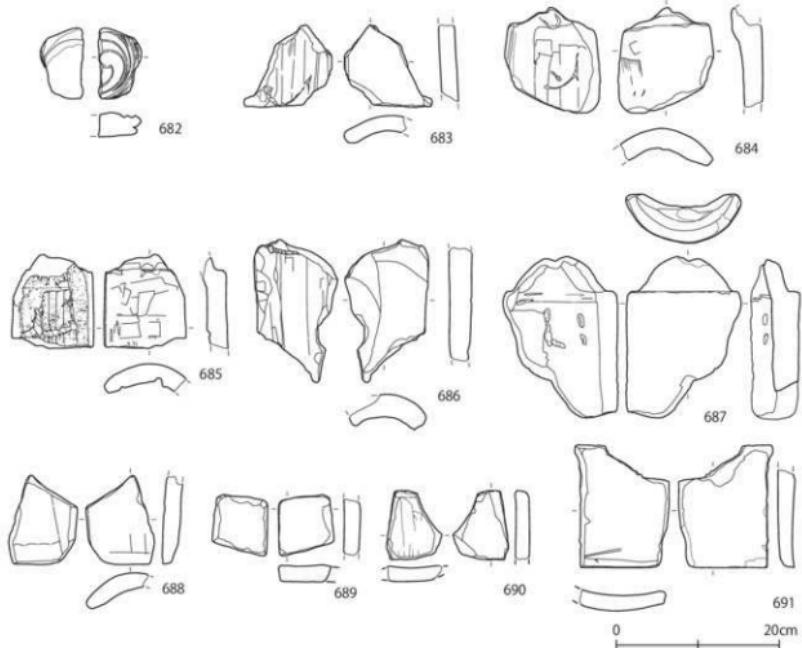
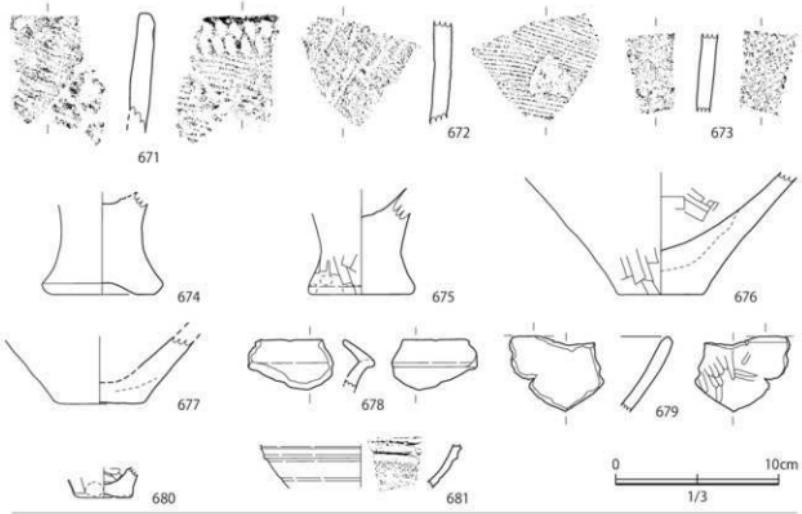


第 148 図 中世土器実測図 (4)

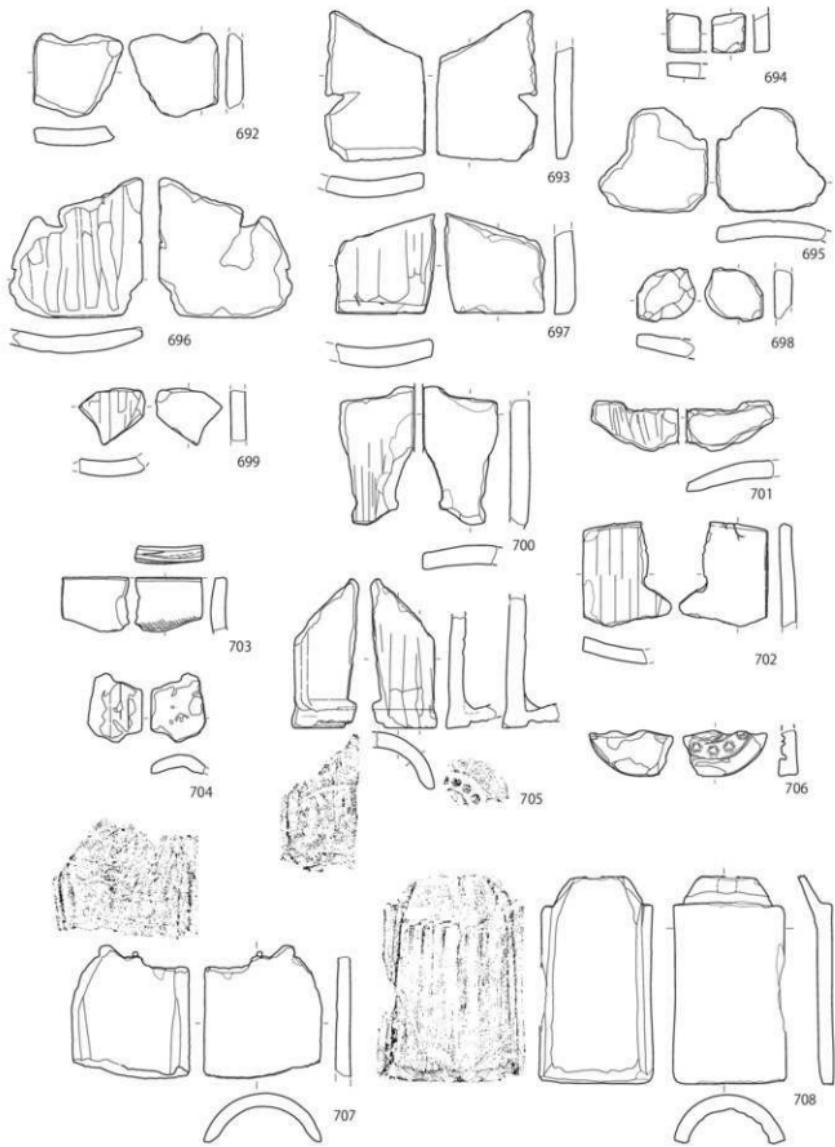


第149図 中世土器実測図(5)



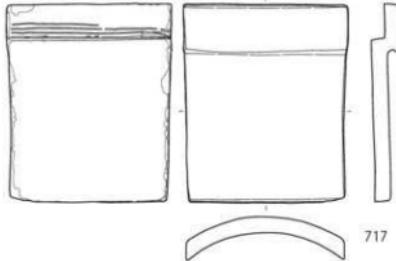
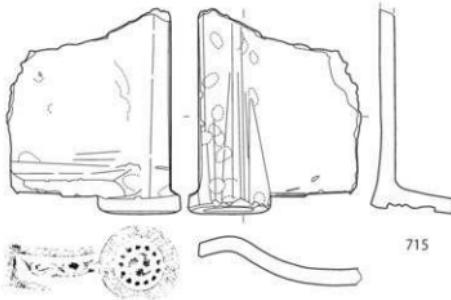
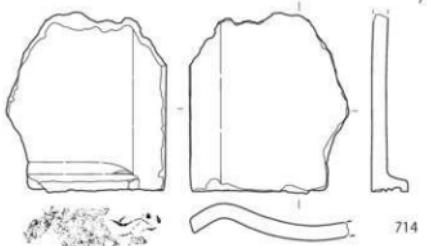
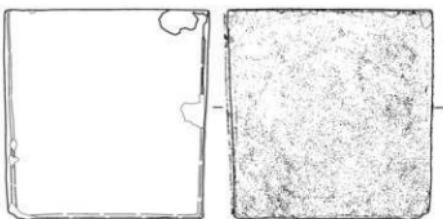
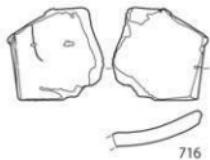
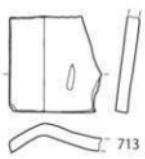
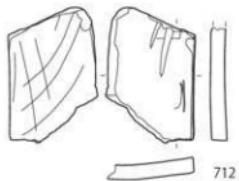
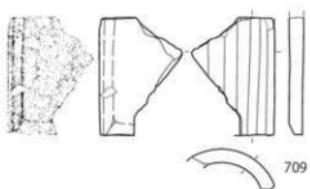
第 150 図 土器実測図・瓦実測図(1)

1/6



第 151 図 瓦実測図 (2)

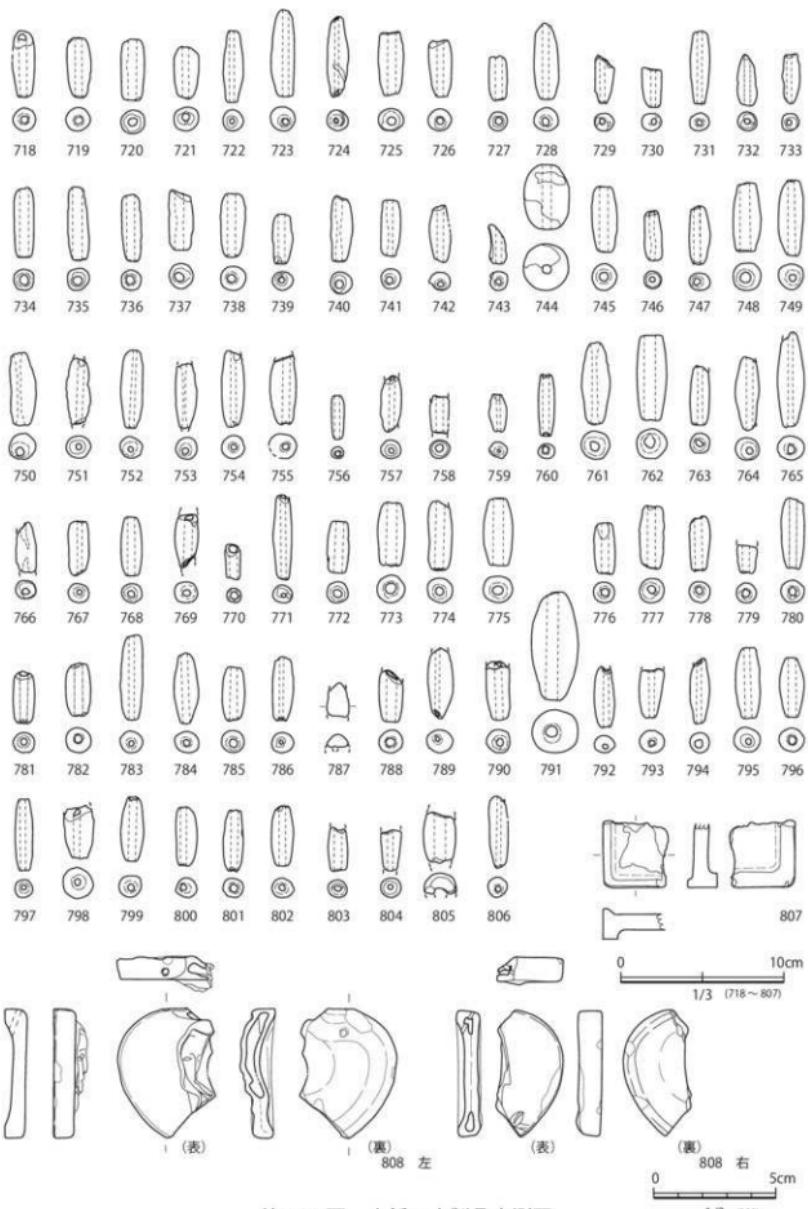
0 20cm
1/6



0 20cm

1/6

第152図 瓦実測図(3)



第153図 土錘・土製品実測図

第5節 金属製品(中近世)

(第154～156図)

1 金属製品(第154～156図: 809～908)

概要 銅製品・鉄製品が表土・耕作土をはじめ遺構内から出土している。

古銭(809～858) 近世以前の銭貨は76枚出土した。うち中世は26枚、近世は33枚、不明17枚である。多くが表土や耕作土層から出土したが、土坑や近世墓からのまとまった出土も見られる。

中世は、開元通寶・元祐通寶・紹聖元寶・大觀通寶・政和通寶・至元通寶・洪武通寶・永樂通寶・宣德通寶を確認し、南宋・北宋・明代に初鑄年を得られるものであるが、中世ではこれらの銭貨を母錢とした模鋳錢が多数流通するため本遺跡出土銭貨についても模鋳錢の可能性がある。

しかし、本銭と模鋳錢との区別は素人目に難しく、本書では明記するに至らない。なお、観察表中では本銭の初鑄年を示す。

近世は寛永通宝のみで、ほぼ全てが一文銭であり四文銭が1枚(838)出土している。一文銭は1期から3期まで確認でき、1期の古寛永が多い。

また、3期では鉄銭や背に「元」字を持つものも出土した。四文銭は真鍮製で波紋は11波である。

銅製品(859～872) 年代については不確定なもののが多いが、ほぼすべて近世に属すると思われる。笄(859～861) 861は蛸もしくは蜘蛛を浮き彫りにした装飾が施されている。

目貫(862) 刀の柄への装飾金具で、不明瞭だが花を組み合せた文様である。

蝶番(863) 円形の蝶番である。

飾金具(864～868) 曲輪K-SD5出土の飾金具である。袈裟金具と思われる。座金と鉢からなり、座金に菊文を描き鍍金を施す。

鉢頭には金は見られず、座金外面にのみ鍍金している。鉢頭はアーチ状の太鼓鉢で、鉢足は残るもののが少ないが、2つに割れる。

環金具(869) 両端先細りの棒を梢円形に曲げたもので、外面に鍍金を施す。

煙管(870～872) 雁首で19世紀以降のものと考えられる。

2 鉄製品(873～905)

釘(873～898) 896を除いて全て断面方形の和釘である。基部上部を叩き潰して折り曲げる巻頭釘が多い。894は両端が先細りになっており、合釘と思われる。

873～890は近世墓出土であり、木棺の木質が銹化し残存する。木質は頭部から1.0cm前後で織維方向が変換しており、木棺材の厚みが推測される。

織維方向は上部が横方向、下部が縦方向のものは、ほとんどに見られるが、873・879の下部は斜め方向である。南側曲輪群の南端に位置する「中山遺跡」の出土遺物にも同様の状況が見られた。

897・898については大型の釘で、898は断面長方形である。

鎧(899・900) 両者ともに半分を欠く。断面は長方形でやや厚みを持つ。火打金の可能性もある。

穿孔のある鉄片(901) 全体形は三角であるが、左側は欠損している。穿孔があることから、飾金具の可能性がある。あるいは、形状から火打金の可能性も考えられる。

紡錘車(902) ドーム状の鉄板の中心に軸を通すものと考えられる。宮崎県都城市の都之城取添遺跡に出土例がある。

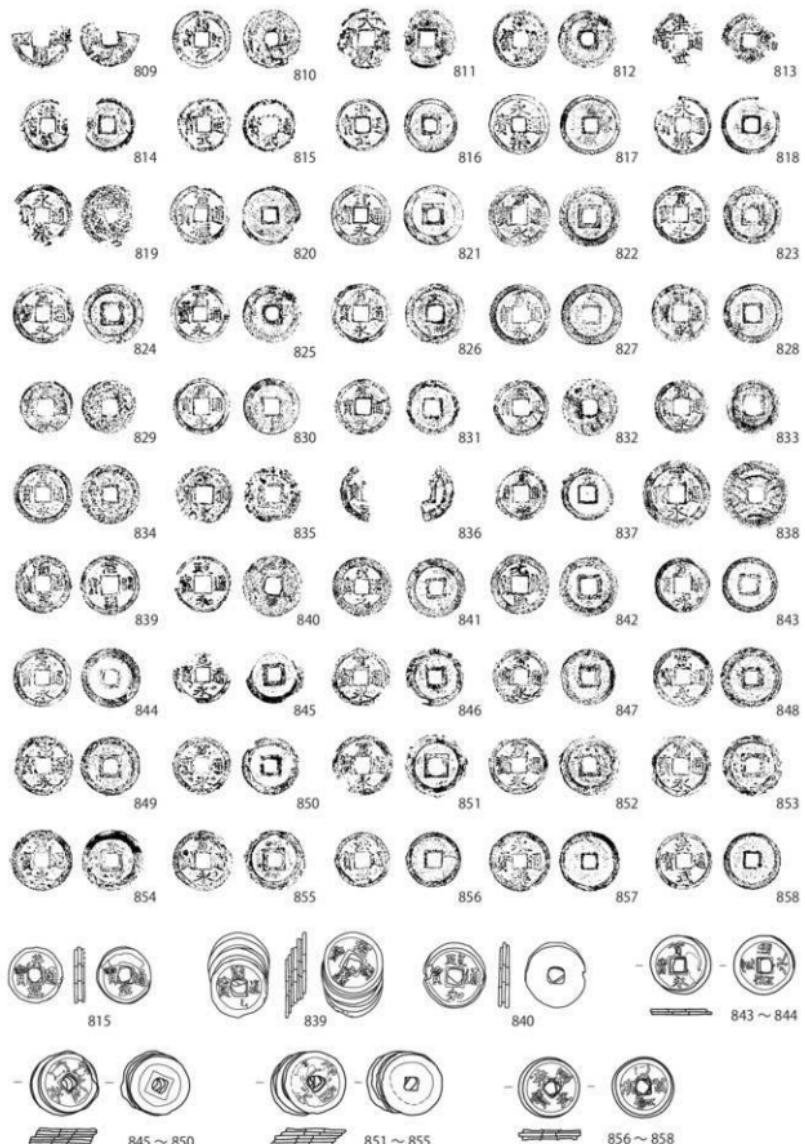
鎌・刀子・ヤリ(903・904・905) 903は鎌の先端部である。904は刀子で、片刃がすべて刃部となってしまい非常に長い。

905は刀部を確認することができないが、両側に闇をもち、先端に向かって尖る形状からヤリと思われる。闇から茎まではなだらかに落ちる。両端が欠損するため全長は不明だが、重量はかなり重い。

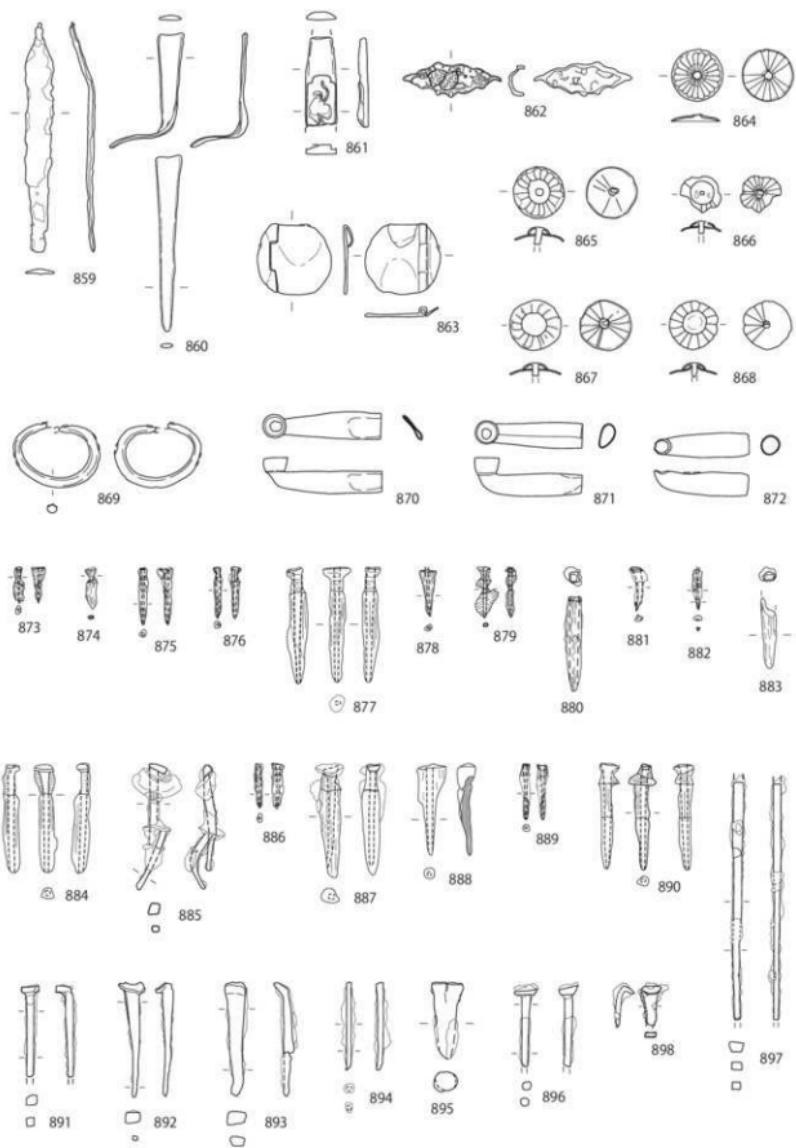
鋳造品(906・907) 906は鉢である。口縁部内面が玉縁状となり、器壁は薄い。907は板状の破片である。

轡(908) 素面轡である。鏡板と断面方形の引手もしくは銜の一部が残存するのみである。

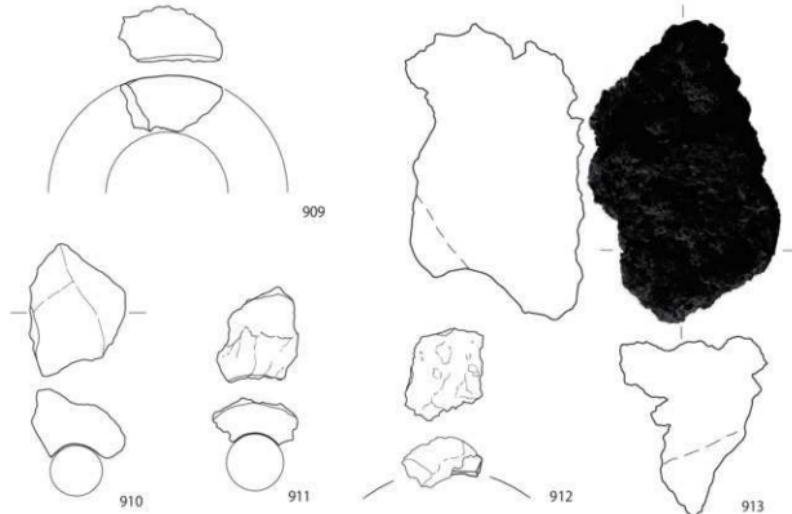
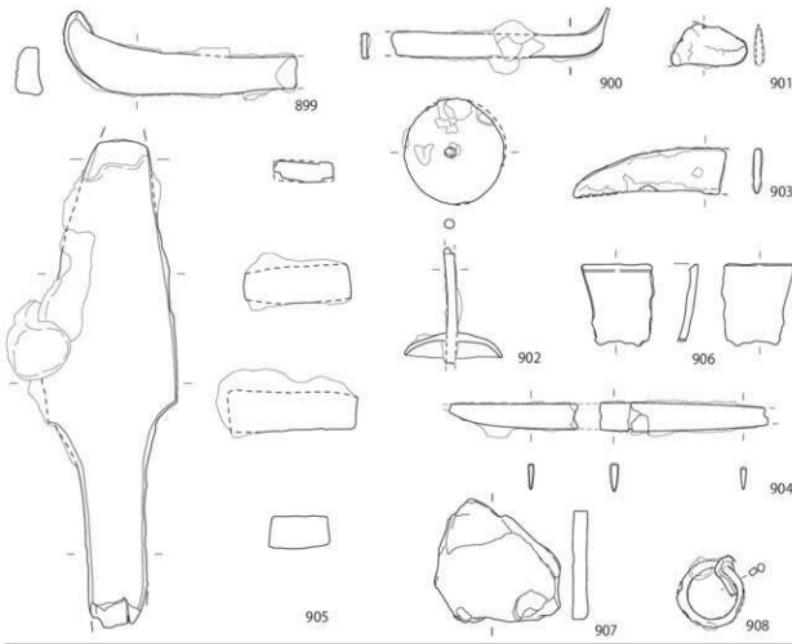
(児玉)



第154図 古銭実測図

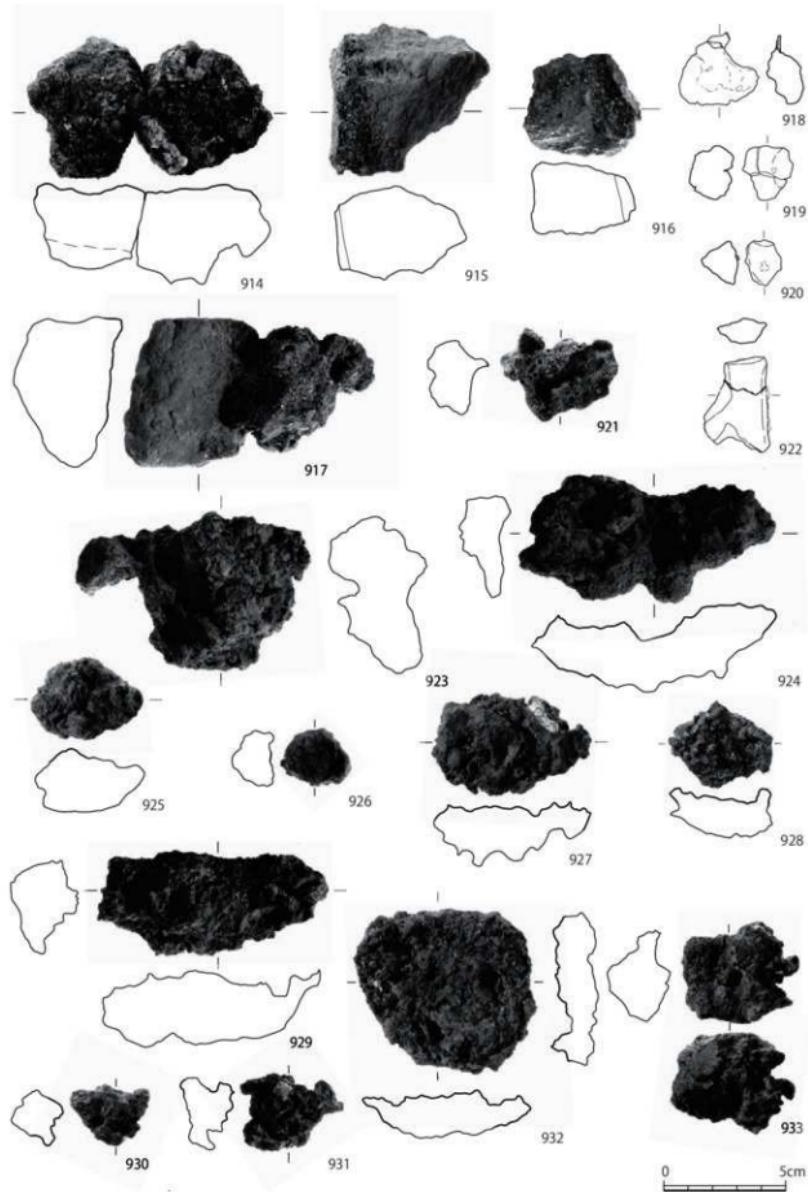


第155図 銅・鉄製品実測図(1)



第 156 図 銅・鉄製品実測図(2)・鉄滓実測図(1)

0
5cm
1/2



第 157 図 鉄滓実測図 (2)

第6節 鍛冶関連遺物(第156～157図)

概要 南側曲輪群から出土した鍛冶関連遺物は合計47点、2130.5gである。

その内訳は、羽口4点79.4g、炉壁4点907.5g（鉄滓が付着する2点542.0gを含む）、鉄塊系遺物14点154.9g、楕円形鍛冶滓6点752.0g、鉄滓17点236.7gである。その他、曲輪MのSC6とSA2の埋土をフリイにかけ、微細な鍛冶関連遺物5.34gを回収した。図化した遺物は25点である。

(第156・157図・第38表)

1 羽口・炉壁(第156-157図:909～917)

羽口(909～912) 910・911は内径約2cmと小さめで、内面は被熱により色調が変化している。909・912は内径5.6cm、10.1cmと比較的大きい。

炉壁(913～917) 大きさの割に重量感がある。915～917の内面はガラス質化しており、強い被熱をうかがわせる。915の耐火度は1,107℃で、中世の鍛冶炉の炉壁としてはやや低いといえる。

2 鍛冶滓(918～933)

鉄塊系遺物または鉄滓(第157図:918～933)

918～920はSC6・SA2出土の鉄塊系遺物である。小型で不整形であり、表面全体を黄褐色の土砂で覆われている。921は曲輪JのSC1出土の鉄滓破片、922は曲輪MのSX1出土で鉄片とみられる。

923～926は曲輪Hの道路状遺構1から出土した。黄褐色の土砂で覆われている。

923・924は楕円形鍛冶滓で、重量感がある。一側面に直線状の破面をもつ。

925・926は鉄塊系遺物である。925は小型腕状で重量感があり、926は一部が鉄錆している。

927・929は曲輪Lの道路状遺構2から出土した。927は楕円形鍛冶滓で木炭痕が付着している。929は鉄滓で重量感があり、一部にガラス化が確認される。

928は曲輪Eの道路状遺構1、930は曲輪Kのビット出土の鉄滓で、木炭痕による凹凸がみられる。

931～933は曲輪Kの包含層出土の楕円形鍛冶滓である。931は大きな割に重量感がある。

932は一側面に直線状の破面がある。933は瓦質土器が付着して出土し、木炭痕による凹凸がある。

(鶴田・松田)

第7節 木製品(第158～163図)

概要 塩見城跡では、水の手曲輪で多くの木製品が出土した。これは、地下水や湧水が多く木製品が遺存しやすい環境であったためである。木製品は、SS2と窪地状遺構や、SE2・3内とその周辺より出土した。

木製品の内容は、曲物や柄杓などの生活用品と、木杭や柱などの建築部材とに大別される。その他、枝葉や竹・樹根、種実に加えて、木片など断片的で形態が不明な資料も出土したが、ここでは製品としての形態をもつものについてのみを報告をする。

なお、木製品の未図化資料は、板状木片40点、棒状24点、丸太状3点である。

1 生活用品(第158～161図:934～983)

漆器塊(934～938) 4点出土し、全て図化した。いずれも両面に漆が残存し、935～937の外面上には赤漆で桐文や木葉などが描かれる。樹種はカツラ、クスノキなどの日本各地に分布する樹種の他に、中部地方以北に分布するイヌエンジがある。

936は布着せの技法が認められる。外面に残る木葉文様の描画法は、左側は全て線描により表現するのに対し、右側は一端赤漆を塗り線状に搔き取ることで葉脈を表現する違いがみられる。また、漆容器として再利用されたものと考えられる。

桶(939～948) 桶の蓋(939～945)、底板(946・947)及び把手(948)である。

939～945は本来は同一製品の部材と考えられる。また、942の表面上部中央に木釘が残存することから、把手が欠如した蓋と考えられる。蓋はスギを板材(板目)に切り出し、各部材を竹製の木釘で組合せる。なお、この製品の復元図を第158図中に示した。

946・947は内面に漆が付着し、947の側面には側板片が付着する。また946は、表面に残る筋状痕からまな板として再利用された可能性がある。

948について、板材に接すると思われる2箇所は対称構造をなし、加工は精密である。また、穿孔が2箇所あり下部には木片(綴皮か)が残存する。側面は滑らかな加工で、上部のみ段が残る。

折敷(949～952) 平折敷(949)と角切折敷(951・952)の底板がある。2～3箇所に綴皮が残る。950の表面には、筋状痕が見られ、946同様にまな板として再利用された可能性がある。

曲物 (953 ~ 973) 曲物の底板 (953 ~ 957) と側板 (958 ~ 973) である。

曲物の底板は、桶に比べてそれぞれ規格が小さく平滑である。特に側板は 0.2 ~ 0.7mm と薄いために欠損部が多いが、幅広のものと幅狭のものの二者が認められるので、蓋の可能性が考えられる。

このうち 954 の側面には 3 箇所に木釘が残存するが、953・955 の 2 点については見られない。側板材の多くは内面に幅 1.5 ~ 8mm 間隔の平行線 (ケビキ線) を刃物でつけ湾曲させている。また、963・964 は煤が付着し火を受けたとみられる。

その他、973 のように漆らしき黒色物が付着するものが確認された。

柄杓 (974・975) コウヤマキを素材とする柄が 2 点出土した。それぞれ先端下部に楔を打ち込むための孔がある。なお、曲物の底板のうち、955 は同じ出土区で同一素材であるため、同一製品の可能性がある。

糸巻 (976) 1 点のみ出土した。中央は相欠き仕口のかみ合わせ部分である。

本来は、同様の部品と共に十字をなす製品であるが、その対応する部材は出土していない。軸孔周囲に背面からの穿孔があるが、うち 4 箇所は貫通、3 箇所は未貫通である。

棒 (977) 1 点のみ出土した。棒状で中央に長方形の孔がある。両端部の処理が甘く、破損後に二次利用された可能性がある。

縞皮 (978) ヤマザクラ、もしくはカバの樹皮である。製品として取り上げた 1 点のみ出土した。

不明木製品 (979 ~ 982) 979 は全面を幅 3.5cm の単位で削りだし、円柱状に加工している。

981 は角を面取りされており、製品の一部分であったと思われるが、下端部は意図的に切除されているため転用品と考えられる。なお、下端部の工具痕は比較的滑らかなのに対し、側面は木目が毛羽立つような状態であることから、使用した工具に違いが見られる。982 は木筒状の形態をなす。

井戸関連遺物 (983) SF1 底面付近にある井戸枠に用いられた刳抜容器である。直径 60cm 弱のクスノキを割り抜き成したのである。上端・下端には底や蓋を固定する穴などは確認できなかった。外面は外皮に近い状態である。部分的に腐朽しており、下部付近はやや厚みがある。

2 建築部材 (第 161 ~ 163 図: 984 ~ 1092)

概要 垂木・胴木及び SS2 の胴木として用いられた柱転用材・木杭と、この背面盛土中や SE2・SE3 などの遺構に伴って出土した杭列である。

柱材 (984・985, 991 ~ 993) 985 は全面に加工を施し、最大 7 面が確認できる。991 ~ 993 は SS2 に伴い出土した。991・992 は木杭を胴木に転用したものである。993 は全長 2.4m になる大型柱転用材で、根元部分が欠損し上端部には柄が残る。中位付近には 2cm 四方の枘穴が 6 箇所みられる。

木杭 (986 ~ 990, 994 ~ 1092) 水の手で検出された SE2 や SE3 などの遺構に伴い 179 点出土した。固化的木杭はそれぞれ、SS2 の胴木 (986 ~ 990), SS2 に伴う杭列 (994 ~ 1013), SE2 に伴う杭列 (1014 ~ 1087), SE3 に伴う杭列 (1088 ~ 1092) である。先端部分は土中保存のため比較的残りは良いが、上端部分は腐食や炭化によって失うものが多く、本来の全長を知り得る資料は少ない。

これら木杭の分布状況は、第 38 ~ 41 図を参照されたい。また、未図化的木杭 35 点の計測表については別途、第 43 表に掲載している。

1075 は、枘穴と思われる加工痕があり柱材を転用した杭で、柱材の 4 分の 1 程度を縱に分割して利用している。1077 は上端部を平滑に削っており、柱材を転用した可能性が高い。1087 は角柱状に成形するが、その際の剥離が顕著である。

木杭の加工法 枝または樹幹部分を使用材とし、枝を切り落とした後に、手斧といった金属製利器で木口面を集約的に加工して杭の先端としている。

木杭の分類 先端の加工形態に着目すると、以下のように分類された。木杭 179 点のうち、A 1 類 84 点、A 2 類 53 点、B 類 8 点、C 類 18 点、分類不能 16 点である。

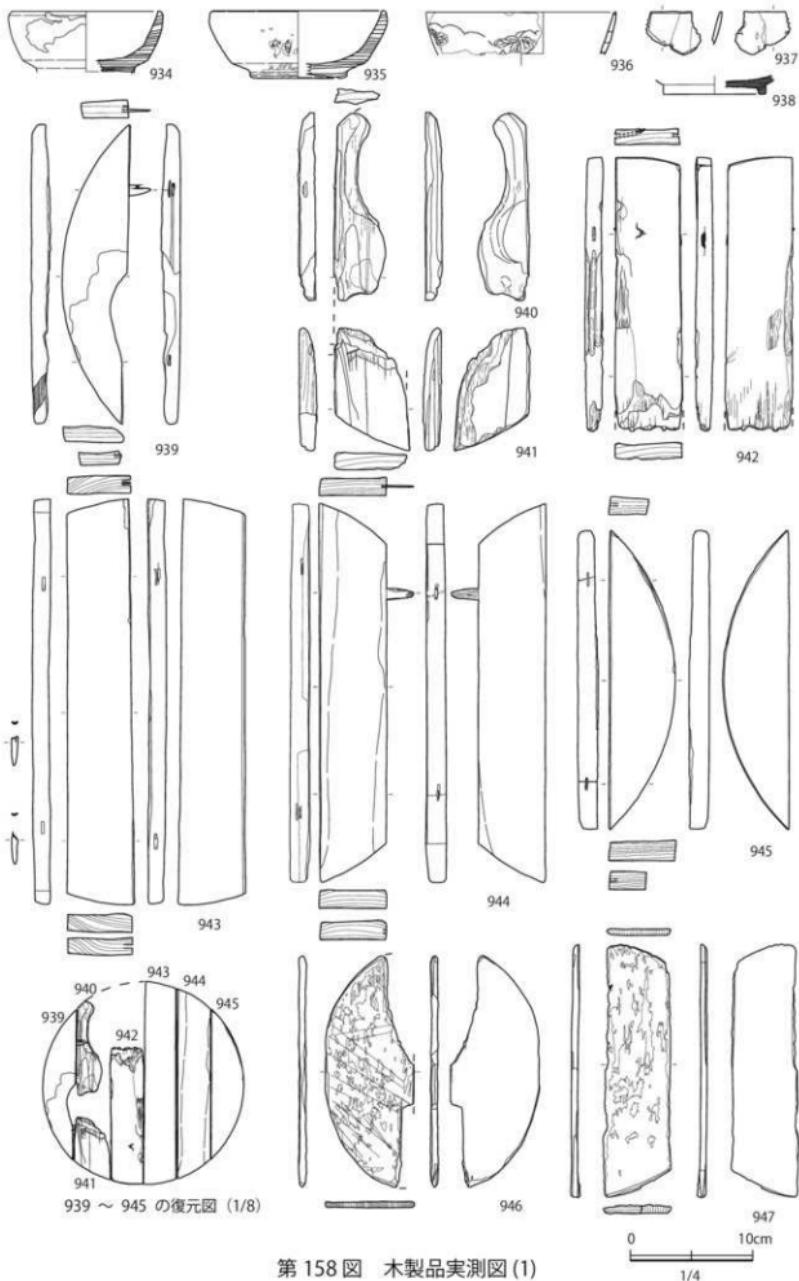
A 1 類 杭先端を円錐形に加工したもの

A 2 類 断面形が扁平刃状であるもの

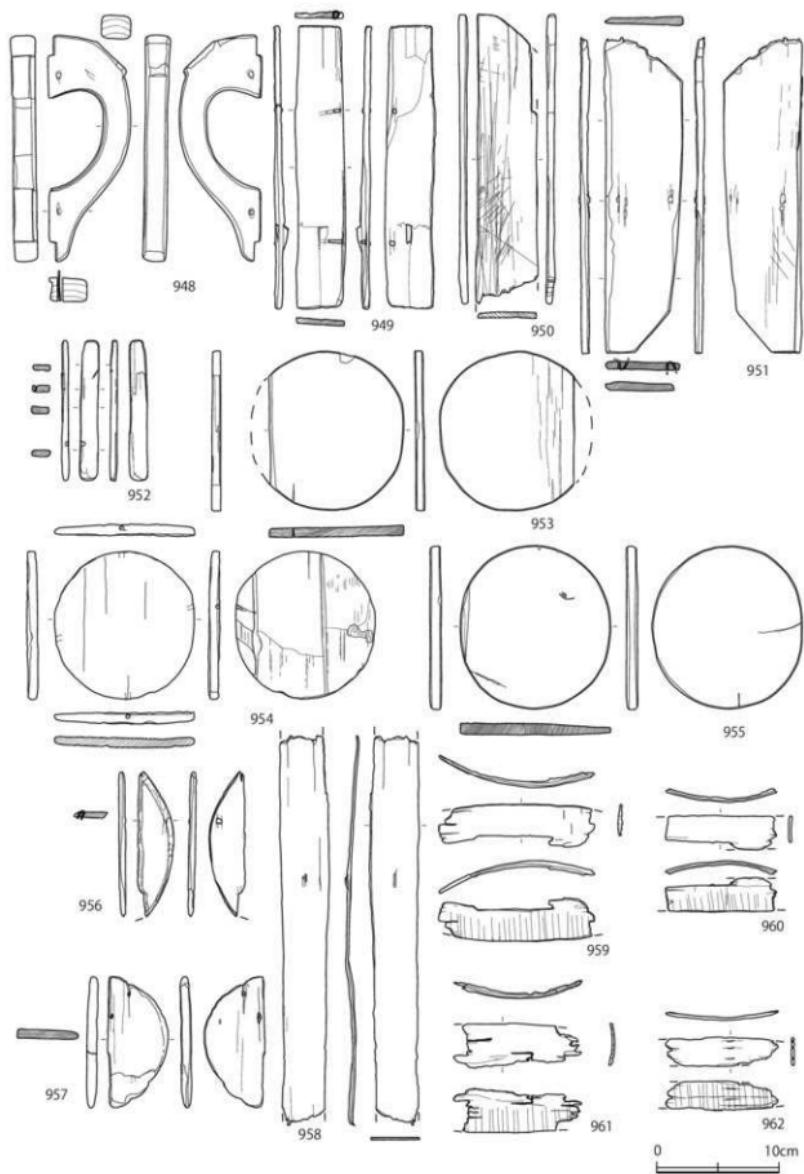
B 類 A 類に比べ先端が水平に近いもの

C 類 腐食・欠損等で先端の形状が不明なもの

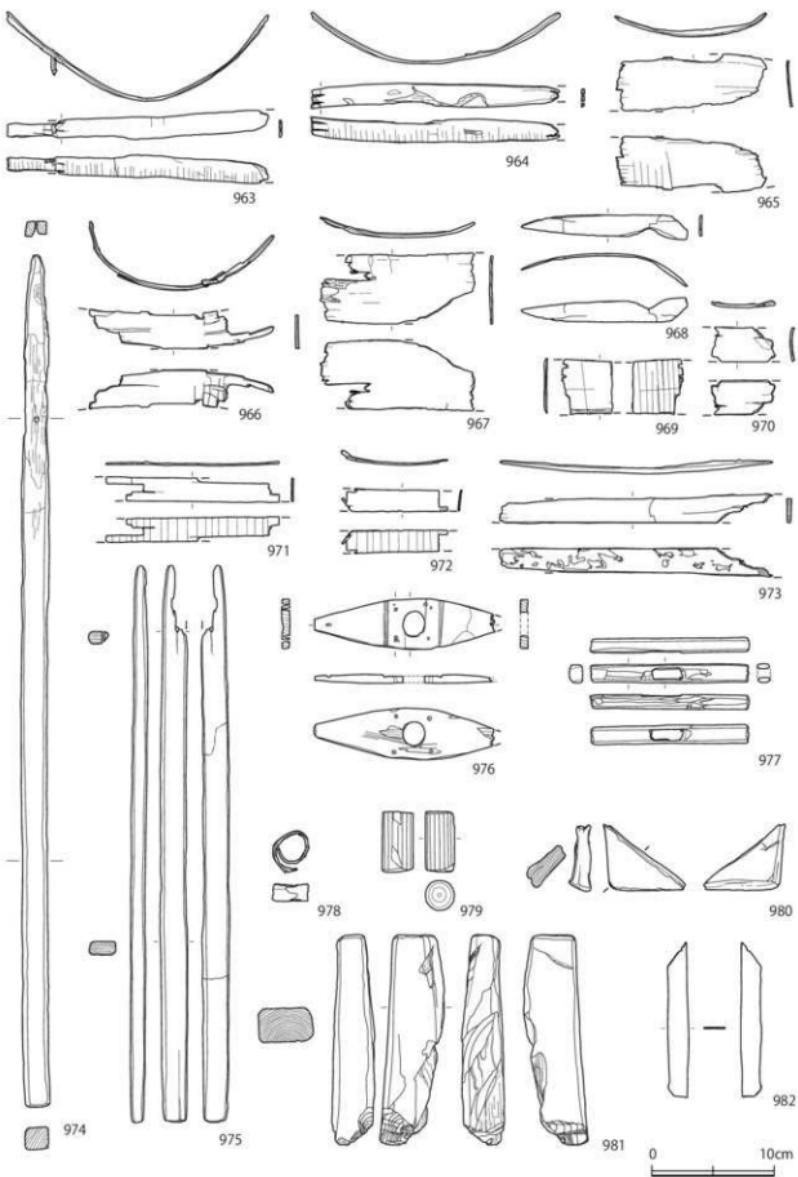
木製品の性格 生活用品には木桶・柄杓といった貯水(藏)具、漆器碗や折敷などの食膳具、糸巻などの紡織関連の日常用品が出土したことは、土器・陶磁器類との補完関係を知る上で好資料である。さらに、塩見城内は緊急時の駐屯的な空間ではなく、常駐的であったことも示唆している。(小船井)



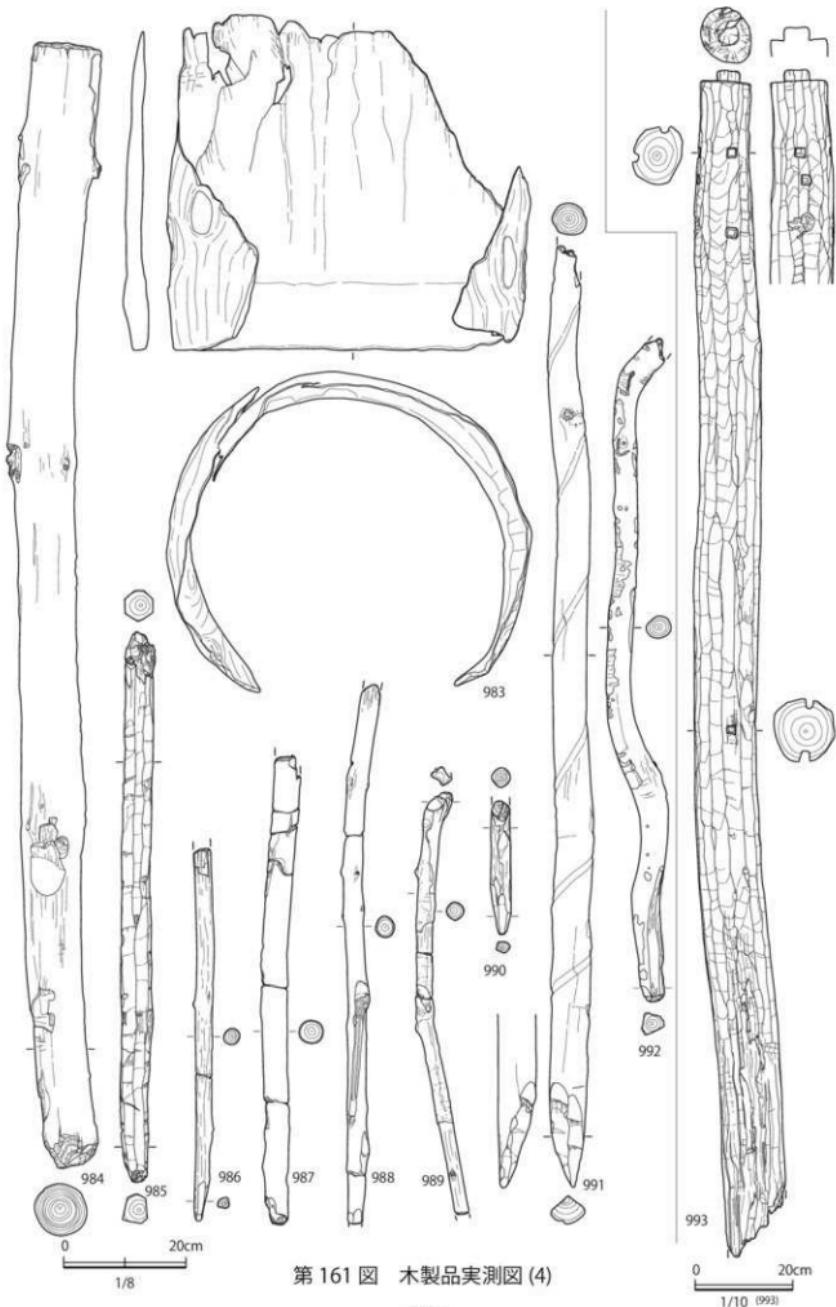
第158図 木製品実測図(1)



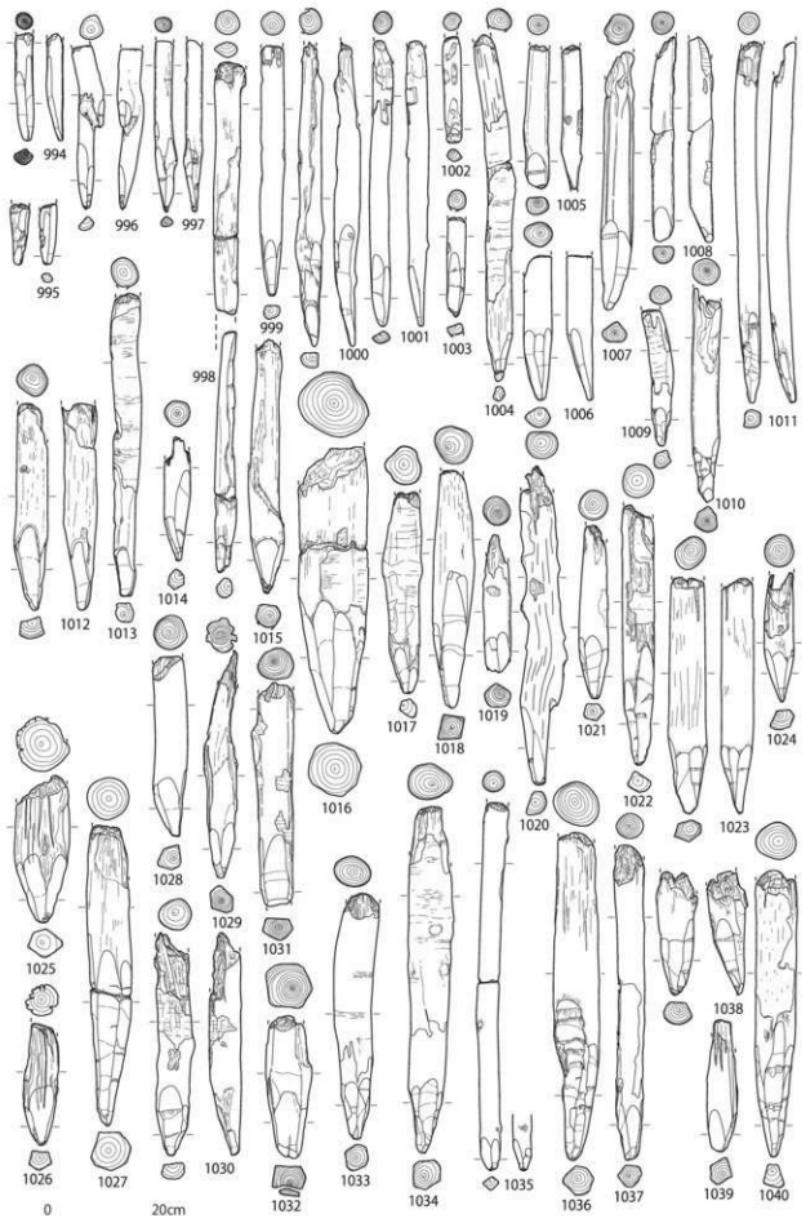
第159図 木製品実測図(2)



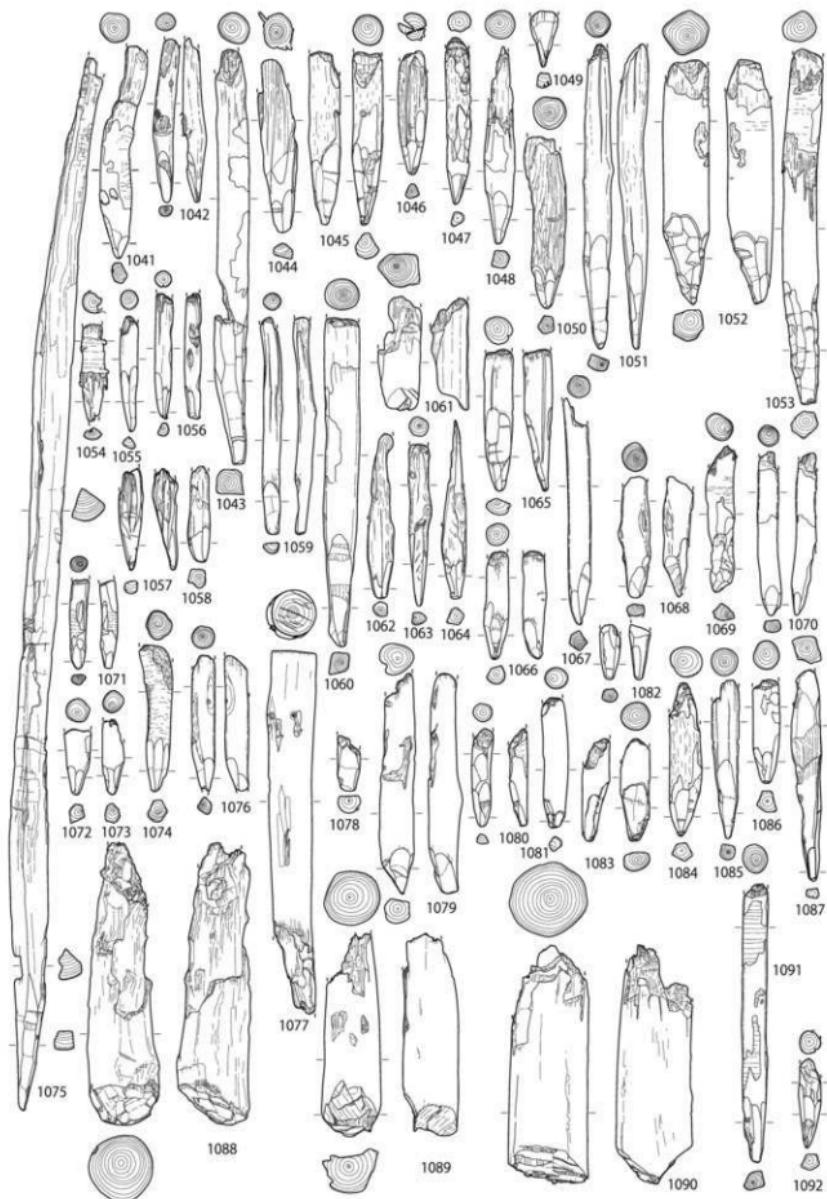
第 160 図 木製品実測図 (3)



第161図 木製品実測図(4)



第 162 図 木製品実測図(5)



第 163 図 木製品実測図 (6)

0 20cm
1/8

第8節 石器・石製品・石塔

(第164～175図)

1 石器 (第164図: 1093～1138)

概要 塩見城跡で出土した後期旧石器時代から縄文時代にかけての石器について図化・報告する。個々の属性や特徴は、遺物観察表を参照されたい。

ナイフ形石器 (1093) 1093はチャート製の縱長剥片を使用する。

楔形石器 (1094) 1094は赤チャート製で、長方形で上下端より加熱している。

台形石器 (1095) 1095はチャート製の幅広不定形剥片を横位に用いる。

剥片尖頭器 (1096) 1096はホルンフェルス製の縱長剥片を使用する。

削器 (1097・1098) 1097はホルンフェルス製、1098は姫島産黒曜石製の縱長剥片素材を利用する。

搔器 (1099) 1099はホルンフェルス製の幅広剥片素材を使用し、刃部は一部欠損する。

石錐 (1100) 1100は姫島産黒曜石の不定形剥片素材を使用する。

打製石鎚 (1101～1113) チャート製は凹基無茎鎚 (1101～1105) と平基無茎鎚 (1106～1111) がある。1108は先端部が鋭利ではなく、基部成形も不十分であることから石鎚未製品とする。1110は製作時に欠損し廃棄されたものである。1112はホルンフェルス製の凹基無茎鎚、1113は頁岩製である。

石斧 (1114～1116) 1114・1115は打製石斧、1116は刃部磨製石斧であり、いずれもホルンフェルス製である。1114は不定形剥片素材の縁辺を二次加工するもので、1115は周縁より剥離調整後、棱線を調整している。1116は周縁を成形後、稜線部分を部分的に剥離成形する。

二次加工剥片 (1117～1119) 全て横長剥片素材の打点と反対側縁辺部に二次加工を行う。

石核 (1120～1121) 1120はホルンフェルス、1121は日東産黒曜石を石材とする。1120は背面に自然面を残す。1121の背面は一枚の剥離面だが、表面、左側面には小さい剥離を複数回行う。

切目石鍤 (1122) 1122はホルンフェルス製の扁平盤の長軸部両端に切目を入れる。

微細剥離剥片、剥片 (1123～1125, 1126) 1126はホルンフェルス製である。1123、1124は縱長剥片を使用し、1125は横長剥片を使用している。

敲石 (1127～1128) 1127は砂岩製で上端、右側上面、下端に敲打痕がある。1128はホルンフェルス製で左側面に敲打痕がある。

凹石 (1129～1136) 1129の石材は尾鈴山酸性岩類で正面、裏面にアバタ状の敲打痕がある。1130は砂岩製で、全体に鉄錆状のものが付着するが、使用時のものは不明である。

台石 (1137～1138) 1137・1138は、砂岩製の台石で、正面に敲打痕がみられる。

2 石製品 (第165～170図: 1139～1230)

概要 石鏡や石臼、砥石などを石製品として報告する。石筆・石盤は現代に、それ以外の石製品は概ね中世に属すると考えられる。

滑石製石鏡 (1139～1141) 1139～1140は口縁直下に突堤を持ち、工具による上下方向の加工がみられる。1141は突堤を持たないもので上下方向の工具痕を消すように横方向の削りがみられる。

茶臼 (1142～1151) 上臼 (1142-1147) のうち、1142～1145は砂岩製、1146・1147は凝灰岩製である。下臼 (1148-1151) は、1148・1149が硬質砂岩製、1150・1151は砂岩製である。

上臼のうち、1142は側面に成形時の工具痕を残す。破碎面を除いて加熱による剥落がある。1143は全体的に赤化する。1144は副溝6本の構成で、凹みから供給口内面、破碎面まで赤化する。1145は副溝は8本の構成で、側面は大変滑らかに磨かれ、破碎面は全体的に赤化する。1146は副溝は8本構成で、台座は断面台形の方形あるいは長方形で台座直下には台座を作り出す過程での工具痕がある。1147は副溝は4～6本で、台座はほぼ方形である。

下臼のうち、1148は受け皿・脚台外面・底面は粗くやや縱斜め方向の凹凸のある工具痕が連続する。底面は平底で中央に向かい若干上げ底となる。全体に弱く赤化する。1149は受け皿部分で、受け皿内面から縁は研磨され、外表面は敲打成形のままである。1150の脚台外面は粗くやや斜め方向の凹凸のある工具痕がめぐる。底面は上げ底になっており、軸孔は下開きで貫通している。受け皿部分は立ち上がり部分から全周に渡り打ち欠かれる。白面は副溝7本構成である。1151は副溝9本構成で、約1/2が欠損しているが、底面は平坦で、軸孔は下半分から台形状に広く貫通している。

挽臼 (1152～1166) 上臼 (1152-1157) と下臼 (1158-1166) がある。

上臼のうち、1153は副溝は3本構成、1154は副溝4本構成である。1155は溝が無くなるほど使い込まれ、外周縁ほど強く摩滅する。1156も溝が無くなるほど使い込まれる。

下臼のうち、1158は副溝4本構成で、溝は太く雑である。白面は弱い凹面を成す。1162は推定径31cmで臼面中央に凹みがあり、強く摩滅する。1163も使い込まれ、外周縁は特に強く摩滅する。

1164～1166は破碎が著しい。1164は軸孔は残存する。

石鉢 (1167) 推定底径10.5cmで内面は口縁部より工具痕が連続し、内底は平坦に仕上げられる。外面立ち上がりは粗い工具痕のままで底面は平坦に仕上げられる。外面から底面にかけての赤化状況から、加热により破碎したものと思われる。

軽石製品 (1168) 平面半月形の軽石にV字の刻線が施され、背面は枝分かれをする。

轆 (1169) 1169は凝灰岩製の轆で中央部に直径約3cmの穴がやや斜め方向に開けられる。外形は端部が黒く融解し中央は赤く熱変色をしている。

砥石 (1170～1209) 棒状砥石 (1170-1181) は、縱長で、表裏のみならず、左右面にも砥面が見られるものがある。板状砥石 (1182-1204) は、四角形に近いものが多く、主に表裏面に砥面があり、器厚は薄い。礫状砥石 (1205-1209) は、礫面を残しだ大きさ、形も不定形である。

石皿 (1210) 1210は砂岩製の石皿で、表裏面に4条の磨痕と水成による鉄分の付着がある。

火打石 (1211～1224) 石材は、チャートと石英である。稜線はつぶれ、鋸も認められる。

数珠玉 (1225) 水晶製の玉である。近世墓 (K-SD5) より出土した。断面形は、ソロバン玉状で中心に穿孔が施される。

硯 (1226) 1226は頁岩製の硯で内面は使用による減りがみられ、外面底部の角は丸く削り出す。

石筆 (1227～1228) 1127は滑石製である。下端は使用により先細りの多面体となる。1128は石英製である。上端部分は平坦に削りだす。

石盤 (1229) 角は丸く面取りされている。

石仏 (1230) 縁内にタール状の黒褐色物質が付着する。裏面は粗いノミ痕が残る。

3 石塔 (第170～175図: 1231～1295)

概要 今回の調査区内では五輪塔群は存在しなかつたが、水の手曲輪のSS1・SS2やSF1、SE1では五輪塔、板碑などの石造物の部材が転用されていた。

これらの部材は、火輪43点、水輪6点、地輪73点と五輪塔の部材が最も多く、宝篋印塔、板碑なども出土した。空風輪の転用はない。石材は阿蘇溶結凝灰岩 (Aso 4由来) が使用されている。これらの石造物は、転用材という性格のためセット関係は不明であり、紀年銘も見られない。

曲輪Gにおいても、少数ではあるが火輪・地輪等が出土している。報告に当たり、部材ごとに整理と分類を行い、このうち、遺存状態のよいものを掲載した。

宝篋印塔 (1231) 1231は宝篋印塔の笠である。上下ともに欠損する。残存部分より三段の階があり、三段ともに5cm程の高さを持つ。

空風輪 (1232) 1232は凝灰岩製である。この1点のみ曲輪G表土層からの出土である。先端部分はやや丸みを帯びた形状で、胴部に一条の深い溝が彫られている。

火輪 (1233～1257) 火輪は器高の高低、柄穴の形状、軒の反りから分類した。なお、器高についてP.269に示した計測値より、法量比 (B/o) を求め、分類を行った。詳細は、第48表を参照されたい。

・器高 (B)

1類 低いもの (法量比1.0以下)

2類 高いもの (法量比1.1以上)

・柄穴の形状 (cn)

A類 円形、B類 方形、C類 多角形

・軒流れの有無 (h)

a類 反るもの、b類 直線的なもの

c類 膨らむもの

・軒の形状 (k)

α類 直線的 (軒の下端部が反るものはα'類)

β類 斜め (軒の下端部が反るものはβ'類)

1234は裏面に水輪の受け部とみられる凹みを持つ。1234と同様に1243も水輪の受け部を持つ。1252は円形の柄穴を持ち、裏面に二段の段取り状の受け部を持つ。1253は八角形の柄穴を持ち、裏面にわずかな工具痕を残す。

1255～1257はSE1の転用材である。上部を打ち欠き、地輪と同程度の厚さに調整した状態で転用されていた。1243はSS2の転用材である。

水輪 (1258 ~ 1263) 水輪は器高の高低、納骨孔の形状により分類した。器高については水輪と同様に法量比を求めた。詳細は、第51表を参照されたい。

・器高 (C)

1類 低いもの (法量比 0.4 以下)

2類 高いもの (法量比 0.5 以上)

・納骨穴の形状 (u)

A類 孔なし B類 円形 C類 方形

1262は円形、1263は方形の納骨孔をもつ。

地輪 (1264 ~ 1288) 地輪は受け部の形状、法量比により器高の高低により分類した。器高については、法量比を求めた。詳細は、第 52-1.2 表を参照されたい。

・器高 (D)

1類 低いもの (法量比 0.4 以下)

2類 高いもの (法量比 0.5 以上)

・受け部の形状

A類 凹みなし、B類 円形、C類 方形

1264 ~ 1276 の表面には、細かな調整痕が残る。

1276 は側面に梵字が書かれている。1277 ~ 1287 は円形の受け部を持つものである。

1276, 1286, 1287 は側面に梵字が書かれており、1286 には側面 4 面全てに梵字が書かれる。梵字の解説結果は、観察表 (第 52 表 -2) を参照されたい。

1285 は裏面にやや方形の凹みを、1288 は方形の凹みをもち、工具痕が良好に残る。

1280 は漢字「経」か一文字を認める。

板碑 (1289 ~ 1293) 1289 ~ 1293 は板碑の頭部で、1289 は正面形山形が低く、直線的な三角形で、二条線の浅い切り込みがある。

1290 は正面形山形が高く、直線的な三角形で、二条線の深い切り込みがある。1291 は先端部の三角形部分は欠損しているが、額部がわずかに確認できる。1292、1293 は身部である。

墓石等 (1294-1295) 1294 は近世墓の墓石、1295 は台石である。1294 は「元文四己未年 心慧宗信士位 二月十二日 俗(名大)八」の銘がある。元文四年 (1739) の紀年銘があり、江戸時代のものである。形状は櫛形で石材は砂岩製である。

1295 は花崗岩製の台石で、墓石の受け部と、梢円形の水鉢があり、2箇所の穿孔がある。

(田中達)

五輪塔表面に残る加工痕跡について

本遺跡出土の五輪塔部材は、形態的なバリエーションに加えて部材の表面には鉄製利器 (ノミなど) による加工痕が観察される事例が多い。その加工痕について簡単に概要を示すことにする。

(道具と使用法) 火輪の底面や水輪・地輪の上面に残る加工痕からノミ状工具の使用が推測できる。工具の先端部形状は、平坦と浅く湾曲した丸ノミ状の二者がある。その幅は両者とともに 3cm 前後で、その削り痕跡の軌跡は、石材面に突き立てて抉りだすような短い場合と、削り出すような長いストロークを認める。1272 は平坦面を粗く削りだす、1239 は平坦面を平滑にしていく際の痕跡である。

(削り調整の方向) 石材面を平坦に整形する際の工具の方向性にも規則性があり、5 パターンほど認められる。まず、4 辺の縁からそれぞれ中心部に向かって削りを入れる例 (1234・1274) があり、1243・1247 では時計回り方向に加工が入る。

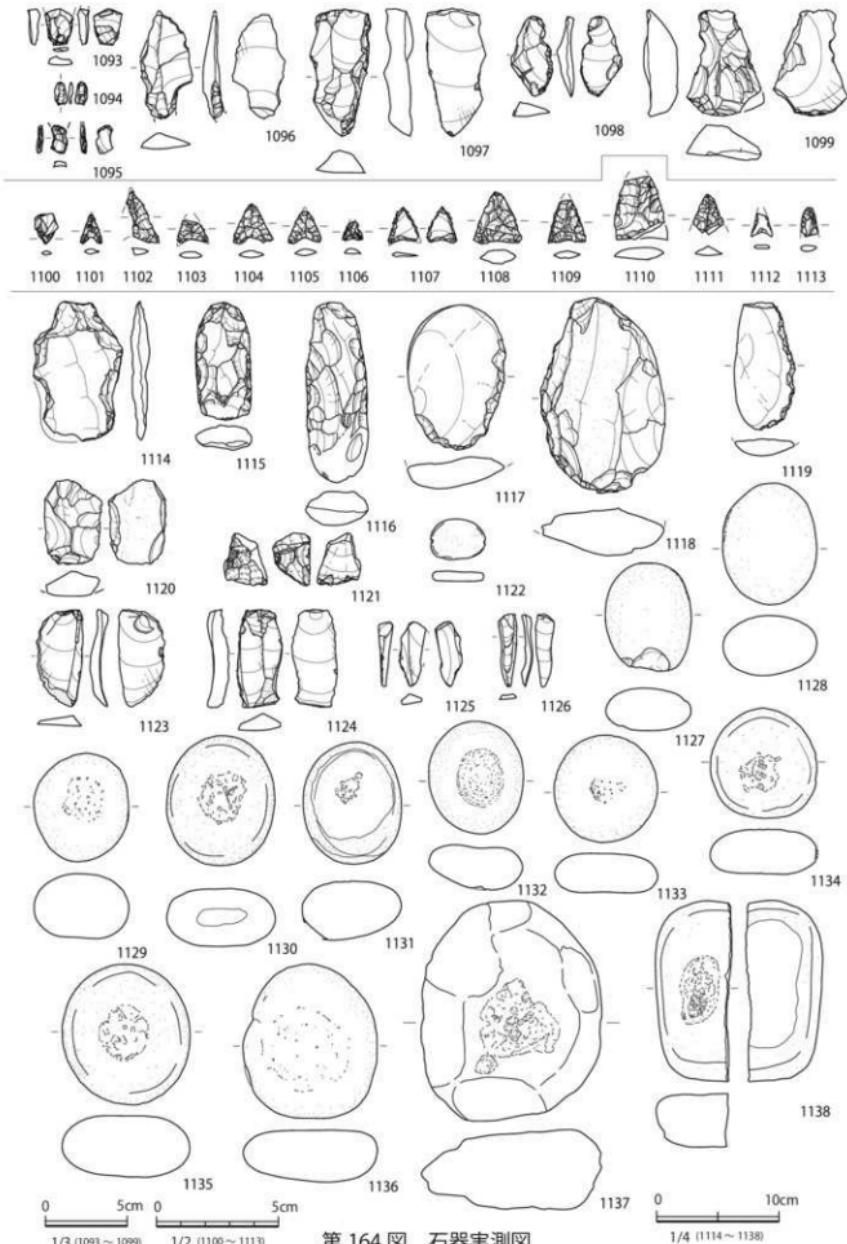
また、対辺の 2 方向から (1239)、一辺のみ (1273)、対角線方向 (1267・1274) もある。1254 は不定方向である。

火輪軒部や水輪や地輪側面の整形は、基本的に縱方向への削りである。1261・1271・1277 は斜めや横方向に削り痕跡が認められる。1269 や 1285 では仕上げ調整というべき丁寧な削り痕跡が確認でき、その工具幅も 1.5 ~ 2 cm 前後と小さい。1241 の底面にも同様の痕跡がある。

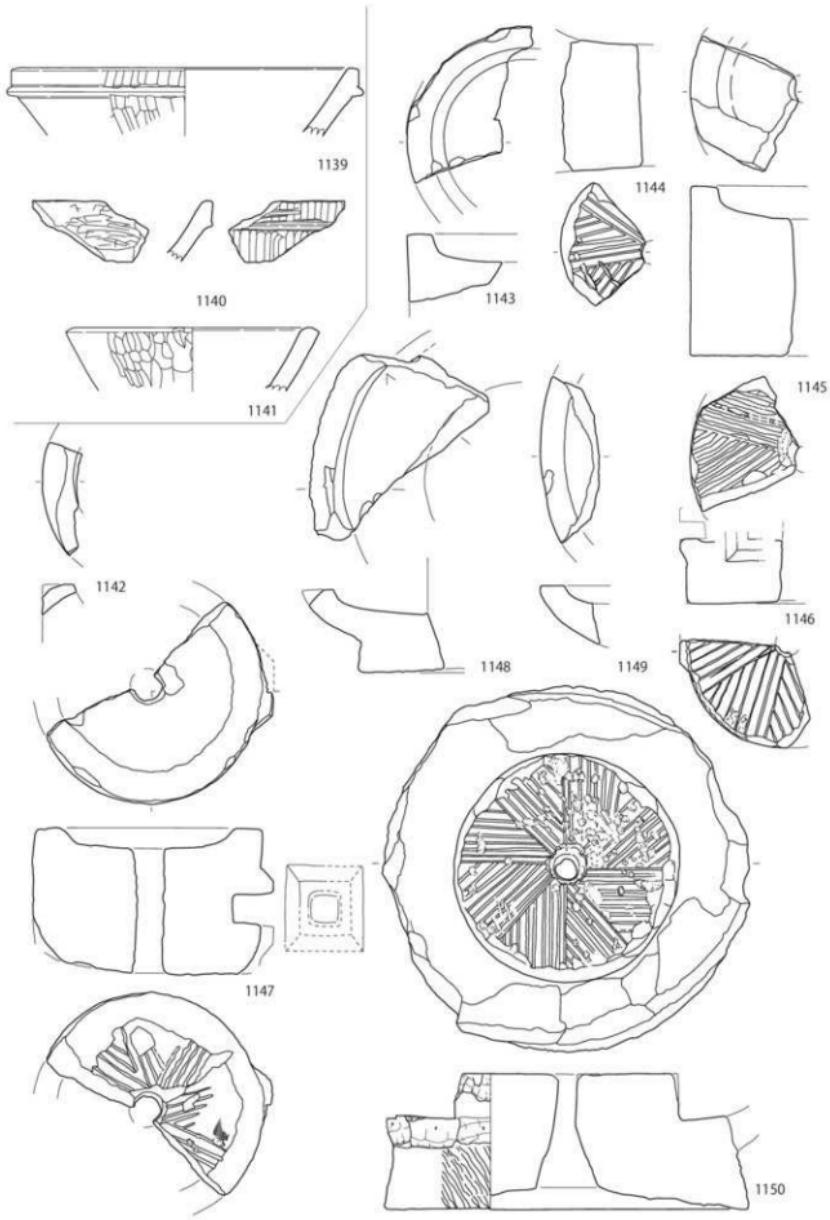
他方、火輪の屋根部にも削り調整の痕跡がある。1239・1241 は縱方向主体で横方向にも削りが入る。1254 では横方向のみの粗い削りである。ほど穴内部の加工痕にも注目すると、その壁面は縱方向に面取り状に削り調整される場合が多い。そのためか、壁面と底面との間に浅い溝が生じる。壁面への調整後には底面に対して縱方向への削りが数条施されて仕上げとする。この工具痕の幅は 1.5 ~ 2 cm 前後である。

(加工痕跡の評価) 石塔部材のに認められた調整痕は、製作工程のうち整形や仕上げ調整段階の加工痕と位置付けられる。

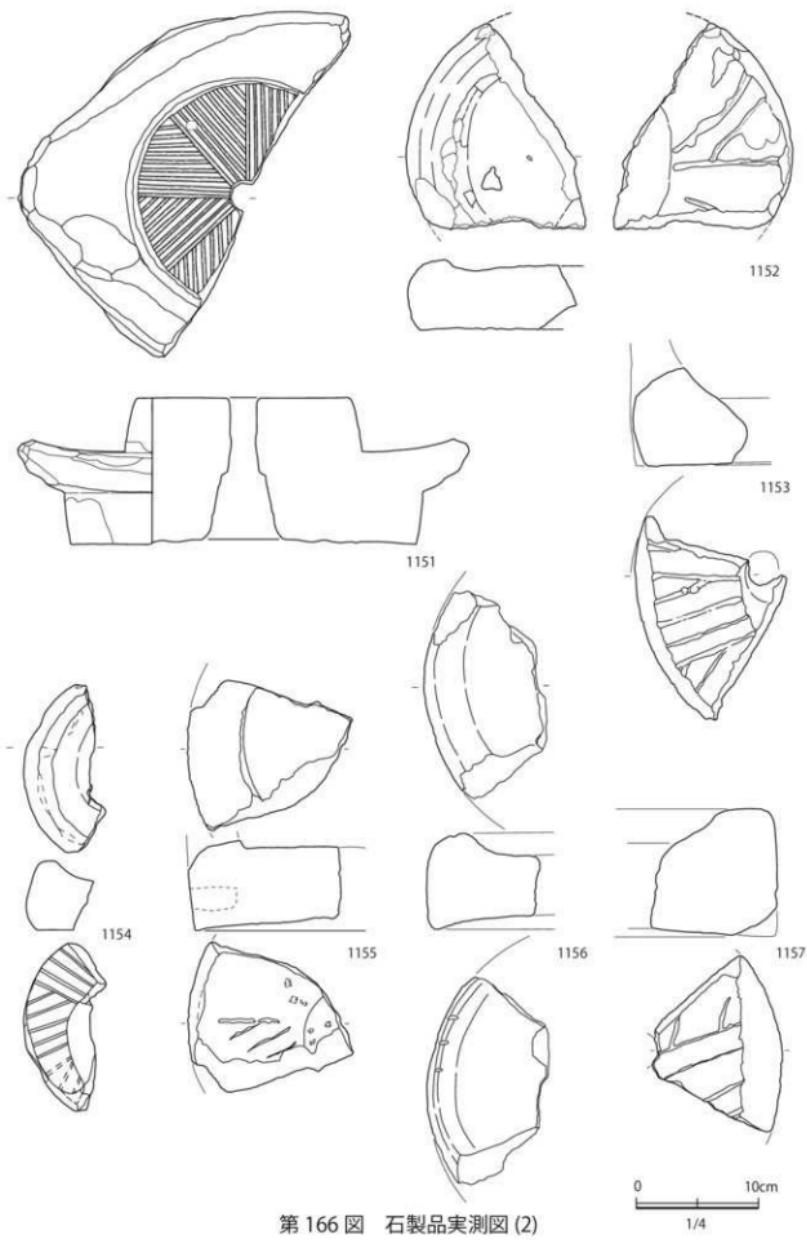
工具痕の幅からは整形段階 (幅 3 cm) と仕上げ段階 (幅 1.5 ~ 2 cm) と工具の使い分けが推定される。火輪底面や地輪の上下面の削り調整の作業手順には数種類のパターンも認められた。 (今塙屋)



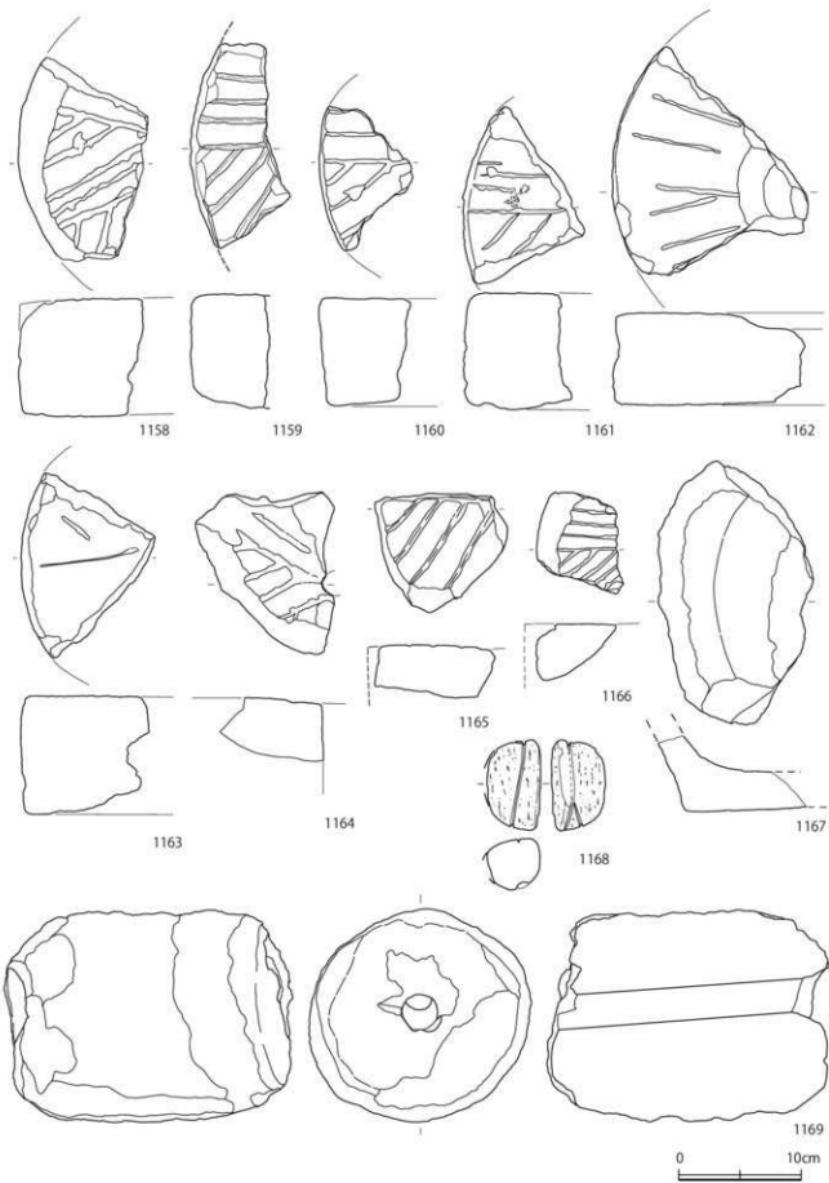
第 164 図 石器実測図



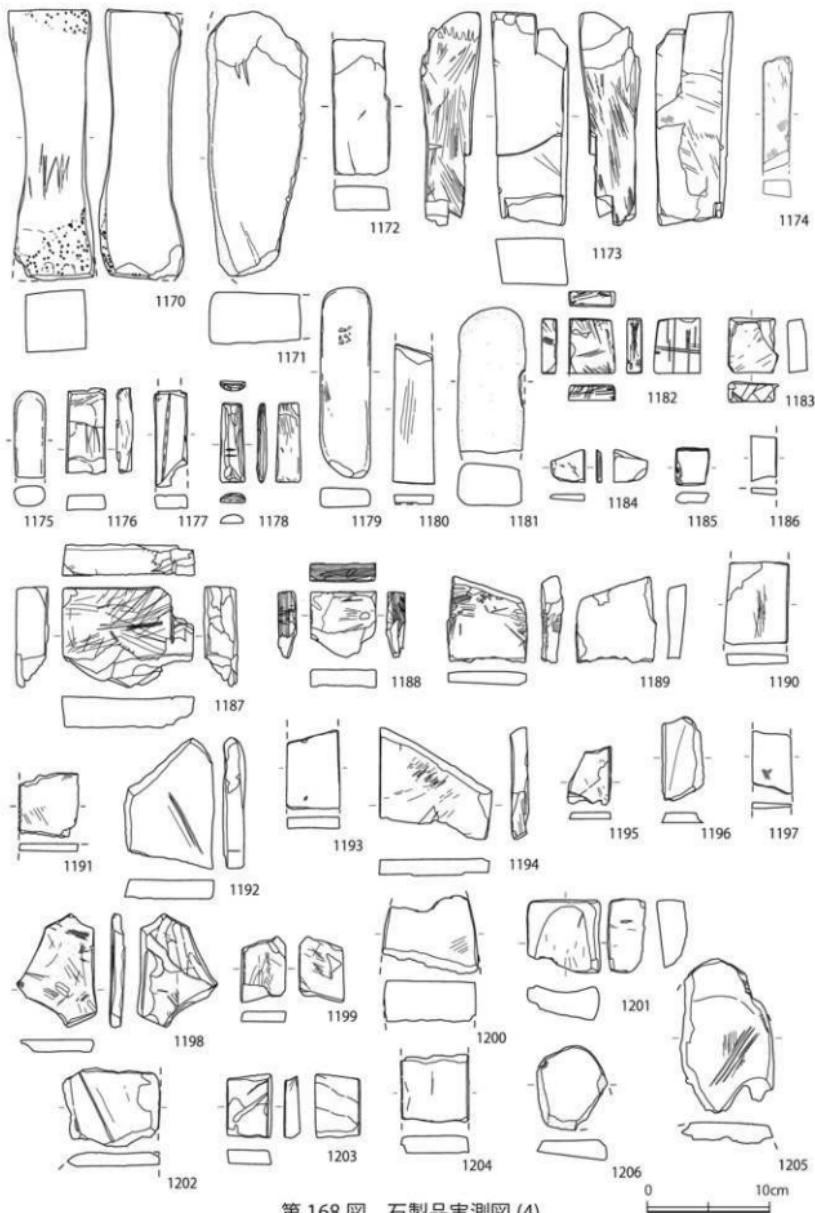
第 165 図 石製品実測図 (1)



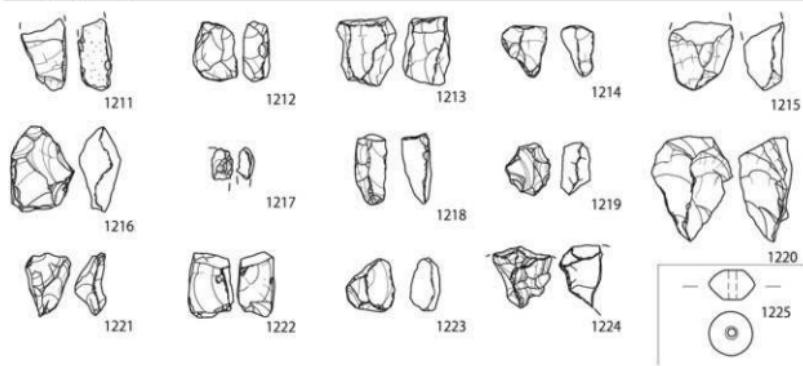
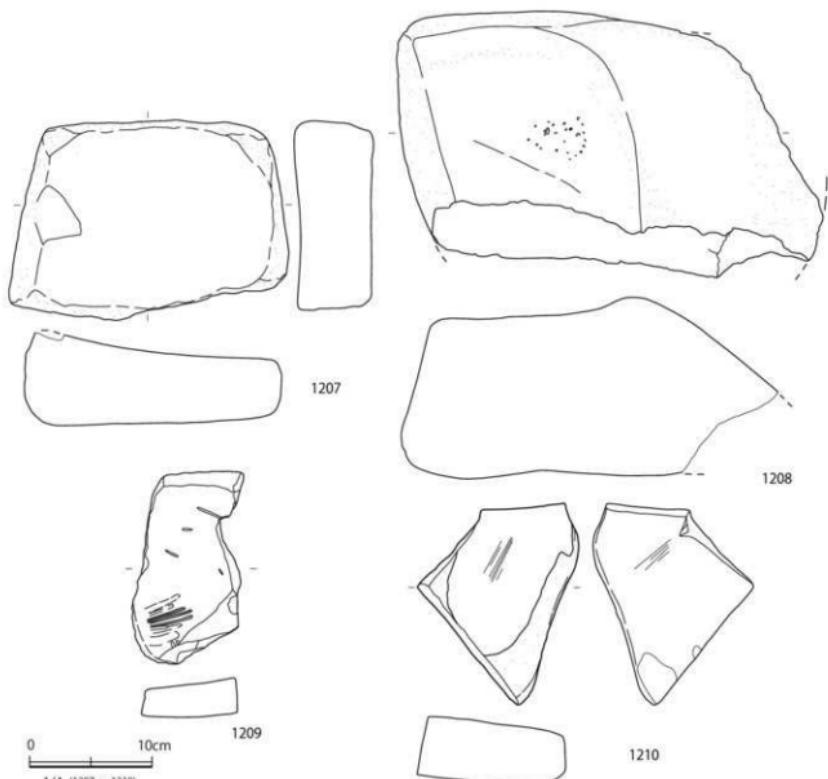
第166図 石製品実測図(2)



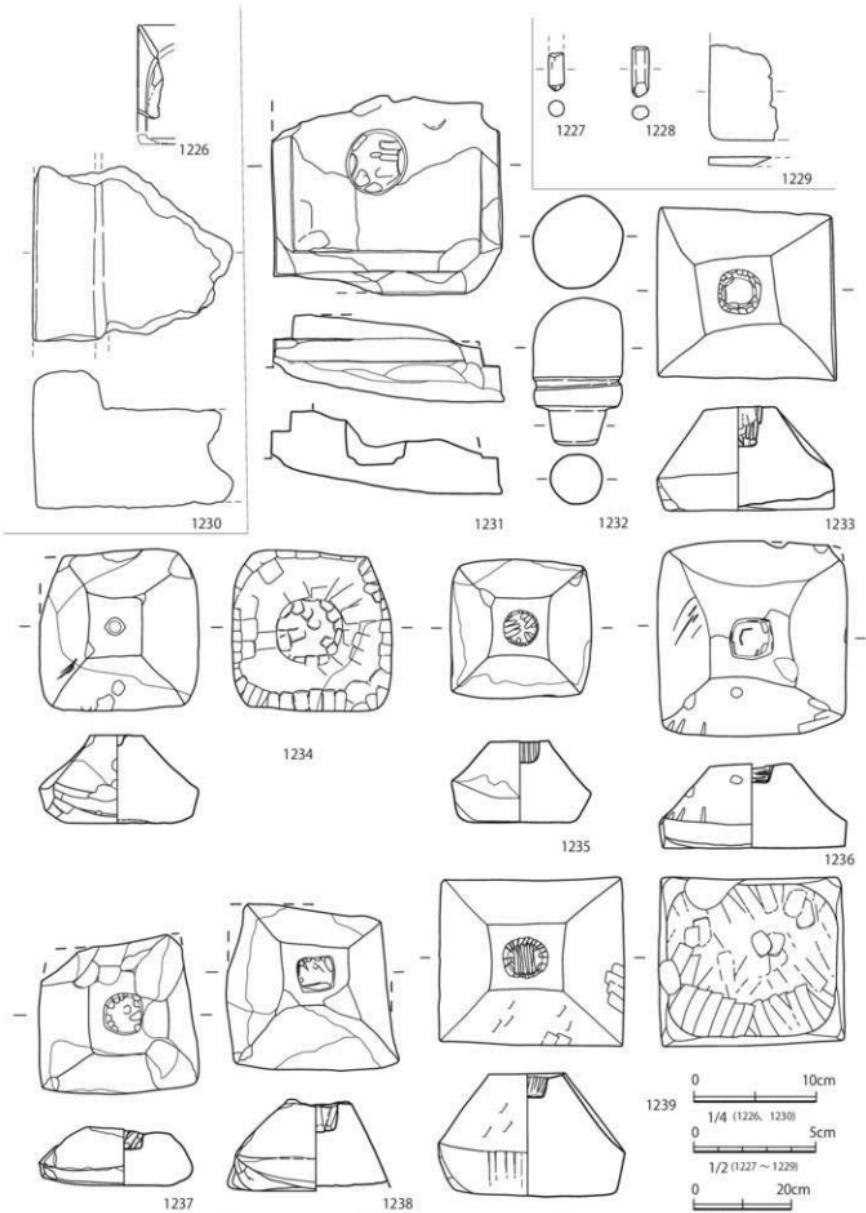
第 167 図 石製品実測図 (3)



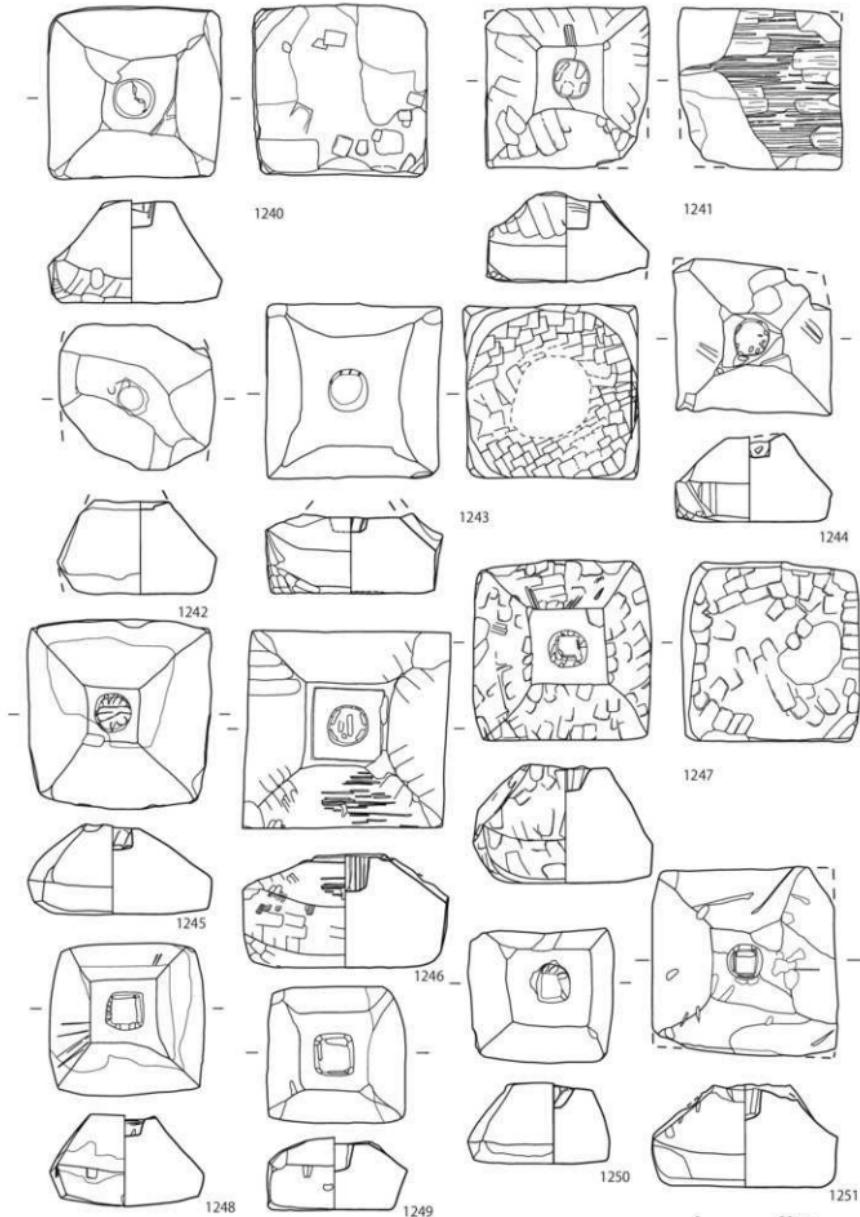
第 168 図 石製品実測図 (4)



第 169 図 石製品実測図(5)

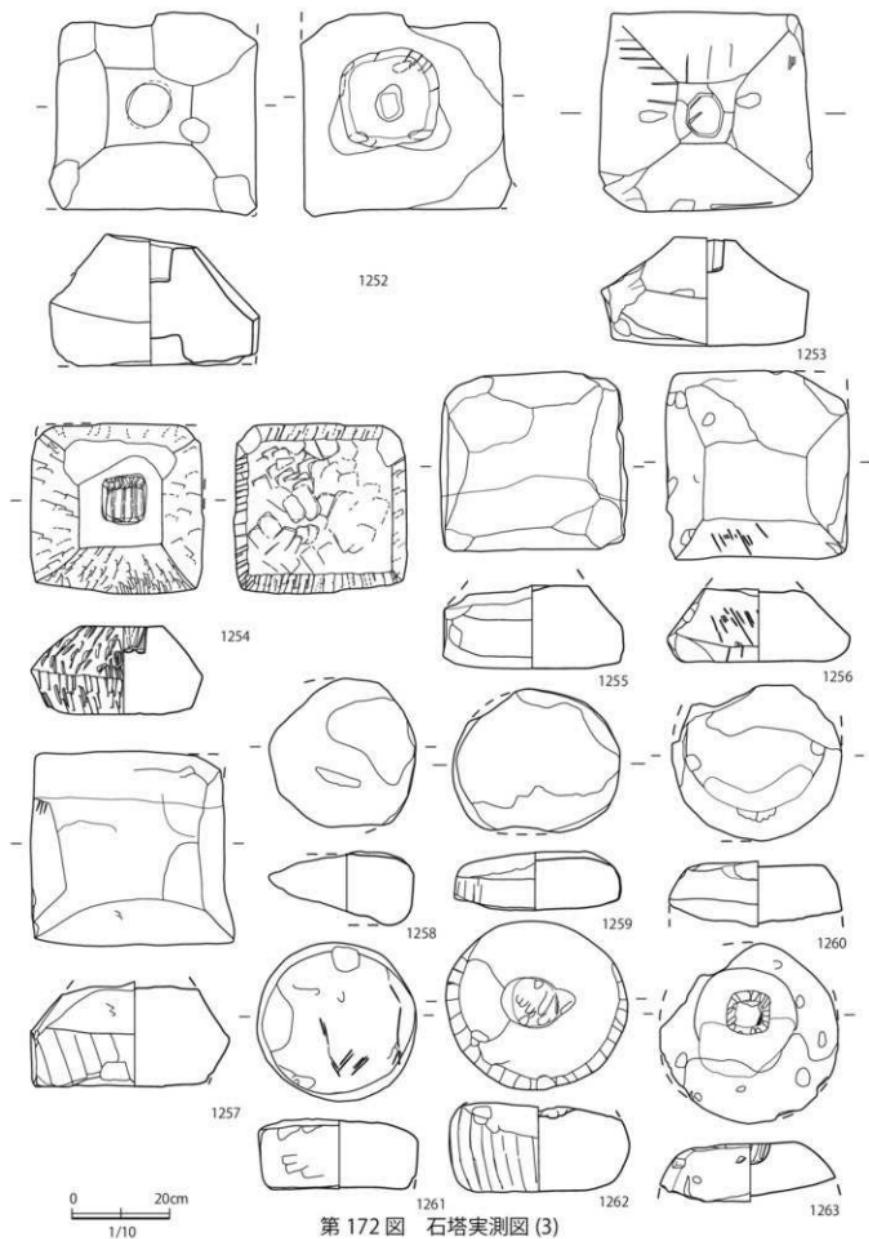


第 170 図 石製品実測図 (6)・石塔実測図 (1)

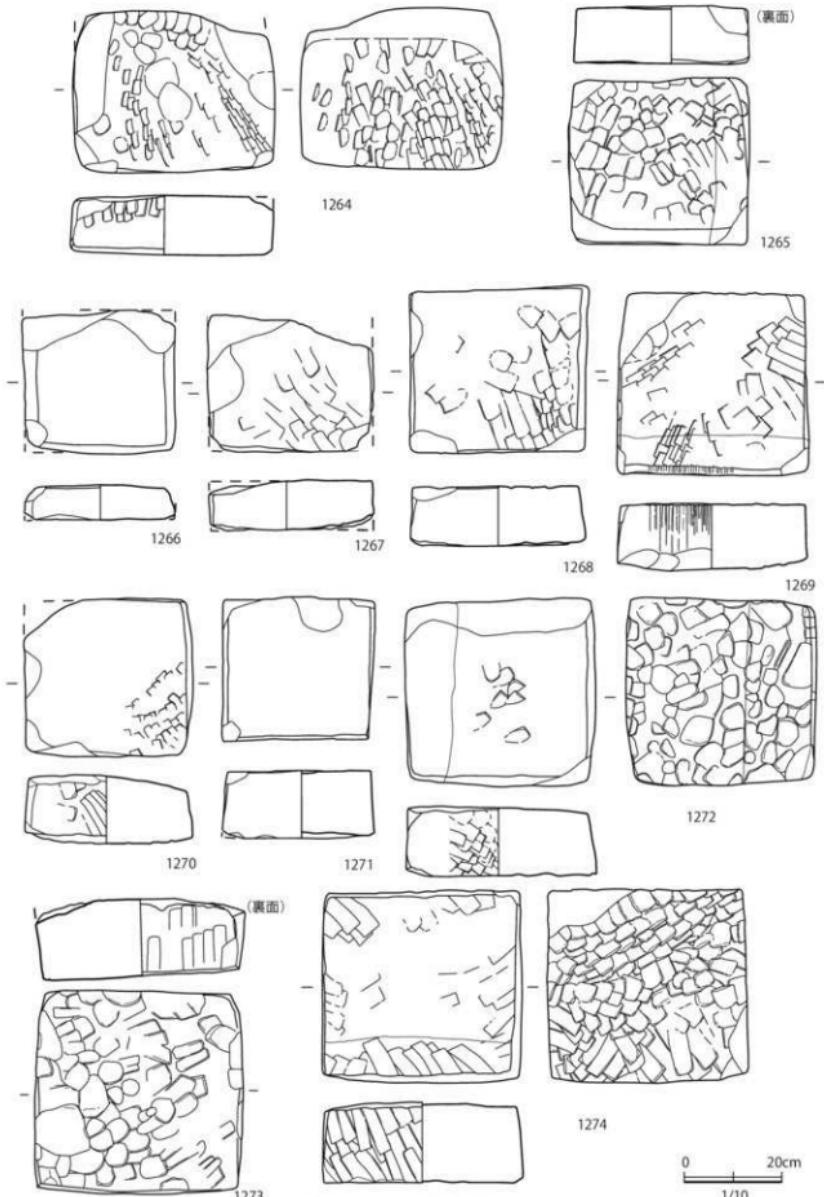


第 171 図 石塔実測図 (2)

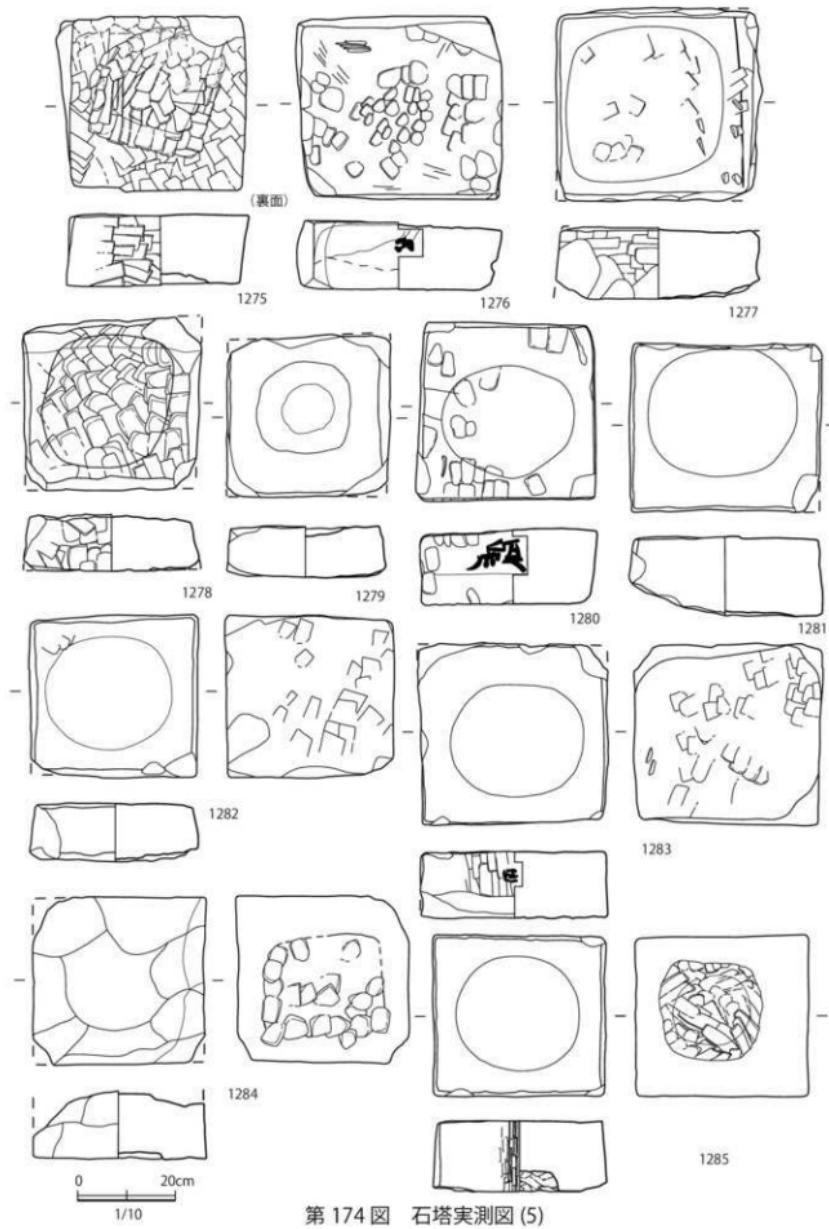
0 20cm
1/10



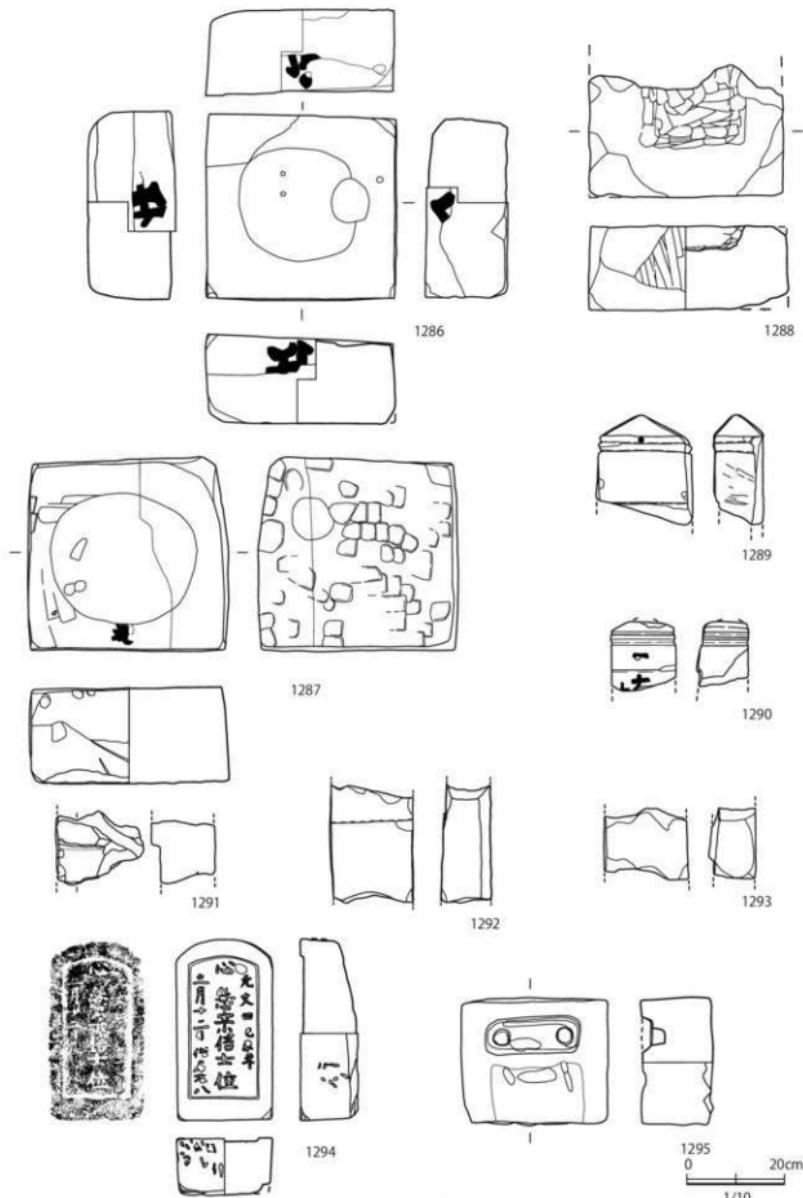
第172図 石塔実測図(3)



第173図 石塔実測図(4)



第174図 石塔実測図(5)



第175図 石塔実測図(6)

第19表 曲輪名対照表

曲輪名	略号	曲輪名	略号	曲輪名	略号	造構名	略号	造構名	略号
曲輪 A1	曲 A1	水の手	水	曲輪 F2	曲 F2	堀切 A1	堀 A1	通路状造構	通路
曲輪 A2	曲 A2	西側谷部	西谷	曲輪 F3	曲 F3	堅壁 A1	堅 A1	石敷造構	石敷
曲輪 A3	曲 A3	曲輪 D1	曲 D1	曲輪 G	曲 G	堀切 A3	堀 A3	SG1-1 区	SG1-1
帯曲輪 A3a 等 A3a		帯曲輪 D1b 等 D1a		曲輪 H1	曲 H1	堀切 B4	堀 B4	SG1-2 区	SG1-2
帯曲輪 A3b 等 A3b		帯曲輪 D1b 等 D1b		曲輪 H2	曲 H2	堀切 C1	堀 C1	SG1-3 区	SG1-3
曲輪 A4	曲 A4	帯曲輪 D1c 等 D1c		曲輪 H3	曲 H3	堅壁 C1a	堅 C1a	SG2-1 区	SG2-1
曲輪 B1	曲 B1	帯曲輪 D1d 等 D1d		曲輪 I	曲 I	堅壁 C1b	堅 C1b	SG2-2 区	SG2-2
曲輪 B2	曲 B2	曲輪 D2	曲 D2	曲輪 J1	曲 J1	堀切 C2	堀 C2	柱穴	P
曲輪 B3	曲 B3	曲輪 E1a	曲 E1a	曲輪 J2	曲 J2	堅壁 B4	堅 B4	盛土	盛
帯曲輪 B3a 等 B3a		曲輪 E1b	曲 E1b	曲輪 K	曲 K	横堀	横		
帯曲輪 B3b 等 B3b		曲輪 E2a	曲 E2a	曲輪 L	曲 L	石積み壁體内	石壁		
曲輪 B4	曲 B4	曲輪 E2b	曲 E2b	曲輪 M	曲 M	1号堀 (SS1)	堀 1		
曲輪 C1	曲 C1	帯曲輪 E2 帯 E2		東側谷部	東谷	2号堀 (SS1)	堀 2		
曲輪 C2	曲 C2	曲輪 F1	曲 F1			堀切 D1	堀 D1		

一括取上げ分	略号
西側曲輪群	西
南側曲輪群	南

【第VI章参考文献】

- 赤羽一郎・中野晴久 1995「中世常滑焼の生産地編年」永原慶二編『常滑焼』中世社会・小字館
- 新垣力・瀬戸哲也 2005「沖縄における14~16世紀の中国産白磁の再整理」『沖縄研究』3
- 市本芳三 1995『瓦』中世土器研究会編『概説 中世の土器・陶磁器』真間社
- 岩崎仁志 2007「山陽西面における中世の土製炊具一周防・長門を中心として」『中世土器の基礎研究』21 日本中世土器研究会
- 上田秀夫 1982「14~16世紀の青磁の分類について」『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会
- 大橋康二 1990「わむわる京焼埴輪の年代と出土分布についてー肥前窯の可能性があるものを中心としてー」『青山考古』第8号 青山考古学会
- 小野正敏 1982「15、16世紀の染付碗、皿の分類とその年代」『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会
- 北野隆光 2006「備前焼水屋彌の分類と変遷ー根来寺訪院跡出土資料を中心としてー」『陶磁器の社会史』吉岡康暢先生古希記念論集 桂書房
- 木村明史 1999「佐上原城跡I」佐上原町文化財調査報告書第12集 九州近世陶磁研究会 2000「九州陶磁の編年」九州近世陶磁学会10周年記念
- 桐山秀穂 1996「日本における茶臼の研究」『古代学研究所研究紀要』(財)古代学協会
- 久保裕子 1997「漁網鉢の製作技術と漁網復元への試論」『民具研究』第116号 日本国芸学会
- 坂本嘉弘 2005「中世太友城下町跡出土の土師質土器編年」『豊後府内2』
- 重久淳一 1999「土師器について」『富隈城跡II』隼人町教育委員会
- 重根弘和 2005「中世の備前焼」『備前焼研究最前線』備前市歴史民俗資料館紀要7
- 柴田圭子 1998「湯葉城跡出土土器様相の把握」『湯葉城跡』埋蔵文化財発掘調査報告書第66集
- 鈴木康之 1996「土器類」『草戸千軒町遺跡発掘調査報告V』
- 中井均 2001「中世城館道路から出土する土器についてーその集成を中心にしてー」『久保和士君追悼考古文集』久保和士君追悼考古論文集刊行会
- 秉岡実 2000「備前焼埴輪の編年について」『第3回中世備前焼研究会資料』中世備前焼研究会
- 秉岡実 2002「近世備前焼埴輪の編年案」『岡山城三之跡跡』
- 長谷川京 2008「上製装具からみた中世兵庫津遺跡」『兵庫津の総合的研究ー兵庫津研究の最新成果ー』大手前大学史学研究所オーブン・リサーチ・センター研究報告第7集
- 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所 1993「上鍾」『草戸千軒町遺跡発掘調査報告』
- 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所 1994「上鍾」『草戸千軒町遺跡発掘調査報告』
- 藤澤良祐 2001「瀬戸・美濃大窯の生産技術」『瀬戸大窯とその時代』財團法人瀬戸市埋蔵文化財センター設立10周年記念企画展図録
- 藤澤良祐 2008「中世瀬戸窯の研究」高志講演
- 細田直潤 2001「『海沿官道跡出土の土器について』『富山考古学研究』第4号財团法人富山県文化財振興財團
- 間野忠彦 1991「備前焼」考古ライブラリー60 ニューサイエンス社
- 港区芝公園1丁目遺跡調査団 1988「土鍾」『芝公園1丁目増上寺寺院 光法院・松柏院跡・源興院跡 一港区役所新庁舎建設に伴う発掘調査報告書』
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2004「中山道路」宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第93集
- 都城市教育委員会 1991「都之城取派遺跡発掘調査報告」都城市文化財調査報告書 第15集
- 森 誠 1992「16世紀後半から17世紀初頭の陶磁器」『難波宮址の研究』第九
- 森田勉 1982「14~16世紀の白磁の形式分類と編年」『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会
- 森村健一 1995「福徳寺漳洲窯系青花・五彩・螭龍地の編年」『大阪府埋蔵文化財協会研究紀要』3
- 山崎信二 2000「近世瓦の研究」奈良国立文化財研究所学報第59冊
- 山本哲也 2007「豊前・豊後に於ける瓦質土器の初期様相」『瓦質土器の発表と定義ー瓦質土器を考える(前編)ー』第26回中世土器研究会発表資料 日本中世土器研究会
- 山本信夫 2000「太宰府条坊跡XV~陶磁器分類編ー太宰府市の文化財第49集

第20表 白磁観察表

番号	出土地点	器種	部位	法量(cm)		素地 色調	色調 色調	買入 場所	分類	備考(防錆性質・鉛跡など)	注記名			
				高さ	横幅									
1	曲F1 田D2	鏡	口	16.8	8.0	灰白	× 灰白	太白山V	地に4点赤	D2				
2	曲A3b	鏡	周縁一部	6.2	8.0	灰白	× 灰白	太白山V-4	見込みへ鉛跡内に繊維目で縦目で充てん	B A3-4 1層				
3	SG2-1 8層	鏡	底	5.8	8.0	灰白	灰白	太白山V	露井部の鉛跡から2次判明した鉛跡あり	Q170 塚原				
4	SG2-1 鏡2層	鏡	口	—	—	灰白	透明	西山C	内部と外部が混在する	P170 II				
5	曲D 旧A	鏡	口	—	—	灰白	透明	西山C	地に薄くかかる	A N 3 層				
6	曲A1	鏡	口-鈕	17	8.0	灰白	× 灰白	西山C	口縁部の鉛跡は剥離している。被熱感あり。底部難熱か。	H/H1 A3 H D/A1				
7	曲A3	鏡	口	16.8	8.0	明竹7段	透明	西山C	明竹7段	地表面に気泡あり	的A2 5層			
8	曲E	鏡	口	—	—	灰白	透明	西山C	地表面に気泡あり	K 下下				
9	水S51 附1	鏡	口	—	—	灰白	透明	西山C	外周部縫合部に細胞	谷2 1層+6.1				
10	鏡A3	鏡	口	—	—	明竹7段	透明	西山C	9に見られるが、より複数ある。内外部縫合部に各面顕1	的A2 5				
11	曲F1 F1-215	鏡	口	—	—	灰白	透明	西山C	○ 磨耗	D2 F1-215				
12	曲A 2層	鏡	口	13.8	8.0	灰白	× 灰白	西山C	外周は調整が粗く凹面になっている。全体に被熱感あり	A3 II 層 谷2 2P3-1				
13	曲B 3 層	鏡	口	—	—	14.1	8.0	透明	○ 清透	西山C	地は黄色緑味。	B 3 3 層		
14	SG2-2 8層	鏡	底	—	—	灰白	透明	西山C	見込みへ鉛跡、圓錐、外周部底半より露井	Q 170 202				
15	角	鏡	周縁一部	5.0	8.0	灰白	透明	西山C	露井部側面をやや剥り落としている。	H 中山				
16	曲F1 旧D2	鏡	周縁一部	5.8	8.0	灰白	透明	西山C	見込みに繊維で草花、圓錐	D2				
17	水木土・造成土	鏡	周縁一部	6.6	8.0	灰白	透明	西山C	○ 磨耗	谷2 10層				
18	鏡A3	鏡	口	9.8	8.0	灰白	白色	○ 清透	西山C	○ 磨耗	的A2 C 層			
19	鏡A3	鏡	口	10	8.0	淡黄	白色	○ 清透	西山C	見込みに鉛跡が残るため、剥り落合か?	的A2 C 層+H1 A2 B 層			
20	鏡E2 S83	鏡	口	9.0	8.0	灰白	白色	○ 清透	西山C	○ 磨耗	D1 P57			
21	SG1-2 露井下層	鏡	口	9.2	8.0	灰白	白色	○ 清透	西山C	見込みに鉛跡、圓錐	F1 170 E14 3層			
22	曲A2 2層	鏡	口	10.4	8.0	灰白	白色	○ 清透	西山C	外周は調整が粗く凹凸立つ	A3 II 層+H1 A2 B2 層-1			
23	曲E1 F1-1	鏡	口	2.8	9.8	3.0	内面に黃褐色	○ 清透	西山C	地中央に斑点	F1 170 N-15 B			
24	鏡E4	鏡	口	—	—	3.4	8.0	透明	○ 清透	西山C	地中央に斑点	H/H1 170 E2 2層		
25	曲A2 5M4	鏡	口	2.7	10.1	3.8	淡白	白色	○ 清透	西山C	地中央に斑点	A2 P2-14 A2 B2 層-14		
26	鏡K502	鏡	口	3.0	11.4	18	淡白	白色	○ 清透	西山C	○ 磨耗	K SC4		
27	曲A4 2層	鏡	口	—	—	3.8	淡黄	白色	○ 清透	西山C	○ 磨耗	谷2 41-2		
28	曲E2 12-294	鏡	周縁一部	—	—	3.3	8.0	白色	○ 清透	西山C	裏面に墨書きで「二」	F1 P94		
29	鏡A3	鏡	口	2.3	9.8	4.6	白色	透明	○ 清透	西山C	見込みに鉛跡残る。全面露井、内面フリモノなし。	的A2 B2 層-1		
30	曲E3 2層	鏡	周縁一部	—	—	4.2	8.0	白色	○ 清透	西山C	見込みに鉛跡残る。裏面に墨書き「元」	B3 T9 2層		
31	SG1-2 例溝	鏡	底	—	—	4.6	8.0	白色	○ 清透	西山C	全面露井	F1 T9 5.1 E		
32	曲F1 S51	鏡	口	2.5	10.0	4.5	黄褐色	白色	○ 清透	西山C	見込みに鉛跡残る。地が薄く一部剥離している。	D2		
33	H S89	鏡	底	—	—	3.7	8.0	白色	○ 清透	西山C	地に凹凸が残っている。	G2 PS + P6 -1		
34	西	鏡	口	10.4	8.0	淡青	白色	○ 清透	西山C	○ 磨耗	H/D B			
35	鏡D 旧A	鏡	周縁一部	—	—	3.6	8.0	白色	白色	○ 清透	西山C	○ 磨耗	A N 4 層	
36	鏡A3	鏡	小鏡 口	3.1	7.7	3.2	灰白	透明	× 清透	西山C	見込みに鉛跡に剥離。	的A2 A 層+H1 B 層+C 層		
37	鏡A3	鏡	小鏡 口	—	—	2.8	灰白	白色	○ 清透	西山C	裏面に墨書き「丁」。二次的に被熱している。	的A2 B 層		
38	水木土/明面	八角片	周縁一部	—	—	2.6	8.0	白色	○ 清透	西山C	裏面に墨書き「丁」。	谷2 5-52-7		
39	水木土/明面	八角片	周縁一部	—	—	3	8.0	白色	○ 清透	西山C	部分的に色あせしている。内面露井ちぢみあり。	谷2 5-5 層		
40	曲F1 田J	八角片	口	3.1	7.4	3.6	青白	白色	○ 清透	西山C	見込みに鉛跡あり	L3 層 S-5 + Q II		
41	曲A3 S81	鏡	口	—	—	12.6	8.0	白色	○ 増厚	西山C	地ふくらみ	AAP97		
42	水木土II层	鏡	口	—	—	12.6	8.0	白色	○ 増厚	西山C	裏面に黒色ちぢみ。	谷2 S52 B B+eガラ		
43	曲A3 2層	鏡	口	—	—	10.4	8.0	透明	○ 增厚	西山C	○ 増厚	谷3+A3 1層		
44	水S51 附1	鏡	口	3	11.8	6.4	白色	× 増厚	西山C	地表面に気泡あり	谷2 2層			
45	水S51 附1	鏡	口	—	—	12.7	6.2	白色	× 増厚	西山C	○ 増厚	谷2 S51-A 37		
46	曲 M- P10	鏡	口	3	19.2	10.6	灰白	× 増厚	西山C	露井と他の鏡が薄く、表面がざらざらしている。大型造	P P10-1			
47	鏡A3	鏡	口	—	—	3.1	12.3	6.8	白色	○ 増厚	西山C	裏面に露井あり。「端」か	的A2 C 層+A1 1層	
48	鏡G 5R1	鏡	口	2.7	11.4	6.4	乳白色	○ 増厚	西山C	○ 増厚	G1 P7			
49	SG1-2 石板	鏡	口	2.8	12.0	6.6	白色	× 増厚	西山C	裏面薄手	Q170-2-G1-2-H1-2-S51-1			
50	曲E3 2層	鏡	周縁一部	—	—	9.6	8.0	白色	× 増厚	西山C	地厚め、ちぢみあり	B3 82 層		
51	曲K H1-P172	鏡	周縁一部	—	—	7.1	8.0	白色	透明	西山C	地の露井が薄く、他のひび割れが見られる	G2 P172		
52	曲 K SB6	鏡	周縁一部	—	—	12.8	8.0	白色	○ 増厚	西山C	大型造と同一個と接合不可	G2 E P47		
53	SG2-2 墓土	鏡	口	2.7	10.4	6.6	灰白	× 増厚	西山C	露井部分が色あせ化している	Q 170 73			
54	曲E3 5R2	鏡	口	—	—	2.6	10.2	4.3	淡黄	○ 増厚	西山C	地の露井で鉛跡。清透感を強調している。裏面露井が暗め。	B3 P220	
55	水木土・造成土	鏡	底	—	—	5.1	8.0	白色	○ 増厚	西山C	○ 増厚	谷2		
56	曲A3 S812	鏡	周縁一部	—	—	3.8	8.0	乳白色	○ 清透	西山C	裏面に墨書き「丁」	A1 P136		
57	水木土・造成土	鏡	周縁一部	—	—	3.0	8.0	白色	○ 増厚	西山C	2次的に被熱している。	谷2 10層		
58	水木土6層下層	鏡	周縁一部	—	—	2.6	8.0	白色	○ 増厚	西山C	○ 増厚	谷2 253 1層		
59	水木土・造成土	鏡	口	—	—	10.2	4.2	8.0	透明	○ 增厚	西山C	内面露井と露井込み、内面は露井によって色を現す。裏面露井は色あせ化している。	谷2 7	
60	水木土1層	鏡	底	—	—	5.1	8.0	白色	○ 増厚	西山C	裏面にも露井が被熱している	谷2 253 1層		
61	南	小鏡	口	3.3	7.1	2.6	白色	○ 増厚	西山C	○ 増厚	H 中山			
62	西	鏡	口	—	—	底	白色	○ 増厚	西山C	○ 増厚	谷2 7-29 層			
63	曲K 2層	鏡	口	—	—	6.4	8.0	透明	○ 增厚	西山C	○ 増厚	谷2 25 層		
64	水S51 附1	鏡	口	—	—	7.6	8.0	白色	× 増厚	西山C	61と同形	谷2 25 層		
65	曲K	小鏡	口	2.0	7.0	2.5	底	白色	× 増厚	西山C	裏面に露井書きあり	K2-6		
66	曲K	小鏡	口	—	—	2.5	8.0	白色	× 増厚	西山C	61と同形の露井所用か? 裏面も露井	K12-6		
67	曲E4 4層	鏡	周縁一部	—	—	3.0	8.0	白色	× 増厚	西山C	露井から裏面から露井まで1字に隠す	B 4 4 層		
68	曲E4 1層	鏡	周縁一部	—	—	3.3	13.2	6	透明	○ 增厚	西山C	露井と露井底がある。	B4 T9	
69	曲E3 S813	鏡	口	—	—	2.7	13.4	6.8	白色	○ 增厚	西山C	露井と露井底で露井が斜めに剥離している。裏面部分は露井が暗め。	B3 PT25	
70	鏡D	鏡	口	2.1	13.1	9.0	白色	○ 增厚	西山C	露井と露井底で露井が渋めに剥離している。	B4 E			
71	SG2-2 墓土	鏡	口	—	—	13.2	10.0	白色	○ 增厚	西山C	露井と露井底で露井が渋めに剥離している。	Q 170 227		
72	曲G 旧G1	鏡	口	3.0	12.3	9.0	白色	透明	○ 增厚	西山C	内外にも露井が有る。	G1 PT1		
73	曲K 缶 下面	鏡	口	12.8	8.0	透明	○ 增厚	西山C	露井と露井底で露井が渋めに剥離している。	Kb 缶下				
74	鏡E4	鏡	口	2.5	12.4	6.2	透明	○ 增厚	西山C	露井部分が色あせ化している。	的A3 S3 T1			
75	鏡F1	鏡	口	—	—	13	8.0	透明	○ 增厚	西山C	見込み露井部分が色あせ化している。	的A1 4 ~ 6 層		
76	水S51 石壁	鏡	周縁一部	—	—	6.2	8.0	透明	○ 增厚	西山C	露井部分が色あせ化している。	谷2 25 層		
77	曲E2 3層	鏡	周縁一部	—	—	5.8	8.0	透明	○ 增厚	西山C	露井部分が色あせ化している。	F1 N-1 3 層		
78	曲H1 H1-P162	鏡	周縁一部	—	—	5.6	8.0	灰白	○ 增厚	西山C	露井部分が色あせ化している	G2 P162-1		

第 21 表 -1 青磁觀察表

番號 No.	出土地点 出土地点	種類 部位 種類 部位	注意 (in.)		文様	地質 色調	種類 種類	鉱物 鉱物	分類	備考	注記名	
			直角	横角								
79	曲H2 田 G5	鏡 口~側			片切削鏡面文	青白	鏡 オリーフ	× 上田 B I	複合有	G.5b H		
80	水 SE1 D 土上壁	鏡 朝			錐削弁文	青白	鏡 オリーフ	×	上田 B I	(B) ISO A 地		
81	曲J1 J1-P3.18	鏡 口~底	6.7	14.0	5.0 片切削鏡面文 / 印花 / 圖繪	青白	鏡 オリーフ	×	上田 B II	高台内部付着	L.P3.4c + H.2	
82	曲J1 J1-P4.3	鏡 口~側		11.8	片切削鏡面文	青白	鏡 オリーフ	×	上田 B I	L. P4.3		
83	電A3	鏡 口~側		12.6	片切削鏡面文	青白	鏡 オリーフ	×	上田 B I	(H) A2 B I		
84	電B4	鏡 口~側		15.4	片切削鏡面文	青白	鏡 オリーフ	×	上田 B I	(H) A2 B II		
85	電A3	鏡 口~側		13.2	片切削鏡面文	青白	鏡 オリーフ	○	上田 B I	H. A2		
86	曲I1 曲V	鏡 口~側			刮削文	青白	鏡 オリーフ			V. 1		
87	SG2-2 地土	鏡 鏡			片切削鏡面文	青白	鏡 オリーフ	×	上田 B I	複合有	Q. 75. T. 2	
88	曲A2 2 量	鏡 口~側		11.0	錐削の大きな鏡面文	青白	鏡 オリーフ	×	上田 B I	A2. Q. 20. T. 3		
89	曲E1 田D.1	鏡 口~側			片切削鏡面文	青白	鏡 オリーフ	×	上田 B I	(D. 1. A2) D. 1		
90	曲F1 田D.2	鏡 鏡			刮削文 / へら彫刻文?	青白	鏡 オリーフ	×	上田 B I	D. 2 F		
91	曲J1 J1-P2.8	鏡 朝			刮削文 / へら彫刻文?	青白	鏡 オリーフ	×	上田 B I	L. P2.8		
92	SG1-2 追加付石	鏡 朝~底			5.0 片切削鏡面文 / 印花	青白	鏡 オリーフ	○	上田 B II	全面施物後高台内の物を範囲に割り取る	H. 16. E. 24.4	
93	水土 B 斜床	鏡 朝~底			4.9 へら彫刻文	青白	鏡 オリーフ	○	上田 B II	全體的に彩色化・透鏡の形跡	S. 12. Z. 3	
94	水土土 地土	鏡 朝~底			4.6 へら彫刻文 / うねり彫	青白	鏡 オリーフ	○	上田 B II	青白 S. 8. 突起		
95	曲H6 田F.1	鏡 口~側	11.4		鍛削鏡面文 / 刮削みを輪郭の輪郭で囲む	青白	鏡 オリーフ	×	上田 B I	(O. 1. B. 1. H. 6) D. 1. 外側に輪郭めぐらしをした輪郭で囲むと見える。	Q. 22. H. 16.2	
96	水S3.1 色I	鏡 口~側	12.4		鍛削鏡面文	青白	鏡 オリーフ	○	上田 B II	外側に輪郭めぐらしをして輪郭めぐらしが目立つ。透明なガラスの井戸が中に入っている。	O. 22.1	
97	SG2-2 棚	鏡 口~側	18.1		鍛削鏡面文 / 輪郭	青白	鏡 オリーフ	○	上田 B II	内側に輪郭めぐらし、裏と輪郭めぐらし一致。輪郭めぐらしは(0.1)	Q. 75. T. 3	
98	西谷 2 量	鏡 口~側	11.0		鍛削鏡面文	青白	鏡 オリーフ	○	上田 B II	内側に輪郭めぐらししない。輪郭めぐらしは(0.1)	Q. 11.9	
99	曲A4 2 量	鏡 口~側	13.0		鍛削鏡面文	青白	鏡 オリーフ	○	上田 B II	内側に輪郭めぐらししない。輪郭めぐらしは(0.1)	H. 14.3. L. 13.4. S. 12.9. D. 10.9	
100	水 S5.1 石壁	鏡 口~側	13.8		鍛削鏡面文	青白	鏡 オリーフ	○	上田 B II	全面施物後高台内の物を範囲に割り取る	H. 16. E. 24.4	
101	曲A4 2 量	鏡 口~側	12.6		鍛削鏡面文	青白	鏡 オリーフ	○	上田 B II	内側に輪郭めぐらし	A. 14.2. Z. 2	
102	曲E2 田F.1	鏡 口~側	13.2		鍛削鏡面文	青白	鏡 オリーフ	○	上田 B II	裏地は底である。透鏡表面	H. 2. Z. 3	
103	電B4	鏡 口~側			鍛削鏡面文	青白	鏡 オリーフ	○	上田 B II	二次的に輪郭めぐらし、文様も明瞭でない。	H. 21	
104	曲J1 連続J1	鏡 朝~底			4.8 刮削文 / へら彫刻鏡面文 / 印花	青白	鏡 オリーフ	○	上田 B II	全面施物後高台内の物を範囲に割り取る	Q. 75. T. 3. H. 7	
105	曲F3 田F.2	鏡 口~側	13.2		鍛削鏡面文 / ひだの状態で目立つ刮削文	青白	鏡 オリーフ	○	上田 B II	内側に輪郭めぐらし、裏と輪郭めぐらし一致。輪郭めぐらしは(0.1)	Q. 75. T. 3	
106	曲J2 1 量	鏡 口~側	14.6		刮削鏡面文 / 印花文 / ひだの状態で目立つ刮削文	青白	鏡 オリーフ	○	上田 B II	内側に輪郭めぐらしの單位をある程度意識している。	H. 14.3. L. 13.4. S. 12.9. D. 10.9	
107	曲J1 J1-S5.2	鏡 口~側	13.0		刮削文 / 面文 / 鍛削ならうマスク彫刻文	青白	鏡 オリーフ	○	上田 B II	内側に輪郭めぐらしの單位を意識して置いている。	L. 13.2. H. 3	
108	水 S. 37. 37	鏡 口~側			刮削文 / 文等	青白	鏡 オリーフ	○	上田 B II	裏地は底である。透鏡表面	H. 2. Z. 3	
109	電E1 鏡	鏡 口~側			粗粒輪郭文 / 陰影	青白	鏡 オリーフ	○	上田 B II	内側に輪郭めぐらし	A. 2.1	
110	曲A2 1 量	鏡 口~側			粗粒輪郭文 / 陰影	青白	鏡 オリーフ	○	上田 B II	内側に輪郭めぐらし	A. 2.1	
111	曲A1 1 量	鏡 口~側			粗粒輪郭文 / 陰影	青白	鏡 オリーフ	○	上田 B II	内側に輪郭めぐらし	A. 2.1	
112	電B3a 5 量	鏡 朝~底			5.8 内側輪郭文 / 外側輪郭文 / 外側輪郭文	青白	鏡 オリーフ	○	上田 C I	側面輪郭めぐらし。裏地には底である。	Q. 75. T. 3. H. 7	
113	水土土 地土	鏡 朝~底			6.2 内側輪郭文 / 片切削鏡面文 / ひだ彫刻文	青白	鏡 オリーフ	○	上田 C I	全面施物後高台内の物を範囲に割り取る	B. 12. G. 12.2	
114	曲K1	鏡 口~側			施物化した蓋文等	青白	鏡 オリーフ	○	上田 C I	蓋	K. 7.3	
115	曲F1 田D.2	鏡 口~側	14.7			施物化した蓋文等	青白	鏡 オリーフ	○	上田 C I	蓋	D. 22. C. 14
116	電B4	鏡 口~側	15.8			施物化した蓋文等	青白	鏡 オリーフ	○	上田 C I	蓋	H. 0.2. Z. 2
117	曲 K SD.5	鏡 口~側			施物化した蓋文等	青白	鏡 オリーフ	○	上田 C I	蓋	K. SD.5.9	
118	曲 K	鏡 口~底	6.3	15.6	5.6 印花 / 圖繪	青白	鏡 オリーフ	○	上田 C I	蓋付めぐらし	K. H. 7	
119	曲 J. 1-F. 19	鏡 口~側	14.7			施物化した蓋文等	青白	鏡 オリーフ	○	上田 C I	蓋	L. 14.2. P. 27.6
120	曲 F. 5B.1	鏡 口~側			印文	青白	鏡 オリーフ	○	上田 C I	側面輪郭めぐらし。裏地には底である。	B. 10.2. G. 10.2	
121	暗 A3	鏡 口~側	14.4			施物化した蓋文等	青白	鏡 オリーフ	○	上田 C I	蓋	H. 21
122	暗 A3	鏡 口~側	13.6		施物化した蓋文等	青白	鏡 オリーフ	○	上田 C I	側面輪郭めぐらし。裏地には底である。	H. 21. A. 2. Z. 2	
123	曲 A3 S5.1	鏡 口~側	15.8			施物化した蓋文等	青白	鏡 オリーフ	○	上田 C I	蓋	A. 21. P. 21.8
124	曲 A4 8 星	鏡 口~側	15.2			施物化した蓋文等	青白	鏡 オリーフ	○	上田 C I	蓋	A. 21. P. 21.8
125	曲 F2 田E.5	鏡 口~側	14.8			施物化した蓋文等	青白	鏡 オリーフ	○	上田 C I	蓋	H. 11.2. G. 11.2
126	曲 E. 2 量	鏡 口~側	16.2			施物化した蓋文等	青白	鏡 オリーフ	○	上田 C I	蓋	H. 11.2. G. 11.2
127	曲 K. 鏡 下面	鏡 口~側	14.6			施物化した蓋文等	青白	鏡 オリーフ	○	上田 C I	蓋	K. 11.2. P. 11.2
128	曲 B. 2 量	鏡 口~側	14.9			施物化した蓋文等	青白	鏡 オリーフ	○	上田 C I	蓋付めぐらし	B. 11.2. G. 11.2
129	曲 J. 1-B.1	鏡 口~側	14.8			施物化した蓋文等	青白	鏡 オリーフ	○	上田 C I	蓋付めぐらし	L. 11.2. H. 11
130	曲 F1 田D.2	鏡 口~側	14.6			施物化した蓋文等	青白	鏡 オリーフ	○	上田 C I	裏地は底である。	D. 12. E. 14.
131	曲 A4 1 量	鏡 口~側	5.4	12.4	4.8	施物化した蓋文等	青白	鏡 オリーフ	○	上田 C I	裏地は底である。	W. 47.4
132	曲 B3.1 量	鏡 口~側	14.0			施物化した蓋文等	青白	鏡 オリーフ	○	上田 C I	裏地は底である。	H. 0.1. Z. 11.2
133	SG2-2 植物J1	鏡 口~側	14.5			施物化した蓋文等	青白	鏡 オリーフ	○	上田 C I	裏地は底である。	V. 7.5. H. 7.2
134	曲 A2 S2	鏡 口~側	15.5			施物化した蓋文等	青白	鏡 オリーフ	○	上田 C I	裏地は底である。	A. 21. B. 1. S. 2. 10.10
135	SG2-2 植物J2	鏡 口~側			標記文 / 鋼板文	青白	鏡 オリーフ	○	上田 C I	裏地は底である。	Q. 75. S. 2. 27.1	
136	曲 H. 1-B.1	鏡 口~側			既輪郭 / 創作 / 刻文 / 印花文 / マスク彫刻文	青白	鏡 オリーフ	○	上田 C I	施物化	I. 1. 3	
137	曲 F. 1-B.2	鏡 朝			内輪郭花文	青白	鏡 オリーフ	○	上田 C I	施物化	D. 21. S. 22. D. 22.4	
138	水土土 地土	鏡 口~側	7.3		鍛削鏡面文	青白	鏡 オリーフ	○	内輪郭花文 (2.0~1.6) 1.6のもの)	裏地は底である。文様は輪郭状。	G. 21. 2. B. 1. 3. 7. 3	
139	水土土 地土	鏡 口~側	7.2		鍛削鏡面文	青白	鏡 オリーフ	○	内輪郭花文 (2.0~1.6) 1.6のもの)	裏地は底である。文様は輪郭状。	G. 21. 2. B. 1. 3. 7. 3	
140	曲 F. 1-B.2	鏡 口~側	7.3		鍛削鏡面文 / 鋼板文 / 鋼版鏡面文	青白	鏡 オリーフ	○	内輪郭花文 (2.0~1.6) 1.6のもの)	裏地は底である。文様は輪郭状。	D. 2. 2	
141	西	鏡 口~側	11.4		鍛削鏡面文	青白	鏡 オリーフ	○	内輪郭花文 (2.0~1.6) 1.6のもの)	裏地は底である。文様は輪郭状。	K. 11.2. P. 11.2	
142	曲 K	鏡 口~側	13.4			鍛削鏡面文	青白	鏡 オリーフ	○	内輪郭花文 (2.0~1.6) 1.6のもの)	裏地は底である。文様は輪郭状。	K. 11.2. P. 11.2
143	曲 F. 5B.7	鏡 口~側				錐削文 / 純錐文	青白	鏡 オリーフ	○	内輪郭花文 (2.0~1.6) 1.6のもの)	裏地は底である。文様は輪郭状。	Q. 75. H. 2. 27.1
144	曲 E2 田P.4	鏡 口~側	11.8			錐削文 / 純錐文	青白	鏡 オリーフ	○	内輪郭花文 (2.0~1.6) 1.6のもの)	裏地は底である。文様は輪郭状。	P. 4. P. 4.4
145	曲 F. 1-B.2	鏡 口~側	11.6			錐削文 / 純錐文	青白	鏡 オリーフ	○	内輪郭花文 (2.0~1.6) 1.6のもの)	裏地は底である。文様は輪郭状。	D. 21.3. S. 21.1. H. 1. 3
146	曲 E. 2 量	鏡 口~側	12.4			錐削文 / 純錐文	青白	鏡 オリーフ	○	内輪郭花文 (2.0~1.6) 1.6のもの)	裏地は底である。文様は輪郭状。	F. 4. 4. 2. 4
147	曲 K. 鏡 下面	鏡 口~側	10.2			錐削文 / 純錐文	青白	鏡 オリーフ	○	内輪郭花文 (2.0~1.6) 1.6のもの)	裏地は底である。文様は輪郭状。	K. 11.2. P. 11.2
148	曲 A3 2 量	鏡 口~側	10.6			錐削文 / 純錐文	青白	鏡 オリーフ	○	内輪郭花文 (2.0~1.6) 1.6のもの)	裏地は底である。文様は輪郭状。	A. 21.2. Z. 2
149	曲 E. 4 量	鏡 口~側	3.3	12.0	5.8 錐削の大きな鏡面文 / 印花文	青白	鏡 オリーフ	○	内輪郭花文 (2.0~1.6) 1.6のもの)	裏地は底である。文様は輪郭状。	N. N. 23. E. 4. W. 10	
150	水 S. 9. 7. 7. 7	鏡 口~側			片切削鏡面文 / 不明略	青白	鏡 オリーフ	○	内輪郭花文 (2.0~1.6) 1.6のもの)	裏地は底である。文様は輪郭状。	Q. 75. T. 2. 27.1	
151	曲 E1 田D.1	鏡 口~側	11.6		鍛削の鏡面文	青白	鏡 オリーフ	○	内輪郭花文 (2.0~1.6) 1.6のもの)	裏地は底である。	D. M. C. 2	
152	水 S. 2 量	鏡 口~側	2.6	11.0	4.6 三島の表記模様	青白	鏡 オリーフ	○	内輪郭花文 (2.0~1.6) 1.6のもの)	裏地は底である。	M. 2	
153	SG2-1 植物	鏡 口~側	3.1	11.1	4.3 三島の表記模様	青白	鏡 オリーフ	○	内輪郭花文 (2.0~1.6) 1.6のもの)	裏地は底である。	M. 2. 1. 2. 2	
154	曲 E1 田D.1	鏡 口~側	3.0	12.0	5.6 三島の表記模様	青白	鏡 オリーフ	○	内輪郭花文 (2.0~1.6) 1.6のもの)	裏地は底である。	H. 2. H. 2. 2	
155	SG2-J 2 流通	鏡 口~側	12.6		三島の表記模様	青白	鏡 オリーフ	○	内輪郭花文 (2.0~1.6) 1.6のもの)	裏地は底である。	Q. 75. T. 2. 27.1	

第21表-2 青磁観察表

番号 No.	出土地点 名	番種 名	部位 名	法長 (cm) 最高 間口 最低	文様	出土 状況		種類		分類	備考	注記名
						高さ	幅	高さ	幅			
157 箱 B4	皿	口・側		11.6	三条の波状模様	直筒	粗	サハラ	○ 花鳥足	文様は略等でほとんど見えない	81H 812番	
158 SG-2 横土 4重	皿	口・底	4.0	13.4	6.0 刻花文・印伝文	直筒	粗	オーバーフラット	○ 花鳥足	全周輪廓線高台内の縁を輪郭に引り取る	81H 7-9 II	
159 SG-3 SR1	皿	口・側		3	13.4	5.6 三条の波状模様・刻花文・印伝文	直筒	粗	サハラ	腹付まで一部輪郭、高台内露胎	82P4	
160 水切付 2	皿	口・側		13.0	三条の波状模様・刻花文	直筒	粗	サハラ	○ 花鳥足		81H 2112	
161 水 S51 堀 1	皿	口・側		10.8	三条の波状模様・刻花文	直筒	粗	サハラ	○ 花鳥足	全体的に赤色化	81H 211	
162 曲 H3 田 1	皿	口・底	3.3	11.5	4.6 三条の波状模様	直筒	粗	サハラ	* 花鳥足	見込み剥がれ、腹付まで一部輪郭、高台内露胎	81H 4-7 II	
163 直 H3 AJ-1-P6	皿	口・側		13.0	三条の波状模様	直筒	粗	サハラ	○ 花鳥足		AS29	
164 曲 F3 田 2	皿	口・側		13.0	三条の波状模様	直筒	粗	サハラ	○ 花鳥足	地内に剥落あり	72 A 1番	
165 曲 H4 4重	皿	口・側		12.0	三条の波状模様	直筒	粗	サハラ	○ 花鳥足	地内に剥落あり	84 4番	
166 曲 H1 田 2	皿	口・側		5.8	柳葉とへらによる青海波文・波模様	凸出脚付	粗	オーバーフラット	○ 花鳥足	見込み剥がれ、腹付まで一部輪郭、高台内露胎	81H 4-7	
167 曲 F1 5802	皿	口・側		10.6		直筒	粗	サハラ	○ 花鳥足	見込み剥がれ	81H 2020/08/24	
168 焙 84	皿	底		7.2		直筒	粗	サハラ	○ 花鳥足?	見込み剥がれ、腹付まで一部輪郭、高台内露胎	81H 2020/08/24	
169 水 S52 上層	皿	底		4.8	柳葉内側を割り込んでいる	直筒	粗	サハラ	○ 花鳥足	直筒形、腹付まで一部輪郭	81H 2020/08/24	
170 水土木・透出土	皿	底		5.2		直筒	粗	サハラ	○ 花鳥足	直筒形、8上回の凹字・高台内露胎、腹付剥り跡有り 81H 2020/08/24	81H 2020/08/24	
171 曲 O2 田 C	皿	口・底		5.7	片切模様文・印伝文	直筒	粗	オーバーフラット	○ 花鳥足	全周輪廓線高台内の縁を輪郭に引り取る	C 1	
172 水 3 通常	皿	口・底		5.9	印伝文	直筒	粗	サハラ	○ 花鳥足	全周輪廓線高台内の縁を輪郭に引り取る	81H 122	
173 SG-1 濃透土層	皿	口・底		6.5	印伝・波模様	直筒	粗	サハラ	○ 花鳥足	全周輪廓線高台内の縁を輪郭に引り取る	81H 123	
174 曲 F1 S80	皿	口・底		6.4	柳葉文・芋文	直筒	粗	サハラ	○ 大きな丸紋が2つ、全周輪廓線高台内の縁を輪郭に引り取る	82/3/24		
175 曲 K	湯7B1 陶7B1	口・底				直筒	粗	オーバーフラット	○	到着時剥落、斜面の凹字は8上回の凹字	81H 2020/08/24	
176 SG-1-2 横作土	皿	口・底		6.4		直筒	粗	オーバーフラット	○	腹付まで一部輪郭、高台内露胎	81H 2020/08/24	
177 曲 F1 F1-P546	湯7B1 陶7B1	口・底		5.1	2重透・波模様	直筒	粗	オーバーフラット	○	腹付輪郭、高台内露胎	81H 2020/08/24	
178 焙 84	皿	口・底		5.3	印伝文	直筒	粗	サハラ	○ 花鳥足	見込み剥がれ、腹付輪郭	81H 2020/08/24	
179 SG-1-2 硬化面	湯7B1 陶7B1	口・底		6.0		直筒	粗	サハラ	○ 花鳥足	81H 2020/08/24		
180 水切付 1	皿	口・底		4.8	印伝文	直筒	粗	サハラ	○ 花鳥足	81H 2020/08/24		
181 曲 F1 F1-P74	湯7B1 陶7B1	口・底		7.0	見込み二重透模様 (印伝文)	直筒	粗	オーバーフラット	○	見込み剥がれせず、腹付輪郭、高台内露胎	82/3/24	
182 曲 K	湯7B1 陶7B1	口・底		6.2	印伝文	直筒	粗	サハラ	○	腹付まで一部輪郭、高台内露胎	81H 2020/08/24	
183 曲 JI-P74	湯7B1 陶7B1	口・底		5.0		直筒	粗	オーバーフラット	○	腹付まで一部輪郭、高台内露胎	81H 2020/08/24	
184 水 2 透 II区	皿	口・底		4.8	波模様	直筒	粗	サハラ	○ 花鳥足	腹付輪郭、一部脚部輪郭まで露胎	81H 2020/08/24	
185 SG-1-2 陶溝	湯7B1 陶7B1	口・底		6.2		直筒	粗	オーバーフラット	○	81H 2020/08/24		
186 水切付 1	皿	口・底		5.2	見込み圓輪か (造成不良のため不平)	直筒	粗	サハラ	○ 花鳥足	81H 2020/08/24		
187 曲 1 陶 1 旧	皿	口・底		5.5	印伝文	直筒	粗	サハラ	○ 花鳥足	腹付輪郭、高台内露胎	81H 2020/08/24	
188 SG-1 濃透土層	湯7B1 陶7B1	口・底		5.2		直筒	粗	サハラ	○ 花鳥足	81H 2020/08/24		
189 曲 P3-P64	盤	口・横		30.0		直筒	粗	サハラ	○	81H 2020/08/24		
190 硬群 様	盤	口・横		35.1	刻花文	直筒	粗	サハラ	○		81H 2020/08/24	
191 曲 F384	盤	口・横		26.0	八重菊の輪・蓮井丹文	直筒	粗	オーバーフラット	○	81H 2020/08/24		
192 曲 F1 5817	盤	口・底		8.0	八重菊の輪・蓮井丹文 / 印伝 (菊花)	直筒	粗	サハラ	○	81H 2020/08/24		
193 SG-2 横2 層	盤	底		11.4	今後の輪・蓮井丹文 / 印伝文	直筒	粗	オーバーフラット	○	81H 2020/08/24		
194 水 S6 36 層	湯7B1 陶7B1	口・底		6.4	柳葉透文	直筒	粗	サハラ	○	81H 2020/08/24		
195 硬群 様	各7B1 口・横			7.1		直筒	粗	サハラ	○	81H 2020/08/24		
196 曲 A2 2 層	香炉? 口・横			6.4	次郎	直筒	粗	サハラ	○	81H 2020/08/24		
197 水土木・透出土	直	口・底		6.0	片切模様透文・印伝文	直筒	粗	サハラ	○	81H 2020/08/24		
198 曲 F1 田 D2	直	口・底		6.0	印伝文・透出土	直筒	粗	オーバーフラット	○	81H 2020/08/24		
199 SG-1 濃透土層	直	口・底		6.0	透出土	直筒	粗	サハラ	○	81H 2020/08/24		
200 曲 F1 田 D2	直	口・底		6.0	透出土	直筒	粗	サハラ	○	81H 2020/08/24		
201 曲 A3	直	口		4.4		直筒	粗	サハラ	○	81H 2020/08/24		
202 曲 F1 F1-P42 不明 肉	直	口・横		4.4		直筒	粗	サハラ	○	81H 2020/08/24		
203 板 A3	直	口		4.4		直筒	粗	サハラ	○	81H 2020/08/24		
204 水 2 区	直	口・底		4.4		直筒	粗	サハラ	○	81H 2020/08/24		
205 水 S51 濃透土	直	口・底		4.4		直筒	粗	サハラ	○	81H 2020/08/24		
206 硬群 様	直	口・底		4.4		直筒	粗	サハラ	○	81H 2020/08/24		
207 曲 F1 田 D2 不明 主持口	直	口・底		4.4		直筒	粗	サハラ	○	81H 2020/08/24		
208 曲 G 581 小春	直	口・底	5.1	2.2	2.4	直筒	粗	サハラ	○	81H 2020/08/24		

第22表-1 青花観察表

番号 No.	出土地点 名	番種 名	部位 名	法長 (cm) 最高 間口 最低	文様	出土 状況		種類		分類	備考	注記名	
						高さ	幅	高さ	幅				
209 筋 A3a	口	口・横	12.6	口筒	荷葉・網目・草花文	直筒	粗	明治灰	被毛	小野 8	81H A21 8番		
210 水切付 1 4重	口	口・底	5.8	柳葉文・荷葉文・透込文・花文	直筒	粗	明治灰	被毛	小野 8	腹付に織目細胞、袖ムラあり	81H 2020/08/24		
210 曲 A2 581	口	口・底	5.6	12.7	6.1 2重透・波模様・透込・透出文・透込文・透出文	直筒	粗	明治灰	被毛	小野 8	A2H-A3H 812番		
211 曲 B2 3層	口	口・底	6.1	6.5	5.6 3重透・波模様・透込文・透出文・透込文・透出文	直筒	粗	明治灰	被毛	小野 8	腹付輪郭	81H 2020/08/24	
212 101 沈透模様	口	口・横	13.8	口筒	荷葉・波模様	直筒	粗	明治灰	被毛	小野 8	81H 2020/08/24		
213 筋 B4	口	口・底	13.0	口筒	荷葉・網目・小花文	直筒	粗	明治灰	被毛	小野 8	81H 2020/08/24		
214 曲 A2 581	口	口・横	13.0	口筒	荷葉・網目・小花文	直筒	粗	明治灰	被毛	小野 8	81H 2020/08/24		
215 直	口	口・横	15.4	口筒	荷葉・網目・小花文	直筒	粗	明治灰	被毛	小野 8	81H 2020/08/24		
216 筋 B4	口	口・横	14.8	口筒	荷葉・網目・花鳥文	直筒	粗	明治灰	被毛	小野 8	81H 2020/08/24		
217 水土木・透出土	直	口・底		14.0	口筒	荷葉・官窯文・網目・透込文	直筒	粗	明治灰	被毛	小野 8	81H 2020/08/24	
218 曲 J1 田 D1	直	口・底		5.4	口筒・透出文・法華文見・透込文・小花文	直筒	粗	明治灰	被毛	小野 8	81H 2020/08/24		
219 SG-1 沈透 2層	直	口・底		4.2	口筒・透込文	直筒	粗	明治灰	被毛	小野 8	81H 2020/08/24		
220 SG-2 582	直	口・底		4.6	透出文・透込文・唐草文・唐文文・絞文文	直筒	粗	明治灰	被毛	小野 8	腹付輪郭	81H 2020/08/24	
221 曲 F1 田 D2	直	口・底	11.4	口筒	荷葉・網目・山水人物	直筒	粗	明治灰	被毛	小野 8	81H 2020/08/24		
222 SG-2 582 2層	直	口・底		4.6	口筒	荷葉・網目・唐草文	直筒	粗	明治灰	被毛	小野 8	81H 2020/08/24	
223 曲 J1 田 D1	直	口		4.6	口筒	荷葉・網目	直筒	粗	明治灰	被毛	小野 8	81H 2020/08/24	
224 曲 J1 田 D1	直	口・底		4.6	口筒	荷葉・網目・唐草文・透出文	直筒	粗	明治灰	被毛	小野 8	81H 2020/08/24	
225 水切付 2 2層	直	口・底		4.8	透込文・荷葉文・花鳥文	直筒	粗	明治灰	被毛	小野 8	透込文が最も多く見える。	81H 2020/08/24	
226 水 S81	直	口・底		4.4	透込文・荷葉文・花鳥文・高内透	直筒	粗	明治灰	被毛	小野 8	透込文が最も多く見える。	81H 2020/08/24	

第 22 表-2 青花觀察表

N.O.	出土点	種類	部位	法文(日本)	文種	断土 高さ cm	地質 岩層 色調	場所 地圖 番号	分類	備考	注記名	
227	水切2 2層 磁	口→底		見込み:花瓶、高台内: 大明窯の轍	灰白 精	明治川 慶應 小野E					昭和21年12月	
228	曲口 JI-P71 磁	底		見込み:花瓶、高台内:萬葉物印の字	灰白 精	明治川 慶應 小野E					L_P71	
229	曲口 JI-SR2 磁	口→側	14.8	口縁:青花文、斜台内:萬葉物印の字	灰白 精	明治川 慶應 小野E					L_P12 昭和4	
230	水切2 2層 磁	側→底	7.2	口縁:青花文、斜台内:萬葉物印の字、丸形、花瓶	灰白 精	明治川 慶應 小野E 豊作鉢割り、砂付茎					昭和21年12月	
231	水SF 6上層 磁	口→底	2.8 13.0	7.2 口縁:青花文、斜台内:萬葉物印の字、丸形	灰白 精	明治川 黒谷E 野口B1 豊作鉢割り					昭和21年12月	
232	曲口 589	口→底	2.6 11.6	6.6 口縁:青花文、斜台内:萬葉物印の字、丸形	灰白 精	明治川 慶應 小野E 2.39cmに焼熱					昭和21年12月	
233	水 582	口→底	2.5 12.8	7.0 口縁:青花文、斜台内:萬葉物印の字、丸形	灰白 精	明治川 慶應 小野E 豊作鉢割りに焼熱、骨付鉢割り					昭和21年12月+昭和17	
234	SGJ-2 欧州T 磁	底		6.6 見込み:三重瓣花文	灰白 精	明治川 慶應 小野E 廉内に萬葉物印が残る					L_P75 下部	
235	曲A2 2層 磁	側→底	7.0	口縁部:あり/脚部:薄唇文/見込み:花瓶	灰白 精	明治川 慶應 小野E 見込みに焼熱、豊作鉢割り					昭和21年12月	
236	曲A3 582 磁	口→底	2.3 5.0 10.4	10.4 口縁:青花文、斜台内:萬葉物印の字、丸形、十字花、灰白 精	灰白 精	明治川 慶應 小野E 2.39cmに焼熱しているのか全体に白っぽい					昭和21年12月	
237	水切2 4層 磁	口→底	2.3 9.8	4.5 口縁:青花文、斜台内:萬葉物印の字、丸形、十字花、灰白 精	灰白 精	明治川 慶應 小野E 2.39cmに焼熱、越山鉢割り					昭和21年12月	
238	曲口 GI-3 磁	口→側	12.6	口縁:西洋文/脚部:脚部文	灰白 精	明治川 慶應 小野E					GB 8 H	
239	水口C 1層 磁	口→底	13.0	口縁:西洋文/脚部:脚部文	灰白 精	明治川 慶應 小野E					GB 8 H	
240	SD-1 欧洲1型 磁	口		口縁:脚部	灰白 精	明治川 慶應 小野E 2.39cmに脚部が焼けられ、脚袖 (口口鉢割)					昭和21年12月	
241	扇口 楠	磁	脚→底	6.0 見込み:5.1cm×8cm 萩内:高台内:天下玉B1	灰白 精	明治川 慶應 小野E 2.39cmに脚部が焼けられ、脚袖					昭和21年12月	
242	末土: 通土 磁	底		8.0 見込み:花瓶	灰白 精	明治川 慶應 小野E					昭和21年12月	
243	曲A3 5810 磁	口→底	2.8 10.0	3.0 口縁:青花文、斜台内:萬葉物印の字、丸形	灰白 精	明治川 慶應 小野E 全周焼熱後、底面鉢割りに焼けた。					昭和21年12月	
244	曲口 JI-1 田口	口→底	2.7 10.1	3.5 口縁:青花文、斜台内:萬葉物印の字、丸形	灰白 精	明治川 慶應 小野E 全周焼熱後、底面鉢割りに焼けた。高台内焼熱、落着物あり、アラビア文					昭和21年12月	
245	末土: 4層 磁	口→底	2.5 9.8	2.0 口縁:青花文、斜台内:萬葉物印の字、丸形	灰白 精	明治川 慶應 小野E 全周焼熱後、底面に焼けた。					昭和21年12月	
246	扇口 楠	磁	口→底	2.5 10.2	2.5 口縁:青花文、斜台内:萬葉物印の字、丸形	灰白 精	明治川 慶應 小野E 全周焼熱後、底面に焼けた。					昭和21年12月
247	曲口 JI-P71 磁	口→底	10.0	口縁:脚部:青花文/脚部文、あり、如意雲頭文	灰白 精	明治川 慶應 小野E 真跡の発見が楽しくやわらかである。					L_P71	
248	水口 D 15 丁口 磁	底		2.4 見込み:花瓶、芭蕉文/萬葉文/見込み:花瓶	灰白 精	明治川 慶應 小野E 全周焼熱後、底面に焼けた。					昭和21年12月	
249	曲口 HI-P60 磁	底		2.0 見込み:2.0cm×8cm 芭蕉文/萬葉文	灰白 精	明治川 慶應 小野E 2.39cmに脚部が焼けた。					昭和21年12月	
250	SGJ-2 通土 磁	脚→底		4.0 口縁:青花文/脚部:脚部文、丸形、灰白 精	灰白 精	明治川 慶應 小野E 全周焼熱後、底面鉢割りに焼けた。高台内焼熱、落着物あり、アラビア文					昭和21年12月	
251	扇口 田口	磁	口→底	2.4 10.4 10.8 11.0 11.4 11.8	10.4 見込み:花瓶、脚部:脚部文、山輪文	灰白 精	明治川 慶應 小野E 脚部に焼けた。					昭和21年12月
252	扇口 楠	磁	口→底	2.6 10.2 6.0	6.0 口縁:脚部/見込み:あり	灰白 精	明治川 慶應 小野E 2.39cmに脚部が焼けた。					昭和21年12月
253	曲口 HI-3 田口	口→底		口縁:七瓣文/脚部:脚部文/脚部鉢割	灰白 精	明治川 慶應 小野E 合成しない凹型・固体あり					昭和21年12月	
254	水切 田口	磁	口	口縁:脚部:青花文/脚部文	灰白 精	明治川 慶應 小野E 2.39cmに脚部が焼けた。					昭和21年12月	
255	曲口 田 P	脚→底		6.6 見込み:花瓶	灰白 精	明治川 慶應 小野E 真跡の発色がよく釉調も済らかな優品。豊作鉢割り					昭和21年12月	
256	末土: 通土 磁	底		規: 見込み:盤	灰白 精	明治川 慶應 小野E 真跡の発色がよく釉調も済らかな優品。豊作鉢割り					昭和21年12月	
257	水切1 1層 磁	底		見込み:花:高台内:文字「第」か	灰白 精	明治川 慶應 小野E 2.39cmに脚部が焼けた。					昭和21年12月	
258	水切2 1層 磁	底	3.9 20.4 20.4 20.4 20.4 20.4	2.4 見込み:2.4cm×8cm 芭蕉文/萬葉文/見込み:花瓶	灰白 精	明治川 慶應 小野E 2.39cmに脚部が焼けた。高台内赤く焼け					昭和21年12月	
259	水切2 2層 磁	底		12.4 見込み:莖鉢輪扁平	灰白 精	明治川 慶應 小野E 2.39cmと同一因合に焼合不可。畠村広く販売。報告不詳。昭和21年12月					昭和21年12月	
260	曲口 1 通土 磁	底		14.0 見込み:アリ/見込み:罐	灰白 精	明治川 慶應 小野E 真跡の発色がよく、ややくずれ。裏地に脚部あり、砂付鉢割り					昭和21年12月	
261	曲口 田 P	底		12.8 見込み:盤	灰白 精	明治川 慶應 小野E 2.39cmと同一因合に焼合不可。畠村広く販売。砂付鉢割り					昭和21年12月	
262	水切1 1区	底	2.5 1.0 2.4 1.6 0.9 1.1	1.1 見込み:脚部:脚部文/脚部鉢割	灰白 精	明治川 慶應 小野E 2.39cmと同一因合に焼合不可。折れで外側大きく崩く。脚部有り。昭和21年12月+昭和22年1月					昭和21年12月+昭和22年1月	
263	末土: 通土 小口	口→底	7.0	7.0 見込み:脚部	灰白 精	明治川 慶應 小野E 2.39cmに焼熱、釉ムラあり					昭和21年12月	
264	末土: 通土 小口	口→底	7.4	7.4 見込み:脚部	灰白 精	明治川 慶應 小野E 2.39cmに焼熱、釉ムラあり					昭和21年12月	
265	曲口 小口	磁	口→底	2.6 見込み:脚部:脚部文/脚部文/萬葉文/芭蕉文/山輪文	灰白 精	明治川 慶應 小野E 高台内くぼれに地に焼くかせる。					昭和21年12月	
266	曲C 小坪 磁	脚→底		脚部:脚部/脚部文/あり	灰白 精	明治川 慶應 小野E 他の脚部も焼く。					昭和21年12月	
267	曲口 1 層 通土	底	6.4 13.0	5.2 口縁:青花文/脚部:脚部文/脚部鉢割/脚部文	灰白 精	明治川 慶應 小野E 2.39cmと同一因合に焼合不可。畠村広く販売。報告不詳。昭和21年12月					昭和21年12月	
268	水切1 1区	底		13.0 口縁:青花文/脚部:脚部文	灰白 精	明治川 慶應 小野E 2.39cmと同一因合に焼合不可。畠村広く販売。砂付鉢割					昭和21年12月	
269	SGJ-1 通土 磁	脚→底		口縁:青花文/脚部:脚部文	灰白 精	明治川 慶應 小野E 2.39cmと同一因合に焼合不可。畠村広く販売。砂付鉢割					昭和21年12月	
270	曲口 589	口→底		12.8 見込み:波文	灰白 精	明治川 慶應 小野E 2.39cmと同一因合に焼合不可。脚部有り					昭和21年12月	
271	SGJ-1 通土 磁	口→底	11.8	11.8 見込み:発達化した脚部文/脚部文/アリ/見込み:脚	灰白 精	明治川 慶應 小野E 脚部を愛してたか。脚部焼化せず。					昭和21年12月	
272	SGJ-2 8層 磁	脚		脚部:脚部化した小花文	灰白 精	明治川 慶應 小野E 脚部にみる厚唇:指痕					昭和21年12月	
273	SGJ-1 通土 磁	脚→底		4.0 脚部:アリ/見込み:花文	灰白 精	明治川 慶應 小野E 2.39cmと同一因合に焼合不可。脚部有り。アラビア文					昭和21年12月	
274	SGJ-2 通土 磁	脚		4.9 脚部:アリ/見込み:花文:芭蕉文	灰白 精	明治川 慶應 小野E 2.39cmと同一因合に焼合不可。脚部有り。アラビア文					昭和21年12月	
275	SGJ-1 3層 磁	脚→底		4.2 脚部:アリ/見込み:花文:	灰白 精	明治川 慶應 小野E 2.39cmと同一因合に焼合不可。脚部有り。アラビア文					昭和21年12月	
276	曲口 83 1層 磁	底		5.8 見込み:盤	灰白 精	明治川 慶應 小野E 脚部が焼けたか。脚部有り					昭和21年12月	
277	水切1 4層 磁	底		5.4 脚部:アリ/見込み:人文化した文字「舟」	灰白 精	明治川 慶應 小野E 脚部に幅広で焼付~高台内焼熱。芸の可能性も。H.3					昭和21年12月	
278	曲H2 田 G1 磁	脚→底		4.9 見込み:文字か	灰白 精	明治川 慶應 小野E 全周焼熱。高台内と脚部に焼付が細胞					昭和21年12月	
279	曲口 1層 通土 磁	脚→底		5.2 脚部:アリ/見込み:意味が	灰白 精	明治川 慶應 小野E 2.39cmと同一因合に焼合不可。脚部有り。					昭和21年12月	
280	末土: 通土 磁	口→底		口縁:青花文/見込み:花文	灰白 精	明治川 慶應 小野E 2.39cmと同一因合に焼合不可。脚部有り。					昭和21年12月	
281	SGJ-1 通土 磁	口→底	16.0	16.0 脚部:脚部化した小花文	灰白 精	明治川 慶應 小野E 2.39cmと同一因合に焼合不可。脚部有り。					昭和21年12月	
282	水切1 4層 磁	口→底	20.8 10.2	2.0 口縁:青花文/脚部:脚部文/萬葉文/芭蕉文/山輪文/芭蕉文	灰白 精	明治川 慶應 小野E 2.39cmと同一因合に焼合不可。脚部有り。					昭和21年12月	
283	水切2 2層 磁	口→底	32.0 10.5	3.6 口縁:青花文/脚部:脚部文/萬葉文/芭蕉文/山輪文/芭蕉文	灰白 精	明治川 慶應 小野E 2.39cmと同一因合に焼合不可。脚部有り。					昭和21年12月	
284	水切1 4層 磁	口→底	2.7 10.6	4.0 口縁:青花文/脚部:脚部文/萬葉文/芭蕉文/山輪文/芭蕉文	灰白 精	明治川 慶應 小野E 2.39cmと同一因合に焼合不可。脚部有り。					昭和21年12月	
285	SGJ-2 通土 磁	口→底	2.8 10.6	5.3 口縁:青花文/脚部:脚部文/萬葉文/芭蕉文/山輪文/芭蕉文	灰白 精	明治川 慶應 小野E 2.39cmと同一因合に焼合不可。脚部有り。					昭和21年12月	
286	曲口 通土	口→底	3.7 10.3 4.0	4.0 脚部:脚部文/萬葉文/芭蕉文/山輪文/芭蕉文/脚部文	灰白 精	明治川 慶應 小野E 脚部が焼く。脚部有り。					昭和21年12月	
287	曲口 IBV 磁	口→底	2.6 9.6 4.0	4.0 脚部:脚部文/萬葉文/芭蕉文/脚部文/萬葉文/芭蕉文/脚部文	灰白 精	明治川 慶應 小野E 脚部が焼く。脚部有り。					V 73	
288	SGJ-2 通土 磁	脚→底		4.8 脚部:萬葉文/見込み:花文	灰白 精	明治川 慶應 小野E 脚部が焼く。脚部有り。					V 75	
289	曲口 田 G1	口→底	3.0 9.6 3.8	3.0 脚部:脚部化した波文	灰白 精	明治川 慶應 小野E 脚部が焼く。					昭和21年12月	
290	水切2 上層	口→底	10.2	10.2 口縁:青花文/波文/萬葉文/芭蕉文/山輪文/花文/灰白 精	灰白 精	明治川 慶應 小野E 脚部が焼く。					昭和21年12月	
291	曲A3 2層 磁	口→底		4.4 脚部:アリ/見込み:花文	灰白 精	明治川 慶應 小野E 脚部が焼く。一寸色である。					A3 1層	
292	曲口 1層 磁	口→底	4.4	4.4 脚部:アリ/見込み:花文	灰白 精	明治川 慶應 小野E 脚部が焼く。一寸色である。					昭和21年12月	
293	曲口 田 P	底	5.0	5.0 脚部:見込み:花文	灰白 精	明治川 慶應 小野E 脚部が焼く。					昭和21年12月	
294	SGJ-2 通土 磁	底	5.8	5.8 脚部:花文	灰白 精	明治川 慶應 小野E 脚部が焼く。					昭和21年12月	
295	水切1 通土 磁	口→底	33.0	3.0 脚部:青花文/脚部:脚部文/脚部鉢割	灰白 精	明治川 慶應 小野E 2.39cmに似るがより大きい。					昭和21年12月	
296	扇口 楠	脚→底		口縁:青花文/脚部:脚部文	灰白 精	明治川 慶應 小野E 脚部が焼く。					昭和21年12月	
297	水切1 2層 磁	口→底	24.0	24.0 脚部:青花文/脚部:脚部文	灰白 精	明治川 慶應 小野E 脚部が焼く。					昭和21年12月	
298	SGJ-2 通土 磁	脚→底	8.2	8.2 脚部:見込み:花文	灰白 精	明治川 慶應 小野E 脚部が焼く。					昭和21年12月	
299	水口 A3a 小坪 磁	口→底	9.8	9.8 口縁:脚部:脚部:植物	灰白 精	明治川 慶應 小野E 脚部が焼く。					K AT27	

第23表 褐釉・無釉陶器観察表

番號 No.	出土地点	種類	部位	法面 (cm)	土色	釉色	地質	備考 (成形・接法・目跡など)		注記名
								横幅	縦幅	
300	水SE2 下層 天井 壁 口一體	11.5	灰白	褐良	褐 / 黑	褐色は厚く、部分的に赤褐色	岩 / 黒	SG2	SG2 雷	
301	曲D 田A 天井 壁 口一體	10.6	灰白	褐良	褐	裏釉陶器だが、表面は赤褐色	褐	A	SC 1	
302	曲K 天井 壁 口一體	12.4	灰白	褐良	褐	黒褐色の底に赤褐色する。口唇部では裏釉を剥出。	褐	K	HTT	
303	SD-2 横口下層 天井 壁 体一連	4.6	灰黄	1ミリ以下の灰白色粒が多く入り、やや粗	褐	見込みに褐色が厚く、深まる	褐	SD-2 横口下層	SD-2 横口下層	
304	曲B 2 通気孔 天井 壁 体一連	3.2	灰白	褐良	褐	黒褐色を施釉後に腹部を削ぎし、裏釉を残す。脚厚め	褐	HTT	B1 2層	
305	曲L 田A 天井 壁 体一連	4.3	灰黄	1ミリ以下の灰白色粒が多く入る	褐	裏釉を施釉後に腹部を削ぎし、裏釉を残す。脚厚め	褐	Q	II	
306	曲A4 3層 天井 壁 体一連	4.0	灰白	褐良	褐	内にぶい赤褐色	褐	HTT	A4 3層	
307	木SH 3層 天井 壁 体一連	2.9	灰白	褐良	褐	黒褐色・裏釉の間に施釉。脚厚め、茶尻のきず?	褐	HTT	HTT	
308	堤D 天井 壁 体一連	3.2	灰黄	粗	褐	見込みにフリノ付着	褐	HTT	HTT	
309	曲D 田A 天井 壁 体一連	3.4	灰白	2ミリ以下の灰白色粒が多く入る	褐	黒褐色・裏釉の間に施釉	褐	A	SC 1	
310	SG2-2 塗土 四四巷 口一體	10.6	にじ白	1ミリ以下の白色、赤褐色粒が多く入る	褐	なで輪の白、模様の底筋	褐	HTT	216-D SG2-2	
311	木SE2 下層 四四巷 口一體	9.6	灰黄	褐良	灰褐色		岩	HTT	HTT	
312	曲B3 2層 四四巷 口一體	10.6	にじ白	1ミリ以下の白色、赤褐色粒を多く含む	褐	黒褐色・裏釉の間に施釉。脚部下半より剥出	褐	HTT	HTT 3-4層	
313	曲J5B1 四四巷 口一體	13.2	浅黄	明褐	明褐	黒化のためか、釉封藻	褐	K	II	
314	組B4 四四巷 口一體	6.6	灰白	1ミリ以下の褐色粒を多く含む。少しひだり入る	褐	頭部下に模様の痕跡。315と同形だが、法面は小さい	褐	HTT	B1 2層	
315	組B3 1層 四四巷 口一體	10.8	灰白	褐良	外・塗土: 黒褐色の底筋。内・裏釉: 赤褐色の底筋。口唇部は白い。足部は黒褐色の底筋。口唇部は白い。	褐	外・塗土: 黒褐色の底筋。内・裏釉: 赤褐色の底筋。口唇部は白い。	HTT	HTT 1-2層	
316	木SF-6下層 四四巷 總一開	9.0	褐良	褐	外・褐 / 内: 浅褐	頭部に模様の痕跡。同様内凹無理	褐	HTT	HTT 1-2層	
317	SG2-2 塗土 四四巷 体	にじ白	1ミリ以下の灰白色粒が多く入る	褐	褐 / 褐	頭部の白、模様が付く。内・施釉	褐	HTT	HTT 1-2層	
318	SG2 塗土 四四巷 体	灰	灰黄褐	1ミリ以下の灰白色粒が多く入る	褐	頭部の白、模様が付く。内・施釉	褐	HTT	HTT 1-2層	
319	SG2-2 中央 四四巷 体	灰	灰黄褐	1ミリ以下の灰白色粒が多く入る	褐	頭部の白。318と同一個体か。	褐	HTT	HTT 1-2層	
320	SG2-2 中央 四四巷 体	口	37.8	灰黄	1ミリ以下の白色粒が多々入る	にじ白 / 褐	他の施釉と口縫合を合わせて焼成したか	HTT	HTT E 1-2層	
321	SG2-2 塗土 7号 体	口	29.8	にじ白	1ミリ以下の白色、白色粒が多々入る	にじ白 / オーバル型	320と同一形とされる。口縫上ワリノ付着。内・裏釉ちぢれ	HTT	HTT E 1-2層	
322	SG2-2 塗土 7号 体	体	にじ白	1ミリ以下の白色、白色粒が多々入る	にじ白 / オーバル型	内・裏釉チキテリ。	HTT	HTT E 1-2層		
323	SG2-2 塗土 7号 体	にじ白	1ミリ以下の白色、白色粒が多々入る	にじ白 / 褐	にじ白	にじ白	にじ白	HTT	HTT 1-2層	
324	SG2-2 塗土 7号 体	底	21.0	にじ白	1ミリ以下の白色、白色粒が多々入る	にじ白 / 黄	通常部近より無理	HTT	HTT 1-2層	
325	水切1 1号 体	13.0	灰黄	2ミリ以下の灰白色粒を多々含む	外: 黄褐 / 内: 褐	施釉・失透。失透の裏釉部を外側で剥け分か。326によく似る。底部剥落	外: 黄褐 / 内: 褐	HTT	HTT 1-2層	
326	木SF-121 塗土 体	12.6	にじ白	1ミリ以下の灰白色粒が多々入る	褐	失透。失透の裏釉部を内側で剥け分か。底部付近は一部無理。325によく似る。HTT 1-2層	褐	HTT	HTT 1-2層	
327	木SF-2 21層 体	にじ白	9.6	灰白	褐	外: 灰白色 / 内: 褐	失透の裏釉部を内側で剥け分か。二重的に失透。底部剥落	HTT	HTT 1-2層	
328	木SF-2 21層 7号 体	にじ白	9.8	灰黄	褐	外: 灰 / 内: 褐	内・裏釉に施して拭き取った跡。底部剥離。外表面剥離	HTT	HTT 1-2層	
329	組B4 7号 体	腰	8.8	1.5cm以下の灰白色粒を多く含む	内: ブラック / 外: 黒褐色	内・裏釉が剥がれる。底面剥離。内・面フリノ / 付着	HTT	HTT 1-2層		
330	木SF-2 21層 7号 体	腰	12.0	1.5cm以下の灰白色粒を多く含む	内: ブラック / 外: 黑褐色	内・裏釉が剥がれる。底面剥離。内・外フリノ / 付着	HTT	HTT 1-2層		
331	SG2-2 塗土 7号 体	14.0	にじ白	1ミリ以下の灰白色粒が多く入り。細い	褐	底部剥離部に難燃材が嵌着。内面に自然釉。表面無理	褐	HTT	HTT	
332	組D2 田C 7号 体	腰	10.0	灰黄褐	褐良	腰縫合のち縫合	褐	C		
333	組D2 田C 7号 体	小口	~	灰黄褐	褐	やや断続的の小窓。内面に縫合痕のみ施釉。口縫上部剥離	褐	L	II 1-2層	
334	曲H 58S 7号 体	腰	灰黄褐	1ミリ程度の白色粒が多く入る	褐	外縫合に粘土付着。底透神のものか。内・裏釉	HTT	HTT	HTT 1-2層	
335	組I 田C 7号 体	腰	1.5cm	1.5cm以下の灰白色粒。白色粒が多々入る	褐	内・裏釉	HTT	V	V 1-2層	
336	革A1a 7号 体	口	11.5	にじ白	1.5cm以下の灰白色粒を多々含む	口縫合部外側に灰白色粒が付着しており、目跡もしくは墨跡書きか	HTT	A	A 1-2層	
337	曲A3 58Z 7号 体	腰	にじ白	1.5cm以下の灰白色粒。灰白色粒をわずかに含む	外: 黑褐色 / 内: 褐	内・外フリノ / 付着	HTT	A	A 1-2層	
338	水切1 3層 7号 体	腰	12.0	にじ白	1.5cm以下の灰白色粒を多々含む	外: 黑褐色 / 内: 褐	外に他製品の着壊痕あり。墨ね跡書きか。	HTT	HTT 1-2層	
339	曲K 7号 7号 7号 体	腰	12.0	1.5cm以下の灰白色粒を多々含む	内: ブラック / 外: 黑褐色 / 内: 褐	底部に難燃材が残る。底面剥離。内・面フリノ / 付着	HTT	HTT		

第24表 その他貿易陶磁器観察表

番號 No.	出土地点	種類	器種	部位	法面 (cm)	土色	釉色	地質	備考 (成形・接法・目跡など)		注記名
									裏面	色面	
340	曲E2 田G1 球窓	平明	底	灰白	另一・縫合部 / 内: 褐	外: 黑褐色 / 内: 褐	底縫合部。失透	HTT	HTT		
341	曲G 田G1 球窓	平明	体	灰白	明	外: 球窓部 / 内: 褐	外: 黑褐色	底縫合部	HTT	HTT	
342	曲M 田P 青白釉	水注	口	灰白	灰白	縫合水注。底部は鉢脚	褐				
343	曲G 田G1 球窓	小杯	体	灰白	外: 黑褐色 / 内: 透明	高湯の文字、高台外側まで被釉。高台内及び内面は透明地	HTT	HTT			
344	曲D 5号 5号	瓶	腰	灰白	高湯	高湯: 明褐色、難燃色。引手: 黒褐色が二方に濃縮して、底部にしている。	高湯: 黑褐色 / 引手: 黒褐色	HTT	HTT		
345	SG2 5号 1号	樂山三彩	瓶	体	6.0	にじ白	外: 黑褐色 / 内: 綠色	底部外側に難燃。内・底無理	V	V	
346	曲K 瓶	青花	花瓶	灰白	淡黄	いわゆるペトナム青花とは施釉や落地が異なる。口縫合部に難燃文	褐	社主			

第25表-1 国産陶器(備前焼)観察表

番号 No.	出土品 出土地点 Excavation site	断面分類 Cross section classification	部位 Part	基準 基准 測定範囲 Measurement range	備考 Remarks		色調 Color	備考 Remarks		注記名 Note	
					形状 Shape	大きさ Size		形状 Shape	大きさ Size		
347	SG-2 青白土質 備前 H 口			7mm 以下の赤褐色粘土。灰白色粘土。黑色粘土が多く含む。	にじいろ	赤	スリメ単位 7 本以上	F17B_E14	4脚		
348	SG-2 青白土質 備前 H 口			3mm 以下の灰白色粘土。褐色粘土を多く含む。	にじいろ	赤	スリメ単位 6 本	G17B_E16_W			
349	西	備前 H 口	一側	2mm 以下の灰白色粘土を多く含む。	灰		スリメ単位 10 本	H1H			
350	曲F1 田F2	備前 N/A 口	一側	3mm 以下の灰白色粘土。褐色粘土を多く含む。	にじいろ	赤	スリメ単位 8 本以上。重ね焼き痕 輪郭線	F24 寸 01-11層			
351	粗目 横	備前 N/A 口	一側	4mm 以下の同色粘土を多く含む。1mm 以下の墨色粘土を少量含む。	粗目	赤	スリメ単位 9 本	H1H 01-29-12層			
352	白 K	底	備前 N/A 口	一側	4mm 以下の同色粘土を多く含む。褐色粘土を多く含む。表面は褐色の外皮に、内皮は細かな部分的にマーブル状を呈する。	灰	スリメ単位 5 本	K_B	13下		
353	SG-2 青白土質 備前 N/A 口	底	11.6	302	5mm 以下の赤褐色粘土を多く含む。表面は褐色の外皮に、内皮は細かな部分的にマーブル状を呈する。	赤	スリメ単位 6 本	II-21_E19_H1_H4-14			
354	SG-2 墓土	備前 N/A 口		2mm 以下の灰白色粘土をわざとらしく含む。	灰		スリメ単位 10 本以上。自然焼 輪郭線	G17B_3F			
355	曲F1 田土	備前 N/A 口		5mm 以下の灰白色粘土。1mm 以下の褐色粘土を含む。	にじいろ	赤	スリメ単位 9 本以上。自然焼 輪郭線	F2b_竹土			
356	SG-2 墓土	備前 N/A 口		4mm 以下の淡黄色粘土を多く含む。きめ細かい土粒子。	黄		スリメ単位 5 本以上	D21F_P40-1			
357	赤 SE1 上部	備前 N/A 口	一側	2mm 以下の灰白色粘土を含む。	黄		スリメ単位 4 本以上	II-21D 上部			
358	SG-27 屋根	備前 N/A 口	一側	3mm 以下の灰白色粘土を多く含む。1mm 以下の透明色粘土をわずかに含む。	にじいろ	赤	スリメ単位 2 本以上	G2 2F			
359	水呑土・通水土	備前 N/A 口	一側	2mm 以下の灰白色粘土を多く含む。	にじいろ	赤	スリメ単位 5 本	G2C7			
360	SG-2 植木 1脚	備前 N/A 口		24.0	7mm 以下の赤褐色粘土。灰色粘土を含む。	にじいろ	赤	スリメ単位 10 本以上	V10		
361	SG-2 通水土 備前 N/A 口			にじいろの外皮に、中皮は黒褐色の外皮を呈する。2mm 以下の灰白色粘土を含む。	にじいろ	赤	スリメ単位 6 本以上。自然焼 輪郭線	F17B_E14	4脚		
362	SG-2 墓土	備前 N/A 口		3mm 以下の灰白色粘土を含む。	灰		スリメ単位 7 本以上。自然焼	G17B_120			
363	SG-2 墓土	備前 N/A 口	一側	3mm 以下の灰白色粘土を含む。輪郭線は黒褐色の外皮を呈する。	赤	スリメ単位 10 本以上	G17B				
364	SG-1 通水土	備前 N/A 口		褐色の外皮の他、底の粘土は自然焼の外皮である。表面はローラーで磨かれた外皮を含む。	灰	赤	スリメ単位 5 本以上。自然焼 輪郭線	L9			
365	曲F1 田-P1	備前 N/A 口		4mm 以下の赤褐色粘土。表面は土粒子をまばらに含む。	黄		スリメ単位 4 本以上	G17B+G17C_E 1-15			
366	SG-1 通水土	備前 N/A 口	一側	5.6 4mm 以下の灰白色粘土。灰白色粘土を少し含む。	灰	赤	スリメ単位 8 本以上	G17B_E 1-15			
367	SG-1 通水土	備前 N/A 口		3mm 以下の赤褐色粘土。白色粘土をわずかに含む。	にじいろ	赤	スリメ単位 2 本以上	G21ms_E 9			
368	SG-2 青白土質 備前 N/A 口			3mm 以下の淡黄色粘土を少し含む。	にじいろ	赤	スリメ単位 5 本以上	F1 1m_E 1-1層			
369	粗目 横	備前 N/A 口	一側	2mm 以下の淡黄色粘土をわざとらしく含む。	にじいろ	赤	スリメ単位 5 本以上	G17B	上層		
370	水 D20H1	備前 N/A 口	一側	30 5mm 以下の赤褐色粘土を多く含む。	灰	赤	スリメ単位 10 本	II-21H+II-21J12層			
371	水 S51 箔2	備前 N/A 口	一側	5mm 以下の赤褐色粘土を多く含む。	灰	赤	スリメ単位 7 本	G2 17			
372	SG-2 墓土	備前 N/A 口		2.88 3mm 以下の灰白色粘土を含む。	灰		スリメ単位 5 本以上	G17B	4-10m_S3		
373	SG-2 上部	備前 N/A 口	一側	31 10mm 以下の褐色粘土をこげてかられ、5mm 以下の白色粘土を含む。	灰	赤	スリメ単位 4 本以上	II-21D 上部			
374	水 崩	備前 N/A 口		26.4 10mm 以下の赤褐色粘土を含む。	灰	赤	スリメ単位 4 本以上	G2 2-36 層			
375	SG-21 A 土	備前 N/A 口		32.8 12mm の褐色粘土をこげてかられ、5mm 以下の白色粘土を含む。	灰	赤	スリメ単位 4 本以上	II-21A-16			
376	SG-2 植木 17 号	備前 N/A 口	一側	24.0 合成繊維が付いた後に、3mm 以下の赤褐色粘土を含む。	赤	赤	赤	V10_E 19-1			
377	SG-1 通水土	備前 N/A 口	一側	24.0 合成繊維が付いた後に、15mm 以下の赤褐色粘土を含む。	赤	赤	赤	G17B_E 1-15			
378	SG-11 竹葉	備前 N/A 口	一側	28.5 1mm ～ 3mm の赤褐色粘土。灰白色粘土を少しある。	赤	赤	赤	G21ms_E 14-7			
379	曲 F1 田	備前 N/A 口		1mm の赤褐色粘土をわずかに含む。	にじいろ	赤	スリメ単位 5 本以上	NW_SE			
380	粗目 横	備前 N/A 口	一側	1mm 以下の灰白色粘土を少し含む。	灰	赤	スリメ単位 4 本以上	Q3			
381	水呑土・通水土	備前 N/A 口		30 5mm 以下の赤褐色粘土を多く含む。	にじいろ	赤	スリメ単位 5 本以上	II-21H			
382	曲 F1 2 脚	備前 N/A 口		2.88 2mm 以下の淡黄色粘土を多く含む。	赤	赤	赤	E			
383	水 H1 1 量	備前 V/A 口	一側	28.4 5mm 以下の赤褐色粘土。3mm 以下の赤褐色粘土を含む。	輪郭線赤	スリメ単位 10 本	II-19_E 16-21+II-21				
384	SG-1 通水土	備前 V/A 口		2.88 合成繊維の粘りを付けてかられ。	灰	赤	スリメ単位 4 本以上。自然焼	G17B			
385	曲 K	備前 V/A 口		4mm 以下の灰白色粘土。灰白色粘土を少し含む。	灰	赤	スリメ単位 7 本	K_E			
386	水呑土・通水土	備前 V/A 口	一側	30 5mm 以下の灰白色粘土を多く含む。	赤	赤	スリメ単位 8 本	II-21H+II-21J			
387	粗目 A3	備前 V/A 口	一側	30 5mm 以下の灰白色粘土を多く含む。	赤	赤	スリメ単位 4 本以上	A2F2+II-2A			
388	水 F1 D2	備前 V/B 口	一側	12.5 14.0 1mm ～ 14mm の白色粘土。細粒赤。薄赤粘土。赤褐色粘土を少し含む。	赤	赤	スリメ単位 15 本以上。交差層スリメ	II-19_E 1-19+II-20			
389	SG-2 磁器柄	備前 V/B 口		2.88 磁器柄の赤褐色粘土。赤褐色粘土を含む。	輪郭線赤	赤	スリメ単位 6 本以上	G21ms_E 1-6			
390	曲 F1 田L	備前 V/B 口		2mm 以下の灰白色粘土を含む。	赤		スリメ単位 4 本以上	L_E 3C13			
391	水 F1 上部	備前 V/B 口	一側	30 3mm 以下の赤褐色粘土。黑色粘土を多く含む。	赤	赤	赤	II-21E+II-21S2上層			
392	SG-2 磁器	備前 V/B 口	部	32 1mm の赤褐色粘土を多く含む。微細な白色粘土を少量含む。	赤		スリメ	II-21			
393	曲 A1 1 脚	備前 V/B 口		13.2 30.4 11.8 3mm の赤褐色粘土。5mm の赤褐色粘土を含む。表面は赤褐色の外皮を含む。	赤	赤	スリメ単位 10 本。交差層スリメ	A1+2 II-20			
394	水 SF-14 星	備前 V/B 口	部	13.5 34.4 17.2 14.0 1mm 以下の灰白色粘土を含む。	赤	赤	スリメ単位 8 本以上	II-19_E 1-19+II-20			
395	SG-2 通水土	備前 V/A 体		にじいろの粘土に付いて複数色のマーブル状を見る。山形土	赤	赤	スリメ単位 5 本以上	II-19_E 1-19+II-20			
396	曲 K	備前 V/A 体		6mm 以下の赤褐色粘土を多く含む。2mm 以下の赤褐色粘土をわずかに含む。山形土	赤	赤	スリメ単位 5 本以上	K_E	17F		
397	曲 K504	備前 V/A 体	一側	15.1 1mm 以下の赤褐色粘土を多く含む。2mm 以下の赤褐色粘土を含む。	赤	赤	スリメ単位 7 本	K_E 17C_E 1-17			
398	水 SF-11 通水土	備前 V/B 体		2.6cm 以下の赤褐色粘土を多く含む。1mm の赤褐色粘土を付けてかられ。	赤	赤	スリメ	II-19_E	1-14層		
399	SG-2 墓土	備前 V/B 体		13.4 11.8 7mm の赤褐色粘土。5mm の赤褐色粘土を含む。表面は赤褐色の外皮を含む。	赤	赤	スリメ単位 5 本以上	G17B	207		
400	曲 H1 田G2	備前 V/B 体	一側	10.4 2mm 以下の赤褐色粘土をこげてかられ。山形土	赤	赤	スリメ単位 8 本以上	G2_E 14_M 7			
401	水 SF-1 A 土	備前 V/B 体	一側	15.1 2mm 以下の赤褐色粘土をこげてかられ。山形土	赤	赤	スリメ単位 9 本	G2_E 14-15			
402	曲 K	備前 V/B 体		2mm 以下の赤褐色粘土を含む。微細な白色粘土を少し含む。山形土	赤	赤	スリメ単位 5 本以上	K_E	17		
403	曲 M SK1	備前 V/A 体		1mm 以下の赤褐色粘土を多く含む。山土	赤	赤	スリメ単位 8 本以上	P_S1_E 4層			
404	水 SF-18 星	備前 V/A 体	一側	10.4 1mm 以下の赤褐色粘土を含む。2mm 以下の赤褐色粘土を含む。	赤	赤	スリメ単位 7 本	E-19-E 19-21+II-20			
405	曲 A3 S811	備前 V/B 体		10mm 以下の赤褐色粘土を含む。3mm 以下の赤褐色粘土。赤色粘土を含む。山形土	輪郭線赤	赤	スリメ単位 6 本以上	AII-19/E-19-20			
406	SG-1 通水土 B	備前 V/B 体		1mm 以下の赤褐色粘土を含む。微細な白色粘土を多く含む。山形土	赤	赤	スリメ単位 10 本以上。交差層スリメ	II-19_E 1-19+II-20			
407	水 SF-1 通水土 T	備前 V/B 体		1mm 以下の赤褐色粘土を含む。微細な白色粘土を含む。山形土	赤	赤	スリメ単位 8 本以上。交差層スリメ	II-19_E 1-19+II-20			
408	水呑土・通水土	備前 V/B 体	一側	1mm 以下の赤褐色粘土を含む。	赤	赤	輪郭線赤	スリメ単位 5 本以上	II-20_E 1-19+II-20		
409	水 SF-1 通水土	備前 V/B 体	一側	1mm ～ 3mm の赤褐色粘土。赤褐色粘土を含む。	赤	赤	スリメ単位 8 本以上	F1 19_E 1-13層			
410	水 SF-1 中等	備 H 口	一側	4mm 以下の赤褐色粘土を多く含む。	赤	赤	赤	G 2532_W/H7層			
411	水 SF-1 通水土	備 H 口	一側	2mm 以下の赤褐色粘土を含む。	赤	赤	赤	G 2532_W/H7			
412	SG-2 墓土	備 H 口	一側	3mm 以下の赤褐色粘土を含む。	赤	赤	赤	G 19_E 1-19+II-20			
413	SG-2 墓土	備 H 口		1mm ～ 3mm の赤褐色粘土を含む。	赤	赤	赤	G 19			
414	水 SF-1 墓土	備 H 口	一側	2.5mm 以下の赤褐色粘土を多く含む。1.5mm 以下の赤褐色粘土を含む。	赤	赤	輪郭線赤	G 20	1-9		
415	水 SF-1 墓土	備 H 口	一側	6.64 6mm の赤褐色粘土を含む。	赤	赤	輪郭線赤	G 20_E 9-11			

第25表-2 国産陶器(備前焼)観察表

番号	出土地点	種類	分類	部位	表面		曲考	色調	備考	注記名
					表面	口縁				
416	島原・田原	便	N/A	口~頸	26.4		断面はマーブル状を呈する。3mm以下の灰白色をまばらに含む。	明黄褐/灰赤		023.5 + 丁寧
417	SOG-2 造石下盤	便	N/A	口	35.0		5mm以下の灰白色。黒色斑を含む。	灰褐色/黒褐色/白自然地		011.6 + 田中1.4層
418	水谷・区 下層	便	N/B	口~頸	40.6		3mm以下の灰白色を少量含む。	暗赤褐		021.552 + 000裏
419	水 S51 直土	便	N/B	口~頸	49.2		2mm以下の灰白色を多く含む。機械研磨粒を少量含む。	黑褐/にじい褐		021.554-52
420	水長良・直成	便	N/B	口~頸	35.6		3mm以下は白灰色を多く含む。黒色斑を含む。點はマーブル状を呈する。	にじい赤		021.552
421	水長良・直成	便	N/B	口~頸	44.2		2mm以下の灰白色をまばらに含む。	暗赤褐		021.552
422	水 SF	便	N/B	口~頸	34		3mm以下の灰白色をまばらに含む。	暗赤褐/暗赤褐		021.552
423	水 SF 2層	便	N/B	口~頸	51.4		4mm以下の灰白色を多く、2mm以下の場合は細粒をむずかしく含む。	黑褐/褐		021.552
424	水長良・直成	便	N/B	口~頸	5mm		5mm以下の灰白色を多く含む。	黑褐/褐		021.552
425	曲 A3 1層	便	N/B	口~頸			3mm以下の灰白色を少しだけ含む。	灰白/にじい褐		A3 1層
426	昭那 横	便	N/B	口~頸	42.8		6mm以下の灰白色。黒褐色斑を少しだけ含む。	褐		011.805 + 32層
427	曲 F1 田 D2	便	N/B	口~体			5mm以下の灰白色を少し。 1mm以下の灰白色を多く含む。	褐/灰/浅褐/褐/白自然地		011.805-42層
428	曲 F1 田 D2	便	N/B	口~頸				褐/褐		021.552
429	曲 F1 田 D3	便	V	口	36.4		1mm以下の灰白色を多く含む。	褐/灰黃褐		021.552-12層
430	SOG-2 2層	便	V	口~体	28.6		2mm以下の灰褐色。1mm以下は灰白色を多く含む。	褐/灰/にじい褐		011.805 + 10層
431	SOG-2 2層	便	V	口~頸			5mm以下の灰白色を多く含む。	昭赤褐(SYR14)		011.805 + 4層
432	水 S51 直土	西	V	口~頸	16.2		直線的な白灰色をくまなく含む。灰褐色を含む。	灰		021.552
433	曲 K	西	V	口			1mm ~ 3mmの灰白色を少し含む。	灰黃褐/灰		6.5 + 11層
434	曲 F2 田 E	西	N/A	体			1mm以下の灰白色を多く。3mm以下の灰褐色をむずかしく含む。	褐/褐/にじい褐		021.552-12層
435	SOG-2 2層	西	N/B	体			1mm以下の灰白色を多く含む。	褐/褐/灰		011.805 + 10層
436	SOG-2 2層	西	N/B	口~頸			2mm以下の灰褐色を多く含む。	褐/灰/にじい褐		011.805 + 10層
437	水 S51 直土	便	V/B	頸	4mm		4mm以下の灰白色を多く含む。	褐/灰/暗赤褐		021.552
438	曲 G_SBI	便	N/B	体			1mm以下の灰白色を多く含む。	褐/褐		021.552
439	SOG-2 2層	便	N/B	体			1mm以下の灰白色を多く含む。	褐/褐		011.805 + 10層
440	SOG-2-1 墓	便	N/B	体			灰白色的底に黒斑を、1mm以下の灰白色を、灰褐色を含む。	灰/灰/黑/灰/白自然地		011.805 + 10層
440	SOG-2-1 墓	便	N/B	体				灰/灰/黑/灰/白自然地/同1-441と同一個体		Q1.98
441	SOG-2-1 墓	便	N/B	体			2mm以下の灰白色を多く含む。	灰/灰/黑/灰/白自然地		Q1.98
442	自 1744年 西昌原 N/B	体						灰/灰/黑/灰/白自然地		LPTR + 98
443	SOG-2-1 墓	便	N/B	体			0.5mm以下の灰白色を多く含む。	褐/褐/灰		LPTR + 98
443	SOG-2-1 墓	便	N/B	体			1.75mm ~ 7mmの灰白色を多く含む。	褐/褐/灰/黑/灰/白自然地		LPTR + 98 + 10層
444	SOG-2-1 墓	便	N/B	体			16.6mm以下の灰白色を少し。 1mm以下の灰白色を多く含む。	褐/褐/灰/黑/灰/白自然地		LPTR + 98 + 10層
445	SOG-2-1 墓	便	N/B	体			17.2mm以下の灰白色を少し。 1mm以下を多く含む。	抹灰/抹灰/灰/白自然地/同1-246と同一文化層		抹灰/抹灰/灰/白自然地/同1-246と同一文化層
446	曲 E581 便	便	N/B	体			1mm ~ 10mmの灰白色を多く含む。	灰/灰/白自然地		011.805 + 10層
447	SOG-2-1 墓	便	N/B	体	32.0		5mm以下の灰白色を含む。表面はマーブル状を呈する。	灰黃褐		内進部底面~底面にかけてのクロナラテ 011.805 + 10層
448	SOG-2-1 墓	便	N/B	体	26.0	3mm	3mm以下の灰褐色を多く。2mm以下の灰白色。黒色斑を含む。	灰/灰/黑/灰/白自然地		内進部底面~底面にかけてのクロナラテ 011.805 + 10層
449	SOG-2-1 墓	便	N/B	体			2mm以下の灰褐色を多く含む。	褐/褐/灰/白自然地		LPTR + 98
450	SOG-2-1 墓	便	N/B	体			5mm以下の灰白色を含む。	灰/灰/黑/灰/白自然地		LPTR + 98 + 10層
451	SOG-2-1 墓	便	N/B	体			5mm以下で複数な灰白色を多く含む。	褐/褐/灰/白自然地		LPTR + 98
452	SOG-2-1 墓	便	N/B	体			20.0mm以下の灰白色を含む。荷物を多く含む。	褐/褐/灰/白自然地		LPTR + 98
453	SOG-2-1 墓	便	N/B	体			3mm以下の灰白色。	3mm以下の灰白色。黒色斑をまばらに含む。		V175
454	SOG-2-1 墓	便	N/B	体			1mm以下の灰白色。	1mm以下の灰白色。黒色斑を少し含む。		V175
455	水 S52 3層	便	V	口~頸	3.8		3mm以下の灰白色。白色斑をわずかに含む。	灰/灰/白自然地		021.552-3A
456	水 S52 3層	便	V	口~頸	8.45	4.2	5.05	積斑		021.552-3A H.A. 14層
457	曲 A2 2層	便	N/B	口~頸	4.8		4.5mm以下の灰褐色。灰白色。黒褐色の粒を少しある。	灰/灰/黑/灰/白自然地		A2 3層 + JTA20層
458	曲 A2 2層	便	N/B	口~頸	6.0		6.0mm以下の灰白色。荷物を少し含む。	黑褐/褐		021.552
459	水 S52 3層	便	V	口~頸	10.6		3mm以下で白灰色。荷物を少しだけ含む。	褐/灰/白自然地		021.552
460	曲 H1 田 G2	便	V	口~頸	14.0		5mm以下の灰褐色。荷物を多く含む。	灰/灰/黑/灰/白自然地		内進部底面~底面にかけてのクロナラテ 011.805 + 10層
461	曲 H1 田 D2	便	V	口~体	27.0		微細な灰褐色を少し含む。	褐		021.552
462	曲 H1 田 V	便	V	口~頸	14.7		1mm以下の灰褐色をわずかに含む。	褐/褐/灰/白自然地		V174
463	SOG-2 2層	便	V	口~体			微細な灰褐色。灰白色を含む。	褐/褐/灰/白自然地		Q1.98 + 10層
464	SOG-2-1 墓	便	V	口~体	12.4		2mm以下の灰褐色。荷物を多く含む。	褐/褐		Q1.98
465	曲 K	便	V	手			さめ細かい灰褐色の土台。	灰褐		K 6. n

第24表 国産陶器(瀬戸・美濃焼)観察表

番号	出土地点	種類	分類	部位	表面		曲考	色調	備考	注記名
					表面	口縁				
466	水切田 1層	糸縫深皿	中前期	口~頸	27.4	淡青		表面はマーブル状を呈する。	明黄褐/灰赤	021.552 + 1層
467	曲田 田原 1層	水桶	中前	上部		にじい褐/相/にじい褐		水鳥型の水桶	021.552	
468	西谷 1層	絞地小口	大宝第1~前	口~底	2.8	11.8	灰白	灰白	口縫付にオレーブ色の灰袖。系切底	A 8 層
469	曲田 田原 絞地小口	大宝第1~前	口~体	1.0						021.552
470	曲M 田P 口片口~縫	後削V/古	口~頸	6.6		灰白		471と同一固体か?	灰/白	P 5.5
471	曲H1 田P 口片口~縫	後削V/古	口~頸	4.5	灰白		471と同一固体か?	灰/白	021.552-1	G279-1
472	曲A4 2層	絞地深皿	後削V/古	口~頸	33.0	灰白		表面はマーブル状。	灰/白	A 8. 6
473	水谷 1層	絞地小口	後削V/古	口~頸	34.0	淡青		後削V/古付	灰/白	021.552-1
474	曲J 田P 絞地深皿	後削V/古	口~底	14.6	灰白		にじい黄褐	内底灰斑あり	F152.1+0.1~1.5	
475	水S2 1層	四耳罐	後削V/古	口~頸	12.4	灰白		口縫付に工芸底あり	白	21.52.2 + 上層
476	絞野	後削	四耳罐	口~頸		灰白				021.552
477	東京 1層	絞地深皿	後削V/古	口~頸	5.2	淡青		底部が丸く、側面に開削している。	白	11.2.54
478	水谷・直成	天目網	大宝第2~後	口~頸		淡青		下地の施釉を施す後削。高輪を施す。	白	2. 8
479	水谷 1層	天目網	大宝第1~前	口~頸	11.5	灰白		施輪に落書きを含む。	白	021.552
480	曲F1 田D2 天目網	大宝第1~前	口~体			灰白		口縫付に灰斑	021.552	
481	水S2 5層下	丸皿	大宝第2~後	底	5.0	灰白		対光に花紋。基台内に落書き。	白	021.552-10.12
482	水 SBS	香炉	水谷 1層~中	口~底	5.8	7.1	5.1 灰白	明黄褐/灰/白	021.552-10.12	

第27表 国産陶器(常滑焼)観察表

規範	出土地点	種類	分類	部位	法量 (cm)	地土	釉調	地質	備考	注記名
No.					高さ	口径	底径	色調		
483	曲2D 田 C 露	60型式	口	に伝い・露	に伝い・露	黒	黒	黒	地質の傾倒。60型式。14c中頃。自然釉がかかる	C2 D 露
484	SG1-2 露土 露	10型式	口～体	灰黄	暗赤	10型式	15C後半	自然釉がかかる	F1露171+172露	
485	曲F1 田D2 露	露	體	に伝い・露	に伝い・露	に伝い・露	に伝い・露	に伝い・露	02W/1+02E/1露	
486	曲F1 田D2 露	露	體	に伝い・露	に伝い・露	に伝い・露	に伝い・露	に伝い・露	02W/1+02E/1露	

第28表 近世磁器観察表

規範	出土地点	種類	分類	部位	法量 (cm)	地土	釉調	地質	文様	產地	出番・ 鑑定	備考	注記名	
No.					高さ	口径	底径	色調	地質					
487	曲 F1 露付 磁	露	口～頂	7.0	11.2	4.7	4.7	灰白	明治灰	見込みに花文	肥前	1-2 口縁の内側から外側にかけて施釉。内部に赤斑を施す。高台露付 F112+Q13+T1		
488	直 F1 染付 磁	露	口	10.0	10.0	4.0	4.0	白	明治灰	口縁に面透文	肥前	日	A 3	
489	直 2層 田付 磁	露	口～体	6.0	12.2	5.2	5.2	灰白	灰白	露付	肥前	日	施ムラあり	田 1 日
490	直 1層 田付 磁	露	口～体	5.4	11.4	4.0	4.0	灰白	灰白	露付	肥前	日	露付の底端部に底端部に手書き文	AA 5
491	直 4層 田付 磁	露	口～頂	4.9	10.5	4.1	4.1	灰白	灰白	露付	肥前	IV	露付の底端部に底端部に手書き文	田 1 露
492	直 2層 田付 磁	露	口～頂	4.9	9.9	3.8	3.8	灰白	灰白	露付	肥前	IV	露付の底端部に底端部に手書き文	田 1 露
493	直 1層 田付 磁	露	口～頂	5.0	9.4	3.4	3.4	灰白	灰白	露付	肥前	IV	露付の底端部に底端部に手書き文	田 1 露
494	直 2層 田付 磁	露	口～頂	3.6	7.2	3.2	3.2	灰白	灰白	露付	肥前	IV	露付の底端部に底端部に手書き文	田 1 露
495	直 2層 田付 磁	露	口～頂	5.3	10.4	3.6	3.6	灰白	灰白	露付	肥前	IV	露付の底端部に底端部に手書き文	田 1 露
496	西 田付 磁	露	口～頂	3.2	8.8	3.6	3.6	灰白	灰白	露付	肥前	IV	露付の内側に西字文	西 1 露
497	直 1層 田付 磁	露	口～頂	5.0	10.0	4.0	4.0	灰白	灰白	露付	肥前	IV	内側・露付内に赤斑を施す。外側に青磁輪を施す	西 1 露
498	直 2層 田付 磁	露	口	9.8	10.0	4.0	4.0	白	明治灰	口縁に露付文	肥前	V	内側に赤斑を施す。外側に青磁輪を施す	田 1 露
499	直 1層 田付 磁	露	口～頂	5.4	11.4	4.0	4.0	灰白	灰白	露付	肥前	V	内側に赤斑を施す。外側に青磁輪を施す	田 1 露
500	直 4層 田付 磁	露	口～頂	4.9	10.5	4.1	4.1	灰白	灰白	露付	肥前	V	内側に赤斑を施す。外側に青磁輪を施す	田 1 露
501	直 2層 田付 磁	露	口～頂	5.0	7.2	3.3	3.3	灰白	灰白	露付	肥前	V	内側に赤斑を施す。外側に青磁輪を施す	田 1 露
502	直 1層 田付 磁	露	口～頂	5.0	7.2	3.3	3.3	灰白	灰白	露付	肥前	V	内側に赤斑を施す。外側に青磁輪を施す	田 1 露
503	直 5層 田付 磁	露	口～頂	2.8	12.8	7.2	7.2	灰白	灰白	露付	肥前	V	内側に赤斑を施す。外側に青磁輪を施す	田 1 露
504	直 2層 田付 磁	露	口～頂	5.0	12.8	7.4	7.4	灰白	灰白	露付	肥前	V	内側に赤斑を施す。外側に青磁輪を施す	田 1 露
505	直 2層 田付 磁	露	口～頂	5.7	12.4	7.6	7.6	灰白	灰白	露付	肥前	V	内側に赤斑を施す。外側に青磁輪を施す	田 1 露
506	直 2層 田付 磁	露	口～頂	3.3	11.8	7.4	7.4	灰白	灰白	露付	肥前	V	内側に赤斑を施す。外側に青磁輪を施す	田 1 露
507	直 2層 田付 磁	露	口～頂	4.4	13.2	7.2	7.2	灰白	灰白	露付	肥前	V	内側に赤斑を施す。外側に青磁輪を施す	田 1 露
508	直 2層 田付 磁	露	口～頂	5.0	12.8	7.2	7.2	灰白	灰白	露付	肥前	V	内側に赤斑を施す。外側に青磁輪を施す	田 1 露
509	直 2層 田付 磁	露	口～頂	5.0	12.8	7.2	7.2	灰白	灰白	露付	肥前	V	内側に赤斑を施す。外側に青磁輪を施す	田 1 露
510	直 2層 田付 磁	露	口～頂	2.8	11.8	7.0	7.0	灰白	灰白	露付	肥前	V	内側に赤斑を施す。外側に青磁輪を施す	田 1 露
511	直 2層 田付 磁	露	口～頂	4.9	21.0	7.6	7.6	灰白	灰白	露付	肥前	V	内側に赤斑を施す。外側に青磁輪を施す	田 1 露
512	直 H 4層 田付 磁	露	口～頂	3.3	11.8	8.0	8.0	灰白	灰白	露付	肥前	V	内側に赤斑を施す。外側に青磁輪を施す	田 1 露
513	直 2層 田付 磁	露	口～頂	4.1	14.5	8.0	8.0	灰白	灰白	露付	肥前	V	内側に赤斑を施す。外側に青磁輪を施す	田 1 露
514	直 2層 田付 磁	露	口～頂	3.2	29.6	18.1	18.1	灰白	灰白	露付	肥前	V	内側に赤斑を施す。外側に青磁輪を施す	田 1 露
515	直 1層 田付 磁	露	口～頂	5.0	12.8	7.2	7.2	灰白	灰白	露付	肥前	V	内側に赤斑を施す。外側に青磁輪を施す	田 1 露
516	直 2層 田付 磁	露	口～頂	3.8	12.8	7.0	7.0	灰白	灰白	露付	肥前	V	内側に赤斑を施す。外側に青磁輪を施す	田 1 露
517	直 1層 田付 磁	露	口～頂	4.2	12.8	7.0	7.0	灰白	灰白	露付	肥前	V	内側に赤斑を施す。外側に青磁輪を施す	田 1 露
518	直 1層 田付 磁	露	口～頂	7.2	12.8	7.0	7.0	灰白	灰白	露付	肥前	V	内側に赤斑を施す。外側に青磁輪を施す	田 1 露
519	直 1層 田付 磁	露	口～頂	4.0	12.8	7.0	7.0	灰白	灰白	露付	肥前	V	内側に赤斑を施す。外側に青磁輪を施す	田 1 露
520	直 1層 田付 磁	露	口～頂	4.0	12.8	7.0	7.0	灰白	灰白	露付	肥前	V	内側に赤斑を施す。外側に青磁輪を施す	田 1 露
521	直 1層 田付 磁	露	口～頂	4.0	12.8	7.0	7.0	灰白	灰白	露付	肥前	V	内側に赤斑を施す。外側に青磁輪を施す	田 1 露
522	直 1層 田付 磁	露	口～頂	4.0	12.8	7.0	7.0	灰白	灰白	露付	肥前	V	内側に赤斑を施す。外側に青磁輪を施す	田 1 露
523	直 1層 田付 磁	露	口～頂	4.0	12.8	7.0	7.0	灰白	灰白	露付	肥前	V	内側に赤斑を施す。外側に青磁輪を施す	田 1 露

第29表-1 近世陶器観察表

規範	出土地点	種類	分類	部位	法量 (cm)	地土	釉調	地質	文様	產地	分類	備考	注記名	
No.					高さ	口径	底径	色調						
524	曲 M 田 D 露	露	口～頂	5.0	10.0	4.0	4.0	淡黃	に伝い・露	露付	肥前	露付	京焼・露付	P 16
525	SG1-2 露1層 磁	露	口～頂	4.5	10.0	4.0	4.0	淡黃	露付	露付	肥前	露付	露付	V 100
526	西 2層 田 露	露	口～頂	4.5	10.0	4.0	4.0	淡黃	露付	露付	肥前	露付	露付	A 2 露
527	曲2D 田 F1 露	露	口～頂	4.5	10.0	4.0	4.0	淡黃	露付	露付	肥前	露付	露付	F1 100+110+110
528	SG1-2 露1層 磁	露	口～頂	3.7	12.6	4.8	4.8	淡黃	露付	露付	肥前	露付	露付	F1 100+110+110
529	SG1-2 中央 露	露	口～頂	4.0	10.0	4.0	4.0	明黃	露付	露付	肥前	露付	露付	G 10
530	曲 G 2層 露	露	口	4.0	10.0	4.0	4.0	淡黃	露付	露付	肥前	露付	露付	G 10
531	SG1-2 露1層 磁	露	口～頂	4.8	10.0	4.0	4.0	淡黃	露付	露付	肥前	露付	露付	F1 100+110+110
532	SG1-2 露1層 磁	露	口～頂	5.0	10.0	4.0	4.0	淡青	露付	露付	肥前	露付	露付	F1 100+110+110
533	SG1-2 露1層 磁	露	口～頂	4.5	10.0	4.0	4.0	淡青	露付	露付	肥前	露付	露付	F1 100+110+110
534	曲 SGS 3 露	露	口～頂	4.5	10.0	4.0	4.0	淡青	露付	露付	肥前	露付	露付	KSC+S 50. 50%
535	直 H 田 土 1 露	露	口	30.6	4.0	4.0	4.0	青綠色	露付	露付	肥前	露付	露付	G 10 露
536	曲 F1 田 D2 露	露	體	4.0	10.0	4.0	4.0	淡黃	露付	露付	肥前	露付	露付	E 10
537	曲 F1 土 田 露	露	口	4.0	10.0	4.0	4.0	淡黃	露付	露付	肥前	露付	露付	F1 100+110+110
538	SG1-2 土 1 露	露	口	5.0	9.0	3.2	3.2	淡黃	露付	露付	肥前	露付	露付	G 10 露
539	曲F1 田 D2 土 1 露	露	口～頂	4.0	10.0	4.0	4.0	淡黃	露付	露付	肥前	露付	露付	D 10
540	SG1-2 露1層 磁	露	口～頂	5.0	9.0	3.2	3.2	淡黃	露付	露付	肥前	露付	露付	F1 100+110+110

第29表-2 近世陶器観察表

番号	出土地点	層構	部位	法量(cm)			出土	施調	文様	产地	分類	備考	注記名	
				表面	口縁	高付	色調							
341	西古 2 階	礎	口~横	6.1	底灰	底灰	青褐色	施瓦ニ	施瓦ニ	無文	青褐色	施瓦ニ	底灰はガラス質	古1層
342	西古 2 階	礎	口~底	5.2	8.9	3.4	青褐色灰	施瓦ニ	施瓦ニ	無文	青褐色	施瓦ニ	底灰は内施物。从施物に施調物。口縁部に絞物を施す。	古1層
343	水切口 1 片	口縁	16.2	底灰	施調	施調	青褐色	無文	無文	無文	青褐色	無文	18時 見受け即ち施調子	古2 層
344	西古 1 階	井	底	3.4	上部	底灰	青褐色	無文	無文	無文	青褐色	無文	底灰は施物。済巻き台面。底部下半より露胎	AA-B1
345	曲M 旧P 土瓶	底	4.2	上部	青褐色	青褐色	青褐色	無文	無文	無文	青褐色	無文	器内D系か	アリ+Q15
346	502 鉢形1 直	向付	13.6	底	施調	施調	青褐色	無文	無文	無文	青褐色	無文	18時 化粧土装飾後、透明釉を施す。右肩の可能性もあり。	VYU

第30表-1 土師器観察表

番号	出土地点	層構	分類	法量(cm)			調整・文様等	内面	外面	出土	色調	備考	注記名			
				表面	口縁	高付										
347	曲E5R 砥	A	8.4	田輪ナデ	工具による	田輪ヘアラブリ	1~3mmの赤褐色の粒を含む。一部で浅黄褐色	田輪ナデ	田輪ヘアラブリ	口縁部に赤褐色を施す。1部で浅黄褐色	褐色	褐色	褐色の底の状態	F1798		
348	曲I 旧Y 砥	A	6.6	田輪ナデ	工具による	田輪ヘアラブリ	1~3mmの赤褐色の粒を含む。	田輪ナデ	田輪ヘアラブリ	口縁部に赤褐色を施す。	褐色	褐色	褐色	V		
349	曲I 旧田 砥	A	4.8	青褐色	施調	施調	青褐色	無文	無文	1~3mmの赤褐色の粒を含む。褐色に赤い網	青褐色	青褐色	口縁部に赤褐色を施す。	III-W入口		
350	曲I 旧田 砥	B	12.9	7.1	3.6	ロクロ目	ロクロ目	田輪ヘアラブリ切り後	田輪ヘアラブリ	1~4mmの赤褐色の粒を含む。1mm~3mmの深窪	青褐色	青褐色	青褐色の底の状態	F1553		
351	曲B4 砥	B	8.0	田輪ナデ	田輪ナデ	田輪ヘアラブリ	1~3mmの赤褐色の粒を含む。	田輪ナデ	田輪ヘアラブリ	口縁部に赤褐色を施す。	褐色	褐色	内面に施調物付帯	H414		
352	曲K 1層 砥	B	8.4	田輪ナデ	田輪ナデ	田輪ヘアラブリ	1~3mmの赤褐色の粒を含む。	田輪ナデ	田輪ヘアラブリ	口縁部に赤褐色を施す。	褐色	褐色	褐色の底の状態	K4017		
353	曲B 1層 砥	B	7.8	田輪ナデ	ロクロ目	ロクロ目	3mm以下の赤褐色の粒を含む。	田輪ナデ	田輪ヘアラブリ	口縁部に赤褐色を施す。	褐色	褐色	褐色の底の状態	古1層		
354	曲E2 SRI 砥	B	14.5	6.4	3.4	ロクロ目	田輪ナデ	田輪ナデ	田輪ヘアラブリ	1~3mmの赤褐色の粒を含む。口縁部に赤褐色を施す。	褐色	褐色	褐色の底の状態の底面。	F1796		
355	曲B2?SRI 砥	B	13.0	田輪ナデ	ロクロ目	ロクロ目	2mm以下の中施物の粒を含む。	田輪ナデ	田輪ヘアラブリ	口縁部に赤褐色を施す。	褐色	褐色	褐色の底の状態	S2-3?層		
356	曲D 田 A 砥	B	12.4	青褐色	施調	施調	青褐色	無文	無文	1~3mmの赤褐色の粒を含む。	青褐色	青褐色	青褐色の底の状態	A-2		
357	曲E5 RII 砥	C	9.4	7.1	1.6	田輪ナデ	田輪ナデ	田輪ヘアラブリ	田輪ナデ	1~3mmの赤褐色の粒を含む。	褐色	褐色	褐色の底の状態	F1796		
358	502 1層 I 砥	C	8.6	田輪ナデ	田輪ナデ	田輪ヘアラブリ	1~3mmの赤褐色の粒を含む。	田輪ナデ	田輪ヘアラブリ	口縁部に赤褐色を施す。	褐色	褐色	褐色の底の状態	VYU-17 層		
359	曲J 5RI I 砥	C	8.8	田輪ナデ	田輪ナデ	田輪ヘアラブリ	1~3mmの赤褐色の粒を含む。	田輪ナデ	田輪ヘアラブリ	口縁部に赤褐色を施す。	褐色	褐色	褐色の底の状態	F1796		
360	曲F10 DII 砥	C	6.8	6.0	1.0	田輪ナデ	青褐色	青褐色	青褐色	1~3mmの赤褐色の粒を含む。	褐色	褐色	褐色の底の状態	D 211		
361	重輪 植	C	9.0	ナデ	ロクロ目	ロクロ目	1~3mmの赤褐色の粒を含む。	ナデ	ナデ	口縁部に赤褐色を施す。	褐色	褐色	褐色の底の状態	SD 375		
362	重輪 植	C	9.2	ナデ	ロクロ目	ロクロ目	1~3mmの赤褐色の粒を含む。	ナデ	ナデ	口縁部に赤褐色を施す。	褐色	褐色	褐色の底の状態	SD 376		
363	重A3 植	C	5.4	田輪ナデ	ロクロ目	ロクロ目	1~3mmの赤褐色の粒を含む。	田輪ナデ	田輪ヘアラブリ	口縁部に赤褐色を施す。	褐色	褐色	褐色の底の状態	H4212		
364	曲J 1層 植	C	5.5	田輪ナデ	ロクロ目	ロクロ目	不明	田輪ナデ	田輪ヘアラブリ	口縁部に赤褐色を施す。	褐色	褐色	褐色の底の状態	SD 2層		
365	曲J 1層 植	C	7.0	田輪ナデ	ロクロ目	ロクロ目	2mm以下の中施物の粒を含む。	田輪ナデ	田輪ヘアラブリ	口縁部に赤褐色を施す。	褐色	褐色	褐色の底の状態	H4213		
366	桂 植	C	7.0	ナデ	田輪ナデ	田輪ヘアラブリ	機械的な赤褐色を少し含む。	ナデ	ナデ	口縁部に赤褐色を施す。	褐色	褐色	褐色の底の状態	H4213 1層		
367	桂 植	D	6.2	田輪ナデ	田輪ナデ	田輪ヘアラブリ	1~3mmの赤褐色の粒を含む。	田輪ナデ	田輪ヘアラブリ	口縁部に赤褐色を施す。	褐色	褐色	褐色の底の状態	1 層		
372	桂 I 7W 植	D	8.5	青褐色	青褐色	青褐色	1~3mmの赤褐色の粒を含む。	桂 I 7W 植	桂 I 7W 植	口縁部に赤褐色を施す。	褐色	褐色	褐色の底の状態	K417		
373	桂 曲 B II 植	D	6.8	田輪ナデ	田輪ナデ	田輪ヘアラブリ	1~3mmの赤褐色の粒を含む。	桂 曲 B II 植	桂 曲 B II 植	口縁部に赤褐色を施す。	褐色	褐色	褐色の底の状態	SD 1 层		
374	重輪 植	D	7.2	ナデ	ロクロ目	ロクロ目	1~3mmの赤褐色の粒を含む。	ナデ	ナデ	口縁部に赤褐色を施す。	褐色	褐色	褐色の底の状態	H4213 2 层		
375	重輪 植	D	8.6	ナデ	ロクロ目	ロクロ目	1~3mmの赤褐色の粒を含む。	ナデ	ナデ	口縁部に赤褐色を施す。	褐色	褐色	褐色の底の状態	H4213 2 层		
376	重輪 植	D	8.2	田輪ナデ	田輪ナデ	田輪ヘアラブリ	1~3mmの赤褐色の粒を含む。	田輪ナデ	田輪ヘアラブリ	口縁部に赤褐色を施す。	褐色	褐色	褐色の底の状態	H4213 2 层		
377	水F 上層	E-1	8.2	8.2	田輪ナデ	田輪ナデ	田輪ヘアラブリ	1~3mmの赤褐色の粒を含む。	田輪ナデ	田輪ヘアラブリ	口縁部に赤褐色を施す。	褐色	褐色	褐色の底の状態	H4213 2 层	
378	水F 上層	E-1	6.4	田輪ナデ	田輪ナデ	田輪ヘアラブリ	1~3mmの赤褐色の粒を含む。	田輪ナデ	田輪ヘアラブリ	口縁部に赤褐色を施す。	褐色	褐色	褐色の底の状態	SD 2 层		
379	水F 上層	E-1	8.4	田輪ナデ	田輪ナデ	田輪ヘアラブリ	2mm以下の赤褐色の粒を含む。	田輪ナデ	田輪ヘアラブリ	口縁部に赤褐色を施す。	褐色	褐色	褐色の底の状態	SD 2 层		
380	水F 1層 II 砥	F-2	7.7	ナデ	ロクロ目	ロクロ目	1~3mmの赤褐色の粒を含む。	ナデ	ナデ	口縁部に赤褐色を施す。	褐色	褐色	褐色の底の状態	SD P 461		
381	社K 1層 II 砥	F-2	9.7	田輪ナデ	田輪ナデ	田輪ヘアラブリ	1~3mmの赤褐色の粒を含む。	田輪ナデ	田輪ヘアラブリ	口縁部に赤褐色を施す。	褐色	褐色	褐色の底の状態	SD 1層		
382	重輪 I 1層 植	F-3	6.0	ナデ	見込み一方向	見込み一方向	2mm以下の赤褐色の粒を含む。	ナデ	ナデ	口縁部に赤褐色を施す。	褐色	褐色	褐色の底の状態	AI 1 层		
383	曲H 5RI II 砥	F-3	6.4	田輪ナデ	田輪ナデ	田輪ヘアラブリ	1~3mmの赤褐色の粒を含む。	田輪ナデ	田輪ヘアラブリ	口縁部に赤褐色を施す。	褐色	褐色	褐色の底の状態	SD 473		
384	水F 上層	F-3	6.0	田輪ナデ	田輪ナデ	田輪ヘアラブリ	1~3mmの赤褐色の粒を含む。	田輪ナデ	田輪ヘアラブリ	口縁部に赤褐色を施す。	褐色	褐色	褐色の底の状態	H4213		
385	水F 1層 II 中	F-3	6.4	ナデ	ナデ	ナデ	1~3mmの赤褐色の粒を含む。	ナデ	ナデ	口縁部に赤褐色を施す。	褐色	褐色	褐色の底の状態	H4213 47		
386	水F 1層 II 中	F-3	7.4	田輪ナデ	田輪ナデ	田輪ヘアラブリ	1~3mmの赤褐色の粒を含む。	田輪ナデ	田輪ヘアラブリ	口縁部に赤褐色を施す。	褐色	褐色	褐色の底の状態	H4213		
387	桂 J 5W 植	F-3	6.8	田輪ナデ	ロクロ目	ロクロ目	1~3mmの赤褐色の粒を含む。	桂 J 5W 植	桂 J 5W 植	口縁部に赤褐色を施す。	褐色	褐色	褐色の底の状態	H4213 5		
388	桂 H 10W 植	F-3	10.3	5.6	3.3	田輪ナデ	田輪ナデ	田輪ヘアラブリ	1~3mmの赤褐色の粒を含む。	桂 H 10W 植	桂 H 10W 植	口縁部に赤褐色を施す。	褐色	褐色	褐色の底の状態	F-2 5 12
389	桂 H 5RI II 砥	F-3	7.2	5.0	3.0	田輪ナデ?	摩滅あり	桂 H 5RI II 砥	桂 H 5RI II 砥	1~3mmの赤褐色の粒を含む。	褐色	褐色	褐色の底の状態	G 25 P37		
390	重A3 植	F	5.8	ナデ	重輪仕面	ロクロ目	1~3mmの赤褐色の粒を含む。	重輪仕面	重輪仕面	口縁部に赤褐色を施す。	褐色	褐色	褐色の底の状態	H4213		
391	重輪 植	F	7.9	4.8	1.9	ナデ?	ナデ?	ナデ?	ナデ?	ナデ?	口縁部に赤褐色を施す。	褐色	褐色	褐色の底の状態	SD 375 2 层	
392	重A3b 植	F	9.5	5.6	5.6	田輪ナデ	田輪ナデ	ロクロ目	ロクロ目	ロクロ目	口縁部に赤褐色を施す。	褐色	褐色	褐色の底の状態	H4213 19	
393	重輪 植	F	4.6	ナデ	ナデ	ナデ	ロクロ目	ロクロ目	ロクロ目	ロクロ目	口縁部に赤褐色を施す。	褐色	褐色	褐色の底の状態	H4213	
394	曲D 旧AII F	F	6.8	田輪ナデ	田輪ナデ	田輪ヘアラブリ	1~3mmの赤褐色の粒を含む。	田輪ナデ	田輪ヘアラブリ	口縁部に赤褐色を施す。	褐色	褐色	口縁部に赤褐色を施す。	A 1		
395	曲D 旧AII F	F	7.2	7.0	2.0	田輪ナデ?	摩滅あり	桂 H 5RI II 砥	桂 H 5RI II 砥	1~3mmの赤褐色の粒を含む。	褐色	褐色	褐色の底の状態	SD C 4		
396	桂 H 5RI II 砥	F	5.7	田輪ナデ	田輪ナデ	田輪ヘアラブリ	1~3mmの赤褐色の粒を含む。	桂 H 5RI II 砥	桂 H 5RI II 砥	口縁部に赤褐色を施す。	褐色	褐色	褐色の底の状態	F 1795		
397	桂 H 5RI II 砥	A	8.4	6.0	2.0	田輪ナデ	田輪ナデ	田輪ヘアラブリ	1~3mmの赤褐色の粒を含む。	桂 H 5RI II 砥	桂 H 5RI II 砥	口縁部に赤褐色を施す。	褐色	褐色	褐色の底の状態	H4205
398	桂 H 5RI II 砥	A	8.4	6.0	1.0	田輪ナデ	田輪ナデ	田輪ヘアラブリ	1~3mmの赤褐色の粒を含む。	桂 H 5RI II 砥	桂 H 5RI II 砥	口縁部に赤褐色を施す。	褐色	褐色	褐色の底の状態	H4212
399	桂 H 17 重II A 砥	A	11.8	田輪ナデ	田輪ナデ	田輪ヘアラブリ	1~3mmの赤褐色の粒を含む。	桂 H 17 重II A 砥	桂 H 17 重II A 砥	口縁部に赤褐色を施す。	褐色	褐色	褐色の底の状態	H4213 17		
400	桂 E 2 砥	A	8.6	6.0	1.1	田輪ナデ?	摩滅あり?	桂 H 17 重II A 砥	桂 H 17 重II A 砥	1~3mmの赤褐色の粒を含む。	褐色	褐色	褐色の底の状態	F 151 1 层		

第30表-2 土師器観察表

用語 名	出土地所	種類	分類	法量 (cm)	調査 内面	表面	土色	色調	備考	注記名
					口幅	高さ	底径	外腹		
601	曲J 587 小田 A	8.8 5.5 1.5	瓶	口幅 7.0 底径 4.0	内腹ナメ	輪郭へ鋸切の痕。縦縫合跡。口縁に凹凸の輪郭ナメ。縫合部に2-3箇所、2-3箇所はナメ無し。	1mm~2mmの白色粘土。縫合部に2箇所は薄緑色の粘土。	青緑	1mm~2mmの薄緑色を含む。他の部分は黄褐色。	D 2 P 381
602	曲H3 田山 A	9.7 7.3 1.3	瓶	口幅 7.0 底径 4.0	内腹ナメ	縫合部に1箇所の凹凸の輪郭ナメ。縫合部に2箇所の凹凸の輪郭ナメ。	1mm~3mmの白色粘土。縫合部に2箇所は薄緑色の粘土。	青緑	1mm~3mmの薄緑色を含む。他の部分は黄褐色。	1 3
603	佐511土器小田 B	7.0	テグ	内腹ナメ	口輪郭へ鋸切	縫合部を輪郭に含む。	1mm~2mmの白色粘土を含む。	青緑	縫合部を輪郭に含む。	W 151 30
604	水59 6厘 小田 B	8.1 6.2 1.2	テグ	内腹ナメ	ヘラ切り	縫合部を輪郭に含む。	1mm~2mmの白色粘土を含む。	青緑	縫合部を輪郭に含む。	W 151 30
605	81 金 下田山 B	8.6 6.0 1.2	田転ナメのち葉型	内腹ナメ	内腹ナメ	縫合部の内腹部に2箇所の凹凸の輪郭ナメ。	1mm~2mmの白色粘土。縫合部に2箇所は薄緑色の粘土。	青緑	縫合部の内腹部に2箇所の凹凸の輪郭ナメ。	K CT 17
606	曲K 小田 B	7.7 5.5 1.2	田転ナメ	内腹ナメ	内腹ナメ	縫合部に2箇所の凹凸の輪郭ナメ。	1mm~2mmの白色粘土。縫合部に2箇所は薄緑色の粘土。	青緑	縫合部に2箇所の凹凸の輪郭ナメ。	A 6 HT
607	曲B3 7厘 小田 B	8.4 5.2 1.1	テグ	内腹ナメ	ヘラ切り	縫合部を輪郭に含む。	1mm~2mmの白色粘土を含む。	青緑	縫合部を輪郭に含む。	W 151 30
608	昭A3 田	8.0				1mm~2mmの白色粘土を含む。	青緑	1mm~2mmの白色粘土を含む。		
609	水59 6厘 小田 B	8.0	田転ナメ	田転ナメ	内腹ナメ	ヘラ切り	2mm~3mmの薄緑色の粘土を含む。	青緑	2mm~3mmの薄緑色の粘土を含む。	W 151 30
610	水21 2厘 田	13.8	田転ナメ	田転ナメ			糞状	にごり青緑/灰青		
611	昭18 田 78井	5.5				角切り	1mm~4mmの赤褐色粘土が多く。1mm以下	赤	1mm~4mmの赤褐色粘土が多く。	P 151 144
612	SGI-3 佐世 B	8.2				内腹ナメ	1mm~2mmの赤褐色粘土が多く。1mm以下	赤	1mm~2mmの赤褐色粘土が多く。	G 22 MCT
613	SGI-3 朝土 田	6.2				内腹ナメ	1mm~2mmの赤褐色粘土が多く。	赤	1mm~2mmの赤褐色粘土が多く。	G 22 MCT
614	昭A3 田		テグ	田転ナメ	内腹ナメ	内腹ナメ	1mm~2mmの赤褐色粘土が細かく含む。	赤	1mm~2mmの赤褐色粘土が細かく含む。	H 1 A 2 備
615	等A3 田	5.6	田転ナメ	内腹ナメ	内腹ナメ	内腹ナメ	糞状	糞状	糞状	H 1 A 2 備
616	81 金 下田山 B	9.0	田転ナメ	田転ナメ	内腹ナメ	内腹ナメ	糞状	糞状	糞状	前2 10
617	曲G 582 田	16.0 9.2	2厘 残底型	内腹ナメ	内腹ナメ	内腹ナメ	1mm以下の基底の粘土	灰青緑/灰	京都土器群の影響あり	G 1 P 19
618	水21 2厘 田	19.0 8.0	3厘 テグ	内腹ナメ	内腹ナメ	内腹ナメ	微細な石突突を含む。	青緑	微細な石突突を含む。	S 10 18
										S 10 17

第31表-1 土師質・瓦質土器観察表

用語 名	出土地所	種類	分類	法量 (cm)	調査 内面	表面	土色	色調	土色	備考	注記名
					口幅	高さ	底径	外腹			
619	曲J 田 Q 瓦質 利野	2.2 2.7 1.4	1.7 ケツリ	内腹ナメ	内腹ナメ	内腹ナメ	1mm以下の白色粘土を含む。	白	和泉河内型	Q 9	
620	水522 上屋 瓦質	1.7 1.7 1.1	5.6 ケツリ	内腹ナメ	内腹ナメ	内腹ナメ	2mm以下の白色粘土。糞状を多く含む。	白	和泉河内型	B 2 S2 西上	
621	曲J 田 Q 瓦質	3.2	3.2 0.7	2.7 ケツリ	内腹ナメ	内腹ナメ	3mmまでの白色粘土。石突突を多く含む。	白	和泉河内型	Q	
622	SGI-2 8厘 瓦質	4.2	4.2 0.8	2.7 ケツリ	内腹ナメ	内腹ナメ	3mm以下の白色粘土を含む。	白	和泉河内型か?	Q 151 備	
623	曲J 田 Q 瓦質 利野	4.3	4.3 0.8	1.7 ケツリ	内腹ナメ	内腹ナメ	1mm以下の白色粘土を含む。	白	和泉河内型	Q 9	
624	曲H3 田 上屋 瓦質	2.0	2.0 0.6	1.7 ケツリ	内腹ナメ	内腹ナメ	1mmまでの白色粘土。石突突を多く含む。	白	和泉河内型	1 11	
625	SGI-2 球土 瓦質	6.0	6.0 0.9	1.7 ケツリ	内腹ナメ	内腹ナメ	1mm以下の白色粘土を含む。	白	和泉河内型	Q 151 16 G 21 P 16	
626	水21 2厘 田 五葉 足頭	2.5 2.8 0.8	5.0 ケツリ	内腹ナメ	内腹ナメ	内腹ナメ	5mm以下の白色粘土を含む。	白	和泉河内型	W 151 144 G 21 P 15	
627	曲K 2厘 瓦質	5.4	5.4 0.6	5.0 ケツリ	内腹ナメ	内腹ナメ	2mmまでの白色粘土を含む。	白	和泉河内型	Q	
628	水21 2厘 田 五葉	5.4	5.4 0.6	5.0 ケツリ	内腹ナメ	内腹ナメ	2mm以下の白色粘土を多く含む。	白	和泉河内型	Q 2 10	
629	曲G 田 G1 瓦質	3.6	3.6 0.6	5.0 ケツリ	内腹ナメ	内腹ナメ	1mm以下の基底の粘土を含む。	西昌門型	西昌門型か?	G 1	
630	西2 2厘 田 瓦質	1.6	1.6 0.5	3.5 ケツリ	内腹ナメ	内腹ナメ	2mmまでの白色粘土を多く含む。	白	受け口口縁	W 1 10	
631	曲J 田 V 瓦質	2.5	2.5 0.6	5.0 ケツリ	内腹ナメ	内腹ナメ	3mmまでの白色粘土を多く含む。	白	瓦質土器群に類似	V 174	
632	曲K 2厘 瓦質	2.8	2.8 1.0	5.0 ケツリ	内腹ナメ	内腹ナメ	2mm以下の白色粘土を含む。	白	瓦質土器群に類似	KH 11	
633	曲J 田 Q 瓦質 双耳瓶	15.0 5.0 3.0	5.0 ケツリ	内腹ナメ	内腹ナメ	内腹ナメ	1mm以下の白色粘土を含む。	白		Q 9	
634	曲E1 田 O1 瓦質 双耳瓶	15.0 5.0 3.0	1.7 ケツリ	内腹ナメ	内腹ナメ	内腹ナメ	2mm以下の白色粘土を含む。	白		D 1 5-T	
635	SGI-2 7厘 瓦質	14.4 5.0 3.0	5.0 ケツリ	内腹ナメ	内腹ナメ	内腹ナメ	3mm以下の白色粘土を多く含む。	白		Q 151 21	
636	水21 2厘 瓦質 双耳瓶	14.0 5.5 0.8	5.0 ケツリ	内腹ナメ	内腹ナメ	内腹ナメ	3mm以下の白色粘土を多く含む。	白		G 22 MCT 6-S2 1 備	
637	SGI-2 7厘 瓦質 双耳瓶	12.8 3.4 1.0	1.0 ケツリ	内腹ナメ	内腹ナメ	内腹ナメ	2mm以下の白色粘土を少しあわせため緑化した土。	青緑		V 195	
638	西2 2厘 瓦質 双耳瓶	14.6 3.2 1.0	1.0 ケツリ	内腹ナメ	内腹ナメ	内腹ナメ	1mm以下の白色粘土を含む。	白		W 1 10	
639	曲A 2厘 瓦質 双耳瓶	15.0 5.0 3.0	1.7 ケツリ	内腹ナメ	内腹ナメ	内腹ナメ	1mm以下の白色粘土を含む。	白		A 4 T2 2 備	
640	曲E2 SG1 瓦質	15.0 5.0 3.0	1.7 ケツリ	内腹ナメ	内腹ナメ	内腹ナメ	1mm以下の白色粘土を含む。	白		F 1 2 9	
641	SGI-2 7厘 瓦質 双耳瓶	25.6 4.1 1.0	1.7 ケツリ	内腹ナメ	内腹ナメ	内腹ナメ	1mm程度の白色粘土を含む。	白		F 12 111 161	
642	SGI-2 7厘 瓦質	4.5 0.7 0.3	0.7 ケツリ	内腹ナメ	内腹ナメ	内腹ナメ	2mm以下の白色粘土を含む。	白		Q 151 B	
643	水1 2厘 瓦質 双耳瓶	23.2 3.6 0.8	0.8 ケツリ	内腹ナメ	内腹ナメ	内腹ナメ	2mm以下の白色粘土を含む。	白		K H 7	
644	曲J 田 N 瓦質 双耳瓶	23.4 6.9 1.2	1.2 ケツリ	内腹ナメ	内腹ナメ	内腹ナメ	3mm以下の白色粘土を含む。	白		W 1 10	
645	曲A 1厘 瓦質 双耳瓶	30.0 4.0 1.0	1.7 ケツリ	内腹ナメ	内腹ナメ	内腹ナメ	3mmまでの白色粘土を含む。	白		A 4 1 備	
646	水9 2厘 瓦質 双耳瓶	26.6 7.8 1.0	1.7 ケツリ	内腹ナメ	内腹ナメ	内腹ナメ	3mmまでの白色粘土を含む。	白		B 2 97	
647	水9 1厘 瓦質	21.6 5.8 0.8	0.8 ケツリ	内腹ナメ	内腹ナメ	内腹ナメ	1mm以下の白色粘土を含む。	白		B 2 92 石シケ	
648	水9 1厘 瓦質	27.6 4.7 0.9	0.9 ケツリ	内腹ナメ	内腹ナメ	内腹ナメ	3mm以下の白色粘土。糞状を含む。	白		B 2 10	
649	SGI-2 球土 瓦質	29.2 5.0 0.9	0.9 ケツリ	内腹ナメ	内腹ナメ	内腹ナメ	3mm以下の白色粘土を含む。	白		Q 151 39	
650	曲F3 田 F2 瓦質	16.4 3.5 0.8	0.8 ケツリ	内腹ナメ	内腹ナメ	内腹ナメ	1mm以下の白色粘土を含む。	白		F 2 x 11	
651	水切1 1厘 瓦質	15.6 4.1 1.2	1.2 ケツリ	内腹ナメ	内腹ナメ	内腹ナメ	2mm以下の白色粘土を少しあわせた土。	白		Q 151 24	
652	水切1 1厘 瓦質	13.0 4.0 0.8	0.8 ケツリ	内腹ナメ	内腹ナメ	内腹ナメ	4mm以下の白色粘土を少しあわせた土。	白		Q 151 24	
653	昭A 2厘 瓦質	13.2 5.8 1.2	1.1 ケツリ	内腹ナメ	内腹ナメ	内腹ナメ	4mm以下の白色粘土を少しあわせた土。	白		Q 151 24	
654	水551 1厘 瓦質	13.2 5.8 1.2	1.1 ケツリ	内腹ナメ	内腹ナメ	内腹ナメ	4mm以下の白色粘土を少しあわせた土。	白		Q 151 24	
655	SGI-2 石 瓦質	24.2 33.0 1.5	1.5 ケツリ	内腹ナメ	内腹ナメ	内腹ナメ	1mm以下の白色粘土の糞状を含む。	白		W 1 10	
656	水切1 1厘 瓦質	24.6 4.5 0.9	0.9 三万手	内腹ナメ	内腹ナメ	内腹ナメ	3mm以下の白色粘土。糞状を含む。	白		W 1 10	
657	水21 2厘 瓦質	30.6 10.7 0.8	0.8 三万手	内腹ナメ	内腹ナメ	内腹ナメ	3mm以下の白色粘土。糞状を含む。	白		W 1 10	
658	曲A 2厘 瓦質	29.0 8.1 1.4	1.4 三万手	内腹ナメ	内腹ナメ	内腹ナメ	3mm以下の白色粘土を含む。	白		A 3 8-B 2 97	
659	曲A 2厘 瓦質	29.0 8.1 1.4	1.4 三万手	内腹ナメ	内腹ナメ	内腹ナメ	3mm以下の白色粘土を含む。	白		W 1 10	
660	水切 1厘 瓦質	29.0 8.1 1.4	1.4 三万手	内腹ナメ	内腹ナメ	内腹ナメ	3mm以下の白色粘土を含む。	白		W 1 10	
661	曲A 582 瓦質	29.0 8.1 1.4	1.4 三万手	内腹ナメ	内腹ナメ	内腹ナメ	3mm以下の白色粘土を含む。	白		A 2 P3-1	

第31表-2 土質・瓦質土器観察表

規範 No.	出土地点	種別	商標	部位	法規 (cm)		調査 内面	色調	地土	備考	注記名		
					口径	高さ	裏面	外面					
662	水呑木	瓦質	高炉付	底	ミガキ	美濃	黒	微細な暗褐色地、灰白色粒。透明光沢粒を多く含む	中空脚部	SE2 上層			
663	SD-2 朝日町	瓦質	火鉢	口一側	36.4	12.5	1.1	暗いミガキ	ハイメ	8.7割/底(山形) 脚周 5mm 以下のオーバー脚粒、2mm 以下の灰白粒を少數含む	2.5割/脚部	SD-2 朝日町	
664	曲 K	瓦質	火鉢	底	15.6	5.4	1.3	油面	ハイメ	灰/底黄	4mm 以下の灰白色粒を含む	底型型か?	K 8-14
665	水切岸	瓦質	火鉢	口	17.0	5.0	1.3	油面	ハイメ	灰/底黄	1mm 以下の暗褐色粒をわずかに含む	底型型か?	SD-2 朝日町
666	SE-B 1 区	瓦質	火鉢	底	15.6	5.4	1.3	油面	ハイメ	灰/底黄	1mm 以下の暗褐色粒をわずかに含む	底型型か?	SD-2 SE-B
667	SD-2 朝日町	瓦質	火鉢	口一側	4.9	1.3	干焼	ハイメ	灰	1mm 程度の暗褐色粒、灰白色粒を少數含む	底型型か?	SD-2 朝日町	
668	曲 K	瓦質	香炉付	口一底	15.2	4.0	0.8	ハイメ/テナ	ハイメ	橙/灰	1mm ~ 2mm 大きな灰色粒、灰白色粒を含む	底型型か?	K 17.7
669	曲 M	旧 P	瓦質	鋸	6.1	0.6	平行タカラ	指觸底	オリバー	灰/底黄	透明光沢粒を含む	P 11	
670	曲 F	近F2	土師質	目皿	底			ナデ	ナデ	明石緑	3mm 以下の灰白色粒を含む、2mm 東洋の石葉。	明石松生窯に当たる	F2-4.4

第32表 繩文・弥生土器 / 必須器観察表

規範 No.	出土地点	種別	部位	法規 (cm)	調査 内面		色調	地土	備考	注記名	
					外表面	内面					
671	曲 I	深縁		口一側	縦縫合	有閉縫合	青灰色系	灰/底黄	1mm 以下の灰白色粒を含む	Q 11	
672	SG2	下腹	深縫	底	縦縫合	有閉縫合	青灰色系	ナデ	灰/にじる	1mm ~ 4mm の赤褐色、灰褐色、灰白色の粒を多く含む	Q 110-122
673	西	深縫		底	縦縫合	有閉縫合	青灰色系	ナデ	灰/底黄	4mm 以下の暗褐色粒を含む	青灰色
674	BF 8 1 岡	深縫		底	6.3	ナデ	縦縫合	ナデ	4mm 以下の灰白色粒、3mm 以下のオーバー脚の粒を多く含む	BF 8 1 岡	
675	SG3	腹		底	6.0	ナデ	縦縫合	有	4mm 以下の灰白色粒、4mm 以下の灰白色の粒、4mm 以下の暗褐色の粒を多く含む	VV 36	
676	SG1-3	杏		底	5.2	ナデ	縦縫合	ナデ	4mm 以下の灰白色粒、4mm 以下の暗褐色の粒、3mm 以下の灰白色の粒、5mm 以下の灰白色的粒を含む	SG1-3	
677	曲 F	杏		底	5.60		にじる	青灰色	5mm 以下の灰白色粒、5mm 以下の灰白色の粒を含む	7.2 厘米	
678	曲 F	二重口付		口			にじる	青灰色	1mm ~ 4mm の赤褐色、高褐色、灰褐色の粒を含む	Q21 墓	
679	曲 F	鋸		口一側			にじる	青灰色	1mm ~ 4mm の赤褐色、高褐色、灰褐色の粒を含む	Q21	
680	曲 K	西古付		底	3.3	ナデ	にじる	青灰色	自然色	3mm 以下の灰白色の粒を含む	6-18
681	曲 A3	丸					織物紋文	黄灰	灰褐色	A3 1 層	

第33表 瓦觀察表

規範 No.	出土地点	種別	法規 (cm)	色調	地土	漬成	備考	注記名			
682	SD-2 朝日町	瓦丸瓦	8.8	5.35	3.0	灰灰	微細な灰白色粒をわずかに含む	良好	FI-E 17.5 14-4		
683	SG2	下腹	丸瓦	10.15	10.8	2.0	にじる	青灰	1mm 以下の粒を多く白灰色の粒をわずかに含む	良い 朱引の底の痕ナデ調整	Q 110-33
684	曲 L	丸瓦	13.1	11.7	3.6	灰灰/底付	灰灰/底付	青灰色	2mm 以下の暗褐色の粒を多く白灰色の粒で覆われていて、1mm 以下の青灰色の粒が混在する。底付は白灰色で底付の粒はわずかに白い。	良好 扇引紐の痕跡	Q 8
685	曲 L	丸瓦	11.6	10.1	2.9	浅灰	青灰	5mm 以下の青灰色を多く 2mm 以下の灰白色の粒を含む	良好 扇引紐の痕跡	Q 65-12	
686	SG2	下腹	丸瓦	17.5	10.2	2.8	明褐色	樹/にじる	3mm 以下の暗褐色の粒、4mm 以下の灰白色的粒を含む	良い 扇引紐の痕跡	Q 110-14
687	曲 F	丸瓦	20.0	14.1	3.5	にじる	青灰	5mm 以下の暗褐色粒を含む	良い	Z-N	
688	曲 M	SA2 丸瓦	11	8.4	2.2	灰灰/底付	灰灰	1mm 以下の灰白色的粒を多く含む	良好	P SA2 2 墓	
689	曲 K	平瓦	7.55	6.75	2.1	にじる	青灰/灰	能かな青、灰白色多く 5mm 以下の灰白色をわずかに含む	良好	K-4-10	
690	SD-2 朝日町	TB 平瓦	8.55	6.65	1.95	にじる	青灰/底付	1mm 以下の灰白色多く 4mm 以下白灰色をわずかに含む	良好	FI-E 17.5 14-4	
691	曲 L	平瓦	15.1	11.7	2.1	にじる	青灰/底付	1mm 以下の灰白色を多く 1mm 以下の灰白色を含む	良好	Q 8	
692	SG2	下腹	平瓦	10.25	10.9	2.0	明褐色	樹/にじる	1mm 以下の青灰色多く 1mm 以下の灰白色を含む	良い	Q 110-204
693	曲 F	平瓦	18.5	12.35	2.1	青灰	明褐色	3mm 程の灰褐色の褐色の粒をわずかに含む	良好	FI-E 17.5	
694	E-8-2	副土	平瓦	4.4	1.1	1.8	にじる	青灰	1mm 以下の青灰色を多く 1mm 以下の灰白色を含む	良好	三井生田調整
695	SD-84	平瓦	12.9	13.6	2.0	青灰	浅青	4mm 以下の青灰色の粒をわずかに含む	良好	HJ-84	
696	曲 S	平瓦	17.3	16.6	2.0	浅青	青灰	3mm 以下の青灰色の粒をこじらせて白いに見える	良い	SD-8	
697	SG2	下腹	平瓦	12.4	12.3	2.4	灰灰/底付	灰灰/底付	1mm 以下の青灰色の粒をこじらせて白いに見える。1 ~ 2mm ほどの灰白色の粒が散在する。	良好	G-211
698	曲 H	平瓦	6.7	7.15	2.3	灰灰/底付	灰灰/底付	2mm 以下の灰白色、4mm 以下の白灰色を多く含む	良好	G-2 4-201	
699	SG1-2	側土	平瓦	6.9	8.2	1.85	樹/にじる	青灰/樹	1mm 以下の青灰色の粒を含む	良好	DI-110-50
700	水	SS1	平瓦	17.0	9.1	2.35	にじる	青灰	1mm 以下の青灰色の粒を含む	良好	SD-2 SS1
701	水	SS1	平瓦	5.1	10.2	2.0	灰白	青灰	1mm 以下の青灰色の粒、暗褐色の粒を多く含む	良好	SD-2 SS1-45
702	SG2-1	平瓦	12.9	10.9	1.8	灰/黒	青灰	3mm 以下の青灰色の粒を含む	良好	G2-E 11-276	
703	水	切刃	平瓦	6.8	8.4	1.8	灰白	青灰	2mm 以下の白灰色を少數含む	良好	SD-2 H11-2 墓
704	西谷	不明	8.1	6.7	1.5	淡青	3mm 以下の青灰色の粒、2mm 以下の灰白色の粒を含む	良好	由 11 墓		
705	西谷	斜丸瓦	18.4	7.4	6.8	黒	微細な青灰色を少し含む	良好	由 1		
706	曲 F	辺世瓦	5.6	10.3	2.4	浅青/集灰/底付/黒	青灰	1mm 以下の青灰色の粒を含む	良好 イブレー顕微化	F2	
707	西谷	丸瓦	16.4	14.5	1.6	黒	3mm 以下の青灰色を含む	良好 「九州タイプ」 明治維新あり	由 1		
708	西谷	丸瓦	25.6	14.0	1.9	灰	2mm 以下の青灰色を含む	良好	由 1		
709	西谷	2 墓 丸瓦	14.6	10.2	1.7	灰	灰色の地に土にこじらく述べた灰黑色のマーブル状を呈する	良好	由 1 1 墓		
710	曲 J	辺世瓦	8.55	8.3	2.1	黒/灰	3mm 以下の青灰色を含む	良好	L-179		
711	西谷	斜丸瓦	25.8	25.3	2.1	黒	微細な青灰色を少し含む	良好	由 1		
712	曲 J	辺世瓦	16.7	11	1.9	黒/灰/浅青	3mm 以下の青灰色の粒、2mm 以下の灰白色的粒を含む	良好	1-0 b		
713	曲 K	辺世瓦	11.85	11.35	1.65	灰/灰/黒	青灰色	1mm 以下の青灰色の粒を含む	良好	K-14	
714	西谷	椭瓦	22.3	19.8	1.9	粗粘	1mm 以下の青灰色を含む	良好 宝塚唐草文	由 1		
715	西谷	椭瓦	24.4	20.1	1.9	黒	3mm 以下の青灰色の粒を含む	良好 宝塚文、巴文、宝塚唐草文	由 1		
716	水	コローナ瓦	11.4	10.9	1.7	粗粘	2mm 以下の灰白色的粒を含む	良好	由 2 の本の 20-7		
717	西谷	薄椭瓦	24.5	20.3	3.4	黒	微細な青灰色を少し含む	良好 内面ハケ工具痕	由 2		

第34表 土錐観察表

番号	出土地点	種類	法面(cm)			重量(g)	色調	地土形態	構成	備考	注記名
			高さ	幅	内径						
718	曲D	1.00 1.40 0.50 9.00	12.0	相	A 一 被覆	A/F					
719	曲D	13.00 1.50 0.60 17.00	12.0	相	A 土壁面	A/F					
720	曲D	10.00 1.40 0.55 17.00	12.0	相	D 土壁面	A/F					
721	曲E	13.00 1.50 0.65 18.00	12.0	相	A 土壁面	D/F ± %					
722	曲F	4.4 1.30 0.25 4.8	4.8	相	A 土壁面	三才干細層	D/F ± %				
723	曲F	10.00 1.30 0.30 13.00	12.0	相	A 土壁面	塊面が面をなす	D/F ± %				
724	曲F	4.3 1.20 0.24 7.5	7.5	相	A 土壁面	D/F ± %	D/F ± %				
725	曲F 3層	13.00 1.60 0.50 18.00	12.0	相	D 土壁面	塊面が面をなす	D/F ± %				
726	曲F	13.00 1.40 0.40 18.00	12.0	相	A 土壁面	D/F ± %	D/F ± %				
727	曲P 465-1	12.00 1.20 0.45 13.00	12.0	相	D 土壁面	D/F ± %					
728	曲E	16.00 1.50 0.65 19.00	12.0	相	A 土壁面	塊面が面をなす	F/F ± %				
729	SG1-2	12.00 1.10 0.40 13.00	12.0	相	A 土壁面	同一個体か	F/F ± %				
730	SG1-2	12.00 1.20 0.40 13.00	12.0	相	A 土壁面	F/F ± %	F/F ± %				
731	SG1-2	13.00 1.30 0.40 13.00	12.0	相	A 土壁面	F/F ± %	F/F ± %				
732	曲E	12.00 1.25 0.30 13.00	12.0	相	A 土壁面	F/F ± %	F/F ± %				
733	曲E	13.00 1.30 0.35 13.00	12.0	相	A 土壁面	F/F ± %	F/F ± %				
734	SG1-3 SE	14.00 1.30 0.50 16.00	12.0	相	A 土壁面	Q/F ± %					
735	曲E/F ± %	11.00 1.40 0.50 13.00	12.0	相	A 土壁面	同工品	Q/F ± %				
736	曲E/F ± %	14.00 1.40 0.50 15.00	12.0	相	A 土壁面	同工品	Q/F ± %				
737	曲H3	13.00 1.50 0.50 17.00	相	D 土壁面	塊面が面をなす	1.0					
738	曲 H3 下層	4.0 1.40 0.30 9.0 12.0	相	A 土壁面	被覆	1.1					
739	曲 H3 下層	13.00 1.50 0.50 13.00	相	A 土壁面	被覆	1.1					
740	曲 H3 下層	14.00 1.40 0.50 15.00	相	A 土壁面	被覆	1.1					
741	曲S505	3.5 1.20 0.45 4.5	4.5	相	A 土壁面	塊面が面をなす	Q/S505				
742	曲K	13.00 1.30 0.40 13.00	12.0	相	A 土壁面	塊面が面をなす	Q/S505				
743	曲 K	12.00 1.20 0.30 11.00	12.0	相	A 土壁面	被覆	K/F ± %				
744	曲 J	4.3 1.20 0.32 5.2	5.2	相	E 土壁面	大型干細層	N/S/C				
745	SG3	4.1 1.30 0.30 5.0	5.0	相	A 土壁面	被覆	P/Y ± %				
746	曲 M	13.00 1.50 0.50 13.00	12.0	相	B 土壁面	被覆	P/Y ± %				
747	曲 A1 P	3.5 1.2 0.3 4.4	4.4	相	A 土壁面	D/F ± %	A/F				
748	曲 A2 P	4.2 1.2 0.4 10.5	10.5	相	A 土壁面	塊面が面をなす	A/F				
749	曲 A2 P	4.4 1.30 0.4 10.5	10.5	相	A 土壁面	塊面が面をなす	A/F				
750	曲 A2 P	4.4 1.3 0.4 9.4	9.4	相	A 土壁面	被覆と塊面、形成が複数	A/F				
751	曲 A2 P	14.0 1.5 0.4 6.5	6.5	相	A 土壁面	塊面が面をなす	A/F				
752	曲 A2 P	4.8 1.25 0.2 7.2	7.2	相	A 土壁面	D/F ± %	A/F				
753	曲 A2 P	4.0 1.3 0.4 9.0	9.0	相	A 土壁面	形成が複数	A/F				
754	曲 A2 層	4.7 1.4 0.35 7.2	7.2	相	A 土壁面	D/F ± %	A/F				
755	曲 A2 層-16	16.0 1.5 0.40 16.0	16.0	相	A 土壁面	D/F ± %	A/F				
756	電 A3-1	2.7 0.9 0.5 1.2	1.2	相	B 土壁面	小品・巻きつけ	H/A				
757	電 A3-3 層	10.0 1.2 0.3 1.6	1.6	相	A 土壁面	D/F ± %	H/A				
758	電 A3-1	12.0 1.2 0.4 2.0	2.0	相	-	被覆	H/A				
759	電 A3-5 層	12.0 1.2 0.4 2.0	2.0	相	B 土壁面	D/F ± %	H/A				
760	電 A3-5 層	3.0 1.0 0.4 3.0	3.0	相	B 土壁面	D/F ± %	H/A				
761	曲 A3	5.0 1.7 0.4 12.8	12.8	相	C 土壁面	A1 1層					
762	曲 A3	5.2 1.9 0.7 14.9	14.9	相	A 土壁面	大型干細層、塊面が面をなす	A1 1層				
807	水切原	4.1 4.0 1.85 18.00	18.00	相	底面	積み重ね	B/F ± %				

第35表 穏観察表

番号	出土地点	種類	法面(cm)			色調	地土形態	構成	備考	注記名
			高さ	幅	内径					
807	水切原	4.1 4.0 1.85 18.00	底面							

第36表 土製聖人像観察表

番号	出土地点	種類	法面(cm)			色調	地土	構成	備考	注記名
			高さ	幅	内径					
808 左 SG1-2 造出土上層	5.3 4.00 1.00 17.1	F/F ± %								
808 右 SG1-2 造出土上層	5.2 2.75 1.00 17.1	F/F ± %								

第37表-1 古錢観察表

番号	出土地点	種類	法面(cm)			重量(g)	注記名	
			高さ	幅	内径			
809	曲G2	光明通(行善)	10.00	2.5	1.9	0.6	0.1	1/3が欠損。背は輪・鏡とともに無い。
810	曲B4	昭和通(裏)	10.94	2.5	1.8	0.6	0.1	3 行所。背は輪・鏡とともに無い。
811	昭和通(大正通)	11.07	0.249	2.10	0.61	0.12	1.5	周縁部欠損
812	曲B4	洪武通	13.68	2.24	1.80	0.53	0.14	2.2 欠損して背は鏡のみに無い。向ピットより前に3枚出土。銘文化して鏡は不明。4.29
813	昭和通(洪武通)	13.68	0.228	1.80	0.58	0.12	1.2	周縁部3/4欠損
814	昭和通(洪武通)	13.68	2.24	1.80	0.49	0.14	1.8	周縁部1/4欠損。銘文不明
815	曲B4	洪武通	13.68	2.2	1.8	0.5	0.4	4.5 背は背も着し右側のみ。表面がざらつき、重量も軽い。被縫跡か?
816	曲 B3	洪武通	13.68	2.2	1.9	0.6	0.1	2.2 完品
817	昭 A1	永楽通	14.08	2.5	2.1	0.6	0.2	4.8 完品。斜面に斜削する跡あり
818	里 C1b	永楽通	14.08	2.4	2	0.5	0.1	1.8 一次欠損
819	里 C1b	永楽通	14.08	2.33	2.00	0.53	0.11	1.7 一次欠損。背の輪・鏡は不明瞭
820	里 C1b	宣德通	14.33	2.5	1.9	0.5	0.1	2.7 一次欠損
821	曲 B3	永楽通(?)	16.06	2.5	1.9	0.5	0.1	3.5 完品。背は輪・鏡とともに無い。

※は推定値

第37表-2 古銭観察表

番号 N.O.	出土地点	種類	素材	初期年	法面(cm)				所定(備考)	注記名
					外径	内径	厚径	最大銭幅		
822	曲G5D1	寛永通寶	銅	16.36	2.56	1.90	0.59	0.13	3.0 実用品	G1520 地主
823	曲E5D1	寛永通寶	銅	16.36	2.48	1.90	0.48	0.16	3.8 実用品	K15C1291
824	曲B3	寛永通寶	銅	16.36	2.5	2	0.5	0.1	4.1 実用品、背は輪、頭とともに広い不規則	83 地主
825	曲B3	寛永通寶	銅	16.36	2.5	2	0.5	0.1	2.4 実用品、背は輪、頭とともに広い不規則	83 地主
826	曲B3	寛永通寶	銅	1668	25	21	0.6	0.1	3.1 実用品	83 地主
827	8H#12	寛永通寶	銅	1668	2.52	1.90	0.56	0.12	2.4 実用品、背は輪が広く、銘文は細字	G1520 地主
828	曲B3	寛永通寶	銅	1697	2.5	2	0.5	0.1	3.5 実用品	83 寛永11(承和) 地主
829	SC1-2	寛永通寶	銅	1697	2.28	1.90	0.59	0.09	1.5 周縁は欠損、銘文は薄肉、背の輪、頭は粗明瞭	F1 15c
830	曲B1	寛永通寶	銅	1697	2.4	1.9	0.6	0.1	2.3 実用品、背の輪、頭は不規則	83 地主
831	曲B1	寛永通寶	銅	1697	2.4	1.9	0.6	0.1	2.2 一部欠損	83 寛永11(承和) 地主
832	曲B1	寛永通寶	銅	1697	2.4	1.8	0.6	0.1	2.8 実用品、背の輪、頭は不規則	83 地主
833	曲A	寛永通寶	銅	1697	2.25	1.80	0.56	0.08	1.7 背と頭の割が一致せず、輪も下方にずれる	A1
834	曲G5D1	寛永通寶	銅	1697	2.48	1.90	0.54	0.15	3.0 実用品	G1520 地主
835	8H-1	寛永通寶	銅	1739	2.4	1.9	0.6	0.1	2.8 実用品、頭は少し歪み銘文は不明	A1 15c
836	6G#12	寛永通寶	銅	1739	2.36	1.90	0.57	0.15	1.5 1/2以上欠損、背は輪、頭とともに広い	G158 T1 H
837	曲B3	寛永通寶	銅	1741	2.3	1.7	0.6	0.1	1.8 一部欠損	83 地主
838	曲A1	寛永通寶	銅	1768	2.8	2.10	0.62	0.10	3.4 実用品	A1
839	曲B4	寛永通寶	銅	960	2.40	1.80	0.60	0.10	2.6 実用品	83 地主
840	曲B4	寛永通寶	銅	1086	2.5	2	0.6	0.1	7枚重なるが筋模様強く剥離できず、残り5枚の銭幅は不明、背と頭に重なるか?	84 74 16番
841	曲B4	寛永通寶	銅	1111	2.4	2.1	0.6	0.1	10.6 3枚重なるが筋模様強く剥離できず、残り2枚の銭幅は不明、背と頭に重なるか?	84 74 16番
842	曲B4	寛永通寶	銅	1285	2.5	1.7	0.5	0.1	3.3 実用品、銘文は行体、面、頭とともに広い	84 74 16番
843	曲B4	寛永通寶	銅	1096	2.5	1.8	0.6	0.1	4.4 銘文は行体でやや歪れる、頭の輪、頭は不規則	84 74 16番
844	8G#2	寛永通寶	銅	1697	2.31	1.80	0.57	0.12	2.7 15.7と背合わせ	G1520
845	8G#2	寛永通寶	銅	1696	2.43	1.80	0.54	0.13	3.3 15.7と背合わせ	G1520
846	8G#2	寛永通寶	銅	1696	2.33	1.80	0.56	0.13	3.1 安行高、六道銭1枚目、2枚目と背合わせ	G1520
847	8G#2	寛永通寶	銅	1696	2.42	1.90	0.56	0.12	2.3 六道銭一部欠損、六道銭2枚目、3枚目と面合せ	G1520
848	8G#2	寛永通寶	銅	1696	2.45	1.90	0.57	0.12	1.5 六道銭欠損、六道銭3枚目、4枚目と面合せ	G1520
849	8G#2	寛永通寶	銅	1696	2.50	2.00	0.55	0.15	3.9 実用品、六道銭4枚目、5枚目と背合わせ、銘化透し・銘文不鮮明	G1520
850	8G#2	寛永通寶	銅	1696	2.46	2.10	0.67	0.13	3.2 実用品、六道銭5枚目、6枚目と面合せ、銘化透し・銘文不鮮明	G1520
851	8G#2	寛永通寶	銅	1696	2.40	2.00	0.59	0.13	2.6 実用品、六道銭6枚目、7枚目と手字の輪、部が崩れ	G1520
852	8G#3	寛永通寶	銅	1696	2.54	2.00	0.61	0.12	2.9 実用品、手字の輪、輪はやや歪れる、六道銭1枚目と背合わせ付く、頭と背の筋が大きくなる	G1520
853	8G#3	寛永通寶	銅	1696	2.45	2.00	0.57	0.11	2.6 実用品、銘文はやや歪れる、六道銭2枚目、3枚目と背合わせ付く	G1520
854	8G#3	寛永通寶	銅	1696	2.57	2.00	0.58	0.12	2.6 実用品、六道銭3枚目、4枚目と背とく	G1520
855	8G#3	寛永通寶	銅	1696	2.52	1.90	0.54	0.12	3.0 実用品、六道銭4枚目、5枚目と背合わせ付く	G1520
856	8G#3	寛永通寶	銅	1696	2.49	1.80	0.56	0.16	4.4 実用品、六道銭5枚目、6枚目と背合わせ付く	G1520
857	8G#3	寛永通寶	銅	1368	2.29	1.90	0.62	0.14	2.4 実用品、六道銭6枚目、7枚目と手字の輪、部が崩れ	G1520
858	8G#3	寛永通寶	銅	1408	2.50	2.10	0.49	0.13	2.8 実用品、六道銭2枚目、3枚目と背とく	K15C8292
859	8G#3	寛永通寶	銅	1368	2.34	2.00	0.61	0.13	2.4 実用品、六道銭3枚目	K15C8292

第38表 銅製品観察表

番号 N.O.	出土地点	種類	時代	法面(cm)				所定	注記名
				最大長	最大幅	最大高	重量(g)		
859	曲A3	井	中世	9.40	1.20	0.10	6.90	先端部は削れ、上部が曲がっている	井A 2 井
860	井	8H#2	井	11.20	0.20	0.40	5.50	黒鐵品、陶器品が中空で壊れ曲がっている	井2 8H 2 中世
861	曲B3	井	近世	3.70	1.30	0.40	9.10	刀身を削り曲がっている。紹少鍔が浮き取りされている	83 地主
862	8H#1	井	近世	4.10	1.40	0.65	4.30	刀身を削り曲がっている。	F2 11番
863	8H#1	井	近世	3.00	2.85	0.40	6.70	刀身を削り曲がっている。	11.1 番
864	曲K5D1	佛金具	近世	2.05	0.95	0.40	6.70	刀身を削り曲がっている。	SC6 No.15
865	曲K5D1	佛金具	近世	2.1	0.95	0.90	6.70	刀身を削り曲がっている。	SC6 No.16
866	曲K5D1	佛金具	近世	1.7	0.95	0.90	6.70	刀身を削り曲がっている。	SC6 No.22
867	曲K5D1	佛金具	近世	2.1	0.95	1.00	6.70	刀身を削り曲がっている。	SC6 No.23
868	曲K5D1	佛金具	近世	2.0	0.95	1.00	6.70	刀身を削り曲がっている。	SC6 No.24
869	曲D1	襷	近世	3.5	0.40	6.70	6枚先端の鋸歯状製造部を削り削成してある。鍔金	F1	
870	曲D1	襷	近世	4.90	1.20	0.10	6.70	鍔金が曲がっているのが先端品	A3 II 番
871	曲D1	襷	近世	4.60	1.60	1.00	5.30	鍔金が曲がつづれらる。首部上面に磨合痕	A8 T r
872	曲D1	襷	近世	3.85	1.05	1.00	5.20	鍔金が曲がる。鍔部は丸形	L 1 番

第39表-1 鉄製品観察表

番号 N.O.	出土地点	種類	時代	法面(cm)				所定	注記名
				最大長	最大幅	最大高	重量(g)		
873	曲K5D5	刀	近世	2.80	1.25	0.50	1.40	頭部から1.1 cm以下は斜め方向の木質残存	KSC No.1
874	曲K5D5	刀	近世	1.40	1.00	1.00	0.90	刀本体は半埋めている。頭部は横方向、頭部から1.0 cm以下は斜め方向の木質残存	KSC No.2
875	曲K5D5	刀	近世	4.70	1.35	0.60	2.50	頭部は横方向、頭部から1.0 cm以下は斜め方向の木質残存	KSC No.3
876	曲K5D5	刀	近世	4.30	1.00	0.50	1.70	頭部は横方向、頭部から1.0 cm以下は斜め方向の木質残存	KSC No.4
877	曲K5D5	刀	近世	4.75	1.10	0.70	2.40	頭部は横方向、頭部から1.0 cm以下は斜め方向の木質残存	KSC No.5
878	曲K5D5	刀	近世	3.90	1.50	0.70	1.50	頭部は横方向、頭部から1.0 cm以下は斜め方向の木質残存	KSC No.6
879	曲K5D5	刀	近世	4.20	1.90	0.50	2.50	頭部は横方向、頭部から1.0 cm以下は斜め方向の木質残存	KSC No.7
880	曲K5D5	刀	近世	3.80	0.95	0.70	2.20	頭部は横方向、頭部から1.0 cm以下は斜め方向の木質残存	KSC No.12
881	曲K5D5	刀	近世	3.40	1.55	0.60	1.90	先端部欠損、頭部は横方向、頭部から1.0 cm以下は斜め方向の木質残存	KSC No.13
882	曲K5D5	刀	近世	3.30	0.80	0.40	1.10	頭部は横方向、頭部から1.0 cm以下は斜め方向の木質残存	KSC No.14
883	曲K5D5	刀	近世	2.95	0.60	0.50	0.70	頭部は横方向、頭部から1.0 cm以下は斜め方向の木質残存	KSC No.17
884	曲K5D5	刀	近世	4.40	1.00	0.60	2.30	頭部は横方向、頭部から1.2 cm以下は斜め方向の木質残存	KSC No.18
885	曲K5D5	刀	近世	5.20	1.40	0.50	3.20	2本の刃で研削している。頭部は横方向、頭部から1.0 cm以下は斜め方向の木質残存	KSC No.22
886	曲K5D5	刀	近世	3.10	1.00	0.50	2.20	先端部欠損、頭部は横方向、頭部から1.0 cm以下は斜め方向の木質残存	KSC No.27
887	曲K5D5	刀	近世	4.50	1.20	0.70	2.70	頭部は横方向、頭部から1.0 cm以下は斜め方向の木質残存	KSC No.28
888	曲K5D5	刀	近世	3.70	1.15	0.40	1.10	頭部欠損、頭部は横方向の木質残存	KSC No.西側

第 39 表 -2 鉄製品観察表

No	出土地名	種類	時代	法量(cm)			所見	注記名
				最大長	最大幅	最大厚		
889	曲 K505	刀	近世	5.10	0.95	0.60	2.30 鋸部は複方向。表面から 0.9 cm 以下は複方向の木質残存	X SC6 - 2面鋸
890	曲 K505	刀	近世	4.30	0.85	0.50	1.70 鋸部は複方向。表面から 0.9 cm 以下は複方向の木質残存	X SC6 - 2面鋸
891	曲 B3	P173 刀		3.70	0.40	0.40	1.50 斜面方形。先端鋸部は欠損	B3 P173
892	木下 日下屋	刀		4.60	0.60	0.40	2.20 先端は複方向の 1/4 の断面に先端を	木下 日下屋
893	曲 A3	1 段 刀		4.50	0.80	0.50	3.10 斜面方形の形状で刃が欠損している。鋸部の折れは複雑	A3 1段
894	曲 A3	2 段 刀		3.60	0.40	0.40	1.30 美麗が継続していい。合鍔か?	A3 2段
895	木 S31 豊 2	刀		3.20			4.00 端に切り欠きはない。頭が壊れている	木 S31 豊 2 墓土
896	曲 A3	2 段 刀		3.30	0.30	0.30	1.40 ○刀。鋸部は複方向である	A3 2段
897	等 A3a	刀		9.70	0.60	0.40	4.30 複方向。下部のやや薄くなるため刀か? 斜面方形	等 A3a T1 4段
898	SG2-2 8 段	刀		3.30	1.60	0.45	7.20 斜面方形の大刀型。頭部折れ	Q170 34
899	木 A5 2 直切	鎌		9.00	2.00	1.00	54.10 半分矢張	A3 P223
900	曲 B4	鎌		8.90	1.00	0.30	15.50 半分矢張	84 13
901	曲 D2	穿孔のある鉄片		6.30	3.65	0.85	29.60 手鏡の裏	C T2 10-1
902	曲 B3	鉄錠	中世	4.50	0.80	0.80	13.90 ドーム状錠板の中心に軸が通る。頭の表面は欠損	木 S31 豊 2 墓土
903	曲 田畠匠	鉄錠		6.30	2.05	0.45	11.60 上辺が弧状。下辺が直線で刃部を持つ	G 2
904	曲 B4	刀子		6.90	1.00	0.40	13.50 開脚し、握合舟	84 13
905	木 S31 エヌ・ヤリ	中世?		15.00	5.30	1.70 52.580 痕跡が複数ある。頭部は複数でない。直線状でなく、頭は斜めに落ちる。素長 6.3 cm。木 S31 3D-7 4 段	木 S31 エヌ・ヤリ	
906	曲 B3	鎌		3.30	2.80	0.30	9.00 錠造品。口端部内部が玉締状となる	83 13
907	木 S2 24号	板状片		5.10	5.20	0.60	28.60 錠造品	木 S2 24号
908	當原 田 P2	骨		6.05	5.50	0.40	35.10 素滑骨。斜面方形の引手か歯が残る	P 11

第 40 表 鍛冶関連遺物観察表

No	出土地名	種類	計測値(cm)			備考	分析番号	金属分析	注記名	
			長さ	幅	重量(g)					
909	島 M-SM-5C1	鉄口	3.8	3.1	11.0	内側に凹部。深さ 5mm。内側 56cm。表面に錆跡が付着している。		X SC6		
910	島 田 田 直	鉄口	2.3	4.2	18.3	内側: 流理。外側: 流理。幅: 端 2.7cm。内側 2.3cm。		I		
911	島 田 田 直	鉄口	5.5	3.9	35.0	内側: 流理。外側: 内側と同様。深さ 1.0cm。内側 2.3cm。表面に錆跡が付着している。		I		
912	島	鉄口	3.9	3.3	15.1	内側: 流理。幅: 端 2.3cm。内側 1.0cm。9.70-9.71 とは頭部が異なり、切端を多く持つ。		表面		
913	SG1 烟管 + 鐵津	12.3	7.9	35.0	重複観察である。炉端の反対側に頭を持つ。		V 錆斑遺構 1			
914	SG1 烟管	6.0	6.5	17.0	錆斑資料。		V 錆斑遺構 1			
915	SG1 烟管	6.3	6.5	99.0	錆斑: 锈跡を有する内側が黒色ガラス質化。頭部部分は褐色の船底質で、真鍮や鉛管を不規則に含んでいる。	1 脱火炎 1107°C の炉端	V 錆斑遺構 1			
916	SG1 烟管	4.2	4.8	31.0	内側: 黒色ガラス質化。		V 錆斑遺構 1			
917	SG1 鐵津 + 鐵津	6.2	10.2	38.0	強い熱影響を受けた。内側が黒色ガラス質化。上面に錆跡を持つ。		V 錆斑遺構 1			
918	島 M-SM-5C1	鐵塊・鉄塊	3.0	3.2	11.0	表面全体を黒褐色のガラス質化。輪郭部で錆跡があり、表面の錆跡が剥落しないが、全体にごく薄い。合併したところがある。	6 錆鉄塊、錆斑資料(製錬鉄块系遺物) か	X SC6		
919	島 M-SM-5C1	鐵塊・鉄塊	2.3	2.1	10.0	4.0 小型で複数個。表面全体を黒褐色のガラス質化。頭部が削り取られている。弱い。	9 錆鉄塊、錆斑資料(製錬鉄块系遺物) か	X SA2		
920	島 M-SM-5C1	鐵塊・鉄塊	1.9	1.5	1.4	小形で複数個。表面全体を黒褐色のガラス質化で覆われている。		X SA2		
921	島 M-SM-5C1	鐵塊・鉄塊	3.8	4.8	14.0	海綿状になつており、軽微である。		X SC6		
922	島 M-SM-5C1	鉄片	3.9	2.8	9.0	黄褐色の土砂で覆われている。		X SA2		
923	相原・鶴岡治	6.6	9.8	20.0	重複観察である。表面全体を黒褐色のガラス質化で覆われている。		V 錆斑遺構 1			
924	相原・鶴岡治	5.0	10.5	15.0	錆斑: 黒色で、上部に円形が複数。錆斑があり、頭部一帯が大きめ錆斑上の頭部。表面は黄褐色の土砂で覆われている。	4 砂鉄を始発料とする機械鈍治澤	V 錆斑遺構 107			
925	相原・鶴岡治	3.3	4.6	57.0	表面が黄褐色の土砂で覆われている。錆斑頭部が削り取られている。表面は頭部で錆斑頭部がある。	3 頭部: 锈斑頭部の頭部、外周部: 鋼鉄頭	V 錆斑遺構 103			
926	相原・鶴岡治	2.3	2.9	13.0	黄褐色の土砂で覆われている。表面一部が削り落してあり。表面は頭部で錆斑頭部がある。	5 頭部: 锈斑頭部(高)、錆斑: 锈斑資料(製錬鉄块系遺物) か	V 錆斑遺構 102			
927	相原・鶴岡治	4.3	6.6	74.0	頭部がよく付着するのでかなり多い。	5 錆鉄頭治澤	II 錆斑遺構 2			
928	SG1-2	鉄津	3.2	4.3	27.3	木炭の土砂で覆われている。		V 錆斑遺構 101		
929	SG1-2	鉄津	2.7	8.6	14.1	錆斑: 黒色で、錆斑頭部が複数ある。		V 錆斑遺構 1		
930	木 S2	鉄津	2.6	3.2	14.2	強烈している。木炭で覆われている。		IV C-1		
931	木 S2	相原・鶴岡治	4.3	9.4	14.0	錆斑: 黒色で複数個。頭部は一層一層の土砂で覆われている。上下とも頭部がよくみられる。		V		
932	木 S2 田 直	相原・鶴岡治	6.8	7.5	13.0	錆斑: 黒色で複数個。頭部は一層一層の土砂で覆われている。頭部は頭部で錆斑頭部がある。	10 錆鉄頭治澤	N		
933	木 S2 田 直	相原・鶴岡治	4.2	4.8	50.0	頭部に錆斑がある。	11 錆鉄頭治澤	N		

第 41 表 -1 鍛冶関連遺物観察表(未掲載分)

出土地名	種類	計測値(cm)			備考	分析番号	注記名
		長さ	幅	重量(g)			
SG1-3	炉壁			45.5			V 錆斑遺構 1
島 M-SM-5C1	鐵塊・鉄塊			10.0 表面を一部土が覆っている。2~4mm の木炭が多く付着している。木が灼いて皮膚となっている箇所がある。	X SC6		
島 M-SM-5C1	鐵塊・鉄塊			13.0 表面を一部土が覆っており、不規則な部分が多い。2~3 mm の木炭が付着している。	X SC6		
島 M-SM-5C1	鐵塊			0.02			X SC6
島 M-SM-5C1	鐵塊・鉄塊			11.0 8.0 土に覆われている。	X SC6		
島 M-SM-5C1	鐵塊・鉄塊			11.0 10.0 土に覆われている。黒化物が付着しているものや、黒化物が落ちて空洞となっているものが多い。	X SC6		
島 M-SM-5C1	鐵塊			0.5 発熱しており、一部がガラス質となる。軽量。	X SC6		
島 M-SM-5C1	鐵塊・鉄塊			4.0 発熱しており、軽石状である。片面は土砂で覆われている。	X SA2		
島 M-SM-5C1	鐵塊			5.0			X SA2
島 M-SM-5C1	鐵塊・鉄塊			5.5 3.0.			X SA2
島 M-SM-5C1	鐵塊			3.9			X SA2
島 M-SM-5C1	鐵塊			0.3 ガラス質。			X SA2
島 M-SM-5C1	鐵塊・鉄塊			0.08			X SA2
SG2-2	鐵塊・鉄塊			1.0			IX 錆斑遺構 2

第41表-2 鍛冶関連遺物観察表(未掲載分)

出土地点	種類	計測値(cm)		備考	注記名
		長さ	幅		
田L	鉄洋鋸片		1.0		IX
501-1	鉄洋鋸片		1.8		VI直頭直横2
501-2	鉄洋鋸片		4.2		VI
501-3	鉄洋		4.1		V 直頭直横1
501-4	鉄洋鋸片		3.4		V 直頭直横2
501-5	鉄洋鋸片		3.1		VSE1
501-6	鉄洋		0.6		直頭直横
501-7	鉄洋		13.7 小石・木炭が付着している。		ISCI
501-8	鉄洋				IV SD1
501-9	鉄洋鋸片				II 直頭直横1
501-10	鉄洋				II 直頭直横2

第42表 樹種分類表

分類	樹種	分類	樹種
a イヌキ科イヌキ属イヌキ	スイカズラ科ガマズミ属	q ブナ科コナラ属コナラ属	クサヒメノキ属
b イヌ科タケ属	スイカズラ属スギ	r ブナ科コナラ属コナラ属クサヒメ	クサヒメノキ属
c カシキ科キヤノキ属	k ブンシキスノキシャンボ	s ブナ科シイ属	クサヒメノキ属
d カラツ科カラツ属カラツ	l ブナ科ツバキ属	t マツ科マツ属 [二葉松類]	クサヒメノキ属
e クスノキ科クスノキ属	m ブナ科サクヤク属サクヤ	u マメ科イヌエンジ属イヌエンジ	クサヒメノキ属
f クスノキ科クスノキ属クスノキ	n ブナ科シカク属	v キラグラソウ属マジリョウ属タミミダチ	クサヒメノキ属
g グミ科グミ属	o ブナ科モッコク属モッコク	w サマザクラ or カバ	クサヒメノキ属
h コウヤマキ科コウヤマキ属コウヤマキ	p ブナ科クリ属クリ	x サマモモ科ヤマモモ属	クサヒメノキ属

第43表 木製品(生活用品)観察表

番号	出土地点	種類	部位	種類	法規(km)			備考	注記名
					口幅	厚さ	寸法		
934	水道 田川	漆器箱	口→底	d	(12.2)	(8.1)	1.0 直板	内面に漆、裏面 5.5cm	田川上・中層
935	水道 田川	漆器箱	口→底	d	(14.0)	(3.95)	1.1 直板	外表面に漆、底面に火吹、裏面 5.5cm	田川上・中層
936	水道 田川	漆器箱	口	f	(15.6)		0.4 板目	内面に漆、赤漆で火刷	田川上・中層
937	水道 1～3区	漆器箱	口	f			0.3 直板	外表面に漆、内面赤漆、外表面に赤漆の文様	1～3区中層
938	水道 1～2区	漆器箱	底	u		(8.0)	0.5 直板	裏面内赤、外表面に漆	1～2区
939	水道 1～2区・中層	漆器箱	蓋	j	24.6	5.3	1.6 組目	939と組合せ、外側に漆、側面に木町(イヌタケ属)残存	田川上・中層
940	水道 2～3区	漆器箱	蓋	j	15.4	4.2	1.4 組目	939と組合せ、外側に漆、側面に木町(タケ属)残存	田川上・中層
941	水道 2～3区	漆器箱	蓋	j	10.1	5.9	1.4 板目	939・942と組合せ、外側に漆、側面に結合部(タケ属)か	田川上・中層
942	水道 2～3区	漆器箱	蓋	j	22.5	5.5	1.5 直板	941・943と組合せ、外側に漆、側面に結合部(タケ属)か	田川上・中層
943	水道 2～3区	漆器箱	蓋	j	33.2	5.5	1.5 遊遊目	941・943と組合せ、外側に漆、側面に漆、側面に結合部(タケ属)か	田川上・中層
944	水道 2～3区	漆器箱	蓋	j	31.1	5.5	1.5 直板	943・945と組合せ、外側に漆、側面に漆、木町(イヌタケ属)残存	田川上・中層
945	水道 2～3区	漆器箱	蓋	j	24.5	5.5	1.65 板目	944と組合せ、外側に漆、側面に漆、側面に結合部	田川上・中層
946	水道 3相生土上	漆器	底板	h	19	7.3	0.65 組目	外表面に漆、内面に漆	相生上・中層
947	水道 3相生土上	漆器	底板	h	20.8	5.5	0.5 直板	外表面に漆、内面に漆、内面に漆	相生上・中層
948	水道 1～3区	漆器	把手	h	(18.9)		1.8 直板	丸太基部生存	水道1～3区中層
949	水道 1～3区	漆器	底板	h	23.2	3.95	0.75 組目	2階建、底面に漆	水道1～3区中層
950	水道 1～3区	漆器	内切、底板	h	23.75	4.8	0.7 組目	2階建、内面に漆	水道1～3区中層
951	水道 1～3区	漆器	内切、底板	h	26.9	6.4	0.85 組目	3階建、底面に漆	水道1～3区中層
952	水道 1～3区	漆器	底板か	h	10.5	1.4	0.55 直板	2階に漆	水道1～3区中層
953	水道 2～3区	漆器	内切	h	12.1	(10.0)	0.8 遊遊目	3階に漆	水道1～3区中層
954	水道 1～3区	漆器	底板	h	11.15	11.45	0.9 遊遊目	無地に三重巻の木彫	1～3区上層
955	水道 1～3区	漆器	底板	h	13.4	12.3	0.9 組目		1～3区上層
956	水道 1～3区	漆器	底板	h	11.9	2.9	0.5 直板	無地に三重巻の木彫	1～3区上層
957	水道 1～3区	漆器	底板	h	10.75	(5.0)	0.95 直板		1～3区中層
958	水道 1～3区	漆器	内切		(31.9)	(3.9)	0.2 板目		1～3区中層
959	水道 1～3区	漆器	内切	h	(12.8)	0.75	0.75 板目	丸太基部生存	水道1～3区中層
960	水道 1～3区	漆器	内切	h	(9.7)	(2.8)	0.3 板目	内面に漆	水道1～3区中層
961	水道 1～3区	漆器	内切	h	(10.5)	(3.6)	0.25 板目	内面に漆	水道1～3区中層
962	水道 1～3区	漆器	内切	h	(9.2)	(2.4)	0.3 板目	内面に漆	水道1～3区中層
963	水道 1～3区	漆器	内切	h	(21.4)	(1.9)	0.3 板目	内面に漆	一部削り、基部丸が2箇所
964	水道 1～3区	漆器	内切	h	(19.6)	(1.8)	0.3 板目	内面に漆	水道1～3区中層
965	水道 1～3区	漆器	内切	h	(12.0)	(4.5)	0.2 板目	内面に漆	水道1～3区中層
966	水道 1～3区	漆器	内切	h	(16.6)	(2.7)	0.3 板目	内面に漆	水道1～3区中層
967	水道 1～3区	漆器	内切	h	(12.5)	(5.7)	0.3 板目		水道1～3区中層
968	水道 1～3区	漆器	内切	h	(13.6)	(1.7)	0.2 組目		水道1～3区上層
969	水道 1～3区	漆器	内切	h	(4.2)	(4.55)	0.25 組目	内面に漆	水道1～3区上層
970	水道 1～3区	漆器	内切	h	(3.2)	(2.8)	0.2 組目		水道1～3区中層
971	水道 1～3区	漆器	内切	h	(12.9)	(1.95)	0.15 組目	内面に漆	水道1～3区下層
972	水道 1～3区	漆器	内切	h	(8.0)	(1.9)	0.1 組目	内面に漆	水道1～3区下層
973	水道 1～3区	漆器	内切	h	(21.0)	(2.2)	0.4 組目	黄色物付	水道1～3区下層
974	水道 1～3区	柄杓	柄	h	69.9	2.2	2.0 板目	先端から11.3cm部分に丸あり	水道1～3区中層
975	水道 1～3区	柄杓	柄	h	45.6	(1.6)	1.1 直板	先端に棒を打ち丸があり、先端が一部欠損のため、身の左基部は不明	水道1～3区中層
976	水道 1～3区	漆器	漆木	j	(14.9)	(4.2)	0.7 組目	輪孔は2×10mmの楕円形	水道1～3区中層
977	水道 1～3区	漆器	漆木	j	(13.0)	(1.5)	1.2 直板	中央に3.3×6cmの楕円形の孔あり	水道1～3区中層
978	水道 1～3区	漆器	漆木	w	(12.1)	(1.4)	0.2 組目	織用の漆木材	水道1～3区下層
979	水道 1～3区	漆器	漆木	g	(5.3)	(5.6)	1.6 直板	漆材若き	水道1～3区下層
980	水道 1～3区	漆器	漆木	t	(5.0)	(2.35)	2.45 直板	漆全体加工	水道1～3区下層
981	水道 1～3区	漆器	漆木	t	(17.2)	(4.5)	1.4 直板	角を削り去り、再加工の痕跡あり	水道1～3区下層
982	水道 1～3区	漆器	漆木		(12.8)	(1.7)	0.1 組目		水道1～3区中層

第44表 木製品(木杭・柱材等)観察表

規格	出土地点	机#	器種	柄種	法差 (cm)		分類	先端の加工	所見
					長大	最大径			
983 水 庫SF1		鉛付	f	54.9	54.8		1/4切欠き		
984 水 庫 口面 上-中幅		樹脂?	t	185.1	12.3 A1	丸孔	根縫	上半部削り下部平手	
985 水 庫 口面 上-中幅		木機	h	90.2	6.2 A1	2方向	根縫	半斜面削り	
986 水 庫		E機	A-4	机	g	61.1	2.9 A2	3方向	18mm
987 水 庫		S/S-N-E 木機	l	76.7	4.2 C		方頭かんの字形		
988 水 庫		S/S-N-E 木機	o	88.5	3.6 C		方頭かんの字形	背側に細い溝としれた跡あり	
989 水 庫		S/S-N-E 木機	q	69.5	3.0 C		方頭かんの字形		
990 水 庫		S/S-N-E 木機	v	22.0	3.2 A1	丸孔	18mm		
991 水 庫		鋼機	l	154.5	6.3 A2	18mm	18mm	ツサの跡有る	
992 水 庫		鋼機	o	102.7	4.5 B	7B	7B		
993 水 庫		鋼機	a	241.5	13.5		丸頭かんの字形	18mm	
994 水 庫(北側)	1	机		17.7	2.8 A2	18mm	28		
995 水 庫(北側)	93	机		22.4	2.9 A2	18mm	18mm	上端削り 塗合平均	
996 水 庫(北側)	2	机		28.1	3.4 A1	21mm	18mm	背側に削りした跡あり	
997 水 庫(北側)	84	机		26.5	4.0 A2	18mm	18mm		
998 水 庫(北側)	85	机		89.1	4.2 C	7B	7B	背側により根縫が判明	
999 水 庫(北側)	86	机		40.9	4.0 A1	8mm	18mm		
1000 水 庫(北側)	87	机		49.8	4.2 A1	18mm	18mm		
1001 水 庫(北側)	88	机		46.6	3.6 A2	17mm	28		
1002 水 庫(北側)	89	机		17.6	3.0 C	丸頭かんの字形			
1003 水 庫(北側)	91	机		35.7	5.3 A1	3.0B	18mm		
1004 水 庫(北側)	90	机		56.8	4.2 A1	8mm	18mm		
1005 水 庫(北側)	115	机		23.6	3.6 A2	18mm	18mm		
1006 水 庫(北側)	125	机		23.7	4.7 A2	18mm	48		
1007 水 庫(北側)	117	机		42.4	5.0 A2	17mm	28		
1008 水 庫(北側)	114	机		33.7	3.9 A2	7mm	18mm		
1009 水 庫(北側)	112	机		22.2	3.8 A2	4.5mm	4.5mm		
1010 水 庫(北側)	119	机		35.3	4.3 A1	8mm	18mm	上端削り	
1011 水 庫(北側)	120	机	t	59.3	3.1 A2	18mm	18mm		
1012 水 庫(北側)	118-①	机	g	34.0	5.3 A2	18mm	18mm		
1013 水 庫(北側)	118-2	机	g	49.6	5.0 A2	18mm	18mm	先端削り	
1014 水 庫(北側)	4	机		20.3	4.3 A1	8mm	48		
1015 水 庫(北側)	5	机		41.7	5.5 A1	8mm	8mm		
1016 水 庫(北側)	8	机	q	46.8	11.7 A1	8mm	8mm		
1017 水 庫(北側)	13	机		33.0	6.3 A1	8mm	8mm		
1018 水 庫(北側)	9	机	v	39.1	6.7 A1	8mm	48		
1019 水 庫(北側)	12	机		22.4	4.7 A1	17mm	28	先端削り	
1020 水 庫(北側)	15	机	p	52.2	6.5 A2	17mm	28		
1021 水 庫(北側)	16	机		28.4	4.7 A1	8mm	18mm		
1022 水 庫(北側)	18	机		42.6	4.4 A1	4mm	48		
1023 水 庫(北側)	19	机		38.6	5.3 A1	5.7mm	8mm		
1024 水 庫(北側)	20	机		21.2	5.2 A1	8mm	8mm		
1025 水 庫(北側)	21-①	机	s	24.2	9.1 A1	8mm	8mm		
1026 水 庫(北側)	21-②	机	o	20.0	5.3 A1	8mm	8mm		
1027 水 庫(北側)	22	机		49.3	7.0 A1	8mm	8mm		
1028 水 庫(北側)	23	机		29.5	5.3 A1	8mm	8mm		
1029 水 庫(北側)	25	机		37.5	5.3 A1	8mm	8mm		
1030 水 庫(北側)	24	机	p	36.6	5.6 A2	18mm	18mm		
1031 水 庫(北側)	26	机		36.6	5.8 A1	8mm	8mm		
1032 水 庫(北側)	27	机		23.4	7.5 A1	8mm	18mm		
1033 水 庫(北側)	29	机	x	40.3	6.4 A1	8mm	8mm		
1034 水 庫(北側)	30	机	l	56.7	7.6 A1	8mm	8mm		
1035 水 庫(北側)	31	机	60.2	3.4 A1	2mm	48			
1036 水 庫(北側)	32	机	m	53.8	7.5 A1	8mm	8mm		
1037 水 庫(北側)	33	机	l	51.6	4.7 A1	8mm	8mm		

第45表-1 木杭観察表(未掲載分)

出土地点	机#	器種	柄種	法差 (cm)		分類	先端の加工	所見
				長大	最大径			
水 S/S2 北側	3	机		33.1	4.0 C	方頭かんの字形		
水 S/S3 北側	6	机	9/4	3.0 C	方頭かんの字形			
水 S/S3 北側	7	机	10.4	5.4 C	方頭かんの字形			
水 S/S3 北側	10	机	11.6	3.4 A2	1.5mm	4mm		
水 S/S3 北側	11	机		13.8	3.1 A1	1.5mm	3mm	
水 S/S3 北側	14-①	机	13.5	4.0 C	方頭かんの字形			
水 S/S3 北側	14-②	机	8.9	2.7 C	方頭かんの字形			
水 S/S3 北側	17	机	82.4	5.9 A1	2mm	5mm	先端削り	
水 S/S3 北側	28	机		29.7	5.5 C	方頭かんの字形		
水 S/S3 北側	39	机		11.7	2.7 C	方頭かんの字形		
水 S/S3 北側	47	机				計測不可		
水 S/S3 北側	50	机				計測不可		
水 S/S3 北側	52	机				計測不可		
水 S/S3 北側	54	机		13.3	3.0 A2	1.5mm	2mm	
水 S/S3 北側	55	机		12.5	2.7 A2	1.5mm	1mm	

出土地点	机#	器種	柄種	法差 (cm)		分類	先端の加工	所見
				長大	最大径			
水 S/S3 北側	57	机		7.6	3.2 A1	1.5mm	2mm	
水 S/S3 北側	62	机		8.2	1.8 C	方頭かんの字形		
水 S/S3 北側	74	机				計測不可		
水 S/S3 北側	75	机		6.7	3.3 C	方頭かんの字形		
水 S/S3 北側	76	机		23.0	4.3 A1	1.5mm	1mm	
水 S/S3 北側	77	机		12.7	5.6 C	方頭かんの字形		
水 S/S3 北側	78	机		28.8	5.1 B	2mm	2mm	
水 S/S3 南側	97	机				計測不可		
水 S/S3 南側	100	机		10.1	2.8 B	1mm	1mm	
水 S/S3 南側	101	机				計測不可		
水 S/S3 南側	102	机				計測不可		
水 S/S3 南側	104	机		12.0	4.0 C	方頭かんの字形		
水 S/S3 南側	105	机				計測不可		
水 S/S3 南側	111	机				計測不可		
水 S/S3 北側	113	机		16.5	3.3 C	方頭かんの字形		

第45表-2 木杭観察表(未掲載分)

出土地点	初名	番種	根脚	分類	先端の加工	所見	正量(cm)	出土地点	初名	番種	根脚	分類	先端の加工	所見	
							最大径								
木552(北側)	116	杭				削頭不可		木552(北側)	121	杭				削頭不可	
木552(北側)	121	杭				削頭不可		木552(北側)	122	杭				削頭不可	
木552(北側)	124	杭	628	4.2 A1	9.5φ、4面			木552(北側)	52-N3	杭	A2		削頭A.77.0		
木552(北側)	52-N3	杭		A1				木552(北側)	52-N5	杭	A1				
木552(北側)	268	7.2 A2	1.5φ、2面					木552(北側)	268	7.2 A2	1.5φ、2面				
木552(北側)	297	3.9 A2	1.5φ、4面					木552(北側)	297	4.8 C	4.5φ、4面				
木552(北側)	359	4.5 B2	2.0φ、2面					木552(北側)	359	4.5 B2	1.5φ、1面				
木552(北側)	200	5.2 A1	1.5φ、1面					木552(北側)	138	4.5 A2	1.5φ、1面				
木552(北側)	173	5.2 A1	1.5φ、4面					木552(北側)	101	3.2 A2	2.0φ、3面				
木552(北側)	61	3.8 A1	9.5φ、5面					木552(北側)	61	3.8 A1	9.5φ、5面				
木552(北側)	100	2.3 A1	1.5φ、3面					木552(北側)	100	2.3 A1	1.5φ、3面				
木552(北側)	140	2.5 A2	1.5φ、1面					木552(北側)	65	3.5 A1	1.5φ、3面				
木552(北側)	78	2.5 A1	1.5φ、3面					木552(北側)	151	4.7 A1	2.0φ、多面				
木552(北側)	82	4.0 A2	1.5φ、1面					木552(北側)	82	4.0 A2	1.5φ、1面				

第46表 石器観察表

河原	出土地点	番種	法量(cm)	高さ(cm)	幅さ(cm)	石材	観察所見	注記名
1093	曲H1	ナイの石磨	2.2	1.8	0.5	2.8テリ	細長い片状材、表面はともに二次加工、幅1.5cm程の基部が丸み出される。先端を大きく欠損。	Q2
1094	西谷	楔形石器	2.3	1.5	0.4	2.6テリチャット	長方形、上端に鋸り加減。	AB
1095	F	台形石器	1.7	1.0	0.4	0.7テリ	他の不規則な形を複数に用いる。刃部の断面は複数。	DII
1096	H3	剥片尖頭器	6.4	3.2	1.0	13.0ルンゴフニス	基部の剥片化した部分で斜線。右側の錐状先端部は、使用に伴うと尖る折れ、錐形剥離。先端・基部欠損。	WII
1097	SG2	下端	7.9	3.8	1.4	52.0ルンゴフニス	片状の片状材、剥片化部に垂直面より二段式。左側に欠損部。	Q19.4C
1098	曲A3	矛頭	5.0	2.5	1.0	8.0(麻布ルンゴフニス)	片状の片状材、剥片化部に垂直面より二段式。左側に欠損部。	AJ.10.9
1099	SG2	埋土	6.6	4.6	2.0	33.9ルンゴフニス	片状の片状材、剥片化部に垂直面より二段式。左側に欠損部。	Q19.11.10
1100	曲H1	石磨	2.5	2.0	0.3	2.3テリ	不定形の片切・削磨。倒伏によって二ツピックに形成。錐形剥離レンズ形。	Q2
1101	SG2	埋土	2.4	1.7	0.4	1.7テリ	四角。辺縁の細かい調整。先端欠損。	Q19.10.9
1102	SG2	埋土	2.1	1.3	0.3	0.5テリ	先端は鋭利でなく、左半分が大きくなり。比較的細めの調整。刃部は再錐形。	P19.10.8
1103	曲M	打製石器	1.0	1.3	0.3	0.4テリ	(重)・切刃。非常に細かな調整。先端・両側欠損。	P II
1104	曲M	打製石器	1.7	1.7	0.3	0.6テリ	(重)・切刃。細かな調整。先端・両側欠損。	P II
1105	曲M	打製石器	1.3	1.3	0.3	0.4テリ	(重)・切刃。細かな調整。先端は鋭利で無し。使用時か。	P II
1106	曲J	打製石器	1.6	1.8	0.4	1.7テリ	非対称・相・調整。打製石器の本物の特徴。石刀のつま目部等の特徴性等あり。	N II
1107	曲M	打製石器	1.5	1.2	0.2	0.29テリ	長いV字型片状材。縦のV字型簡単な調整で仕上げる。両端を手で尖らす。	Q II
1108	F	打製石器製品	2.2	2.0	0.6	22.9テリ	先端は先端なく、基部も最も十合でないで、打製石器の本物品と見られる。分裂型。	D II
1109	曲K	打製石器	1.7	1.5	0.3	0.8テリ	くつくらんや。細かな調整。非常に細かな調整。先端・両側欠損。	K17.7
1110	曲H2	打製石器製品	2.6	2.5	0.5	31.7テリ	基部が先端で底面へは先端が底面へ直し。その段階で底面が大きくなる。GII.1	Q.10.9E
1111	SG2	剥片	1.6	1.3	0.4	0.7テリ	大ざっぱの錐形の先端の突起。次第に細くなる。	P II
1112	曲H1	打製石器	1.9	1.8	0.3	1.9ルンゴフニス	本來は石基には基盤に沿って向かって等辺三角形に似せる剥片の打製石器であったと見られる。先端欠損。	G II
1113	曲F	打製石器	2.4	1.5	0.5	1.9テリ	打製石器の底面。周囲の細かい鋸り。底面の一部に刃部も残す。	Q II
1114	曲J	打製石器	11.5	7.3	1.5	11.9ルンゴフニス	裏面は手が触れる。底面は鋸りで製作された石器の底面と思われる。	N.17.7.9
1115	SG1-2	打製石器	9.7	4.6	2.1	27.9ルンゴフニス	裏面は平行に4なぞる縦溝より横溝・底面のV字型。縦溝は少しつかた割離形成をする。	FII.17.5
1116	曲K	万葉鶴形石器	14.8	5.1	2.8	27.7ルンゴフニス	裏面より底面の、底面の部を削除した浅いV字型をもつて構成。万葉鶴形は底面と見られる。万葉鶴形は底面と見られる。方葉は厚壁する。	K17.7
1117	曲H1	二次加工剝片	11.9	8.0	2.8	28.0ルンゴフニス	剥片の末梢部の1辺から2辺にかけて二次加工。二次加工部は細いV字型となる。裏面は底面とする。	G II
1118	SG3	二次加工剝片	16.0	10.2	3.9	69.0ルンゴフニス	裏面や手の握る位置のV字型。二次加工。裏面は底面に平行して刃部を削離せり。さらには細かな二次加工がする事。	V.17.5
1119	曲F	二次加工剝片	16.4	10.0	2.0	67.0ルンゴフニス	穀粒のV字型の底面のV字型。二次加工。裏面は底面に平行して刃部を削離せり。底面は刃部で削離せり。底面は底面とする。	T II
1120	SG2	下端	7.0	4.7	2.1	75.0ルンゴフニス	剥片剥離の底面。底面は底面とV字型。裏面に底面が残る。	Q19.4E
1121	SG2	下端	4.3	3.6	3.1	42.1ルンゴフニス	剥片剥離の底面。底面は底面とV字型。裏面に底面が残る。	Q19.4.15.5
1122	曲H3	P22.切跡群	3.4	3.5	0.8	18.2ルンゴフニス	緩平底の平面。切跡の群。	P II
1123	SG1-3	微細剥離剝片	7.9	3.8	0.8	27.9ルンゴフニス	渦巻いた矩形剥片の右側縁は逸脱して離れており、剝片は斜面剥離の面により打面調整なく、作業面調整の後剝離される。	H I
1124	SG2	微細剥離剝片	8.0	3.7	1.4	46.0ルンゴフニス	緩平底の平面の奥側に微細剥離が見れる。緩平底剝片は剥離剝離により打面剥離なく、作業面調整の後に剝離される。	O. m.2
1125	曲H3	微細剥離剝片	5.3	2.1	0.9	9.5ルンゴフニス	剝片の奥側の底面にV字型。二次加工。裏面は底面に平行して刃部を削離せり。	I - E
1126	SG1-3	側面剥離	5.9	1.5	0.5	5.1ルンゴフニス	剝片の底面。底面は底面とV字型。裏面に底面が残る。	H I m.15.5
1127	曲F	剥石	8.9	7.0	3.5	32.1ルンゴフニス	鶴形の上端の、石刀上端。下端に刃部があり、下端には刃部がある。	K. SC4
1128	SG3	剥石	10.0	7.7	4.9	54.0ルンゴフニス	鶴形の上端の、石刀上端。下端に刃部があり、下端には刃部がある。	V. 17.5
1129	曲F	剥石	9.0	7.9	5.3	53.0ルンゴフニス	裏面にアフタの歯打痕あり。	B II
1130	曲S1	剥石	10.7	8.85	47.60	59ルンゴフニス	鶴形の正面にアフタの歯打痕あり。右側にも一部歯打痕あり。	B II. SII
1131	曲A3	剥石	10.0	8.05	4.8	54.0ルンゴフニス	鶴形の正面にアフタの歯打痕あり。左側には一部歯打痕がある。	O.IA2. SII
1132	SG3	剥石	9.2	7.2	3.7	37.0ルンゴフニス	全体に基準のV字型のもの付ける。	V.17.5
1133	曲F	剥石	8.8	8.5	3.3	38.4ルンゴフニス	剥石の裏面にV字型。裏面にアフタの歯打痕あり。	O. m.15.5
1134	曲A3	剥石	9	8.7	3.7	45.0ルンゴフニス	円錐の正面にアフタの歯打痕あり。右側が底面欠損する。	O.IA2. SII
1135	曲F	剥石	11.5510.45	5.1	94.0ルンゴフニス	裏面にアフタの歯打痕あり。	Q.17.5.14.4	
1136	曲F	剥石	12.7	11.0	4.3	95.0ルンゴフニス	底面が底面とV字型。裏面にアフタの歯打痕あり。	Q.17.5.14.4
1137	台石	17.9	14.6	6.1228.0ルンゴフニス	底面が底面とV字型。裏面にアフタの歯打痕あり。	A3 -		
1138	曲B4	3層	14.85	6.25	4.68.26ルンゴフニス	約1/2が残り、やらう鶴形の正面にアフタの歯打痕が広がる。	SA. 6	

第47表-1 石製品観察表

番号	出土地点	種類	石材	分類	最大底面幅	底面長	厚度	重量	所見	注記名
					(mm)	(mm)	(mm)	(kg)		
1139	曲B1 2層	石碑	滑石	21.4	1.2				断面端あり。定規幅の上に1cmほどの重みが添え。	H12 級
1140	曲B2 2層	石碑	滑石	3.8	7.1	1.2			断面端あり。定規下に1cmの重み。	C1179
1141	曲A2 3層	石碑	滑石	15.6		1.1			断面端あり。H11H10のよう夜坂跡がない。	A23 級
1142	SG1-3 石碑	板石	白石	9.3	2.9	2.5	51.5		断面端なし。複数の直角面16cm有り。横幅は約1.5倍である。横幅により倒れても、傾斜面側倒れてく可能性。	G217017
1143	SG1-2 表土	砂岩	白	12.7	7.8	1.6	50.5		断面端あり。横幅約16cm程度。上縁は直角で、下縁は2.0~2.5cmの傾斜。傾斜面下に1cmの重み。内側に断面に沿う凹凸が複数ある。	F171
1144	SG2-2 墓土	砂岩	白	10.0	7.0	10.3	92.0		断面端あり。直角面と傾斜面とある。直角面1cm厚。S字形の傾斜面。傾斜面下に1cmの重み。傾斜面側倒れてく可能性。	Q2111
1145	SG2-2 墓土	砂岩	白	11.0	8.9	13.9	167.2		断面端あり。直角面と傾斜面とある。直角面1cm厚。S字形の傾斜面。傾斜面下に1cmの重み。傾斜面側倒れてく可能性。	Q2111
1146	SG2-2 墓土	砂岩	白	8.9	9.2	5.2	58.9		断面端あり。直角面と傾斜面とある。直角面1cm厚。S字形の傾斜面。傾斜面下に1cmの重み。傾斜面側倒れてく可能性。	Q2111
1147	SG2-2 墓土	砂岩	白	20.2	18.9	12.0	283.6		断面端あり。直角面と傾斜面とある。直角面1cm厚。S字形の傾斜面。傾斜面下に1cmの重み。傾斜面側倒れてく可能性。	Q21102110
1148	SG1-2 墓土	砂岩	白	14.3	5.8	10.3	52.8		断面端あり。直角面と傾斜面とある。直角面1cm厚。S字形の傾斜面。傾斜面下に1cmの重み。傾斜面側倒れてく可能性。	Q21102110
1149	SG2-2 道成川	砂岩	白	13.6	4.9	3.0	25.7		断面端あり。直角面と傾斜面とある。直角面1cm厚。S字形の傾斜面。傾斜面下に1cmの重み。傾斜面側倒れてく可能性。	F272014
1150	曲E2 2層	石碑	砂岩	28.9	30.1	11.1	125.0		断面端あり。傾斜面と直角面とある。直角面1cm厚。直角面下に1cmの重み。直角面側倒れてく可能性。	F272014
1151	箱A3 C層	砂岩	白	28.3	27.3	12	6000		断面端あり。直角面と傾斜面とある。直角面1cm厚。直角面下に1cmの重み。直角面側倒れてく可能性。	F272014
1152	箱A3	砂岩	白	16.3	13.8	5.7	126.2		断面端あり。直角面と傾斜面とある。直角面1cm厚。直角面下に1cmの重み。直角面側倒れてく可能性。	A174
1153	SG1-3 土塗	砂岩	白	16.7	12.4	8.0	124.6		断面端あり。直角面と傾斜面とある。直角面1cm厚。直角面下に1cmの重み。直角面側倒れてく可能性。	G2170
1154	西	砂岩	白	27.5	13.5	11.3	300.0		断面端あり。直角面と傾斜面とある。直角面1cm厚。直角面下に1cmの重み。直角面側倒れてく可能性。	-
1155	SG2-2 墓土	砂岩	白	10.0	13.3	7.4	99.3		断面端あり。直角面と傾斜面とある。直角面1cm厚。直角面下に1cmの重み。直角面側倒れてく可能性。	Q21119
1156	SG1-2 道成川	砂岩	白	17.0	10.0	7.9	117.5		断面端あり。直角面と傾斜面とある。直角面1cm厚。直角面下に1cmの重み。直角面側倒れてく可能性。	F1714
1157	SG1-3 石碑	砂岩	白	14.4	10.4	10.8	148.0		断面端あり。直角面と傾斜面とある。直角面1cm厚。直角面下に1cmの重み。直角面側倒れてく可能性。	G217017
1158	SG2-2 墓土	砂岩	白	16.7	10.6	16.6	199.8		断面端あり。直角面と傾斜面とある。直角面1cm厚。直角面下に1cmの重み。直角面側倒れてく可能性。	Q21103
1159	西UF1 砂岩	白	18.1	9.3	13.5	265.0		断面端あり。直角面と傾斜面とある。直角面1cm厚。直角面下に1cmの重み。直角面側倒れてく可能性。	Q21103	
1160	SG1-3 石碑	砂岩	白	11.8	7.6	8.9	65.3		直角面の直角面と傾斜面とある。直角面1cm厚。直角面下に1cmの重み。直角面側倒れてく可能性。	G217016
1161	SG2-2 墓土	砂岩	白	14.5	9.9	9.6	126.2		直角面の直角面と傾斜面とある。直角面1cm厚。直角面下に1cmの重み。直角面側倒れてく可能性。	Q2110
1162	SG1-3 土塗	砂岩	白	18.7	16.0	7.5	225.1		直角面の直角面と傾斜面とある。直角面1cm厚。直角面下に1cmの重み。直角面側倒れてく可能性。	G2170
1163	SG2-2 墓土	砂岩	白	15.2	11.9	9.7	146.6		直角面の直角面と傾斜面とある。直角面1cm厚。直角面下に1cmの重み。直角面側倒れてく可能性。	Q21104
1164	SG1-3 石碑	砂岩	白	13.2	11.4	5.2	64.9		直角面の直角面と傾斜面とある。直角面1cm厚。直角面下に1cmの重み。直角面側倒れてく可能性。	G217016
1165	SG1-3 石碑	砂岩	白	9.9	10.4	4.4	52.5		直角面の直角面と傾斜面とある。直角面1cm厚。直角面下に1cmの重み。直角面側倒れてく可能性。	G217016
1166	SG1-3 土塗	砂岩	白	7.3	6.6	4.2	21.8		直角面の直角面と傾斜面とある。直角面1cm厚。直角面下に1cmの重み。直角面側倒れてく可能性。	G2170
1167	SG3	石碑	白	21.6	12.7	6.2	167.6		直角面の直角面と傾斜面とある。直角面1cm厚。直角面下に1cmの重み。直角面側倒れてく可能性。	V15
1168	SG2-2 下層	砂岩	滑石	7.4	4.4	2.0	37.2		直角面の直角面と傾斜面とある。直角面1cm厚。直角面下に1cmの重み。直角面側倒れてく可能性。	Q21221
1169	水	砂岩	白	23.6	18.2	17.5	7800		直角面の直角面と傾斜面とある。直角面1cm厚。直角面下に1cmの重み。直角面側倒れてく可能性。	S2.7.1.F1.0.0.0
1170	曲J	砂岩	墓伏石	22.2	7.0	5.1	143.4		直角面の直角面と傾斜面とある。直角面1cm厚。直角面下に1cmの重み。直角面側倒れてく可能性。	L1
1171	SG1-3 石碑	砂岩	白	21.7	8.3	14.7	242.4		直角面の直角面と傾斜面とある。直角面1cm厚。直角面下に1cmの重み。直角面側倒れてく可能性。	G217017
1172	SG1-3 石碑	砂岩	白	11.1	4.8	2.1	252.2		直角面の直角面と傾斜面とある。直角面1cm厚。直角面下に1cmの重み。直角面側倒れてく可能性。	G217017
1173	曲B3	砂岩	シルト岩	17.3	5.9	5.7	754.3		直角面の直角面と傾斜面とある。直角面1cm厚。直角面下に1cmの重み。直角面側倒れてく可能性。	S2.9.6.3
1174	曲H1	砂岩	シルト岩	9.4	2.4	1.4	54.5		直角面の直角面と傾斜面とある。直角面1cm厚。直角面下に1cmの重み。直角面側倒れてく可能性。	G2.4.5
1175	曲P33	砂岩	砂岩	7.2	2.6	1.7	54.2		直角面の直角面と傾斜面とある。直角面1cm厚。直角面下に1cmの重み。直角面側倒れてく可能性。	L.P33
1176	箱A3	砂岩	砂岩	7	3.1	1.3	54.5		直角面の直角面と傾斜面とある。直角面1cm厚。直角面下に1cmの重み。直角面側倒れてく可能性。	H17
1177	曲K	砂岩	シルト岩	8.9	2.7	1.1	37.9		直角面の直角面と傾斜面とある。直角面1cm厚。直角面下に1cmの重み。直角面側倒れてく可能性。	K17
1178	曲A 2層	砂岩	シルト岩	6.5	2	0.7	16.4		直角面の直角面と傾斜面とある。直角面1cm厚。直角面下に1cmの重み。直角面側倒れてく可能性。	A14
1179	曲	砂岩	砂岩	15.6	4.3	1.6	216.8		直角面の直角面と傾斜面とある。直角面1cm厚。直角面下に1cmの重み。直角面側倒れてく可能性。	H17
1180	SG1-2 15層	砂岩	シルト岩	11.6	3.4	0.8	65.4		直角面の直角面と傾斜面とある。直角面1cm厚。直角面下に1cmの重み。直角面側倒れてく可能性。	Q21102110
1181	曲M SA2	砂岩	砂岩	12.0	5.5	3.5	42.7		直角面の直角面と傾斜面とある。直角面1cm厚。直角面下に1cmの重み。直角面側倒れてく可能性。	P521
1182	水 切壁1	砂岩	砂岩	4.5	3.8	1.25	32.7		直角面の直角面と傾斜面とある。直角面1cm厚。直角面下に1cmの重み。直角面側倒れてく可能性。	S2.2.1
1183	箱A3 2層	砂岩	砂岩	4.5	4.1	1.6	54		直角面の直角面と傾斜面とある。直角面1cm厚。直角面下に1cmの重み。直角面側倒れてく可能性。	H17
1184	箱A3 2層	砂岩	砂岩	2.7	2.7	0.5	5.1		直角面の直角面と傾斜面とある。直角面1cm厚。直角面下に1cmの重み。直角面側倒れてく可能性。	H17
1185	曲G	砂岩	砂岩	3.2	2.8	0.9	15.4		直角面の直角面と傾斜面とある。直角面1cm厚。直角面下に1cmの重み。直角面側倒れてく可能性。	G1
1186	曲G	砂岩	砂岩	3.7	2.1	0.5	7.3		直角面の直角面と傾斜面とある。直角面1cm厚。直角面下に1cmの重み。直角面側倒れてく可能性。	G1
1187	西	砂岩	砾質砂岩	8.25	10.7	3.4	65.4		直角面の直角面と傾斜面とある。直角面1cm厚。直角面下に1cmの重み。直角面側倒れてく可能性。	H17
1188	水 S1 27層	砂岩	砾質砂岩	5.4	5.35	1.45	66.6		直角面の直角面と傾斜面とある。直角面1cm厚。直角面下に1cmの重み。直角面側倒れてく可能性。	S2.0.2.7.2.0
1189	曲B4 3層	砂岩	砂岩	7.05	6.55	1.5	99.6		直角面の直角面と傾斜面とある。直角面1cm厚。直角面下に1cmの重み。直角面側倒れてく可能性。	H17
1190	曲F2	砂岩	砂岩	6.8	5.4	1.0	67.9		直角面の直角面と傾斜面とある。直角面1cm厚。直角面下に1cmの重み。直角面側倒れてく可能性。	H17
1191	SG1-2 鹿野山	砂岩	砂岩	5.3	4.9	0.6	31.7		直角面の直角面と傾斜面とある。直角面1cm厚。直角面下に1cmの重み。直角面側倒れてく可能性。	G217017
1192	曲B2 P60	砂岩	砂岩	10.7	7.35	1.6	106.1		直角面の直角面と傾斜面とある。直角面1cm厚。直角面下に1cmの重み。直角面側倒れてく可能性。	RD-1
1193	曲H1	砂岩	砂岩	6.5	4.5	1.0	55.6		直角面の直角面と傾斜面とある。直角面1cm厚。直角面下に1cmの重み。直角面側倒れてく可能性。	G2.5
1194	西	砂岩	砾質砂岩	7.4	9.2	1.35	146.9		直角面の直角面と傾斜面とある。直角面1cm厚。直角面下に1cmの重み。直角面側倒れてく可能性。	H17
1195	水	砂岩	砂岩	4.9	3.5	0.55	15.3		直角面の直角面と傾斜面とある。直角面1cm厚。直角面下に1cmの重み。直角面側倒れてく可能性。	S2.2.1
1196	曲A2 2層	砂岩	砂岩	6.9	3.4	0.8	32.4		直角面の直角面と傾斜面とある。直角面1cm厚。直角面下に1cmの重み。直角面側倒れてく可能性。	A2.2
1197	曲D	砂岩	砂岩	5.1	3.3	4.5	8.5		直角面の直角面と傾斜面とある。直角面1cm厚。直角面下に1cmの重み。直角面側倒れてく可能性。	F.1
1198	水 切壁1	砂岩	砂岩	9.3	6.5	1	77.6		直角面の直角面と傾斜面とある。直角面1cm厚。直角面下に1cmの重み。直角面側倒れてく可能性。	A1.1
1199	箱A3 5813	砂岩	砂岩	5.35	3.7	0.8	30.7		直角面の直角面と傾斜面とある。直角面1cm厚。直角面下に1cmの重み。直角面側倒れてく可能性。	A1.1
1200	曲F3	砂岩	墓伏石	6.4	7.9	3.4	227.9		直角面の直角面と傾斜面とある。直角面1cm厚。直角面下に1cmの重み。直角面側倒れてく可能性。	T2.7.7
1201	曲C2	砂岩	砂岩	6	6	2.7	132.1		直角面の直角面と傾斜面とある。直角面1cm厚。直角面下に1cmの重み。直角面側倒れてく可能性。	C1
1202	曲M	砂岩	砂岩	6.5	8.1	1.1	95.1		直角面の直角面と傾斜面とある。直角面1cm厚。直角面下に1cmの重み。直角面側倒れてく可能性。	P.1
1203	箱B2 P74	砂岩	砾質砂岩	5.2	3.7	1.2	44.2		直角面の直角面と傾斜面とある。直角面1cm厚。直角面下に1cmの重み。直角面側倒れてく可能性。	RD-1
1204	曲L	砂岩	砾質砂岩	5.6	5.5	1.5	96.2		直角面の直角面と傾斜面とある。直角面1cm厚。直角面下に1cmの重み。直角面側倒れてく可能性。	Q.1
1205	曲K	砂岩	砾質砂岩	12.2	7.2	12.0	189.9		直角面の直角面と傾斜面とある。直角面1cm厚。直角面下に1cmの重み。直角面側倒れてく可能性。	K.c.9.7
1206	SG1-2 下層	砂岩	砂岩	16.5	23.0	7.6	4564.3		直角面の直角面と傾斜面とある。直角面1cm厚。直角面下に1cmの重み。直角面側倒れてく可能性。	G217016
1207	SG3	砂岩	砾質砂岩	7.0	5.7	1.7	84.9		直角面の直角面と傾斜面とある。直角面1cm厚。直角面下に1cmの重み。直角面側倒れてく可能性。	V15
1208	SG1-2 例置	砂岩	砂岩	21.1	35.0	14.8	14500		直角面の直角面と傾斜面とある。直角面1cm厚。直角面下に1cmの重み。直角面側倒れてく可能性。	D171016
1209	水 切壁1	砂岩	砂岩	31.3	15.7	5.7	450.0		直角面の直角面と傾斜面とある。直角面1cm厚。直角面下に1cmの重み。直角面側倒れてく可能性。	S2.2.0.2.0
1210	水 切壁1	砂岩	砂岩	32.8	26.3	10.6	6500.0		直角面の直角面と傾斜面とある。直角面1cm厚。直角面下に1cmの重み。直角面側倒れてく可能性。	S2.2.0.2.0

第47表-2 石製品観察表

規格 No.	出土地点	種類	石材	分類	最大長大幅(前) 大厚さ	重量	所見	注記名
				(cm)	(cm)	(kg)		
1211 曲 K	火打石	石英	29	2.0	1.4	7.8	表面には縦溝が特徴。上方斜面、傾斜面に削痕がある。	K1-17
1212 曲 A3.2 墓	火打石	チャート	24	1.8	1.1	6.8	表面の縫合部が鋸歯状である。	A3.2-1
1213 曲 A4.2 墓	火打石	石英	28	2.4	1.9	16.1	正面・裏面の縫合部が鋸歯状である。	A2-1
1214 曲 E	火打石	石英	21	1.9	0.8	4.5	その他の縫合部が鋸歯状である。再利用することなく廃棄されたもの。	-
1215 曲 G P15	火打石	石英	28	2.7	1.7	11.1	上面・側面・底面に鋸歯状である。	G1-SP15
1216 曲 L	火打石	チャート	35	2.6	1.7	14.0	表面の縫合部が鋸歯状である。	Q1-1
1217 曲 J	火打石	珪質チャート	13	0.9	0.8	0.7	側面から側面、側面から底面、側面から底面など、火打石の縫合部がS字カーブにより複数走行している。	J-1-1
1218 曲 H1	火打石	チャート	29	1.4	1.2	4.7	側面・底面の縫合部は鋸歯状である。	G1-1
1219 曲 G	火打石	チャート	21	1.9	1.3	4.7	側面・底面の縫合部は鋸歯状である。	G1-1
1220 曲 A1 A 墓	火打石	チャート	43	3.3	2.3	21.5	正面の縫合部が鋸歯状である。	赤色 A2.2 墓
1221 水 P17	火打石	チャート	26	1.9	1.3	4.8	正面の縫合部が鋸歯状である。	赤色 P17
1222 曲 A3	火打石	チャート	26	1.9	1.3	10.2	側面から側面、側面から底面など、正面の縫合部が鋸歯状である。	A1-1
1223 曲 L	火打石	チャート	22	2.0	1.3	5.0	その他の縫合部が鋸歯状である。再利用することなく廃棄されたもの。	Q1-1
1224 曲 E	火打石	チャート	25	2.4	1.2	8.6	側面から側面、側面から底面など、側面の縫合部が鋸歯状である。本体は側面がS字カーブの縫合部で複数走行している。表面は側面より削り出されている。	K306-19
1225 曲 K5DS	数珠玉	水晶	0.9	0.9	0.6	0.6	側面から側面などで、正面の縫合部が鋸歯状である。	-
1226 曲 F2	鏡	真岩	7.7	2.8	0.9	15.8	側面の縫合部が鋸歯状である。側面と上端と下端と、上端部を3mm、下端部を2mmほど削り出している。表面は側面より削り出されている。	E-H
1227 曲 F1	石筆	透石	1.6	0.6	0.6	4.7	側面の縫合部が鋸歯状である。側面と上端と下端と、上端部を3mm、下端部を2mmほど削り出している。表面は側面より削り出されている。	D2-1
1228 曲 H1	石筆	石英	21	0.7	0.6	1.5	側面の縫合部が鋸歯状である。側面と上端と下端と、上端部を3mmほど削り出している。表面は側面より削り出されている。	G2-1
1229 曲 F1	石筆	真岩	3.9	2.9	0.6	7.6	側面の縫合部が鋸歯状である。コーナー部は側面より削り出されている。	D2-1
1230 5G3	石仏	羅刹鬼	14.8	16.5	11.3	212.0	側面が斜めに削り出され、傾いた状態で側面が削り出されている。側面は側面の縫合部が削り出されている。表面は側面より削り出されている。	V-M

第48表 宝鏡印塔計測表

規格 No.	出土地点	部位	重量 (kg)	法量 (cm)	注記名	空風輪	火輪	斜の細分形状
1231	水 S51	宝	23.0	18.0	47.0	40.6	551-45	

第49表 空風輪計測表

規格 No.	出土地点	部位	重量 (kg)	法量 (cm)	注記名
1232	曲 G	H中	10.0	30.3	15.8 1.8 5.4 7.0 18.4 18.0 9.2

第50表 火輪計測表

規格 No.	出土地点	部位	法量 (cm)	法量比	分類	備考	注記名									
1233 水 S51	28.2	36.6	18.5	4.5	11.0	6.4	1.0	5.0	2.5	10.5	7.5	18.5	18.0	1.0 Aa α 石種構成材	S51-52	
1234 水 S51	22.0	33.1	17.4	3.6	11.6	5.4	0.4	2.4	17.6	9.0	18.4	18.1	1.0	1.0 Ab β 石種構成材	S51	
1235 水 S52	15.3	29.1	12.0	3.8	6.2	1.6	2.9	3.0	1.6	17.6	8.2	16.6	16.1	0.7	1.0 Ab β 石種構成材	S52-2
1236 水 S51	25.0	40.0	16.8	5.9	11.1	5.4	4.2	4.2	12.6	7.8	16.2	15.2	1.0	1.0 Ba α 石種構成材	S51-66	
1237 水 S52	12.0	33.0	17.8	5.4	10.4	6.7	0.7	7.2	1.4	17.0	9.3	19.0	15.6	0.9	1.0 Ba α 石種構成材、軒部欠損	S52-4
1238 水 S51	16.5	34.2	21.0	8.2	13.8	3.4	3.0	2.2	6.4	9.4	20.6	20.0	1.0	1.0 Ba 砂漿構成材、軒部欠損	SE1	
1239 水 S51	41.5	38.0	14.8	5.6	5.4	7.6	0.6	7.0	1.4	14.3	8.0	13.4	12.2	1.1	2.6a β 石種構成材	S51-43
1240 水 S51	24.0	35.8	18.2	2.0	11.0	5.4	1.6	3.0	5.4	11.0	4.2	13.2	12.9	1.4	2.6a β 石種構成材	S51-41
1241 水 S51	18.0	33.2	21.7	4.8	12.3	8.4			9.8	17.7		1.2	2.6a α 石種構成材	S51-46		
1242 水 S51	15.0	32.0	18.8	5.8	15.8				7.0	13.4	7.4	17.6		1.1	2.6a β 砂漿構成材・軒・垂檻部欠損	SE1-37
1243 水 S52	16.5	35.9	17.3	4.0	10.5	7.0			1.1	15.0	8.6	14.8	14.0	1.2	2.6a β 砂漿構成材・垂檻部欠損	S52-9
1244 水 S51	19.2	32.0	21.2	8.2	12.8	7.7			8.6	16.7		1.3	2.6a β 石種構成材・軒部欠損	S51-48		
1245 水 S52	26.0	25.0	40.0	2.0	5.0	8.0	3.8	15.0	4.0	8.0	10.0	15.0		0.3	2.6a α 石種構成材	S52-7
1246 水 U2W3	47.0	41.0	24.1	5.8	13.5	5.4	0.6	8.0	1.6	18.1	9.6	16.2	16.0	1.5	2.6c α 石種構成材	S51-47
1247 水 S51	41.0	36.8	21.0	3.5	15.0				6.0	17.0	8.0	17.9	14.0	1.2	2.6a β 石種構成材	CJW-3-70
1248 水 S51	21.0	31.6	19.0	4.2	11.7	4.4	2.2	6.2	2.4	13.5	7.8	13.8	11.6	1.4	2.6a β 石種構成材	S51-35
1249 水 S51	32.0	28.6	24.2	1.5					10.4		8.4	19.5	17.3	1.3	2.6a β 石種構成材	SE1-71
1250 水 S52	12.5	30.1	22.2	7.8	10.0	9.9	3.4	8.8	7.0	17.0	8.4	19.9	19.8	1.1	2.6c β 石種構成材	S52-31
1251 水 S51	14.0	38.9	12.8	4.2	14.2	4.1	5.8	4.2	11.0	6.6	16.2	13.0	1.2	2.6a β 石種構成材・軒部欠損	S51	
1252 水 S51	32.0	42.2	23.0	4.8	16.0	5.0	1.5	5.2	1.8	11.0	7.0	16.6	14.5	1.4	2.6a α'β' 石種構成材	S51-60
1253 水 S51	15.5	31.8	19.0	5.0	12.0	4.5	2.0	7.0	2.0	11.0	8.0	18.0	16.0	1.1	2.6a α 石種構成材	S51-77
1254 水 S51	28.0	35.0	25.4	4.2	15.9	8.0	1.2	9.8	1.5	9.4	18.3	15.2	1.4	2.6c β 石種構成材	S51-39	
1255 水 S51	25.9	38.4	17.2							18.0	18.0	1.0				SE1-16
1256 水 SE1	21.2	37.4	22.4	5						8.8	17.3		1.3			SE1-74
1257 水 S51	36.0	40.2	15.0						5.4	0.6						SE1-24

第51表 水輪計測表

規格 No.	出土地点	部位	法量 (cm)	法量比	分類	備考	注記名					
1258 水 S52	10.0	15.0		22.3	30.3	30.1	0.5 2x	石種構成材、上下左右欠損	S52-2-1			
1259 水 S51	11.0	12.0		31.7	34.3	28.6	0.4 2x	石種構成材、上下欠損	S51			
1260 水 S51	11.0	13.5		26.9	35.1	31.6	0.4 2x	石種構成材、下欠損	S51			
1261 水 S51	15.5	14.5	100	31.3	32.8	27.2	32.6	0.5 2x	石種構成材	S51-56		
1262 水 S51	22.0	18.4	1.9	100	3.3	12.2	37.0	29.6	34.6	0.5 2x	石種構成材	S51-64
1263 水 S51	11.0	12.1	4.1	21.1	9.0	36.7	36.0	0.3 1A	石種構成材、下欠損	S51-38		

第52表-1 地輪計測表

規格 No.	出土地点	法量 (cm)	法量比	分類	備考	注記名	
1264 水 S51	20.5	41.7	17.2	33.1	0.3	1A 砂漿構成、一辺が欠損	S51
1265 水 S51	21.2	37.2	11.4	33.8	0.3	1A 砂漿構成、一面が欠損	S51-17
1266 水 S52	8.0	30.6	7.2	28.8	0.2	1A 石種構成材、一面が欠損	S52-14
1267 水 S51	9.0	34.2	9.8	28.0	0.3	1A 砂漿構成、一辺が欠損	S51-68
1268 水 S51	22.0	36.2	12.2	33.4	0.3	1A 砂漿構成、側面が欠損	S51-81
1269 水 S51	36.0	39.5	13.2	37.4	0.3	1A 砂漿構成、側面が欠損	S51-3
1270 水 S51	19.0	34.6	14.8	32.1	0.4	2A 石種構成材、側面が欠損	S51-51

第52表 地輪計測表

測量 No.	出土地点	部位	基準	法量 (cm)		法量比 (D/x)	分類	備考	注記名
				X	D				
1271	水 S52	17.0	30.8	13.6	29.1	0.5	2A	石積構成材	S52-15
1272	水 S51	28.0	39.2	14.1	37.8	0.4	2A	堆積地盤、開拓・凹部が欠損	S51-22
1273	水 S51	45.0	42.8	16.4	41.8	0.4	2A	堆積地盤、開拓が欠損	S51-82
1274	水 S51	40.5	41.2	16.4	39.7	0.4	2A	堆積地盤	S51-5
1275	水 S51	30.0	39.2	14.2	36.3	0.4	2A	堆積地盤	S51-4
1276	水 S51	42.0	42.2	14.0	37.4	0.3	1B	堆積地盤、梵字「テ」?	S51-49
1277	水 S52	36.0	42.2	14.0	39.3	0.3	1B	石積構成材、開拓が欠損	S52-12
1278	水 S51	21.0	34.9	11.7	34.8	0.3	1B	堆積地盤、開拓が欠損	S51-25
1279	水 S51	25.0	33.0	12.0	32.4	0.3	1B	堆積地盤、開拓が欠損	S51-48
1280	水 S51	26.0	36.8	15.6	36.4	0.4	2A	堆積地盤、梵字「ラーン」?	S51-48
1281	水 S51	29.0	39.2	16.3	34.6	0.4	2B	石積構成材、開拓が欠損	S51-67
1282	水 S51	34.0	34.8	12.1	31.4	0.4	2B	堆積地盤、開拓が欠損	S51-15
1283	水 S51	30.5	38.2	13.5	36.9	0.4	2B	堆積地盤、梵字「イ」?, 開拓が欠損	S51-29
1284	水 S51	18.0	35.2	13.8	34.2	0.4	2A	堆積地盤、東・西辺が欠損	S51-27
1285	水 S51	27.0	35.7	14.7	33.0	0.4	2B	堆積地盤	S51-63
1286	水 S52	38.5	39.0	18.2	37.8	0.5	2B	石積構成材、梵字「リーヴー」または「アン」?	S52-10
1287	水 S51	45.5	41.0	19.8	39.6	0.5	2B	堆積地盤、梵字「アーヴー」	S51-23
1288	水 S51	20.0	39.8	16.7	26.7	0.4	2C	石積構成材、半分が欠損	S51-58

第53表 板磚計測表

測量 No.	出土	部位	基準	法量 (cm)		備考	注記名
				厚度	長さ		
1289	水 S51	19.0	20.0	24.0	10.8	10.8	石積構成材、梵字「リーヴー」?あり S51
1290	水 S51	13.4	14.4	10.6	12.0	12.0	石積構成材、手字「古」?あり S51
1291	水 S51	15.0	17.3	12.0	12.0	12.0	石積構成材 S51
1292	水 S51	身部	16.8	24.0	10.6	10.6	石敷上に埋土 S51
1293	水 S51	身部	17.0	14.8	9.6	9.6	石敷上に埋土 S51

第55表 火輪計測表(未掲載分)

出土地点	重里	法量 (cm)		法量比 (D/x)	分類	備考	注記名
		X	D				
水 S51	14.0	34.8	22.4	5			
水 S51	16.5	34.1	15.5	5.5	11.0	3.5	1.0
水 S51	12.5	36.0	23.0	4.8	16.0	5.0	1.5
水 S51	26.0	39.5	20.2	7.8	13.4	5.4	0.6
水 S51	51.0	35.3	17.8	5.2	11.0	5.0	5.9
水 S51	20.0	38.1	24.7	1.5	10.4		
水 S51	21.5	33.4	17.2	4.0	10.5	7.0	
水 S51	29.5	34.2	21.0	3.5	15.0	7.0	
水 S51	18.0	42.4	21.0	8.2	13.8	3.4	3.0
水 S51	14.5	37.2	19.0	5.0	12.0	4.5	2.0
水 S51	28.0	33.0	24.6	10.4	16.4	4.8	1.8
水 S51	28.0	31.8	15.1	3.9	8.4	4.8	1.9
水 S51	18.5	29.8	17.6	8.0	9.0	6.4	1.8
水 S51	31.8	37.4	17.4	2.2	12.6	3.6	1.4
水 S51	22.0	31.0	18.8	3.2	12.8	4.2	1.4
水 S51	28.0	32.6	16.8	5.9	11.1	5.4	4.2
水 S51	21.2	35.1	24.1	5.8	13.5	5.6	0.6
水 S51	27.0	41.2	21.7	4.8	12.3	8.4	
水 S52	15.0	36.2	21.0	5.0	12.0		
曲 I	21.0	29.0	20.0	4.0	20.0	2.0	5.0

第56表 地輪計測表(未掲載分)

出土	重里	法量 (cm)		法量比 (D/x)	分類	備考	注記名
		X	D				
水 S4	5.0	27.0	9.7	23.6	4.6	2A	S51-82
水 S51	26.8	38.7	14.7	36.3	6.0	2B	堆積地盤
水 S51	20.1	38.0	12.6	34.0	0.3	1A	堆積地盤
水 S51	15.5	35.4	9.8	33.4	0.3	1A	堆積地盤
水 S51	21.0	36.9	12.6	35.3	0.4	2A	堆積地盤
水 S51	21.0	38.0	11.8	36.4	0.3	1A	堆積地盤
水 S51	16.0	35.8	12.8	35.4	0.4	2A	堆積地盤
水 S51	15.5	38.2	8.2	34.8	0.2	1A	堆積地盤
水 S51	22.5	35.5	11.8	34.8	0.3	1A	堆積地盤
水 S51	16.0	33.8	10.5	30.5	0.3	1A	堆積地盤
水 S51	16.5	36.4	12.6	30.2	0.4	2A	堆積地盤
水 S51	18.0	33.6	13.5	33.4	0.3	1A	堆積地盤
水 S51	33.0	43.2	15.7	42.2	0.4	2A	堆積地盤
水 S51	27.0	35.4	16.4	35.0	0.5	2A	堆積地盤
水 S51	53.0	43.3	17.7	40.9	0.4	2A	堆積地盤
水 S51	34.5	49.8	9.4	46.9	0.2	1A	堆積地盤
水 S51	23.5	30.8	16.2	29.0	0.5	2A	堆積地盤
水 S51	23.5	38.6	12.6	35.4	0.3	1A	堆積地盤
水 S51	33.5	40.6	13.7	35.4	0.3	1A	堆積地盤
水 S51	27.0	40.6	12.6	36.7	0.3	1A	堆積地盤
水 S51	22.5	39.8	12.7	34.3	0.3	1A	堆積地盤
水 S51	23.5	42.3	10.7	36.4	0.3	1A	堆積地盤
水 S51	37.0	39.0	11.0	37.8	0.3	1A	堆積地盤
水 S51	20.0	35.2	12.5	34.9	0.4	2A	堆積地盤

第57表 板磚計測表(未掲載分)

出土地点	部位	法量 (cm)		法量比 (D/x)	分類	備考	注記名
		X	D				
水 S51	身部	18.0	17.0	0.4	2A	石敷上に埋土	S51

第54表 近世墓計測表

測量 No.	出土	基層	石材	法量 (cm)		法量比 (D/x)	分類	備考	注記名
				厚度	長さ				
1294	曲 G	基層	砂岩	37.5	19.8	11.8	「火文四日朱文」心臓室四壁	S51	
1295	曲 G	唐草	花崗岩	26.4	30.1	14.5	花崗岩、縦轍の穴が六つ	S51	

第VII章 自然科学分析の結果

第1節 はじめに

第VII章では、塩見城跡発掘調査に関連した自然科学分析の結果と概要について以下に記載する。実施した自然科学分析は放射性炭素年代測定（第2節）、樹種同定（第3節）、漆製品の塗膜構造（第4節）、金属分析（第5節）、近世人骨の鑑定（第6節）である。

第2節 放射性炭素年代測定

1 西側曲輪群における放射性炭素年代測定

(1) 試料

試料は、下記の炭化材8点である。

- No.1 堀切A3, 19層（第11図f-g）
- No.2 曲輪B2, 通路状遺構, 5層（第23図g-h）
- No.3 曲輪B4, 16層（第23図q-r）
- No.4 水の手曲輪, SS1 スロープ部, 10層（第53図）
- No.5 水の手曲輪, 窟地状遺構, 6層（第39図）
- No.6 水の手曲輪, 窟地状遺構, 22層（第39図）
- No.7 帯曲輪A3b, 5層（第14図l-m）
- No.8 帯曲輪A3b, 2層（第14図l-m）

(2) 分析方法

各試料を超音波洗浄と酸-アルカリ-酸処理の後、AMS〔加速器質量分析法（Accelerator Mass Spectrometry）〕により年代を測定し、暦年分析した。

(3) 測定結果

第58表に放射性炭素年代測定結果および暦年代（較正年代）を示し、第176図に暦年較正結果（較正曲線）を示す。

(4) 所見

加速器質量分析法（AMS）による放射性炭素年代測定の結果、No.1の炭化材では 520 ± 20 年BP（ 2σ の暦年代でAD1400-1440年）、No.2の炭化材では 700 ± 20 年BP（AD1260-1300、1360-1380年）、No.3の炭化材では 605 ± 20 年BP（AD1290-1370、1380-1410年）、No.4の炭化材では 380 ± 20 年BP（AD1440-1530、1570-1630年）、No.5の炭化材では 305 ± 20 年BP（AD1490-1650年）、No.6の炭化材では 355 ± 20 年BP（AD1450-1530、1550-1640年）、No.7の炭化材では 300 ± 20 年BP（AD1510-1600、

1610-1650年）、No.8の炭化材では 340 ± 20 年BP（AD1470-1640年）の年代値が得られた。

なお、樹木（炭化材）による年代測定結果は、樹木の伐採年もしくはそれより以前の年代を示しており、樹木の心材に近い部分や転用材が利用されていた場合は、遺構の年代よりも古い年代値となる。

2 南側曲輪群における放射性炭素年代測定

(1) 試料

試料は、下記の15点である。

- No.1 曲輪M SA1 地床か中央出土
- No.2 曲輪M SC1 出土
- No.3 曲輪K SC1
- No.4 曲輪M SC1 出土
- No.5 曲輪M SX1 3層出土
- No.6 曲輪H SC1 出土
- No.7 道路状遺構1-3 地山土層出土
- No.8 道路状遺構1-2 西側溝（法面近く）出土
- No.9 曲輪J1 土層5a（炭化材を含む層）出土
- No.10 曲輪H 柱穴（D-15）出土
- No.11 曲輪J 包含層出土
- No.12 道路状遺構1-3 炭化物層出土
- No.13 道路状遺構1-3 潜耕状遺構出土
- No.14 曲輪J SA1 柱穴出土
- No.15 曲輪M SA1 出土

(2) 分析方法

各試料を超音波洗浄と酸-アルカリ-酸処理の後、加速器質量分析計を用いて測定した。得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、 ^{14}C 年代、暦年代を算出した。

(3) 測定結果

第59表に放射性炭素年代測定結果および暦年代（較正年代）を示し、第177図に暦年較正結果（較正曲線）を示す。

(4) 所見

No.1は 1344 ± 1394 calAD(5.6.3%)と 1287 ± 1326 calAD(39.1%)で、14世紀中頃から14世紀末の確率が高い。

No.2は 1399 ± 1440 calAD(95.4%)で、14世紀末から15世紀中頃の範囲である。

No.4は1265~1302calAD(84.8%)と1367~1383calAD(10.6%)で、13世紀中頃から14世紀初頭の確率が高い。

No.5は1539~1635calAD(56.8%)と1466~1530calAD(38.6%)で、16世紀前半から17世紀前半の年代範囲の確率が高い。

No.6は1470~1635calAD(95.4%)で、15世紀後半から17世紀前半の年代範囲である。

No.7は1454~1526calAD(49.9%)と1556~1633calAD(45.5%)で、15世紀中頃から16世紀前半と16世紀中頃から17世紀前半の年代範囲の確率がほぼ同じである。

No.8は1490~1603calAD(74.3%)と1612~1645calAD(21.1%)で、15世紀末から17世紀初頭の年代範囲の確率が高い。

No.9は1397~1441calAD(93.3%)と1331~1338calAD(2.1%)で、14世紀末から15世紀前半の年代範囲の確率が高い。

No.10は1540~1635calAD(54.3%)と1461~1530calAD(41.1%)で、16世紀中頃から17世紀前半と15世紀中頃から16世紀前半年代範囲の確率がほぼ同じである。

No.11は1418~1455calAD(95.4%)で、15世紀初頭から15世紀中頃の年代範囲である。

No.12は333~435calAD(92.0%)と492~507calAD(1.8%)で、4世紀前半から5世紀前半の年代範囲の確率が高い。

No.13は1430~1482calAD(95.4%)で、15世紀前半から15世紀後半の年代範囲である。

No.14は580~655calAD(95.4%)で、6世紀後半から7世紀中頃の年代範囲である。

No.15は1400~1442calAD(95.4%)で、15世紀前半の年代範囲である。

以上の木材の14C年代が示すのは、その部分の年輪が形成された年代である。今回の炭化材試料は、すべて最外年輪以外の部位不明の年輪を測定試料としており、古木効果の影響を考慮する必要がある。またイネは1年生の草本植物のため、得られた年代は結実年を示している。

なお、今回測定した試料の14C年代は土20年あるいは土25年の誤差範囲であったが、1450~1600calADにかけての暦年較正曲線が比較的平坦なため、暦年較正年代（実年代）を求めるとき、得られた年代範囲は幅広くなるか、2つの年代範囲に分かれた（第177図）。こうした時期の高精度年代測定には、1試料について木材の年輪を5年ごとに複数測定するウィグルマッチング法が有効である。

参考文献

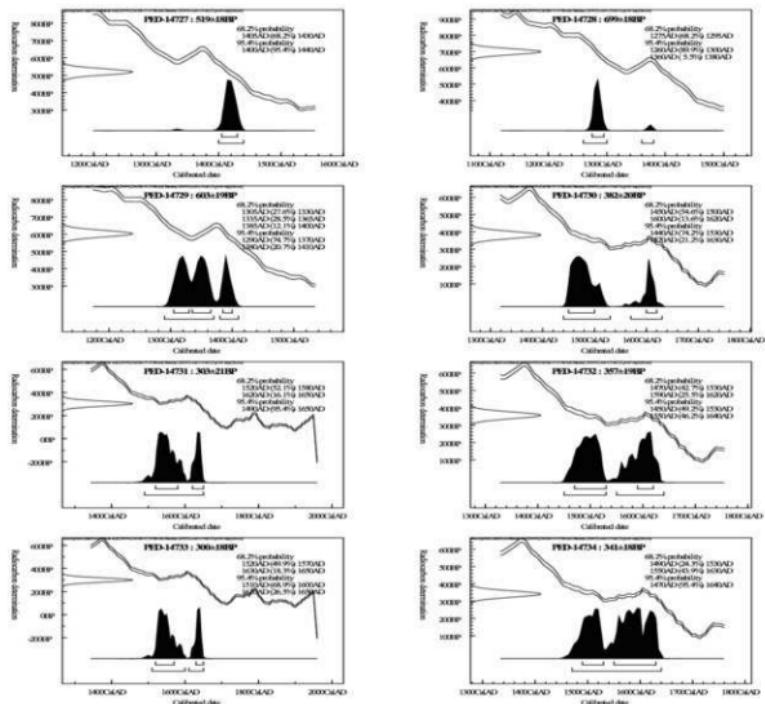
- Paula J Reimer et al. (2004) IntCal04 Terrestrial radiocarbon age calibration, 260ka BP. Radiocarbon 46,p1029-1058.
Brook Ramsey, C. (1995) Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy The OxCal Program. Radiocarbon, 37, 425-430.
Brook Ramsey, C. (2001) Development of the Radiocarbon Program OxCal. Radiocarbon, 43,355-363.
中村俊夫(2000)放射性炭素年代測定法の基礎、日本先史時代の14C年代. 320.

第58表 西側曲輪群における放射性炭素年代測定結果

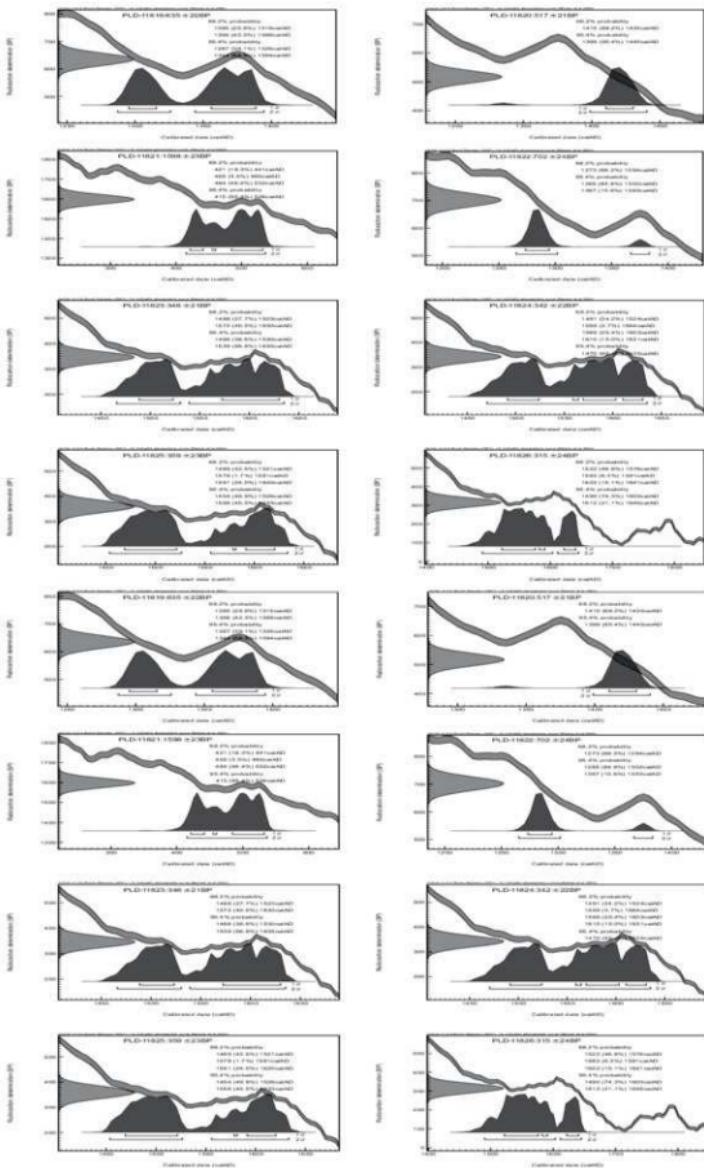
試料No.	測定番号 PED-	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	14C年代 (年BP)	暦年代 (較正年代)	
				1σ (68.2%確率)	2σ (95.4%確率)
1	14727	-26.05 ± 0.12	520 ± 20	AD 1405-1430 (68.2%)	AD 1400-1440 (95.4%)
2	14728	-25.03 ± 0.20	700 ± 20	AD 1275-1295 (68.2%)	AD 1260-1300 (89.9%) AD 1360-1380 (5.5%)
3	14729	-26.65 ± 0.19	605 ± 20	AD 1305-1330 (27.6%) AD 1335-1365 (28.5%) AD 1385-1400 (12.1%)	AD 1290-1370 (74.7%) AD 1380-1410 (20.7%)
4	14730	-25.06 ± 0.15	380 ± 20	AD 1450-1500 (54.6%) AD 1600-1620 (13.6%)	AD 1440-1530 (74.2%) AD 1570-1630 (21.2%)
5	14731	-27.51 ± 0.19	305 ± 20	AD 1520-1580 (52.1%) AD 1620-1650 (16.1%)	AD 1490-1650 (95.4%)
6	14732	-26.00 ± 0.13	355 ± 20	AD 1470-1530 (42.7%) AD 1590-1620 (25.5%)	AD 1450-1530 (49.2%) AD 1550-1640 (46.2%)
7	14733	-27.17 ± 0.18	300 ± 20	AD 1520-1570 (49.9%) AD 1630-1650 (18.3%)	AD 1510-1600 (68.9%) AD 1610-1650 (26.5%)
8	14734	-29.36 ± 0.14	340 ± 20	AD 1490-1530 (24.3%) AD 1550-1630 (43.9%)	AD 1470-1640 (95.4%)

第 59 表 南側曲輪群における放射性炭素年代測定結果

試料No	測定番号	$\delta^{14}\text{C}$ (‰)	測年範囲(用年時代) (yrBP ± 1σ)	${}^{\text{14}}\text{C}$ 年代 (yrBP ± 1σ)	{}^{\text{14}}\text{C}年代を基年代に較正した年代範囲	
					1 σ 年代範囲	2 σ 年代範囲
1	PLD-11819	-28.09 ± 0.25	635 ± 22	635 ± 20	1295AD(55.9%)1315AD	1287AD(39.7%)1326AD
2	PLD-11820	-28.10 ± 0.14	517 ± 21	515 ± 20	1356AD(42.3%)1388AD	1344AD(56.3%)1394AD
3	PLD-11821	-27.97 ± 0.19	1598 ± 23	1600 ± 25	421AD(18.5%)441AD	415AD(95.4%)536AD
4	PLD-11822	-23.70 ± 0.17	702 ± 24	700 ± 25	1273AD(6.2%)1294AD	1265AD(84.8%)1302AD
5	PLD-11823	-26.75 ± 0.14	346 ± 21	345 ± 20	1488AD(27.7%)1521AD	1466AD(38.6%)1530AD
6	PLD-11824	-28.20 ± 0.12	342 ± 22	340 ± 20	1572AD(45.9%)1620AD	1539AD(56.8%)1635AD
7	PLD-11825	-28.26 ± 0.22	359 ± 23	360 ± 25	1491AD(24.2%)1524AD	1470AD(95.4%)1635AD
8	PLD-11826	-28.32 ± 0.15	315 ± 24	315 ± 25	1559AD(37.1%)1564AD	1569AD(25.4%)1603AD
9	PLD-11827	-28.67 ± 0.14	518 ± 23	520 ± 25	1610AD(11.5%)1631AD	1612AD(21.1%)1645AD
10	PLD-11828	-25.43 ± 0.13	349 ± 22	350 ± 20	1469AD(24.5%)1521AD	1454AD(49.9%)1526AD
11	PLD-11829	-26.93 ± 0.12	457 ± 22	455 ± 20	1591AD(10.7%)1581AD	1556AD(45.5%)1633AD
12	PLD-11830	-24.33 ± 0.16	1651 ± 23	1650 ± 25	1522AD(26.8%)1576AD	1582AD(6.3%)1591AD
13	PLD-11831	-29.46 ± 0.19	431 ± 22	430 ± 20	1622AD(15.1%)1641AD	1612AD(21.1%)1645AD
14	PLD-11832	-26.10 ± 0.17	1432 ± 24	1430 ± 25	1437AD(68.2%)1460AD	1430AD(95.4%)1482AD
15	PLD-11833	-29.47 ± 0.16	514 ± 22	515 ± 20	610AD(68.2%)645AD	580AD(95.4%)655AD
					1411AD(68.2%)1431AD	1400AD(95.4%)1442AD



第 176 図 西側曲輪群暦年較正結果



第 177 図 南側曲輪群暦年較正結果

第3節 樹種同定

(1) 試料

試料は水の手から出土した生活用品 30 点、建築部材 35 点、用途不明品 3 点の合計 68 点である。

(2) 観察方法

剃刀で木口（横断面）、柾目（放射断面）、板目（接線断面）の各切片を採取し、永久プレパラートを作製した。これを顕微鏡で観察して同定した。

(3) 結果（第60表・第178～180図）

樹種同定結果（針葉樹 3 種、広葉樹 19 種、タケ類 1 種、樹皮 1 種）の表と顕微鏡写真を示した。

参考文献

島地謙・伊東隆夫「日本の遺跡出土木製品総観」雄山閣出版（1988）

島地謙・伊東隆夫「國説木材樹種」地科社（1982）

伊東隆夫「日本産広葉樹材の解説的記載 I～V」京都大学木質科学研究所（1999）

北村四郎・村田源「原色日本植物3選木本編 I・II」保育社（1979）

濱野和三「樹木の解剖」海青社（1997）

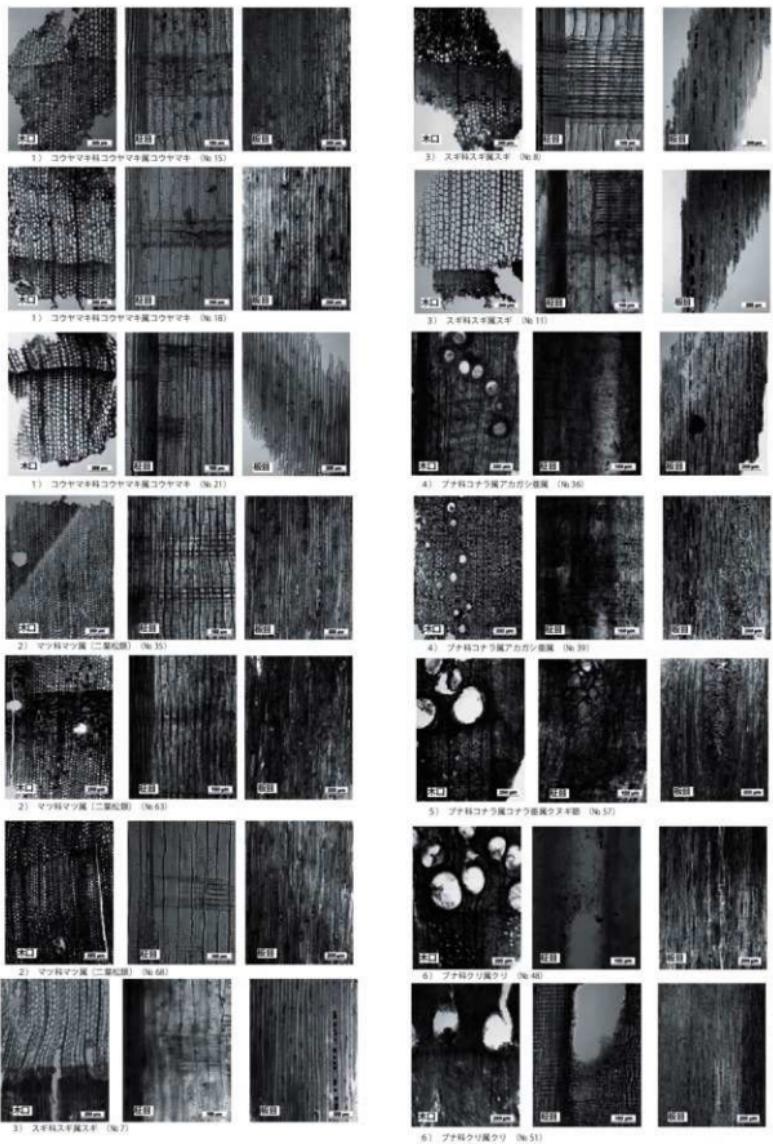
奈良国立文化財研究所「奈良國立文化財研究所史料第 27 冊 木器集成錄近畿古代篇」（1985）

奈良國立文化財研究所「奈良國立文化財研究所史料第 36 冊 木器集成錄近畿中古篇」（1993）

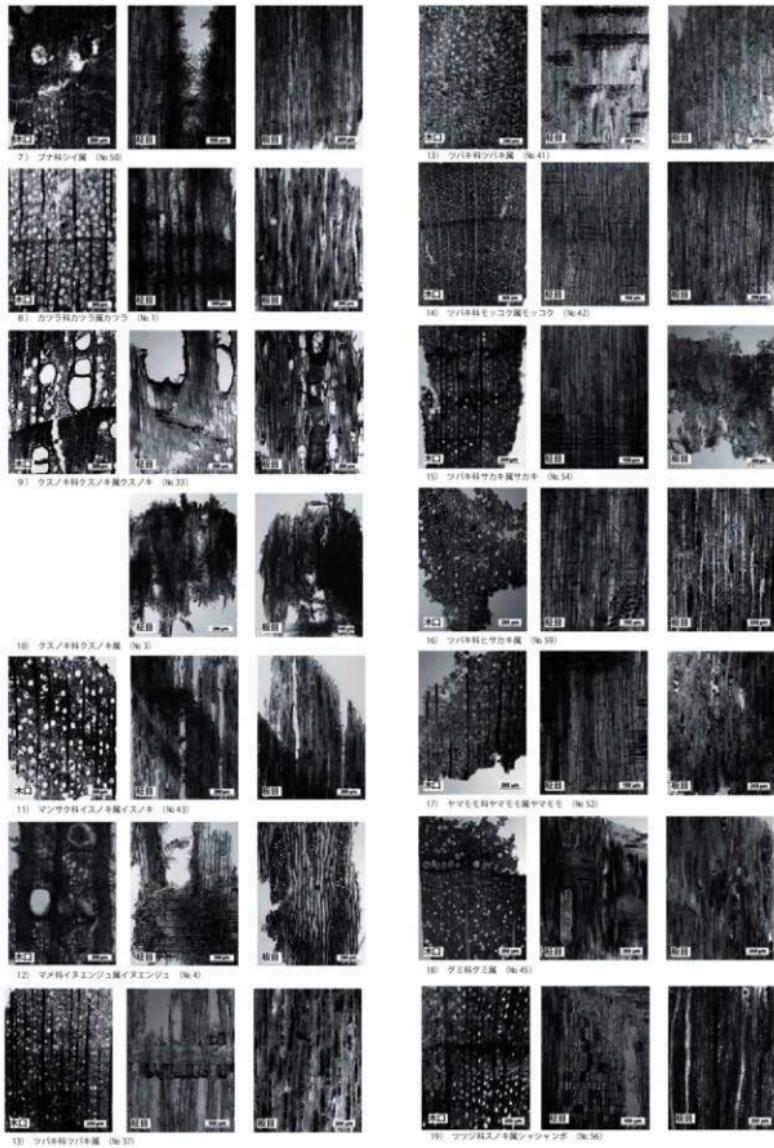
使用顕微鏡 Nikon DSI-R

第60表 木製品樹種同定表

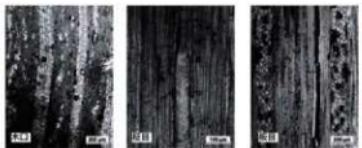
No.	開拓番号	樹種	樹種
1	934・935	漆器碗	カブラ科カツラ属カツラ
2	936	漆器碗	クスノキ科クスノキ属クスノキ
3	937	漆器碗	クスノキ科クスノキ属
4	938	漆器碗	マメ科イヌエンジ属イヌエンジ
5	939・940	A種（蓋） B〃（木杓）	スギ科スギ属スギ
6	941	桶（蓋）	スギ科スギ属スギ
7	942	桶（蓋）	スギ科スギ属スギ
8	943	桶（蓋）	スギ科スギ属スギ
9	944	A種（蓋） B〃（木杓）	スギ科スギ属スギ
10	945	桶（蓋）	スギ科スギ属スギ
11	946	曲物（底板）	スギ科スギ属スギ
12	947	曲物（底板）	スギ科スギ属スギ
13	948	把手	コヤマキ科コヤマキ属コヤマキ
14	949	折敷	コヤマキ科コヤマキ属コヤマキ
15	950	角切折敷	コヤマキ科コヤマキ属コヤマキ
16	951	角切折敷	コヤマキ科コヤマキ属コヤマキ
17	952	桶（底板か）	コヤマキ科コヤマキ属コヤマキ
18	953	曲物（底板）	コヤマキ科コヤマキ属コヤマキ
19	954	曲物（底板）	コヤマキ科コヤマキ属コヤマキ
20	955	曲物（底板）	コヤマキ科コヤマキ属コヤマキ
21	956	曲物（底板）	コヤマキ科コヤマキ属コヤマキ
22	957	曲物（底板）	コヤマキ科コヤマキ属コヤマキ
23	958	曲物（側板）	コヤマキ科コヤマキ属コヤマキ
24	959	曲物（側板）	コヤマキ科コヤマキ属コヤマキ
25	974	柄杓	コヤマキ科コヤマキ属コヤマキ
26	975	柄杓	コヤマキ科コヤマキ属コヤマキ
27	976	糸巻	スギ科スギ属スギ
28	977	神	スギ科スギ属スギ
29	978	縄皮	ヤマザクラ科カバの縄皮
30	979	不明木製品	ブナ科コナラ属アカガシ属
31	980	不明木製品	マツ科マツ属（二葉松類）
32	981	不明木製品	マツ科マツ属（二葉松類）
33	983	井戸杵	クスノキ科クスノキ属クスノキ
34	984	柱材	マツ科マツ属（二葉松類）
35	985	桐木	マツ科マツ属（二葉松類）
36	986	杭	ブナ科コナラ属アカガシ属
37	987	杭	ツバキ科ツバキ属
38	988	杭	ツバキ科モコク属モコク
39	989	杭	ブナ科コナラ属アカガシ属
40	990	杭	ヤブコウジ科ツルマンゴ属ツルマンゴ
41	991	桐木	ツバキ科ツバキ属
42	992	桐木	ツバキ科モコク属モコク
43	993	桐木	マンサク科イスイ属イスイ
44	1011	杭	マツ科マツ属（二葉松類）
45	1012	杭	グミ科グミ属
46	1016	杭	ブナ科コナラ属アカガシ属
47	1018	杭	ヤブコウジ科ツルマンゴ属ツルマンゴ
48	1020	杭	ブナ科クリ属クリ
49	1023	杭	カキノキ科カキノキ属
50	1025	杭	ブナ科シノ属
51	1030	杭	ブナ科クリ属クリ
52	1033	杭	ヤマモチ科ヤマモチ属ヤマモモ
53	1034	杭	ツバキ科ツバキ属
54	1036	杭	ツバキ科カヤカヤ属カヤ
55	1037	杭	スイカズラ科ガマズミ属
56	1042	杭	ツツジ科スノキ属シカシボ
57	1050	杭	ブナ科コナラ属コナラ属ツツジ科
58	1051	杭	ヤブコウジ科ツルマンゴ属ツルマンゴ
59	1052	杭	ツバキ科ヒカゲ属
60	1053	杭	ヤブコウジ科ツルマンゴ属ツルマンゴ
61	1056	杭	ブナ科コナラ属アカガシ属
62	1060	杭	ツバキ科ツバキ属
63	1067	杭	マツ科マツ属（二葉松類）
64	1075	杭	ブナ科クリ属クリ
65	1077	杭	マツ科マツ属（二葉松類）
66	1088	杭	ブナ科クリ属クリ
67	1089	杭	マツ科マツ属（二葉松類）
68	-	杭	マツ科マツ属（二葉松類）



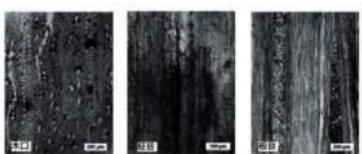
第 178 図 樹種同定試料の断面写真 (1)



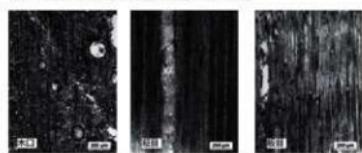
第 179 図 樹種同定試料の断面写真 (2)



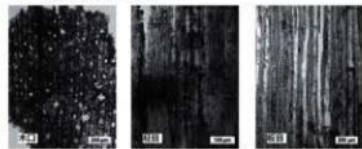
20) サブコラジカルマルニヨウ属タイミンチナ (No. 58)



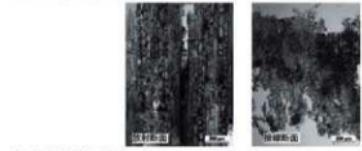
20) サブコラジカルマルニヨウ属タイミンチナ (No. 60)



21) カキノキ科カキノキ属 (No. 49)



22) スイカラ科ガマズミ属 (No. 55)



23) イヌ科タケ属 (No. 58)



24) ヤマザクラ or カリの根皮 (No. 29)

第4節 漆製品の塗膜構造

(1) 試料

試料は、以下の中世～近世の漆製品4点である。

No.1 (樹種同定試料No.1) 漆器椀 (934・935: カツラ) 内外両面に黒色の漆の残存がみられる。

No.2 (樹種同定試料No.4) 漆器 (938: イヌエンジュー) 内外両面とも黒色の椀。内面は模化？

No.3 (樹種同定試料No.2) 漆器椀片 (936: クスノキ) 口縁端部内面赤色で文様が施される。外面は赤色で文様が施される。漆容器として転用されたものか、内面に漆が付着している。

No.4 (樹種同定試料No.3) 漆器椀片 (937: クスノキ属) 内面赤色で外面は黒色の漆。

(2) 調査方法

試料本体から数mm四方の破片を採取してエポキシ樹脂に包埋し、塗膜断面の薄片プレパラートを作製した。これを落射光ならびに透過光の下で検鏡した。

(3) 断面観察結果

塗膜断面の観察結果を第61表に示す。

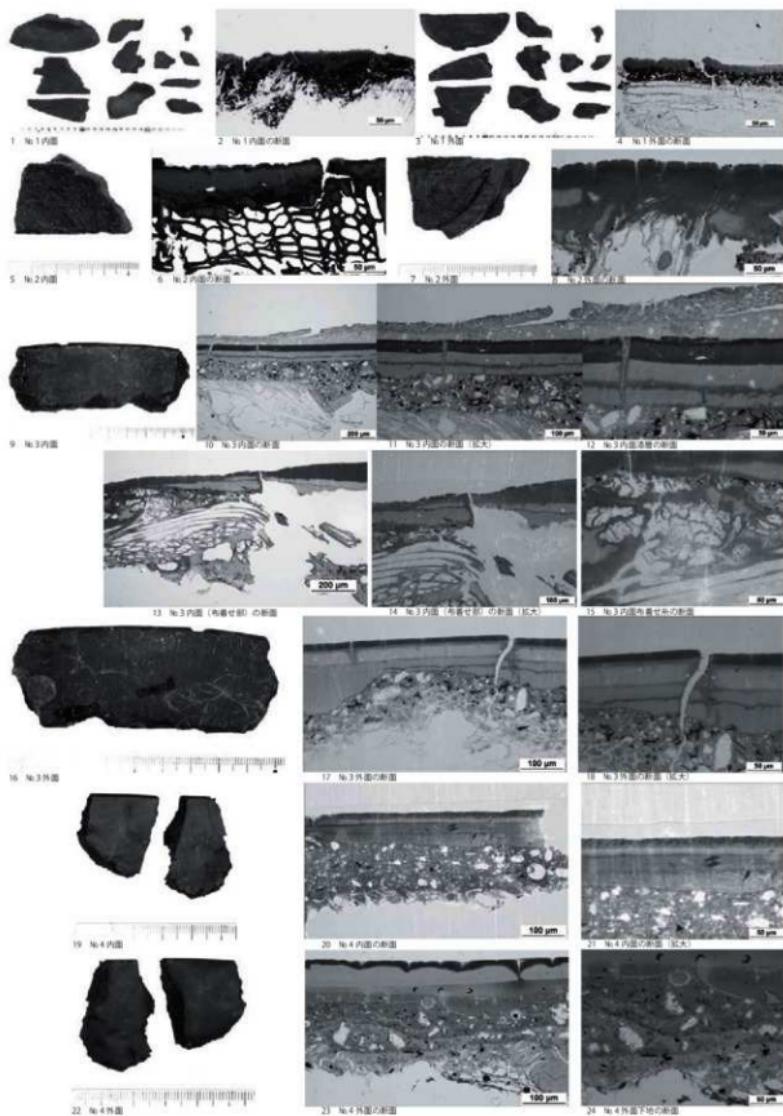
塗膜構造：下層から下地、漆層と重なる様子が観察された。1点には、下地の下に布着せが施されていた(No.3内面)。また、1点(No.3内面)には内面に塗装とは関係ない漆が観察された。漆容器(パレット?)として転用された時の漆であろう。

布着せ：No.3内面には下地の下に布着せの様子が観察された。数単位の植物繊維がひとかたまりになり、このかたまりがいくつか集まって布の糸を構成している(第181図)。この様子は、植物の韌皮繊維の特徴をしめし、布の材質は麻の可能性が高い。

下地：褐色の柿渋に木炭粉を混和した炭粉渋下地2点と、漆に主に鉱物質を混和する漆下地2点とが認められた。漆下地のうち、No.3には炭化物も混和されていた。No.4外面の下地は、4層施されていた。

漆層：下地の上に、地色の漆層が1層のみ重なるものと、複数の漆層が重なるものとがあった。1層のみ重なるものは下地が炭粉渋下地で、複数の漆層が重なるものの下地は漆下地であった。漆層が重なるものは、透明漆が2～3層重なっていた。地色が赤色の場合には(No.4内面)、透明漆が数層重なった上に1層のみ赤色漆が見られた。

第180図 樹種同定試料の断面写真(3)



第181図 水の手曲輪出土漆製品の塗膜構造調査結果

No. 2 内面は、木胎～漆層までが茶褐色を呈している。これは全体が火を受けて炭化した結果である。

No. 4 外面最上層の透明漆の上面付近が濃褐色に変色している。これは劣化による漆の変色である。

顔料: No.3,4 には、赤色顔料の使用が認められた。全点ともに、きわめて透明度が高い、赤色の顔料が漆に混和されていた。この顔料はすべて朱である。

転用: No. 3 内面には椀の塗装の上に、さらに透明漆が 2 層観察された（赤色漆層の上）。これらの漆には、気泡や夾雜物が混じっており、精製の度合いが低いことがわかる。

（4）摘要

炭粉洗下地の試料 2 点には、それぞれ透明漆 1 層のみが、漆下地の試料 2 点には複数層の塗り重ねが認められた。また、漆下地の試料には赤色顔料が使用されているが、ベンガラではなくすべて朱であった。よって下地のランクが漆層の数や顔料の種類などと関連があることが読み取れる。しかし、今回調査した漆下地の試料には、漆容器としての転用例があった。これは什器としての利用後、転用されたことを意味するので、製品のランクについては今後慎重に調査例を増やしていく必要がある。

※試料 No. 1 については、当時同一個体として分析したが、別個体であることが判明し、別々に図化し報告した（第 VI 章 木製品）。

第 5 節 金属分析

（1）試料

試料は南側曲輪群から出土した次の 11 点である。

- No. 1 が哩（SG1-3 出土）
No. 2 鉄塊系遺物（SG1-3・側溝出土）
No. 3 鉄塊系遺物（SG1-3・側溝出土）
No. 4 梭形鍛冶滓（SG1-3・側溝出土）
No. 5 梭形鍛冶滓（SG 2 出土）
No. 6 鉄塊系遺物（曲輪 M SC1 出土）
No. 7 粒状滓様遺物（曲輪 M SA2・SC1 出土）から 3 点

No. 8 錫削剥片様遺物（曲輪 M SA2・SC1 出土）から 6 点

No. 9 鉄塊系遺物（曲輪 M SA2 出土）

No. 10 梭形鍛冶滓（曲輪 I 出土）

No. 11 梭形鍛冶滓（曲輪 I 出土）

（2）分析項目（第 62 表）

① 肉眼観察

遺物の外観上の観察所見を行う。

② マクロ組織

ここでは顕微鏡埋込み試料の断面全体像を、投影機の 5 倍で撮影した。

③ 顕微鏡組織

漆中に晶出する鉱物及び鉄部の調査を目的として、光学顕微鏡を用い観察を実施した。観察面は供試材を切り出した後、エメリー研磨紙の #150、#240、#320、#600、#1000、及びダイヤモンド粒子の 3 μ と 1 μ で順を追って研磨している。なお金属組織の調査では腐食（Etching）液に 5% ナイタル（硝酸アルコール液）を用いた。

④ ピッカース断面硬度

鉄滓中の鉱物と金属鉄の組織同定を目的として、ピッカース断面硬度計（Vickers Hardness Tester）を用いて硬さの測定を行った。試験は鏡面研磨した

第 61 表 漆製品塗膜断面観察結果

No.	器種 (掲載番号)	部位	回収番号	漆膜構造（下層から）			
				下地 接着剤	混和材	漆層構造	顔料
1	椀	内面	第 181 回 2	漆	木炭粉	透明漆 1 層	—
		外腹	第 181 回 4	漆	木炭粉	透明漆 1 層	—
2	椀が焉	内面	第 181 回 6	漆	木炭粉	透明漆 1 層	—
		外腹	第 181 回 8	漆	木炭粉	透明漆 1 层	—
3	椀	内面	第 181 回 10～15	漆	鉱物、炭化物	透明漆 2 層／赤色漆 1 層／ 容器内：透明漆 2 層	朱
			第 181 回 17,18	漆	鉱物	透明漆 3 層／赤色漆 1 層	朱
		内面	第 181 回 20,21	漆	鉱物	透明漆 3 層／赤色漆 1 層	朱
4	椀	外腹	第 181 回 23,24	漆 4 層	鉱物	透明漆 3 層	—

試料に 136° の頂角をもったダイヤモンドを押し込み、生じた窪みの面積をもって、その荷重を除した商を硬度値としている。試料は顕微鏡用を併用した。

⑤ EPMA (Electron Probe Micro Analyzer) 調査

化学分析を行えない微量試料や鉱物組織の微小域の組織同定を目的とする。

分析の原理は、真空中で試料面（顕微鏡試料併用）に電子線を照射し、発生する特性 X 線を分光後に画像化し、定性的な結果を得る。更に標準試料と X 線強度との対比から元素定量値をコンピューター処理してデータ解析を行う方法である。

⑥ 化学組成分析（第 63 表）

供試材の分析は次の方法で実施した。

全鉄分 (Total Fe)、金属鉄 (Metallic Fe)、酸化第一鉄 (FeO)：容量法。炭素 (C)、硫黄 (S)：燃焼容量法、燃焼赤外吸収法。二酸化硅素 (SiO₂)、酸化アルミニウム (Al₂O₃)、酸化カルシウム (CaO)、酸化マグネシウム (MgO)、酸化カリウム (K₂O)、酸化ナトリウム (Na₂O)、酸化マンガン (MnO)、二酸化チタン (TiO₂)、酸化クロム (Cr₂O₃)、五酸化磷 (P₂O₅)、バナジウム (V)、銅 (Cu)、二酸化ジルコニア (Zr₂O) : ICP (Inductively Coupled Plasma Emission Spectrometer) 法：誘導結合プラズマ発光分光分析。

⑦ 耐火度

主に炉材の性状調査を目的とする。耐火度は、溶融現象が進行の途上で軟化変形を起こす状態の温度で表示される。胎土をゼーゲルコーンという三角錐の試験片に作り、1 分間当り 10°C の速度で温度 1000°C まで上昇させ、以降は 4°C に昇温速度を落し、試験片が荷重なしに自重だけで軟化し崩れる温度を示している。

（3）調査結果（第 64 表、第 182-189 図）

No.1 : 炉壁

a) 肉眼観察：強い熱影響を受けて、内面が黒色ガラス質化した炉壁である。胎土部分は橙色の粘土質で、真砂（花崗岩の風化砂）や粉碎を多量に混和している。

b) 顕微鏡組織：第 183 図①～③に示す。内面表層のガラス質部分である。内部に点在する明灰色～暗灰色粒は、炉壁粘土中に含まれていた有色鉱物が、熱影響を受けて分解・津化したものと推測される。

c) 化学組成分析：第 63 表に示す。強熱減量 (Ig loss) 2.83% とやや低めであった。熱影響を受けて、かなり結晶構造水が飛散した状態での分析である。

鉄分 (Fe₂O₃) は 2.91% と高くはないが、酸化アルミニウム (Al₂O₃) が 17.06% とやや低めであり、耐火性にはやや不利な成分系といえる。

d) 耐火度：1107°C であった。中世の鍛冶炉の炉壁としては、やや耐火性の低い性状といえる。

No.2 : 鉄塊系遺物

a) 肉眼観察：表面が黄褐色の土砂で覆われた、13g の小型鉄塊系遺物である。表面の一部が剥落しており、茶褐色の鉄錆化物が露出している。全体に軽い質感で錆化が進んでいるが、特殊金属探知機による反応 (H ○) から、内部に若干金属鉄が残存するものと推定される。

b) マクロ組織：第 186 図①に示す。全体に錆化が進んでおり、観察面で金属鉄は確認できなかったが、滓の付着のほとんどない小鉄塊であった。

c) 顕微鏡組織：第 183 図④～⑧に示す。いずれも錆化鉄部の拡大である。④は片状黒鉛 (C) が残存する、ねずみ錆鉄組織の領域である。また⑤・⑥は蜂の巣状のレデブライト (Ledeburite)、板状のセメントタイト (Cementite : Fe₃C)、層状のパーライト (Pearlite) 痕跡が残る亜共晶組成白錆鉄組織 (C < 4.26%) 領域、⑦・⑧は針状セメントタイトとパーライト痕跡の残る過共析組織 (C > 0.77) 部分で、表層側が僅かに脱炭されている。

d) 所見：以上の金属組織痕跡から、当試料は炭素含有量にばらつきをもち、過共析組織～錆鉄組織を呈する小鉄塊である。刃金原料に適した、炭素含有量の高い鍛冶原料鉄となる。

No.3 : 鉄塊系遺物

a) 肉眼観察：表面が黄褐色の土砂で覆われた、小型楕円状の 57g を測る鉄塊系遺物である。重量感があり、表面には放射割れが生じている。また特殊金属探知機の反応 (L ●) から、内部にまとまった金属鉄が残存する。

b) マクロ組織：第 186 図②～④に示す。中段は断面全体像である。上側の灰色部は鍛冶滓である。また写真下側は金属鉄部である。5% ナイタルで腐食した組織を示した。芯部は比較的炭素量の低い亜共析組織 (C < 0.77%) である。また細長い伸仲状の非金属介在物が複数分布している〔④上側はその拡大〕。熱間で鍛打加工した痕跡と判断される。

一方金属鉄部の外周は高炭素域で、共析組織～亜共晶組成白鉄を呈する〔③および④の下側はその拡大〕。c) 頸微鏡組織：第183図⑨～⑯に示す。⑨は滓部の拡大である。淡灰色柱状結晶ファイアライト（Fayalite: $2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$ ）が晶出する。なお滓部の鉱物組成はe) の項で詳述する。⑩～⑯は金属鉄部の拡大である。⑩～⑬は表層の亜共晶組成白鉄組織、また⑭～⑯は過共析組織、⑭～⑯は共析組織、⑯が亜共析組織部分の拡大である。以上の金属組織から、炭素含有量は0.5～3%程度のばらつきがあると推測される。

d) ピッカース断面硬度：第183図⑪～⑯の金属鉄部の硬度を測定した。硬度値は⑪の亜共晶組成白鉄組織（レデブライト）部分は581 Hv、⑬の過共析組織部分が300 Hv、⑯の共析組織部分は286 Hv、⑭の亜共析組織部分は172 Hvであった。炭素含有量の減少と対応して硬度値も低減しており、それぞれ組織に見合った値といえる。

e) EPMA調査：第188図①に、金属鉄部（高炭素域）に多数分布する、粒状非金属介在物の反射電子像（COMP）を示す。特性X線像を見ると、複数の非金属介在物はすべて、珪素（Si）、磷（P）に反応がある。定量分析値も24が67.7%FeO - 15.8%SiO₂ - 13.2%P₂O₅、25が72.1%FeO - 18.7%SiO₂ - 8.9%P₂O₅、26が72.6%FeO - 17.0%SiO₂ - 10.7%P₂O₅と、いずれも近似した組成であった。酸化鉄と矽珪酸を主成分とする化合物で、遺跡出土鉄塊系遺物中の非金属介在物としてはやや特異である。（ただしその成分系から、鍛接剤の薙灰と金属鉄が高温下で反応して生じた可能性が高いと考えられる。）

また第188図⑤は、金属鉄部（低炭素域）に分布する、展伸状の大型非金属介在物の反射電子像（COMP）である。27の素地部分の定量分析値は58.9%FeO - 31.6%SiO₂で、ファイアライト（Fayalite: $2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$ ）に近い組成といえる。また28の白色粒状結晶の定量分析値は103.1%FeOであった。ウスタイト（Wustite: FeO）に同定される。これは鍛錬鍛治滓とほぼ同じ鉱物組成であり、やはり熱間での鍛冶加工に伴う不純物といえる。

第189図①に、滓部の反射電子像（COMP）を示す。29の暗褐色多角形結晶の定量分析値は50.3%FeO - 49.8%Al₂O₃であった。ヘーシナイ

ト（Hercynite: $\text{FeO} \cdot \text{Al}_2\text{O}_3$ ）に同定される。また30のごく微細な白色樹枝状結晶の定量分析値は60.1%FeO - 19.7%SiO₂ - 12.3%Al₂O₃ - 3.1%CaO - 4.7%K₂O - 1.1%Na₂Oであった。色調や形状から、結晶本体はマグネタイト（Magnetite: Fe₃O₄）と推測される。しかし結晶が非常に微細なため、定量分析値は周囲のガラス質滓の影響を受けた値となった。31の淡灰色柱状結晶の定量分析値は71.9%FeO - 30.2%SiO₂であった。ファイアライト（Fayalite: $2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$ ）に同定される。32の黒色多角形結晶の定量分析値は16.1%K₂O - 59.3%SiO₂ - 24.7%Al₂O₃であった。正長石（Orthoclase: KAIS_3O_8 ）組成の化合物といえる。さらに37の明白白色粒の定量分析値は107.4%Feで、金属鉄（Metallic Fe）と同定される。

f) 所見：当資料の金属鉄部は、芯部が展伸状の非金属介在物を含み、亜共析組織を呈する。一方外周部には粒状の介在物が多数分布しており、炭素含有量は高く共析組織～鉄組織を呈する。以上の特徴から、この金属鉄部はもともと一つのものではなく、炭素含有量の異なる二つの鉄素材（芯部：鍛造鉄器十外周部：鍛（鉄塊）または鍛造鉄器）が、鍛冶炉内で加熱され溶着したものである可能性が高い。

こうした遺物が生じる作業内容として、一つは卸し金（炭素含有量の異なる複数の鉄素材をまとめて、鍛造可能な鉄素材を作る）が考えられる。この場合、本来鉄部分は、より鍛打加工がしやすい状態まで脱炭することを意図していたはずであるが、溶融状態にはなっても十分には脱炭せず、鍛造鉄器と溶着したものと考えられる。（高炭素域に1mm前後のごく微細な気孔が散在することや、粒状の非金属介在物が多数確認されることから、高炭素域が溶融状態になるまで加熱されたことは確実である。）

またもう一つの可能性として、鉄鉄を溶かして鉄素材の表面に塗りつけ硬化処理する、いわゆる湯金（ゆかね）作りを行った可能性も挙げられる。（ただし滓がかなり固着しているので、そうした仕上げに近い段階のものであったかは疑問も残る。）

こうした、当試料の二つの異材が溶着したような特徴は、今まで分析調査が実施された、近代以前の出土鉄関連遺物と比較しても、きわめて稀なものといえる。現時点での断定は困難であり、慎重に検討していく必要があろう。

No 4 : 槌形鍛冶津

a) 肉眼観察：150gの細長い槌形鍛冶津である。表面は広い範囲が黄褐色の土砂で覆われている。津の地の色調は黒灰色を呈す。上面は中央が窪み形状で、下面には長さ1cm前後の木炭痕が多数散在する。側面1面が大きな直線状の破面で、気孔は少なく緻密な津である。

b) 顕微鏡組織：第183図⑧～⑩に示す。⑧中央の明白色部は、津中のごく微細な金属鉄である。5%ナイタルで腐食したところ、炭素をほとんど含まないフェライト（Ferrite: α鉄）単相の組織が確認された。⑨⑩は津部である。淡茶褐色多角形結晶はウルボスピネル（Ulvöspinel: 2FeO·TiO₂）と推測される。白色樹枝状結晶ウスタイト、淡灰色柱状結晶ファイヤライトが晶出する。これは砂鉄を始発原料とする精鍛鍛冶津に、時折り見られる鉱物組成である。

c) ピッカース断面硬度：第183図⑩の淡茶褐色多角形結晶の硬度を測定した。硬度値は668Hvであった。この硬度値から、当結晶はウスボスピネルの可能性が高いと考えられる（注1）。

d) EPMA調査：第189図②に、津部の反射電子像（COMP）を示す。17の淡茶褐色多角形結晶は、特性X線像を見るとチタン（Ti）、バナジウム（V）、酸素（O）に反応がある。定量分析値は64.3%FeO - 17.9%TiO₂ - 7.8%Al₂O₃ - 7.6%V₂O₃ - 2.3%Cr₂O₃であった。スピネル類の化合物ではあるが、純粹なウルボスピネル（Ulvöspinel: 2FeO·TiO₂）組成ではなく、他の元素を相当量含む固溶体（注2）といえる。また18の淡灰色結晶は、特性X線像では珪素（Si）、酸素（O）に強い反応がみられる。定量分析値は47.8%FeO - 36.9%SiO₂ - 7.3%Al₂O₃ - 3.7%CaO - 3.7%K₂Oであった。色調や形状から結晶はファイヤライト（Fayalite: 2FeO·SiO₂）と推測されるが、細かく晶出しているため、周囲のガラス質津部分の影響を受けた値となった可能性が高い。19の白色粒状結晶は、特性X線像では鉄（Fe）、酸素（O）に強い反応がある。定量分析値は94.8%FeO - 4.3%TiO₂ - 1.2%Al₂O₃であった。他の元素を微量固溶する、ウスタイト（Wustite: FeO）と推定される。

e) 化学組成分析：第63表に示す。全鉄分（Total Fe）55.46%に対して、金属鉄（Metallic Fe）2.42%、酸化第1鉄（FeO）39.02%、酸化第2鉄（Fe₂O₃）

32.47%の割合であった。造津成分（SiO₂ + Al₂O₃ + CaO + MgO + K₂O + Na₂O）23.95%で、このうち塩基性成分（CaO + MgO）は2.53%と低値であった。また製鉄原料の砂鉄起源の二酸化チタン（TiO₂）は2.11%、バナジウム（V）が0.19%含まれる。さらに酸化マンガン（MnO）は0.15%、二酸化ジルコニア（ZrO₂）0.04%、銅（Cu）0.01%であった。

f) 所見：当試料は製鉄原料の砂鉄起源の脈石成分（TiO₂、V）の影響が残る。このため、鍛冶原料（製鍛鉄塊系遺物）に付着した不純物を除去する、精鍛鍛冶工程で生じた津と推定される。

No 5 : 槌形鍛冶津

a) 肉眼観察：平面不整梢円状で74gと小型完形の槌形鍛冶津である。表面は広い範囲が黄～茶褐色の土砂で薄く覆われる。津の地の色調は黒灰色である。上下ともと細かい木炭痕が著しい。表面の気孔は少なく、緻密な津である。

b) 顕微鏡組織：第183図21に示す。発達した白色粒状結晶ウスタイト、淡灰色柱状結晶ファイヤライトが晶出する。これは鍛錬鍛冶津に最もよく見られる晶癖といえる。

c) ピッカース断面硬度：第183図21の白色粒状結晶の硬度を測定した。硬度値は433Hvであった。測定時の亀裂の影響か、ウスタイトの文献硬度値450～500Hvより若干下回る値となつたが、ウスタイトの可能性が高い。

d) 化学組成分析：第63表に示す。全鉄分（Total Fe）は61.25%と高値であった。このうち金属鉄（Metallic Fe）は0.33%、酸化第1鉄（FeO）52.74%、酸化第2鉄（Fe₂O₃）28.49%の割合であった。造津成分（SiO₂ + Al₂O₃ + CaO + MgO + K₂O + Na₂O）14.02%で、このうち塩基性成分（CaO + MgO）は1.40%と低値であった。製鉄原料の砂鉄起源の二酸化チタン（TiO₂）は0.12%、バナジウム（V）が<0.01%と低値である。酸化マンガン（MnO）0.06%、二酸化ジルコニア（ZrO₂）0.01%、銅（Cu）も<0.01%であった。

e) 所見：以上の特徴から、当試料は鉄素材を熱間で鍛打加工したときに生じる、鍛錬鍛冶津と推定される。特に酸化鉄の割合が高く、鉄素材の酸化による損失（吹き減り）が大きかったものと考えられる。（ただし、当遺跡の鉄塊の多さを配慮すると、下げ脱炭の精鍛鍛冶の可能性も配慮すべきであろう。）

No.6：鉄塊系遺物

a) 肉眼観察：11gとごく小型の鉄塊系遺物である。黄褐色の土砂に覆われており、表面の状態が判然としないが、全体にごく細かい凹凸がみられる。また表面には木炭破片が付着する。

b) マクロ組織：第186図⑤に示す。中央の暗灰色部は鋳化鉄である。最大厚み6mmの板状、ないしは偏平な楕形を呈する。また鋳化鉄の表面には微細な木炭が複数見られるが、これは廃棄後、二次的に付着した可能性が高い。

c) 顕微鏡組織：第183図22～24に示す。22は表面に付着した木炭破片の拡大である。また23・24は鋳化鉄部である。内部には片状黒鉛の痕跡が残存しており、ねずみ鋳鉄であったことが分かる。

当試料はごく小型のねずみ鋳鉄の破片であった。鍛冶原料であった可能性が考えられる。

No.7：粒状津様遺物

No.7-1 長径 7.8mm

a) 肉眼観察：表面黄褐色の土砂に覆われた、歪な球状の鋳化鉄である。鋳化に伴い表面の一部が欠損しており、内部は大きく空洞化している。特殊金属探知機での反応はない。

b) マクロ組織：第186図⑥に示す。約6mm径の環状の明灰色部が鋳化鉄である。その両側の黒色部は表面に付着した土砂である。

c) 顕微鏡組織：第184図①～③に示す。全体に鋳化が激しく金属組織の痕跡も不明瞭であるが、ごく一部亜共析組織（針状フェライト）のような痕が見受けられる。

No.7-2 長径 2.0mm

a) 肉眼観察：表面黄褐色の土砂に覆われた、やや歪な球状の微細遺物である。付着土砂によって表面の観察が困難であり、これも鋳化鉄粒の可能性が考えられる。着磁性は強いが、特殊金属探知機での反応はない。

b) マクロ組織：第186図⑦に示す。7-1と同様、環状（1.5mm径）の明灰色部が鋳化鉄で、外面に土砂が厚く固着している。また内部は大きく空洞化している。

c) 顕微鏡組織：第184図④に示す。鋳化鉄部の拡大である。金属組織痕跡は残存しておらず、炭素含有量を推測できるような情報は得られなかった。

No.7-3 長径 1.9mm

a) 肉眼観察：表面黄褐色の土砂に覆われた、歪な球状の微細遺物である。地の色調は暗灰色で、細かい凹凸が目立つ。これも鋳化鉄粒の可能性がある。着磁性は強いが、特殊金属探知機での反応はない。

b) マクロ組織：第186図⑧に示す。中心部に上下方向にややつぶれた梢円状（長軸1.8mm、短軸1.0mm）の鋳化鉄部が存在する。その表面には土砂が厚く固着する。

c) 顕微鏡組織：第184図⑤～⑦に示す。鋳化鉄中には、ほぼ全面酸化で侵された白色バーライトと地の黒色レデブライドの亜共晶組成の白鋳鉄組織痕跡が確認された。

d) 所見：分析調査を実施した資料No.7の球状の微細遺物3点は、すべて微細な金属鉄粒が錆びたもの（鉄錆化物）であった。通常、鉄素材を加熱鍛打したときにできる粒状津（注3）は、鍛練鍛治津とは同じ鉱物組成（ウスタイトとマグネタイト）であり、こうした鋳化鉄粒とは異なるものである。

当試料は鍛冶原料の鋳鉄を加熱脱炭して、その表面が溶融状態になって細かく飛散したもの可能性が高い。

No.8：鍛削剥片様遺物

No.8-1 2.7×2.1×0.9mm

a) 肉眼観察：薄板状の微細遺物である。表裏面に細かい剝離痕跡があり、鋳化鉄片の可能性が高い。

b) マクロ組織：第187図①に示す。断面にも多層状の剝離痕跡が残る鋳化鉄片であった。

c) 顕微鏡組織：第184図⑨に示す。内部にセメントタイトの一部がバラ状黒鉛化した斑鋳鉄組織痕跡の残る鋳化鉄片であった。

No.8-2 2.6×1.1×0.5mm

a) 肉眼観察：表面黄褐色の土砂に薄く覆われた、薄板状の微細遺物である。表裏面とも比較的平滑で、鍛削剥片の可能性はある。

b) マクロ組織：第187図②に示す。8-1と同様、断面に多数層状の剝離痕跡が残る鋳化鉄片であった。

c) 顕微鏡組織：第184図⑩～⑪に示す。網目状にセメントタイトの痕跡が残る個所があり、本来過共析組織であったと推測される。

No.8-3 3.2×2.9×0.5mm

a) 肉眼観察：薄板状の微細遺物である。表裏面は比較的平滑であるが、裏面が茶褐色の錆化物に覆われており、鋳化鉄片の可能性が高い。

b) マクロ組織：第187図③に示す。8-1、2と同様、断面に層状の剥離痕跡が残る鋳造鉄片であった。

c) 顕微鏡組織：第184図②に示す。内部には亜共晶組成白鋳鉄組織でレデブライトの痕跡が確認された。

No 8-4 1.9×1.5×0.3mm

a) 肉眼観察：薄板状の微細遺物である。表裏面はやや振れていますが平滑である。全体が薄く茶褐色の鋳造物に覆われており、鋳造鉄片の可能性が高い。

b) マクロ組織：第187図④に示す。素地の黒色部は粘土鉱物で、点在する暗灰色粒はごく微細な砂粒である。

c) 顕微鏡組織：第184図③に示す。マクロ組織の拡大である。当試料は鋳造片でも鋳造鉄片でもなく、土砂であることが確認された。鉄塊系遺物や鉄製品の表面付着土砂が剥離したものとの可能性が高い。

No 8-5 3.9×2.8×0.8mm

a) 肉眼観察：薄板状の微細遺物である。表裏面に細かい凹凸があり、鉄滓または鋳造鉄片の可能性が高い。

b) マクロ組織：第187図⑤に示す。断面に層状の剥離痕跡が残る鋳造鉄片であった。

c) 顕微鏡組織：第184図④～⑥に示す。小型の片状黒鉛とバラ状黒鉛の痕跡が多数残存しており、ねずみ鋳鉄片と推定される。

No 8-6 2.7×2.1×0.5mm

a) 肉眼観察：薄板状の微細遺物である。表裏面とも比較的平滑ではあるが鋳造片の可能性は低い。

b) マクロ組織：第187図⑥に示す。素地の黒色部は粘土鉱物で、点在する暗灰色粒はごく微細な砂粒である。

c) 顕微鏡組織：第184図⑦に示す。当資料も8-4と同様、土砂であることが確認された。やはり鉄塊系遺物や鉄製品の表面付着土砂が剥離したものとの可能性が高い。

d) 所見：分析調査を実施した6点中に、鉄素材を加熱鍛打した時にできる、鉄酸化物の薄膜である鋳造片（注4）は見られなかった。

4点（8-1, 2, 3, 5）は、ごく微細な鋳造鉄片で、鉄塊系遺物または鉄製品の表面が、鋳化に伴い薄く剥離したものと推測される。なお1点は高炭素鋼（過共析組織痕跡）、3点は鋳鉄と、炭素含有量が高い傾向を示す。これは鉄塊系遺物（No 2, 6, 9）とともに共通する特徴といえる。

残る2点（8-4, 6）は土砂であった。上述したように、鉄塊系遺物や鉄製品の表面付着土砂が剥離したものとの可能性が高い。

No 9：鉄塊系遺物

a) 肉眼観察：4gとごく小型で不定形の鉄塊系遺物である。表面全体は黄褐色の土砂に覆われており、鋳化割れも生じている。全体に軽い質感で、特殊金属探知機での反応ではなく、鋳化が進んでいる。

b) マクロ組織：第187図⑦に示す。全体に鋳化が進んでおり、断面には金属鉄が残存していない。また明瞭な滓部はなく、ほぼ鉄主体の遺物であった。

c) 顕微鏡組織：第184図⑧～⑩に示す。⑧は表面に付着した、ごく微細な木炭破片の拡大である。組織中に発達した導管が確認されるため、広葉樹材の木炭と推定される。⑨⑩は鋳化鉄部の拡大である。片状黒鉛が多数残存しており、ねずみ鋳鉄であることが確認できた。

d) 所見：当試料も鉄塊系遺物（No 6）とよく似た、ねずみ鋳鉄の小鉄塊であった。やはり鍛冶原料鉄の可能性が考えられる。

No 10：楕円鍛冶滓

a) 肉眼観察：130gでやや偏平な楕円鍛冶滓である。側面1面が直線状の破面で、本来は梢円形に近い形状と推測される。表面は広い範囲が黄～茶褐色の土砂で薄く覆われている。滓の地の色調は黒灰色である。上面は中央が窪む形状で、下面は浅い皿状を呈する。表面には細かい気孔が部分的に集中するが、全体的には緻密である。

b) 顕微鏡組織：第184図21～24・第185図①に示す。発達した白色粒状結晶ウスタイト、淡灰色柱状結晶ファイヤライトが晶出する。鍛鍊鍛冶滓の品癖といえる。また第184図24・第185図①中央は滓中のごく微細な金属鉄である。5%ナイトルで腐食したところ、フェライト地にパーライトを晶出した亜共析組織が確認された。炭素含有量は0.4%程度と推測される。

c) ピッカース断面硬度：第184図21の白色樹脂状結晶の硬度を測定した。硬度値は467Hvであった。ウスタイトに同定される。

d) 化学組成分析：第63表に示す。全鉄分（Total Fe）51.18%に対して、金属鉄（Metallic Fe）0.11%、酸化第1鉄（FeO）40.24%、酸化第2鉄（Fe₂O₃）28.30%の割合であった。造滓成分（SiO₂ + Al₂O₃ +

$\text{CaO} + \text{MgO} + \text{K}_2\text{O} + \text{Na}_2\text{O}$ は 25.26% で、このうち塩基性成分 ($\text{CaO} + \text{MgO}$) は 1.40% と低値である。製鉄原料の砂鉄起源の二酸化チタン (TiO_2) は 0.20%、バナジウム (V) が < 0.01% と低値であった。また酸化マンガン (MnO) 0.10%、二酸化ジルコニウム (ZrO_2) 0.02%、銅 (Cu) < 0.01% といずれも低い。

e) 所見：当試料は製鉄原料（砂鉄）起源の脈石成分 (TiO_2 , V) の低減傾向が顕著であり、高温沸し鍛接・鍛錬鍛治津に分類される。

No 11：楔形鍛治津

a) 内眼観察：50g とごく小型の楔形鍛治津である。下面の一部が破面。表面は広い範囲で黄～茶褐色の土砂が付着する。津の地の色調は黒灰色である。全体に木炭灰による凹凸が著しい。

b) 顯微鏡組織：第 185 図②～④に示す。②中央は津中のごく微細な金属鉄である。5% ナイタルで腐食したところ、フェライト地に少量のパーライトが晶出した亜共析組織が確認された。炭素含有量は 0.3% 程度と推測される。

また津には、白色粒状結晶ウスタイト、淡灰色柱状結晶ファイヤライトが晶出する。こちらも No. 9 楔形鍛治津と同様に高温沸し鍛接・鍛錬鍛治津の晶癖である。

c) ピッカース断面硬度：第 185 図③の白色粒状結晶の硬度値は 485 Hv であった。ウスタイトに同定される。④の淡灰色盤状結晶は 673 Hv であった。ファイヤライトの文献硬度値 600 ～ 700 Hv の範囲内で、ファイヤライトに同定される。

d) 化学組成分析：第 63 表に示す。全鉄分 (Total Fe) 48.85% に対して、金属鉄 (Metallic Fe) 0.21%、酸化第 1 鉄 (FeO) 45.41%、酸化第 2 鉄 (Fe_2O_3) 19.08% の割合であった。造津成分 ($\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO} + \text{K}_2\text{O} + \text{Na}_2\text{O}$) 31.34% とやや高めであるが、塩基性成分 ($\text{CaO} + \text{MgO}$) は 2.94% と低値である。製鉄原料の砂鉄起源の二酸化チタン (TiO_2) は 0.28%、バナジウム (V) < 0.01% と低い。また酸化マンガン (MnO) 0.10%、二酸化ジルコニウム (ZrO_2) 0.03%、銅 (Cu) 0.02% と、いずれも少ない。

e) 所見：当試料も製鉄原料（砂鉄）起源の脈石成分 (TiO_2 , V) の低減傾向が顕著で、鍛錬鍛治津に分類される。

(4) まとめ (第 64 表)

南側曲輪群から出土した鍛冶関連遺物を分析調査した結果、遺跡内で精錬鍛冶～鍛錬鍛治作業が連続して行われていたことが明らかになった。また鍛鉄塊が多数出土するため、かなりの割合でこうした鍛鉄を脱炭して鍛冶原料としていたと推定される。

詳細は以下の通りである。

〈1〉分析調査を実施した楔形鍛治津 4 点のうち、1 点 (No. 4) は砂鉄起源のチタン (TiO_2) の影響が確認されたため、砂鉄を始発原料とした鉄塊の不純物（製錬滓）除去で生じた、精錬鍛治津と推定される。また残る 3 点 (No. 5, 10, 11) は、チタン (TiO_2) の影響がほとんどなく、鉄素材を熱間で鍛打加工した時に生じた鍛錬鍛治津と推定される。

現在までのところ、宮崎県内では世の中の明瞭な製鉄遺跡は確認されていない。ただし中～南九州地域では、この時期火山岩起源の高チタン砂鉄を製鉄原料として、堅型炉による鉄生産が行われている（注 5）。こうした周辺地域で生産された金属鉄（製錬鉄塊系遺物）が、鍛冶原料であった可能性は考えられよう。

〈2〉分析調査を実施した鉄塊系遺物 (No. 2, 6, 9) は、全体に炭素含有量が高く、一部または全体に鍛鉄組織が確認された。また鍛冶構造から検出した粒状・板状の微細遺物も通常の粒状津～鍛造片ではなく、その大半が鉄化鉄であった。やはり鍛鉄組織が確認されたものが多い。このうち鍛造剝片様遺物 (No. 8 ～ 1 ～ 3, 5) は、鉄塊系遺物の表面が二次的に鉄化剥落した可能性が高いが、粒状津様遺物 (No. 7 ～ 1 ～ 3) は、鍛冶原料の鉄塊を加熱脱炭した時、表面が溶融状態になって細かく飛散した可能性がある。

このような遺物群の特徴から、当遺跡では炭素含有量の高い鐵塊（高炭素鋼～鉄）が主な鍛冶原料であったと推測される（第 64 表）。なお分析調査を実施した遺物中には、鍛造器片は含まれていないが、こうした製品の破片が多数共伴している場合は、その再利用が行われていた可能性も考慮する必要があろう。

〈3〉鉄塊系遺物 (No. 3) は、付着津の鉱物組成から、鍛冶処理途中の遺物と判断される。また前項でも述べたように、金属鉄部は芯部が鍛打痕跡の残る亜共析鋼、表層は脆くて鍛打が困難な鍛鉄組織であった。

これは今まで分析調査が実施された、近代以前の鍛冶遺跡の出土鉄関連遺物と比較しても、きわめて稀な特徴といえる。

この理由として、現時点では①炭素含有量の異なる複数廃鉄器をまとめて鉄素材を作る鉄金作業の途中で生じた。②鉄を溶かして鉄素材の表面に塗りつけ硬化処理する、いわゆる湯金作りを行った。などの可能性が挙げられる。他の鉄塊系遺物は鉄がが多いことも勘案すると、やはり融点が低い鉄の性格を利用した、鍛冶技術が存在していたように見受けられる。

当地域の中世の鍛冶技術を検討するうえで、非常に貴重な事例であり、今後も慎重に検討していく必要があろう。

(注)

(1) 日刊工業新聞社『焼結鉱組織写真および識別法』1968

ウスタイトは450～500 Hv、マグネタイトは500～600 Hv、ファイアライトは600～700 Hvの範囲が提示されている。ウルボスピニルの硬度値範囲の明記はないが、マグネタイトにチタン (Ti) を固溶するので、600 Hv以上であればウルボスピニルと同定している。それにアルミニナ (Al) が加わり、ウルボスピニルとヘーシナイトを端成分とする固溶体となると更に硬度値は上昇する。このため700 Hvを超える値では、ウルボスピニルとヘーシナイトの固溶体の可能性がある。

(2) 黒田吉益・諭訪兼位『偏光顕微鏡と造岩鉱物』[第2版] 共立出版株式会社 1983

第5章 鉱物各論 D. 尖晶石類・スピニル類 (Spinel Group) の記載に加筆

尖晶石類の化学組成の一般式は XY_2O_4 と表記できる。Xは2価の金属イオン、Yは3価の金属イオンである。その組み合わせいろいろの種類のものがある。(略)

(3) 粒状率は鍛冶作業において凹凸を持つ鉄素材が鍛冶炉の中で赤熱状態に加热されて、突起部が溶け落ちて酸化され、表面張力の関係から球状化したり、赤熱鉄塊に酸化防止を目的に塗布された粘土汁が酸化膜と反応して、これが鍛打の折に飛散して球状化した微細な遺物である。

(4) 鍛造剝片とは鉄素材を大気中で加热、鍛打したとき、表面酸化膜が剥離、飛散したものを指す。俗に鉄肌(金肌) やスケールとも呼ばれる。鍛冶工程の進行

により、色調は黒褐色から青味を帯びた銀色(光沢を発する)へと変化する。粒状率の後継派生物で、鍛打作業の実証と、鍛冶の段階を押える上で重要な遺物となる(注6)。

この鍛造剝片や粒状率は極めて微細な鍛冶派生物であり、発掘調査中に土中から肉眼で識別するのは難しい。通常は鍛冶跡の床面の土砂を水洗することにより検出される。鍛冶工房の調査に当っては、鍛冶炉を中心メッシュを切って土砂を取り上げ、水洗選別、秤量により分布状態を把握できれば、工房内の作業空間配置の手がかりとなりうる重要な遺物である(注7)。

鍛造剝片の酸化膜相は、外層は微厚のヘマタイト ($Hematite : Fe_2O_3$)、中間層マグネット (Magnetite : Fe_3O_4)、大部分は内層ウスタイト (Wustite : FeO) の3層から構成される。このうちのヘマタイト相は1450°Cを越えると存在しなく、ウスタイト相は570°C以上で生成されるのは $Fe - O$ 系平衡状態図から説明される(注8)。

鍛造剝片を王水(塩酸3:硝酸1)で腐食すると、外層ヘマタイト ($Hematite : Fe_2O_3$) は腐食しても侵されず、中間層マグネット (Magnetite : Fe_3O_4) は黄変する。内層のウスタイト (Wustite : FeO) は黒変する。

鍛打作業前半段階ではウスタイト (Wustite : FeO) が粒状化を呈し、鍛打仕上げになると非晶質化する。鍛打作業工程のどの段階が行われていたか推定する手がかりともなる。

(5) 鈴木瑞穂「九州各地の砂鉄と製鉄技術の関わりについて」『九州の古代から近代の製鉄技術発達史 社会鉄鋼工学部会 2008年度秋季講演大会シンポジウム論文集』(社)日本鉄鋼協会学会部門社会鉄鋼工学部会 2008

(6) 大澤正己「房総風土記の丘実験試料と発掘試料」『千葉県立房総風土記の丘 年報15』(平成3年度) 千葉県房総風土記の丘 1992

(7) 大澤正己「奈良尾遺跡出土鍛冶関連遺物の金属学的調査」『奈良尾遺跡』(今宿バイパス関連埋蔵文化財調査報告書 第13集) 福岡県教育委員会 1991

(8) 森岡進ら「鉄鋼腐食科学」「鉄鋼工学講座」11 朝倉書店 1975

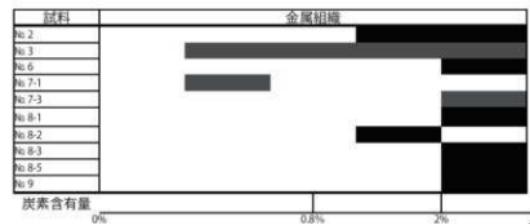
第62表 南側曲輪群出土鍛冶関連遺物の計測値と調査項目

※ メタル窓は特殊金属探知機の反応を示す。

試料	測定番号	地区	出土位置	遺物名	推定年代	計測値		メタル窓	調査項目					
						大きさ (mm)	重量 (g)		マグロ	鋼鐵類	ヒート・セラミック	EPMA	化学分析	耐火度
No.1	915	SG1-3	—	炉壁	中世	66 × 62 × 38	99	なし	○	○	○	○	○	○
No.2	926		—	鉄塊系遺物		29 × 23 × 15	13	H (●)	○	○	○	○	○	○
No.3	925		倒溝	鉄塊系遺物		45 × 33 × 25	57	L (●)	○	○	○	○	○	○
No.4	924		倒溝	楕円窯冶津		104 × 50 × 28	150	なし	○	○	○	○	○	○
No.5	927		—	楕円窯冶津		65 × 41 × 24	74	なし	○	○	○	○	○	○
No.6	918		SA2 内 SC1	鉄塊系遺物		32 × 30 × 13	11	鈍化 (△)	○	○	○	○	○	○
No.7	—	曲輪 M	SA2 + SC1	粒状滓焼物	—	—	—	なし	○	○	○	○	○	○
No.8	—		SA2 + SC1	鍛造片焼物		—	—	なし	○	○	○	○	○	○
No.9	919		SA2	鉄塊系遺物		22 × 17 × 15	4	鈍化 (△)	○	○	○	○	○	○
No.10	932		—	楕円窯冶津		68 × 64 × 18	133	なし	○	○	○	○	○	○
No.11	933		—	楕円窯冶津		50 × 39 × 26	50	なし	○	○	○	○	○	○

第63表 試料の化学組成

試料	遺物名	元素分析										酸素含有量	燃焼性	二酸化炭素生成量	耐火度	温度(T)								
		全鉄 (% Fe)	酸素 (% O)	鉄 (% Fe)	錫 (% Sn)	銅 (% Cu)	錫 (% Sb)	鉄 (% Fe)	錫 (% Sn)	銅 (% Cu)	錫 (% Sb)													
No.1	炉壁	26.5	0.11	0.65	29	63.70	17.06	194	0.86	386	423	0.12	<0.01	<0.01	0.14	1.6%	<0.01	<0.01	0.05	1107	91.04	34.355	0.245	
No.4	明礬岩	55.46	2.42	39.02	32.47	15.67	4.08	1.86	0.67	144	0.23	0.15	211	0.05	0.13	0.24	0.18	0.19	0.01	0.04	-	23.95	0.432	0.038
No.5	明礬岩	61.25	0.33	52.74	28.49	9.80	2.14	0.86	0.54	0.55	0.13	0.08	0.12	0.03	0.041	0.29	0.28	<0.01	<0.01	0.01	-	14.02	0.229	0.002
No.10	明礬岩	51.18	0.11	40.24	28.30	18.67	4.01	0.82	0.58	0.93	0.25	0.10	0.20	0.02	0.052	0.29	0.22	<0.01	<0.01	0.02	-	25.29	0.494	0.004
No.11	明礬岩	48.85	0.21	45.41	19.08	20.89	5.56	2.12	0.82	153	0.43	0.10	0.28	0.03	0.043	0.28	0.22	<0.01	0.02	0.03	-	31.34	0.642	0.006

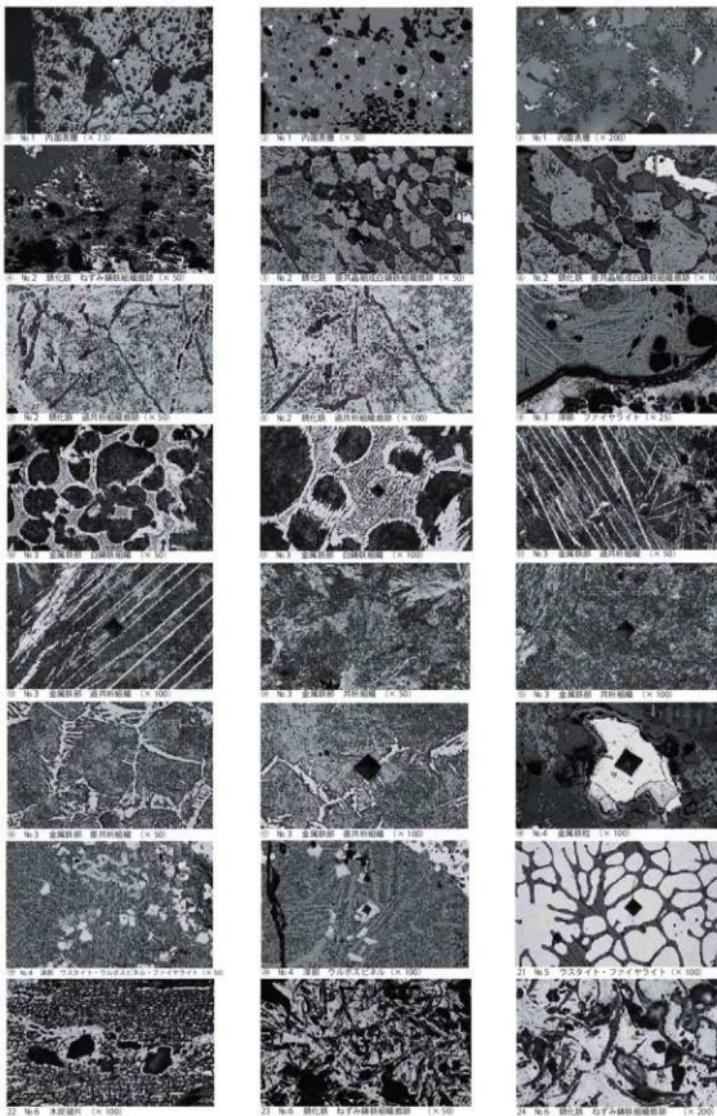


第182図 鉄塊系遺物の断面金属組織観察結果

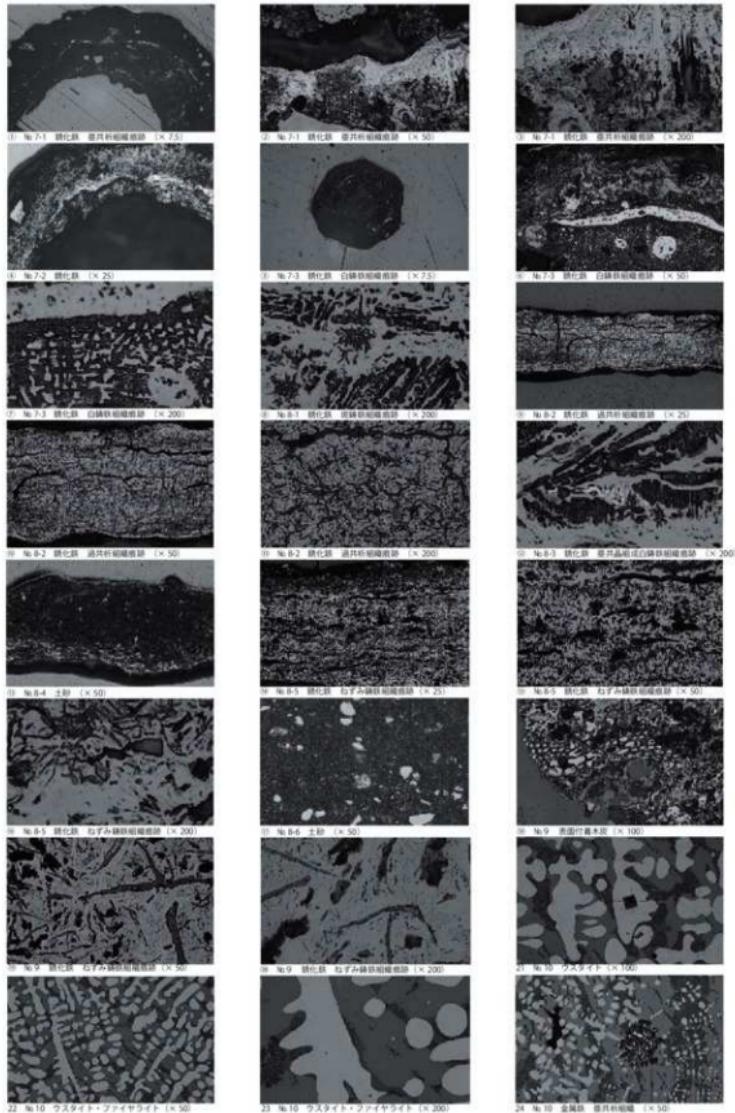
第64表 分析の結果一覧表

剖面	遺物名称	顕微鏡組織		化学組成(%)						所見	
		FE	FE ₂ O ₃	Mn	Si	TiO ₂	V	MnO	CaO		
No.1	炉壁	26.9	2.91	2.83	0.65	<0.01	0.12	91.04	<0.01	0.04	炉壁: 鋼鐵系組織 (Fe, Mn, Si, CaO, V, MnO, TiO ₂ , Fe ₂ O ₃)。中の層: 鋼鐵系組織 (Fe, Mn, Si, CaO, V, MnO, TiO ₂ , Fe ₂ O ₃)。外側: 鋼鐵系組織 (Fe, Mn, Si, CaO, V, MnO, TiO ₂ , Fe ₂ O ₃)。
No.2	鉄塊系遺物	—	—	—	—	—	—	—	—	—	白鍛鐵組織 (Fe, Mn, Si, CaO, V, MnO, TiO ₂ , Fe ₂ O ₃)。
No.3	鉄塊系遺物	—	—	—	—	—	—	—	—	—	白鍛鐵組織 (Fe, Mn, Si, CaO, V, MnO, TiO ₂ , Fe ₂ O ₃)。
No.4	楕円窯冶津	55.46	32.47	2.53	2.11	0.19	0.15	23.95	0.05	0.04	白鍛鐵組織 (Fe, Mn, Si, CaO, V, MnO, TiO ₂ , Fe ₂ O ₃)。外側: 鋼鐵系組織 (Fe, Mn, Si, CaO, V, MnO, TiO ₂ , Fe ₂ O ₃)。内側: 鋼鐵系組織 (Fe, Mn, Si, CaO, V, MnO, TiO ₂ , Fe ₂ O ₃)。
No.5	楕円窯冶津	61.25	28.49	1.40	0.12	<0.01	0.06	14.02	<0.01	0.02	白鍛鐵組織 (Fe, Mn, Si, CaO, V, MnO, TiO ₂ , Fe ₂ O ₃)。
No.6	鉄塊系遺物	—	—	—	—	—	—	—	—	—	白鍛鐵組織 (Fe, Mn, Si, CaO, V, MnO, TiO ₂ , Fe ₂ O ₃)。
No.7	鐵化鉄: 鋼鐵系組織	—	—	—	—	—	—	—	—	—	鐵化鉄: 鋼鐵系組織 (Fe, Mn, Si, CaO, V, MnO, TiO ₂ , Fe ₂ O ₃)。
No.8	鐵塊系遺物	—	—	—	—	—	—	—	—	—	白鍛鐵組織 (Fe, Mn, Si, CaO, V, MnO, TiO ₂ , Fe ₂ O ₃)。
No.9	鉄塊系遺物	—	—	—	—	—	—	—	—	—	白鍛鐵組織 (Fe, Mn, Si, CaO, V, MnO, TiO ₂ , Fe ₂ O ₃)。
No.10	楕円窯冶津	51.18	28.30	1.40	0.20	<0.01	0.12	9.50	25.29	<0.01	白鍛鐵組織 (Fe, Mn, Si, CaO, V, MnO, TiO ₂ , Fe ₂ O ₃)。
No.11	楕円窯冶津	48.85	19.08	2.94	0.28	<0.01	0.16	31.34	0.642	<0.01	白鍛鐵組織 (Fe, Mn, Si, CaO, V, MnO, TiO ₂ , Fe ₂ O ₃)。

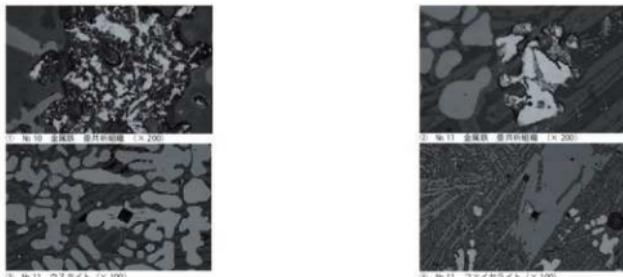
M : Magnetite (Fe₃O₄), Hematite (Fe₂O₃), Fayalite (2Fe₂O₃·SiO₂), Uvöspinel (2FeO·TiO₃), W : Wustite (FeO)



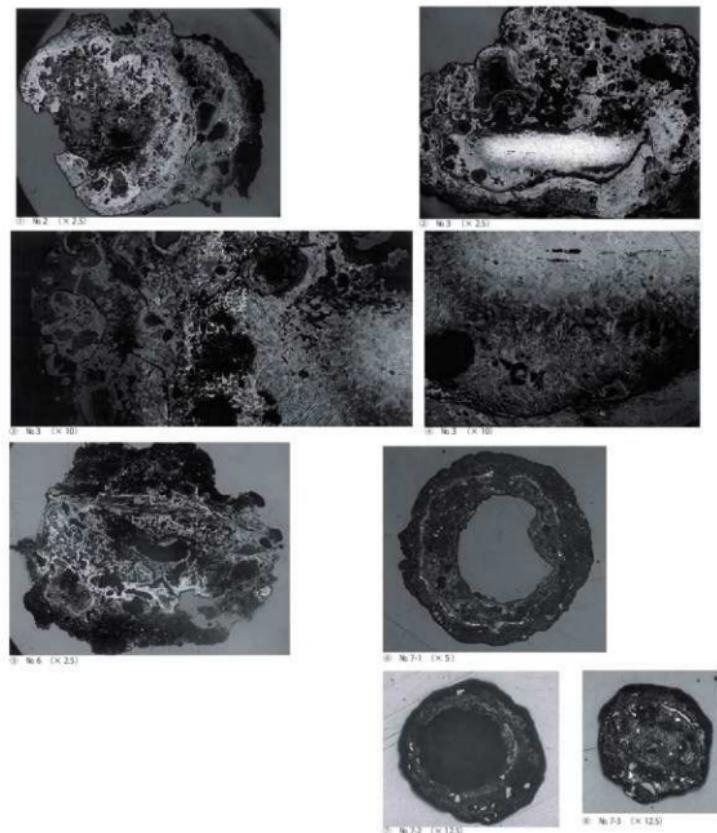
第 183 図 金属分析試料の顕微鏡組織写真 (1)



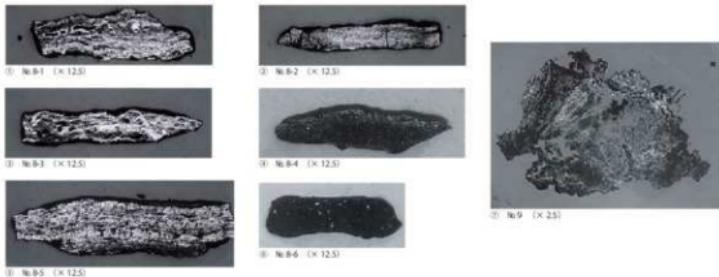
第184図 金属分析試料の顕微鏡組織写真(2)



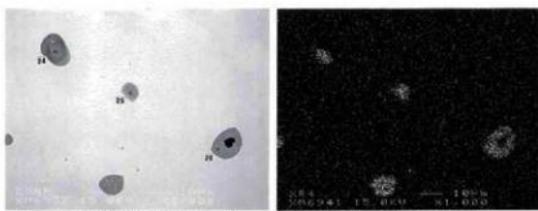
第185図 金属分析試料の顕微鏡組織写真(3)



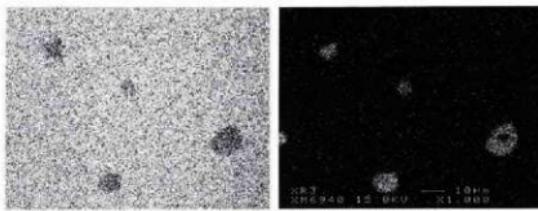
第186図 金属分析試料のマクロ組織写真(1)



第 187 図 金属分析試料のマクロ組織写真 (2)



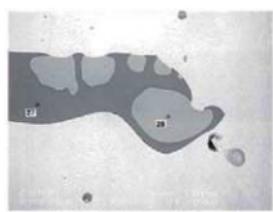
(1) No. 3 金属鉱物 構造鉱金属介在物の反射電子像 (x800) (2) No. 3 構造鉱金属介在物の特性X線像 (Si) (x800)



(3) No. 3 構造鉱金属介在物の特性X線像 (Fe) (x800) (4) No. 3 構造鉱金属介在物の特性X線像 (P) (x800)

Element	24	25	26
F	-	-	-
K ₂ O	1.217	1.362	0.947
Na ₂ O	0.000	0.193	0.016
CuO	0.056	-	-
MgO	0.482	0.506	0.468
CaO	0.540	0.746	0.348
Al ₂ O ₃	4.444	3.377	3.377
FeO	87.881	72.134	72.632
SiO ₂	18.857	18.599	17.019
TiO ₂	0.046	0.118	0.187
S	0.000	0.193	0.129
As	0.186	0.103	0.126
Al ₂ O ₃	0.025	0.069	0.003
As ₂ O ₃	13.193	8.368	10.721
ZnO	0.019	-	0.117
Cr ₂ O ₃	0.048	0.074	0.037
V ₂ O ₅	-	0.096	0.172
Total	101.114	887.669	105.522

No. 3 構造鉱金属介在物の定量分析値

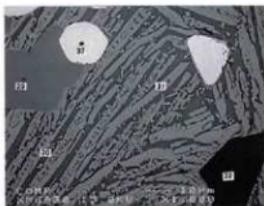


(5) No. 3 金属鉱物 大型鉱金属介在物の反射電子像 (x800)

Element	27	28
F	-	-
K ₂ O	1.814	-
Na ₂ O	0.215	0.063
CuO	0.014	0.020
MgO	0.056	0.231
CaO	0.059	-
Al ₂ O ₃	7.128	0.493
FeO	98.815	103.951
SiO ₂	31.838	0.371
TiO ₂	0.012	0.001
S	0.282	0.005
MnO	0.079	0.060
As ₂ O ₃	-	0.020
ZnO	-	2.741
Cr ₂ O ₃	-	0.010
V ₂ O ₅	-	0.029
Total	104.146	104.908

No. 3 大型鉱金属介在物の定量分析値

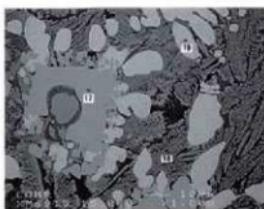
第 188 図 金属分析試料の EPMA 調査写真 (1)



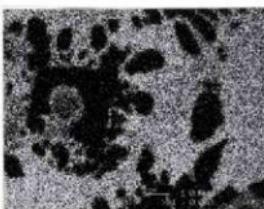
(3) No.3 深部の反射電子像 ($\times 800$)

Element	Si	Al	Mg	Ca
P	-	-	-	-
K ₂ O	0.004	4.717	0.047	0.000
Na ₂ O	0.032	-	0.101	0.024
CaO	-	-	0.048	0.001
MgO	0.001	-	1.287	0.130
CaO	-	-	2.009	-
MgO	0.035	12.007	0.030	24.000 Element
Al ₂ O ₃	0.002	-	7.113	0.000
SiO ₂	0.014	10.730	32.219	83.200
FeO	1.205	-	0.749	-
Cr ₂ O ₃	-	0.000	-	0.001 Ca
Al ₂ O ₃	-	0.101	0.140	-
CaO	0.004	0.004	0.001 Ti	0.002
Al ₂ O ₃	0.002	-	0.001 Al	0.001
Cr ₂ O ₃	0.077	-	0.014	0.001
Y ₂ O ₃	0.000	0.007	-	-
Total	100.000	102.420	100.000	102.200 Total

No.3 深部の定量分析値



(3) No.4 深部の反射電子像 ($\times 800$)



(3) No.4 深部の特性X線像 (Si) ($\times 800$)



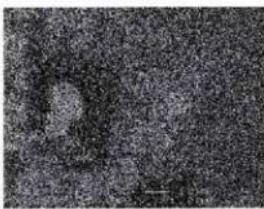
(3) No.4 深部の特性X線像 (Fe) ($\times 800$)



(3) No.4 深部の特性X線像 (Al) ($\times 800$)



(3) No.4 深部の特性X線像 (Mg) ($\times 800$)



(3) No.4 深部の特性X線像 (Ca) ($\times 800$)



(3) No.4 深部の特性X線像 (V) ($\times 800$)

Element	17	18	19
P	-	-	-
K ₂ O	0.012	3.655	0.043
Na ₂ O	-	0.524	-
CuO	-	0.004	-
MgO	0.272	0.947	0.115
SiO ₂	0.034	3.734	0.060
Al ₂ O ₃	7.069	7.299	1.216
FeO	64.288	47.823	34.810
SiO ₂	0.181	34.895	0.482
TiO ₂	17.903	0.766	4.299
S	-	-	-
MnO	0.138	0.287	0.132
As ₂ O ₃	0.021	0.046	0.027
ZrO ₂	-	0.142	0.025
Cr ₂ O ₃	-	0.040	-
Y ₂ O ₃	2.346	-	0.180
V ₂ O ₃	7.108	0.128	0.032
Total	100.043	102.255	102.291

No.4 深部の定量分析値

第189図 金属分析試料のEPMA調査写真(2)

第6節 近世人骨の鑑定

南側曲輪群で検出された近世墓からは、人骨が出土している。この節では、その分析結果について述べる。

2002年実施の中山遺跡の発掘調査では28基の近世墓が検出され、13体の人骨が出土した。体数が多いが、保存状態は1例を除いてあまり良くなかった。頭蓋の保存状態が悪く、頭型や顔面の特徴を知ることはできなかったが、男性の四肢骨は太く、上腕骨と脛骨は扁平で、大腿骨は粗線や骨体の後方への発達も良好であった。またこの逞しい男性は僧侶だったことが推測されており、職種と身体的特徴との関連を探る上では貴重な資料となった。

1 出土人骨の年齢・性別

本遺跡からは3基の近世墓から3体の人骨が検出された。3体のとも成人骨で、2体は女性骨であったが、残りの1体は性別を明らかにできなかった。出土人骨の性別・年齢は第65表のとおりである。年齢区分を第66表に示した。

なお、本人骨は、墓の形態や副葬品などの考古学的所見から、近世に属する人骨である。

下肢の姿勢については第67表を参照されたい。通常、近世墓の墓坑の形態には方形、長方形、円形がみられるが、本遺跡では方形のみで、円形プランは存在しなかった。

2 出土人骨についての所見

① G-SD1 人骨 (性別・年齢不明)

墓坑の形態は方形。埋葬姿勢は不明。残存していたのは左右不明の上肢骨の一部に過ぎない。頭蓋は残存していないかったが、墓坑内で上肢骨が検出された位置から推測して、頭蓋は北西に位置していたようである。性別・年齢は不明である。

② G-SD2 人骨 (女性・年齢不明)

G-SD1のすぐ北西に位置する。墓坑の形態は方形。残存していたのは頭蓋と左右不明の大腿骨のみである。頭蓋の位置は北西。大腿骨は後面が上を向いた状態で検出されたことから、埋葬姿勢は仰臥で、大軀を腹部にのせた姿勢で埋葬されていたものと思われる。脛骨は残存していないかったが、膝関節は強屈状態であったと推測される。

遊離歯を歯式で示した。

／＼ 6 ／＼ ／＼ ／＼ 5 ／＼ ／＼

／＼ 6 5 ／＼ ／＼ ／＼ ／＼ ／＼

(●:歯槽閉鎖 ○:歯槽開存 ／:不明 △:先天性欠損 番号は歯種)

(1:中切歯、2:側切歯、3:犬歯、4:第一小臼歯、5:第二小臼歯、6:第一大臼歯、7:第二大臼歯、8:第三大臼歯)

咬耗度はBrocaの1(咬耗がエナメル質のみ)～2度(咬耗が部分的に象牙質まで及ぶ)である。歯の径はかなり小さい。

大腿骨の径が小さいことから性別を女性と推定した。年齢は不明である。

③ K-SD5 人骨 (女性・壯年)

a) 出土状態と埋葬姿勢

墓坑は方形で、かなり大きい。頭蓋の位置は北。埋葬姿勢は仰臥で、膝関節は屈曲状態であった。残存していたのは、頭蓋、左右の上腕骨、右側の寛骨、左右の大腿骨と脛骨、右側の腓骨である。上腕骨はほとんど痕跡状態で、泥化していた。右側膝関節は約60度に屈曲し、左側に倒れていた。左側膝関節も約60度に曲げられ、左側に倒れていたが、膝は床からやや高い位置にあった。

なお、墓坑の四隅から釘が検出されていることから、被葬者は木棺(箱棺)に納められて埋葬されたものと思われる。頭頂部や頭蓋の周辺から銅製金具も出土しており、副葬品として銅鏡(寛永通宝)も見つかっている。

なお、本墓坑はかなり大きい。近世墓でこれほど大きい墓坑はこれまで見たことがない。副葬品が多いこと銅製金具に金メッキが施されていることと墓坑が大きいことはこの被葬者の所属する階層がかなり高かったことを示唆している。

b) 人骨の形質

取り上げが可能だった頭蓋は、前頭骨、左右の側頭骨、左右の頭頂骨の一部、上頸骨の一部である。前頭鱗は垂直に立ち上がり膨隆している。乳様突起はやや大きい。左右の外耳道の観察が可能であったが、骨腫は存在しない。現場で観察したところ、鼻骨はやや降り、鼻根部は挾かった。ラムダ縫合の右側部分が観察できたが、おそらく内外両板とともにまだ開離していたようである。

歯が残存していたが、原形を保って取り上げることはできなかった。取り上がったのは歯冠のみである。残存していた歯冠を歯式で示した。

/ 7 6 5 // / / / / 4 5 6 7 8
8 7 / 5 4 // / / / 4 5 6 7 /
●：歯槽閉鎖 ○：歯槽開存 /：不明 △：先天性欠損、番号は術種)
〔1：中切歯、2：側切歯、3：犬歯、4：第一小白歯、5：第二小白歯、6：第一大臼歯、7：第二大臼歯、8：第三大臼歯〕

歯冠の径は小さい。咬耗度は Broca の 1 度(咬耗がエナメル質のみ)である。

四肢骨のうち、かろうじて取り上げることができ、比較的原形を保っていたのは左側の大脛骨のみである。内側を欠いているので骨体の計測はできない。残存部分から推測すれば長さはかなり短いようであるが、矢状径が横径よりも大きく、骨体は後方へよく発達している。

人骨を取り上げる際に右側寛骨の大坐骨切痕部を観察することができたが、この角度は大きい。

大坐骨切痕の角度が大きいので、性別を女性と推定した。年齢は観察できたラムダ縫合がまだ内外両板とも開闊していたようなので、壮年と思われる。

3 紹要

今回出土した人骨の保存状態は必ずしも良好なものではなかったが、現場での埋葬姿勢や人骨の人類学的観察をおこない、以下の所見を得た。

- ① 人骨は成人骨 3 体で、そのうち 2 体は女性骨、残りの 1 体は性別を明らかにできなかった。
- ② 本人骨は考古学的所見から近世に属する。
- ③ 墓坑の形状は方形で、理葬施設は木棺(箱棺)であった。埋葬姿勢が判明したのは 2 体のみであるが、2 体とも埋葬姿勢は仰臥で、1 体は大脛を腹部にのせた姿勢、もう 1 体は膝関節を約 60 度に曲げて下肢を左側に倒した状態であった。
- ④ 頭蓋の保存状態が悪く、頭型や顔面の形態は不明だが、鼻根部は挾く、鼻骨はやや隆起していた。
- ⑤ 大脛骨は短く、骨体の後方へ発達は良好である。

今回の調査で出土した人骨は体数が少なく、形質的特徴を知ることができなかつたが、1 基(K-SD5)は墓坑も大きく、副葬品も持っており、被葬者の形質が注目された。残念ながら頭型や顔面の特徴は知ることができなかつたが、大脛骨は短いものの、骨体の後方への発達は良好であった。この例は大坐骨切痕の角度から女性骨と思われるが、副葬品から社会的階層が高かったことが予想される。北九州での

近世人骨の調査と研究で、武家層では女性でも身体がよく鍛えられていたことがわかっている。今回出土した女性の大脛骨はきゃしゃではなく、むしろ頑丈なものであり、少なくとも下半身はよく鍛えられていたようである。この地域の近世社会の実態がわかつてくれれば、被葬者の階層と身体的特徴との関連が明らかになると期待したい。

なお、宮崎県での近世人骨の出土例は、宮崎学園都市堂地東遺跡(松下・他、1982)、小林市水落遺跡(佐伯・他、1992)、高鍋町野首第 1 遺跡(松下、2007)、延岡市吉野遺跡(松下、2007)、中山遺跡(松下・他、2004)の調査・報告例の他に宮崎市納屋向遺跡の例があるに過ぎない。

参考文献

- Takayuki MATSUSHITA, Masumi MATSUSHITA : The Dogo-gome Site Anthropological Museum [土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム]
松下孝幸・他 1982 : 宮崎学園都市堂地東遺跡出土の近世人骨。宮崎学園都市埋蔵文化財調査概報(Ⅲ) : 47-55。
松下孝幸 1997 : 宮崎県の古人骨。宮崎県史・通史編 原始古代 1 : 784-794。
松下孝幸・他 2004 : 宮崎県日向中山遺跡出土の近世人骨。中山遺跡(宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 93 集) : 49-68。
松下孝幸 2007a : 宮崎県延岡市吉野第 2 遺跡出土の近世人骨。吉野第 2 遺跡(一般国道 10 号延岡都留線に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 3)(宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 155 集) : 160-163。
松下孝幸 2007b : 宮崎県高鍋町野首第 1 遺跡出土の近世人骨。野首第 1 遺跡 II(東九州自動車道(都農→西都原)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 50)(宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 157 集) : 191-195。
松下孝幸・他 2008 : 山口県柳井市吉毛遺跡の埋葬姿勢。(複印中)
佐伯和信・他 1992 : 宮崎県小林市水落遺跡出土の近世人骨。小林市文化財報告書第 5 集 : 付篇 1-20。

第 65 表 出土人骨一覧

人骨番号	性別	年齢	埋葬姿勢	下肢の姿勢	墓坑の形態	遺構	頭位
G-SD1	不明	不明	不明	不明	方形	不明	北東
G-SD2	女性	不明	仰臥	仰臥屈曲 I d	方形	不明	北東
K-SD5	女性	壯年	仰臥	仰臥屈曲 I b	方形	箱棺	北

第 66 表 人骨分析における年齢区分

未成人	年齢区分	年齢	
	乳児	1歳未満	
	幼児	1歳～5歳	(第一大臼歯萌出直前まで)
	小児	6歳～15歳	(第一大臼歯萌出から第二大臼歯萌出完成まで)
	成年	16歳～20歳	(蝶形頭軟骨結合融合まで)
成人	壮年	21歳～39歳	(40歳未満)
	熟年	40歳～59歳	(60歳未満)
	老年	60歳以上	

注) 成年という用語については土井・浜田・第 14 次貝塚調査報告書 (1996) を参照されたい。

第 67 表 埋葬姿勢の様式

頭部の姿勢	膝間筋の角度	下肢骨の立・倒	形式
			仰臥
仰臥	伸展	立膝	仰臥伸展
		左右一方に倒す	仰臥屈曲 I a
		左右別々に倒す	仰臥屈曲 I b
		下肢を腹面に載せる (注 2)	仰臥屈曲 I c
		立膝	仰臥屈曲 I d
	屈曲 (鋭角)	立膝	仰臥屈曲 II a
		左右一方に倒す	仰臥屈曲 II b
		左右別々に倒す	仰臥屈曲 II c
	屈曲 (鈍角)	立膝	仰臥屈曲 III a
		左右一方に倒す	仰臥屈曲 III b
		左右別々に倒す	仰臥屈曲 III c
側臥	強屈		側臥屈曲 I
	屈曲 (鋭角)		側臥屈曲 II
	屈曲 (鈍角)		側臥屈曲 III
坐位	強屈	立膝	坐位屈曲 I a
		左右一方に倒す	坐位屈曲 I b
		左右別々に倒す	坐位屈曲 I c
		下肢を腹面に載せる (注 2)	坐位屈曲 I d
		正坐	坐位屈曲 I e
	屈曲 (鋭角)		坐位屈曲 II
			坐位屈曲 III
伏臥	伸展		伏臥伸展
	強屈		伏臥屈曲 I

注 1 : 強屈というのは大腿骨と脛骨が接するほど曲げた状態

注 2 : 踵は地面に着いていない。

強屈状態の時は踵と尻が接するぐらい近づくので、骨盤と下部腰椎は寝た状態（仰臥）になる。

坐位屈曲 I d の下半身は仰臥屈曲 I d の同じ姿勢だが、上半身が立っているので、坐位とする。

第VIII章 総括

第VIII章では、塩見城跡全体構造の把握に必要な縄張り図の調査記録（第VII章第1節）と若山浩章氏による塩見城跡の歴史的位置を考察した文献史学的成果（第2節）を踏まえたうえで、遺物・遺構の様相と遺構の変遷を検討（第3節）したうえで、現時点における発掘調査成果の総括とする（第4節）。

第1節 塩見城跡の縄張り

塩見城跡の縄張り図は、既に図化・公表されている（宮崎県教委1990・宮崎県埋蔵文化財センター2006）。これら先行の縄張り図に発掘調査の成果や現地踏査の結果等を加筆し、新たに作成した（第191図）。

塩見城跡の立地 塩見城跡は、戸高山から塩見川に突き出た山塊上に立地する。城の東西は小河川と湿地帯（水田面）、北は険しい山地形、南は塩見川とその氾濫原に接する。自然の障壁を巧みに利用して防御性を高めた位置取りとなる。さらに、城の南端は入郷地域（旧東郷町・東臼杵郡美郷町）に至る山陰街道に面し、交通の要衝ともなる。

塩見城の周辺 塩見城周辺には中世城館跡やその存在が想定される地名が残る。塩見城跡に程近い位置に正法寺や栗尾神社が所在する低丘陵があり、そこには塩見城成立以前の城館である「塩見之城」の存在が推定されている（『日向市史』2010）。この低丘陵の周囲は、「田淵」「十田」の小字の如く湿田が取り巻いている。また、館や防衛的な屋敷地の意である「団（かこ）イ」の小字も現存する。

また、巨視的に見渡すならば、塩見城から東側2kmに石櫃山、西側約1.7kmの地点に高平城が位置するので（第2図）、塩見川北岸に沿った中世城館の横軸の相互関係が読み取れる。

城域の範囲 塩見城跡の城域は、その東端を現在の城山墓地公園の入り口付近とすると、南北0.5km、東西0.6kmの範囲（約30万m²）と考えられる。

全体構造 塩見城跡の中心に位置する不整形な三角形状の平坦面（標高約70m）は主郭と見なされ、現在の城山公園にあたる。この主郭から東・西・南側に展開する曲輪群を便宜的に「東側曲輪群」、「西側曲輪群」、「南側曲輪群」と区分する。

東側曲輪群は水月寺や城山墓地公園付近、西側曲輪群は東川に面した丘陵と谷地形、南側曲輪群は

主郭より南側に広がる丘陵上の曲輪群とする。

このように塩見城跡は、その主郭から放射状に延びる尾根線上に数段にわたる曲輪を設ける構造であり、あたかも主郭を頂点として扇を開いたように各曲輪群が展開する。

主郭の構造 この主郭の最高所は、土壘で「コ」の字形に取り囲まれている。この土壘は主郭の東側縁に沿って延伸するが、取り付け道路により切断されるなど部分的に残存している。

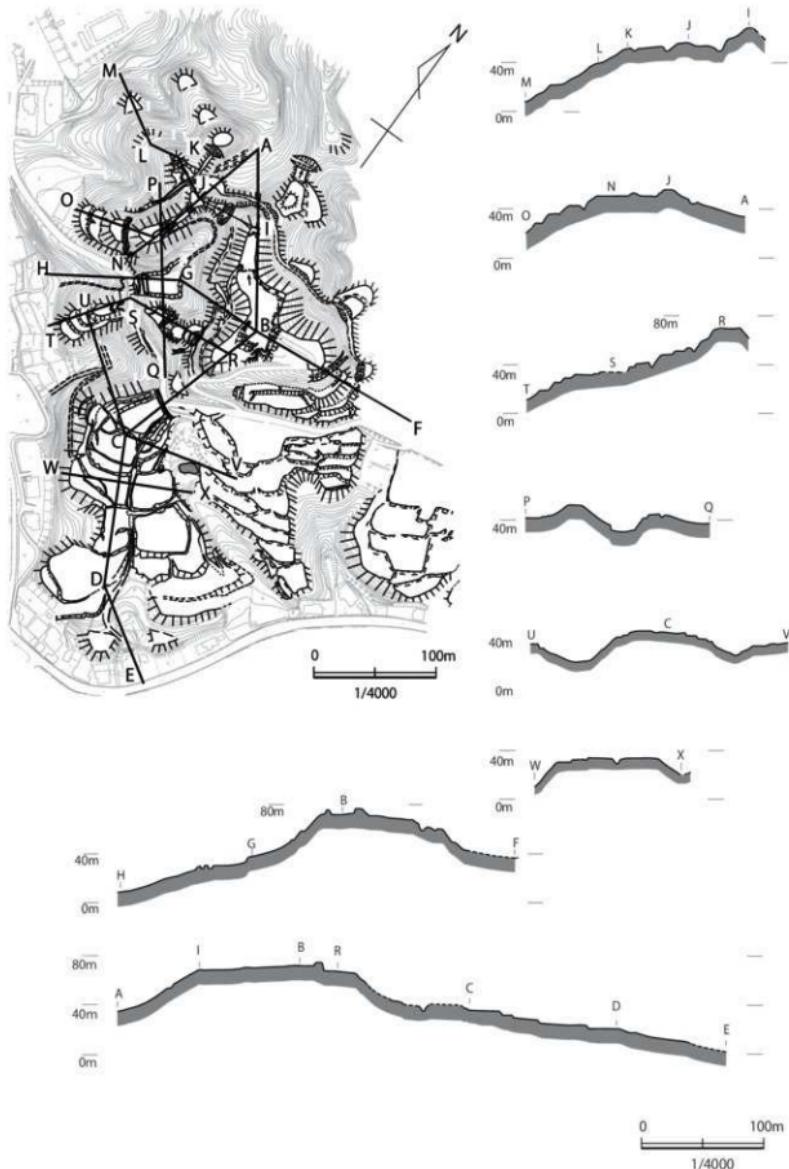
土壘の南面には、虎口部が1箇所確認された。現状では2箇所の出入り口が認められるが、本来の姿は食い違い虎口にスロープが付設された形態か、外側形と推定される（第191図下段）。さらに虎口部の両側には土壘の張り出し等が認められるので、虎口部両側に櫓台の存在を想定できる。また、主郭の北端に位置する東西7m、南北5mの幅の狭い方形台状の高まりも櫓台と考えられる。

一方、主郭西縁のやや北よりの部分では、城戸状の開口部が確認された。この開口部から南に斜面を下ると石組のある狭い平坦面に行き着く。この石組からは曲輪A・B方向に向かう通路面や細長い帯曲輪が接続するので、石組のある平坦面（曲輪面）は「虎口受け」と考えられ、虎口受けから曲輪A・B方向に分岐するルートが想定される。

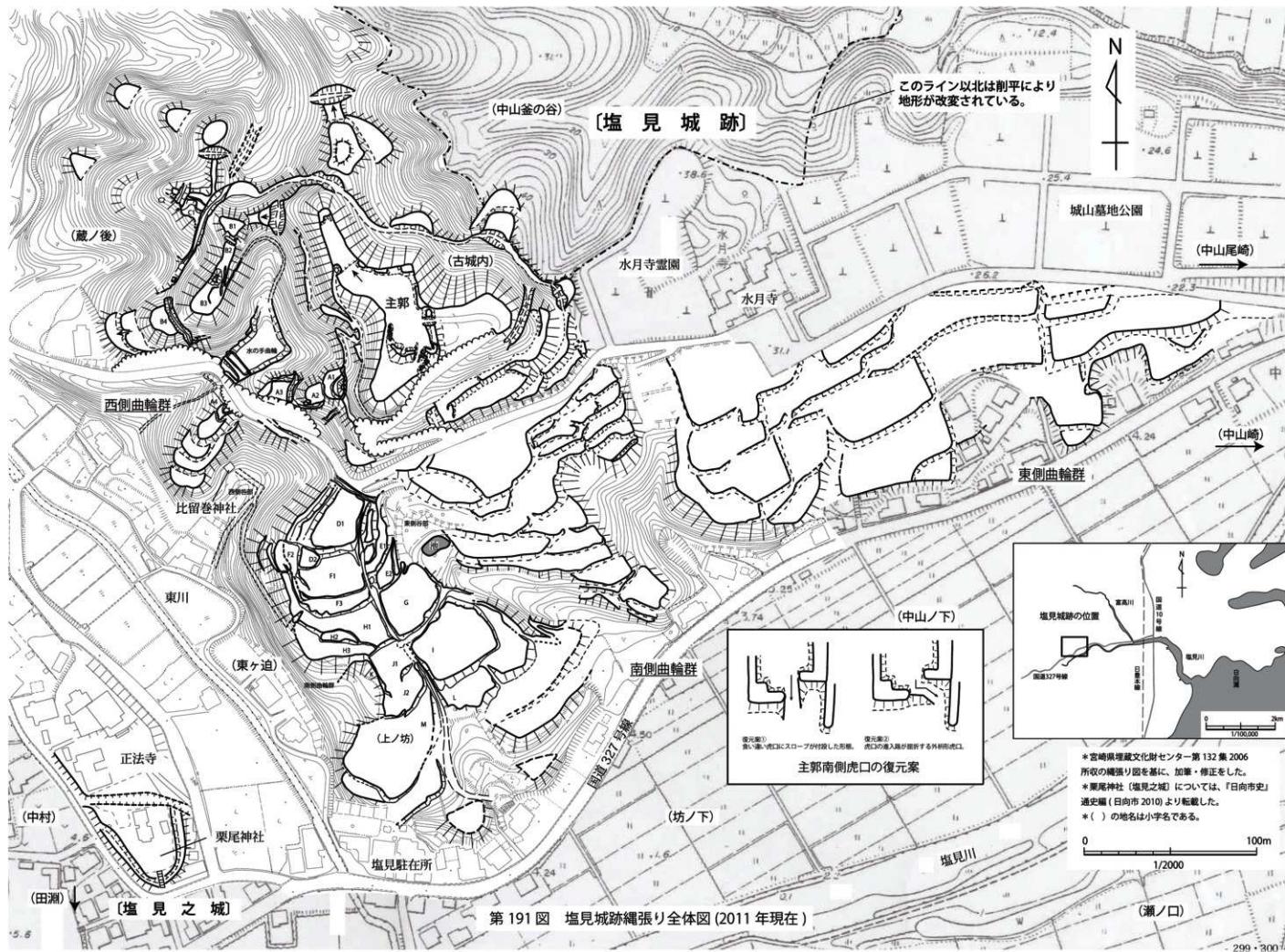
このように主郭への出入り口部は、土壘を作ら虎口部と城戸状の開口部の2箇所と解釈される。この場合、主郭と城外を結ぶ主要な登城路は、水の手曲輪や南側曲輪群（道路状遺構）および現在の城山墓地公園の出入り口等が考えられる。

主郭周辺の防護 主郭から四方に延びる丘陵尾根を断ち切る堀切は、帶曲輪や堅壠・横壠、さらに帯状の細い平坦面（通路）とて相互に連結し、総延長0.6kmにわたって円環状に主郭周辺を取り巻く防護線となる。この防護線は城域の中核部分である「内郭」と「外郭」の境界線でもあり、塩見城跡の縄張りの大きな特徴といえる。

主郭の東南隅部分は帶曲輪を幾重にも設けた上に掘りと連結して、水月寺方面からの備えとする。一方、主郭の西側面には大きく谷地形が入り込むが、水の手曲輪における石積遺構の構築（第III章第6節）し、さらに石積遺構を交点としたX字形に曲輪面を



第190図 塩見城跡縄張り断面図



*宮崎県埋蔵文化財センター第132集, 2006

所収の縹張り図を基に、加筆・修正をした。

*栗尾神社(塩見之城)については、「日向市史」
通史編(日向市, 2010)より転載した。

*()の地名は小字名である。

数段にわたり構えることで(曲輪A～B群)、谷筋からの侵入に対する防備上の弱点を補う。

城域北側の外縁部は、堀切や豊塙等で丘陵尾根を切断し、小曲輪を効果的に配して防御となす。

東側曲輪群 主郭より東側の丘陵上は、近現代の土地利用により大きく削平されており、曲輪の状況を確認することができない。丘陵南側斜面では、宅地や墓地による後世の変更が顕著な箇所も多いが、大小様々な平坦面が多く確認できるので、曲輪群が形成されていると考えておきたい。

西側曲輪群 西側曲輪群の一部は、今回発掘調査を実施した部分にある(第Ⅲ章参照)。この西側曲輪群は高低差が極めて大きく、狭く小さい平坦面を数段にも設ける。曲輪A・B群では狭い平坦面にも関わらず掘立柱建物跡が高密度に検出された。

水の手曲輪では、城の維持管理に必要不可欠な井戸跡が検出されている。さらに石積遺構は、完全に外部から遮断する時期と二つ折れの虎口構造に変更する時期が認められた。従って、水の手曲輪には、閉鎖的空間から城域内への登城ルートとして開放された空間への変化が読み取れる。

南側曲輪群 城山墓地公園から主郭直下に通じる市道より南側の丘陵上には、方形基調の広大な平坦面が幾重にも階段状に連なる。これら階段状の平坦面群は、開析谷によって大きく3箇所に区分される。

中央部及び谷を挟んで東側の平坦面群は、南側曲輪群の発掘調査の成果や平坦面に切り通し状の出入り口部が備わることから、曲輪群であった可能性が高いと判断し図化・記録している。今回の発掘調査を受けたのは最も西側にある(第Ⅲ章参照)。

南側曲輪群の発掘調査では、直線的に縱横断する道路状遺構(SG1～3)の両側に方形の曲輪群が階段状に左右対称に整然と連なる構造が明らかとなった。曲輪内には多数の掘立柱建物跡が検出されるなど、主郭周辺と比べて防御性よりも生活空間的要素が強い曲輪群といえる。この道路状遺構(SG2)は、国道327号線のカーブ部まで延伸していたと推測されるが、既に削平されてしまっているので、詳細は不明である。直線のかつ規模も大きいので、街道筋からの主要な登城ルートであったと考えられる。

(今塩屋)

第2節 塩見城の歴史的位置

若山浩章

1はじめに

本節では、残された史料(注1)から塩見城がたどった歴史を概観し、その中で同城が政治・経済・社会的にどのような位置を占めていたかという点について考察する。その際、重要な視点は塩見城の近隣にある門川城と日知屋城との関係である。これらの城は、少なくとも戦国期末には「三城」と一括して呼ばれており(注2)、当時から一体のものと認識されていた。そうなった経緯や背景について検討することは、最初に記した課題を解明する上で重要なポイントになると思われる所以、門川城や日知屋城も議論の対象にしておきたい。

なお伊東氏支配以前の三城にかかる史料はほとんど残っていないため、後世の編纂物ではあるが『日向記』を、また島津氏支配下の状況については、比較的まとまった記述のある『上井覚兼日記』(以下『覚兼日記』と略称する)を主に使用した。

2塩見城の初見史料

塩見城の史料上の初見は、菅見の限り文明6年(1474)の『文明六年三州廻々領主記』(以下『領主記』と略記する)(注3)である。これは薩摩・大隅・日向3国を行脚した僧の聞き書きで、文明6年当時の、3国内の諸地域の領主と持城の状況を記している。

これによれば、塩見城は門川城・日知屋城とともに「山東城」と呼ばれる18の城(注4)に数えられている。同史料には「山東仁伊東大和守祐堯・同六郎祐国」とあって、山東城(注5)が伊東氏の持城であったことがわかるが、それらの中での三城は、縣の土持氏と境を接する山東という領域の北の境界の位置にあった。

しかし、これ以上のことについては「領主記」は何も語らず、島津氏が支配する天正期まで関係史料を見る事ができないため、塩見城等三城をどのように伊東氏が支配するようになったのか、また領内の内で三城がどのような位置を占めていたのかよくわからないというのが実情である。

ここでは、その手がかりを探るため、伊東氏の家譜ともいいくべき『日向記』を中心に三城の描かれ方を見ていきたい。

3 『日向記』に記された塩見城

(1) 土持氏と塩見城

『日向記』における塩見城の初出は、卷3「三ヶ家人ノ御教書ヲ賜ル事」である。これによれば、康永2年(1456)10月、土持氏は伊東氏と衝突し合戦に及んだ。いわゆる小浪川の戦いと呼ばれるが、これに敗れた土持氏は長禄元年(1457)10ヶ所の城を伊東氏に譲ったとする。10城は、財部・高城・日知屋・塩見・門川・新名・野別府・山陰・田代・神門の各城であった。つまりそれまで三城は土持氏の支配下にあったということになる。この記載はどのくらい信憑性があるのだろうか。

建久8年(1197)の「日向国岡田帳」(注6)によれば、弥勒寺領として塩見庄(35町)が見え、地頭は土持太郎信綱と記されている。これが土持氏との関係を示す最初の史料である。なお日知屋も当時、塩見庄に含まれていたと考えられている(注7)。その後、康永4年(1345)11月22日「開田遠長領吉田村年貢盜妨事書」(注8)によれば、「御教書を申しなさせ給候ハんする御使ニハ、日向國ニハ土持、一族ニハ土持兵衛尉、塩見左衛門(門脱)太郎、北谷兵衛尉にて候へく候」とあり、土持氏の一族として塩見氏の名を見る事ができる。土持氏の一族が在地の名を名乗り土着したものとすれば、南北朝期に至ってもなお塩見が土持氏の影響下にあったということになるだろう。

一方、門川は「日向国岡田帳」に記される宇佐宮領富田庄(80町)に含まれていたと見られているが(注9)、富田庄の地頭は故勅藤原衡門尉(工藤祐経力)であった。『日向記』によれば、祐経の孫(伊東祐時之子)祐景が門川を領したとしているが(この祐景の一統を門川氏とする)(注10)、そうなると、門川は伊東氏(門川氏)の支配から土持氏へ移り、小浪川の戦いで再び伊東氏へ移ったということになる。この間の事情について『日向記』は触れておらず、事実関係は不明というしかない。

詳細は検討を要しようが、重要なことは10城の支配が土持氏から伊東氏に移ったと、『日向記』が強調している点である。何故なら、『日向記』の編者は、この戦いで伊東氏が土持氏を破り、山東の割権を掌握したということを後世に伝えようとしたからである。この事件はそれほど伊東氏にとって重要な事件と認識されていた。そのような意味では、

これについて、あからさまな脚色をほどこすとも考えにくく、この記載もあながちのはずれとは言いがたいのではないだろうか。

(2) 伊東家の家督継承争いと塩見城

「領主記」に見られるように、祐堯の代には山東の領域形成が進められた。その中で塩見城とそこを拠点にした人々(ここでは便宜上「塩見衆」などと呼ぶことにする)は、政治的にどのような位置を占めていたのだろうか。『日向記』は、伊東家の家督の継承争いについて多くの記述を残し、伊東家の臣属の構成やその様相を描いている。その中で塩見衆・日知屋衆・門川衆の動向を見ておきたい。

【事例1】

文明16年(1484)伊東祐堯は肥沃に遠征する。その主力は子の祐国・祐邑であったが、塩見衆は門川衆・日知屋衆とともに、祐国の軍勢の中に入っていた。しかし文明17年(1485)に行われた2回目の遠征で、祐堯が陣中で病死、祐国も戦死する。こうした混乱の中で、文明18年(1486)日知屋に拠点をおいた祐邑が、豊後の大友氏と手を結び島津氏に対抗しようと企図したが、逆に祐国の跡目をねらっているものとの疑いをもたらされ殺される。同時に祐邑の支持者であった野村一族も肅正された(卷3「祐邑生害並野村乱事」)。

【事例2】

祐国跡を継いだのは尹祐だったが、その尹祐も永正3年(1523)野々美谷の陣中で歿死したため、その跡を祐充が継ぐことになった。尹祐から祐充の代にかけて台頭したのが福永伊豆守である。福永氏が台頭したのは、祐充・祐清(後の義祐、以下便宜上祐清は義祐の名で統一する)・祐吉兄弟の外祖父であったことによる(卷4「守護方若輩方争論ノ事」)。しかし天文2年(1533)祐充が24歳で早世すると、祐充兄弟の伯父祐武が家督を継ごうとし、伊豆守に切腹をさせた(卷4「祐充御早世並豆州殺害事」)。

義祐・祐吉兄弟は日知屋へ逃れ、上洛しようとするが家臣等に止められる。その後、三城はじめ財部衆が義祐兄弟に合力、山陰の米良宮内少輔らも加わり、これらの勢力に通じた荒武三省が祐武を切腹に追いやった。(卷4「武藏守祐武殺害事」)

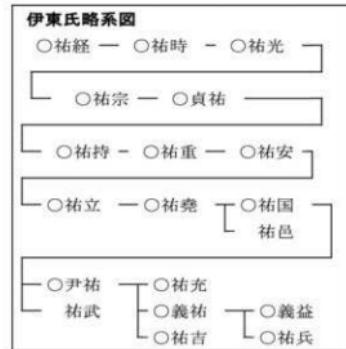
【事例3】

その後、祐武の嫡子左兵衛佐が、米良山を頼って

平野へ落ちのび、周辺の勢力を結集して義祐等に対抗した。その勢力は渡河・雄八重・仲俣・銀鏡・小崎・神門・石尾・小河・平野・石・三納・青山衆（現在の、美郷町～西米良村～西都市）であった。これに對し義祐方には伊東相模守・荒武三省を中心とする山陰・坪屋・田代・水志谷・塙見・日智屋など現在の日向市から入郷地域の勢力が集り、その後、穂北・三納・平野・八代・綾・本庄・木脇・穆佐・内山・高城が左兵衛佐から義祐方に移ったため、左兵衛佐の勢力は後退した。（巻4「祐清公被得御勝利事」）

【事例4】

左兵衛佐の乱後、長倉能登守が義祐の弟祐吉を守護にしようと画策。天文4年（1535）2月宮崎城に入城し実権を掌握した。この混乱の中、12月に門川の領主たちが縣の兵を門川城に引き入れるという事件をおこす。彼等の拠点は本城（門川城）、鳥越、狗山、佐々木津の四城であったが、間もなく鎮定された（巻4「門河対治並祐吉早世事」）。その後、祐吉が天文5年（1536）6月早世、出家していた義祐が還俗して富田城から佐土原城へ入城した。



事例1のように、祐邑は日知屋を拠点にし、大友氏との連携を模索していたが、これは日知屋衆の支持があつてのことであろう。日知屋は天然の良港をもち、海上交通によって大友氏との関係を深めていたと推測される。しかも、その勢力は決して侮れると

ものではなかったらしい。追われた義祐兄弟が日知屋に逃げ込んだのも、そこが身を守る上で安全な場所だったのであるからであり、祐武なども容易に手を出せる地域ではなかったと推測される。

また、門川衆については、事例4のように土持氏との関係が深く、また後述するように伊東氏の豊後落ち後には、大友氏と結び島津氏に対して挙兵するなど、山東より北の勢力との関係が深かった。

一方、塙見衆は『日向記』からうかがう限り、表だった行動をしてはいない。義祐の擁立に際しては、日知屋衆に同調した行動を示しているが、その中心的な部分を占めてはいない。しかし塙見衆の同調が、山陰・坪屋・水清谷・田代など入郷地域（日向市東郷町・美郷町西郷区・南郷区）の勢力を呼応させたのは否定できないと思われる。塙見城は、これらの海の勢力と入郷地域の勢力の結節点の役割を果たしていたのではないだろうか。

このような塙見城等三城と入郷地域の関係、三城と大友氏との関係の深さを如実に示すのが、天正5年（1577）伊東氏の豊後落ち後に繰り広げられた石城の籠城戦であるが、この経過については次項で触れておきたい。

さて、これらの家督繼承争いについて『日向記』は、三城等の勢力と対立する勢力として、米良等の山間部の勢力をあげているのは興味深いことである。福永氏は、米良氏を近付けたため、小原・椎葉山・黒木など山間地帯の勢力も福永氏の被官同様の活動をしたとしている（巻4「守護方若輩方争論ノ事」）、左兵衛佐が、義祐に対抗した際には、渡河・雄八重・仲俣・銀鏡・小崎・神門・石尾・小河・平野・石・三納・青山などの勢力が呼応している。

『日向記』の著者は、義祐寄りの立場から書いているため、山間部の勢力に対しては批判的で、三城衆に対しては好意的に扱っているように見える。その意味で三城衆の行動は際だつ形になっており、多少の誇張は考慮に入れておく必要がある。しかし重要なことは、この海岸部と山間部の対立ともいべき図式が、伊東氏の領内支配のネックになっていたということであろう。そして、その対立の軸に三城衆は位置付けられていたことである。山間部の勢力が台頭した背景は何か、また三城衆が、義祐を擁立したのは何故か、彼らの対立の背景にある利害関係はどのようなことなのか、今後、検討すべき課題も

多いが、ここでは、三城衆が伊東氏領域内で重要な位置を占めていたことを確認しておきたい。

(3) 伊東氏の豊後落ちと塩見城

天正5年(1577)、島津氏の日向侵攻によって、伊東義祐は日向を退去し豊後に向かった。島津氏は日向に入るが、日向国内にはいまだ伊東氏の残存勢力が活動しており、大友氏もいったんは島津氏側についた伊東氏の旧家臣たちの内応を誘おうとしていた。

『日州江御発足日々記』(注11)によれば、天正5年12月24日、「此日豊後佐伯宗天より日知屋・門川・塩見三ヶ城江以書状、伊東物内 太守様御安利伝説雖為必定、三ヶ城の事ハ以談合堅固才覺候ハ々、從豊後口可被加力、書状即三ヶ所より組をもとかす使僧両三人ニ持セ被上」とあって、大友氏の重臣佐伯宗天が三城に対し内応の書状を送ったことがわかる。大友氏は、島津氏の日向進出は認めるものの、三城までは大友氏が領有するという認識を持っていたことがうかがわれ、大友氏の境界認識を示すものとして興味深い。三城衆は組もとをはず島津氏にこのことを知らせたとしているが、結局は大友氏の側についた。

『日向記』(巻9「日州郷評儀事」)によれば、大友氏の家老佐伯宗天惟定と内通したのは、当時の門川城主米良四郎右衛門尉、塩見城主右松四郎左衛門尉、山陰城主米良喜内らで、天正6年(1578)2月、先手として臼杵惣右衛門を大将とする大友勢と伊東新助・長倉勘解由左衛門尉等豊後に身を寄せていた伊東氏家臣等が門川城に入ったという。潜入した伊東氏の旧臣たちには、山陰・田代(現、美郷町)・坪屋(現、日向市)・日知屋(現、日向市)・水清谷(現、美郷町)・入下(現、美郷町)・神門(現、日向市)など現在の入郷地区の勢力が合力し、新納院石城(現、木城町)に立て籠もった。

これに対し島津氏は、同年7月、伊集院忠棟を中心にして石城攻めを開始したが、石城は山間地であり、攻撃は難航、多くの負傷者がが出た(注12)。このことは石城に立て籠もある長倉勢も同様で、抵抗はしだいに弱まっていった。9月29日、島津方から城を明け渡せば、退路を開くという勧告が出来たため、長倉勢はこれを受け入れ、人質を交換し三城へ送られていった(注13)。

4 島津氏支配下の塩見城

天正6年(1578)高城合戦で大友氏を破った島津氏は、日向支配を本格的に進めることになった。ここでは島津氏支配下における塩見城の状況をみていくたい。またこの頃から「三城」という表現が顕著に現れるようになるため、日知屋城や門川城との関係についても言及したい。

さて、島津氏の日向支配は、旧伊東氏の地頭による城領を継承したもので、それらの城に島津氏の家臣たちを地頭としておくというものであった(注14)。日向には守護代として島津家久(義久の弟)が佐土原に在城し、その補佐として、また山東の諸地頭を統括する役目として上井兼兼が宮崎に在城することになった。三城については、門川に伊地知重政、日知屋に井尻祐貞、塩見に吉利忠澄が置かれていた。

(1) 三城に配された地頭

まず『本藩人物誌』(注15)によって三城の地頭の略歴を追ってみたい。

伊地知丹後守重政は、義久の奏者であった伊地知重秀の一族である。永禄9年(1566)10月三山(現、野尻町)で軍功をあげ、天正期には軍の談合衆54人の一人に数えられたという。三城の地頭は本来、吉利忠澄に任じられたものだが、忠澄は彼に従っていた重政を門川地頭に任せたとする。

井尻祐貞は、伊作久逸に仕えた井尻祐秀の子とされている。『本藩人物誌』では、祐貞がもともとは伊東氏の家臣で、石城の合戦で人質となった「伊賀」という人物であるという説があることを紹介しているが、これは誤りとコメントしている。『本藩人物誌』編纂時から、由緒がよくわからない人物と見られていた。

吉利忠澄は島津久定の嫡子である。久定の祖父秀久は薩摩家2代国久の三男で、鹿籠を領地としていたが、久定の時、島津貴久によって吉利を与えられ移住。伊集院地頭職も得たという。しかし久定は忠澄が9歳の時没したため、その遺跡は伯父の久金(後の日向蔵岡地頭)に継がせるよう貴久からの指示があったという。これに対し家臣36名が連判をもって反対したため、貴久は家督を忠澄に継がせ、吉利の地を安堵した。忠澄は、永禄9年(1566)に吉利を家号とし、その後の多くの軍功によって、高城合戦の直前、天正6年3月下旬、日州の抑として、

塩見・門川・灘（日知屋であろう）の地頭をあわせて仰せ付けられたとする。

さて、「本藩人物誌」では、忠澄の記載は多く詳細であるが、重政・祐貞のそれは少ない。これは重政・祐貞が、同じ地頭でありながら、忠澄と違って由緒がよくわからなかったことを示している。『覚兼日記』をみると、登場する頻度に同様の傾向を見ることができ、覚兼と忠澄は頻繁に交流していることがわかるが、重政と祐貞はそうではない。また忠澄は「殿」付けがされているが、重政・祐貞はそれがないなど、重政と祐貞は忠澄より格下と見られていたことはまちがいない。このほか覚兼からの三城への連絡も忠澄に対して行われていること等（注16）を考えあわせると、忠澄が、日州の抑として三城の地頭に任じられたとする「本藩人物誌」の記載は、信憑性があるといえる。

このように、塩見城の吉利忠澄が三城の統括的立場になったが、このことは三城内における塩見城の役割が大きくなつたことを意味している。島津氏は、塩見城を中心にして三城支配を強化したものと考えられる。では何故にそのようなことになつたのか、この時期の塩見城の果たした役割について、次項で考えてみよう。

（2）三城の果たした役割

ここでは、紙数の関係から、特に三城の情勢が緊迫する天正13年（1585）8月以後の事例をもとに検討していきたい。

8月5日、覚兼のもとに豊臣秀吉が四国に渡海したという情報が入った。長宗我部元親が程なく降り、その後、秀吉は九州に来襲するだろうという風聞があるとのことであった（7日には細島からの情報で元親の降伏が伝えられ風聞が事実と確認されている）。

当時、島津氏は肥後から筑後攻めにかかっていたが、この新たな情勢に対し、家久・覚兼等日向勢は日向口からの豊後攻めを主張し始める。これに対し義弘は、忠澄や都於郡地頭鎌田政親と相談して縣・三城の様子を検分し、よく考慮するよう覚兼に指示した（6日条）。

秀吉が大友氏につけば、三城は攻撃の正面にたつ可能性が高くなる。義弘にとっては、かつて大友氏に内応したこの地域に対する不安をぬぐい去れず、現地を検分するよう指示をしたのであろう（事実、14日条には、覚兼等も敵に内応しない旨の神水を飲み交わしている）。

8日にはさらにも悪い情報が入る。阿蘇氏が大友氏と結び、高千穂の三田井親武や甲斐宗栄を取り込もうとし、縣へ着陣する時は、協力するようにと依頼したという。三城口はさらに緊迫したものとなった。

島津氏の側でも高千穂の重要性は早くから認識していた。天正11年（1583）11月14日条に依れば、伊集院忠棟や覚兼、忠澄等は、三城口から高千穂境への計策を議論しており、この地域を取り込むもくろみがあつたものと見られる。その情報収集と調略活動に大きな役割を果たしたのが、右松備後守であった。備後守は伊東氏時代の塩見城主右松四郎左衛門尉の一族と見られるが、『覚兼日記』では「山中衆」と呼ばれており、入郷地域を根拠に活動していたらしい。天正13年8月10日条によれば、備後守は大友義統が阿蘇に出陣して高千穂に進出しようとしていること、秀吉の使い菊田某がやってきて、義統に資金提供したこと等の情報をもたらした。また27日条によれば、備後守は家久の指示で11年頃から山間地帯の諸氏に計策を行っていたことが知られる。

こうした情報によりながら8月、家久は自ら田代（現、美郷町）に出陣、三ヶ所（現、五ヶ瀬町）を落とし、親武に人質を出させることに成功した（同年8月29日条）。

さて、以上の経緯を見ると、塩見城とその周辺地域は、海上交通の要衝であると同時に、九州山地に入る入り口という好条件の位置にあり、島津氏はその利点を積極的に活用したことがうかがえる。

前述したように、細島を通して長宗我部氏の情報が入っていたことから、畿内や四国からの船の入津は相当数あったと思われ、様々な情報が入手できたであろう。また義久が、海路視察するために水主50人程を美々津や細島に命じたこと（天正14年（1586）2月1日条）や、覚兼が南林寺の用材を種子島に求めた際、船の水主を細島に命じたこと（同年3月16日条）などは、これらの地域が水主の動員において重視されていたことを示している。こうした条件の良さは、当然、秀吉の標的ともなり得たため、覚兼は祐貞に対し細島の普請を油断なく行い、堅固にするよう指示するとともに、船数をそろえ、四国の兵船の動向を探査し早舟で知らせるよう命じている（同年8月29日条）。

一方、高千穂攻略の経過に見られるように、塙見城は内陸交通の起点として重要な位置にあった。時期は遡るが、天正 11 年 9 月 20 日条には、覚兼が当時敵対していた阿蘇氏に対抗するため、県の土持久綱や塙見の忠澄、高城の山田有信への方面への魚塙止めを命じた記事がある。九州山地を越える流通の実態を垣間見ることができるが、おそらく備後守のような山中衆の存在がこれらのルートを掌握していたのであろう。島津氏は、右松氏のような山中衆を抑えることで交通路や流通路を掌握することができたと思われる。

(3) 三城とその周辺地域

さて、島津氏はかつて大友氏に内応した三城や入郷地域の人々をどのように取り込んでいったのだろうか。これらの地域の人々との交流について、天正 13 年（1585）4 月に行われた覚兼の塙見訪問の記事をもとにみていきたい。

覚兼が出発したのは 4 月 6 日であった。その目的はこの地域で狩を実施することであった。7 日には穂北（現、西都市）地頭の平田宗張、高城（現、木城町）の山田有信を訪れ、8 日に有信を同道して名貫（現、都農町）・美々津（現、日向市）を経由し平岩（現、日向市）に入った。覚兼等はこの日、忠澄の内衆田中市佑のところに宿泊し、翌 9 日塙見に着く。忠澄は城の「たれの口」（注 17）で覚兼等を出迎え、饗應した。

狩が始まったのは 10 日である。この日は早朝から狩を行い、朝のうちに鹿 1 頭仕留めると芝屋で、日知屋・塙見衆中と酒宴。美々津からも酒が届き、俣江（現、美郷町南郷区）や坪屋（現、日向市東郷町）からも人々が参集し、狩人 1000 人を数えた。この日の獵果は猪・鹿 50 頭以上だったという。11 日は、細島はた浦（現、日向市日知屋畠浦）で狩りが行われている。細島衆が棧敷を構え会釣、細島に逗留中の播州室之弥太夫という船頭から杉原紙 20 帖・樽 1 が進上された。その後、井尻祐貞を訪問し薄暮塙見へ帰った。

12 日には覚兼のもとに衆中 10 人・光嚴寺・土持久綱の使者新名美作守・井尻祐貞・細島衆らが訪れる。その後、覚兼は右松備後守を訪ね、山影（陰）（現、日向市東郷町）へ出発し狩を行った。この日は、土うち（比定地不明）という村に宿泊する。13 日は早朝から忠澄や久金のほか 10 人ばかりで狩に出る。鹿

10 頭ほど獲り山陰地頭吉田清長の設営した棧敷で休憩。しかし大雨になったため忠澄の宿に戻り併講などして閑談、深更に覚兼は宿に向かった。

14 日も早朝から狩。忠澄が猪に噛みつかれ 3 力所の疵を負うという 1 日であったが、広瀬（現、日向市東郷町）という村に逗留。15 日は日田尾（現、日向市東郷町）に逗留。山影衆 5、6 人が酒肴を持参し、忠澄や吉田右衛門佐（清長）もやって来て朝まで閑談。16 日、早朝から吉田清長、逆瀬川豊前孫・井尻太郎四郎等と狩を行なった後、清長や右松備後守と酒宴。この夜は高城の征矢原に逗留し、翌 17 日、都農を経由して、18 日に宮崎に着いた。

狩は、2 週間近く行われた大規模なものであったが、覚兼等はこの地域のあちこちを訪れ、その先々で地頭やその家臣、地域の有力者層など実際に多くの人々と交流を持った。狩は日知屋や入郷地域の各地で行われるが、特に 10 日に 1000 人が動員されたことは注目される。彼らは入郷地域から勢子として集められたのであろうが、これは忠澄によって演出された一つのデモンストレーションであったと思われる。忠澄は、かつて島津氏に反した入郷地域の人々に対し、狩に動員することで、新しい支配者として威儀を隅々に示す必要があったのではなかろうか。それと同時にまた逗留した地区ごとに数多くの宴をもつたのも重要であろう。この宴も人間の鎖を強固にするための舞台となったと思われる（注 18）。

宴の中に播州室之弥太夫という船頭がいたことも注意すべきである。細島が畿内とをつなぐ港であつたことを示す事例であり、彼らからは多くの情報や交易品がもたらされたであろう。覚兼にとっては疲労困憊の旅であったろうが、来るべき合戦に備えてこの地域との関係を強化するために必要な旅だったと思われる。

5まとめ

以上、中世における塙見城の姿を概観し、その果たしてきた役割についてみてきた。領主の変遷にともない、三城の役割は変化するが、いずれの時代にも共通する特徴というべきものが見えてきた。

その一つは、港に近く海上交通の利点があったことである。これについては、特に大友氏との関係が深かったことは重要である。おそらく豊後方面からの交易や人々の交流が、はやくから行われており、

それらに分かちがたく結びついた広範囲なネットワークが形成されていたと思われる。また『覚兼日記』に見られるように、四国からの様々な情報が入ったり、播州の商人との交流が見られる点、さらに種子島への水主の動員があるなど、畿内方面から南西諸島に至る広範囲な交流や交易とともに、それを利用する領主層の実態が垣間見られる。

もう一つは、入郷地域との関係の深さである。伊東氏時代においては家督継承争いの事例や石城の籠城戦に見られるように、これらの地域が連携していたことがわかった。また『覚兼日記』においては、右松備後守等の中山衆の取り込みが重視されたことを確認した。それは高千穂や椎葉方面をつなぎ、九州山地をぬける内陸交通の起点であるという意味で重要であった。

以上、塩見城の位置付けや役割について述べてきたが、これらの歴史が遺物上にどのように反映されているのか、また塩見城の遺構がどのような特徴をもつか、島津氏の支配になって整備された痕跡が認められるのか等、今回の報告書をもとに詳細な検討が今後なされることを期待したい。

最後に今回の調査で発見されたキリスト教関係の遺物について、特にキリスト教の地方伝播のあり方という点から言及しておきたい。

1581年(天正9)のイエズス会「日本年報」(注19)には、日向国の数少ない信者の一人を紹介している。彼の名はルカス(Lucas)といって日向国のある港に住んでいた。彼には妻と娘がいたが、一家でキリストとなり18年間信仰を守っていたといふ。一家はもともとは裕福であったが、キリストとなった後、財産を失い、最後には家まで火災に遭ってしまい、聖像付きの十字架とデシビリナ(修行の時使うムチ)だけが残った。特に後者はルカスが燃えさかる家の中から取り出したもので、ルカスはこれらさえあれば失った財産など惜しくはないといい修道士たちを感激させた。異教徒の中にあって、これほどの財を失ったにもかかわらず、信仰をやめるどころか前にも増して信仰を深め、自らがキリストであることを公表し、諸人からも認められていることに宣教師たちは大いに驚いたといふ。

「日本年報」には多くの誇張があり、この話もそのまま信用するわけにはいかないが、これまで述べてきた人や物の移動の観点からみれば、あながち荒

唐無稽な話ではない。ルカスが港町にいて裕福であったことを考えれば、彼が海上交易にかかわる商人であった可能性がある。教会はこうした階層を媒介にして信者を獲得していくのであるまいか。ルカスのような信者は、「日本年報」にもあるように、決してその地域で多数派ではなく異端であったろうが、彼がすでに18年間信仰していることから、入信したのは1563年ごろと思われ、1549年ザビエルの来日から14年の間に、地方の港町にキリストが存在したということになる。このように考えると、ルカスのような人物が塩見城周辺にいてもおかしくはないと思われる。この遺物が、單に大友氏の進攻との関係だけでは語れない側面があるということを指摘し、擱筆したいと思う。

(若山 浩章)

(注1)関係史料については、拙稿「中近世城郭関係史料目録(2)」「宮崎県中近世城郭急分布調査報告書II」(宮崎県教育委員会、1999)を参照。

(注2)三城の史料上の所見は、管見の限り「川上久辰印川日記」(都城印川家文書12号『宮崎県史 史料編中世2』)、天正6年11月12日条である。

(注3)都城印川家文書3号『宮崎県史 史料編中世2』(1994)

(注4)残りの15の城は、福佐・池尻・曾井・宮崎・清武・田野・山之城・木之脇・阿屋(続)・本庄・都於郡・岡富・財部・竹森・八代・平賀・新田・田鶴である。

(注5)山東とは青井岳(宮崎県都城山川之口町)以東を指す地域名である。詳細は拙稿「九州の「奥三ヶ国」と「山東」」(『地方史研究』340、2009)

(注6)鳥居家文書25号『宮崎県史 史料編中世2』

(注7)『宮崎県史 通史編中世』第1章第2節「日向國の珊瑚・公頤」(1998)

(注8)相良家文書5号『宮崎県史 史料編中世2』

(注9)前脚註7参照

(注10)『印記』卷2「幕時男子格別之事」

(注11)『鹿児島県史料 旧記録後編1』(以下「後1」と略記)948号。

(注12)『年表』7月9日「上井覺兼・伊集院忠輝連署状」(『後1』984号)

(注13)前掲「川上久辰印川日記」

(注14)福島金治「戦国大名島津氏の領地形成」第3の2「戦国大名島津氏と地頭」(1988、吉川弘文館)

(注15)『本藩人物誌』(鹿児島県史料集第13集1973)は、15世紀中叶から17世紀中頃までの島津氏の一族及び主な家臣などの歴記をまとめたものである。成立年代不明。

(注16)例えば、天正13年(1585)5月28日条で、覚兼が、八代守立ならびに京御印御のことを諸地頭に勅む際には、三城への便は忠源に送られていた。

(注17)「たれ口」は、実態は不明だが城門の前にある何らかの防御施設と推測される。南九州の城郭には「たれ口」などの名稱が残っているケースがある。拙稿「慶長期の倉岡城の普請について—『伊地知重順覚書』をもとに—」(『宮崎県地歴史研究』16、2003参考)。

(注18)久留島典子「酒宴の空間—政事を担う場」(『朝日百科日本の歴史別冊 歴史を読み直す』7、1994)

(注19)「イエズス会 日本年報 上」(新選国讃書3、雄松堂出版、1969)

第3節 遺物と遺構の検討

本節では、今回の発掘調査で得られた遺物と遺構、及び西側・南側曲輪群における遺構の変遷過程について検討を加えることとする。

(1) 遺物とその特徴

a) 陶磁器類

中世陶磁器類とその内容 今回の調査で出土した陶磁器類（第7・16表参照）は、輸入品（白磁・青磁・白青磁・青花・褐釉陶器・無釉陶器・瑠璃釉・染付・華南三彩・五彩）と国産品（備前焼・瀬戸美濃焼・常滑焼・肥前系陶磁器）の2者に区分される。

食膳具・調理具・貯蔵具等の出土量全体の構成比（推定個体数）では、陶磁器類が7割と多数を占めていた。食膳具は輸入陶磁器が多くを占めており、瀬戸・美濃焼は皿類と天目茶碗等があるが量的に少ない。調理具では備前焼摺鉢・貯蔵・運搬具としては備前焼が主体的であり、常滑焼窯はわずかである。中国南部産と考えられる褐釉陶器の四耳壺も少ないながらも出土した。

また、龍首水注（342）や梅瓶（200・201）、瑠璃釉（340・341）、華南三彩の瓶（345）、褐釉陶器天目碗（300～309）といった上位ランクの製品を保有するのが塩見城跡の特徴であり、景德鎮産の青花では作りや発色の良い優品も多い。なお、塩見城跡近隣の日知屋城跡（日向市教育委員会1993）では陶磁器類、高平城では中世土器（土師器壺・皿類）が卓越して出土する傾向を示している。

陶磁器類にみる曲輪の展開 第68表は、各曲輪出土の陶磁器類の年代幅を示した一覧表である。

西側・南側曲輪群で出土した陶磁器類の量的なピークは、大きく3つと考えられる。14世紀後葉～15世紀前葉、15世紀後葉～16世紀前葉、16世紀後葉～16世紀末葉である。

調査区内出土の最古相にあたる陶磁器類は、11世紀後葉と12世紀中頃～後葉の年代を示す景德鎮窯系白磁碗や皿である。曲輪A・E・F・道路状遺構2にて出土しており、中世塩見城内における最初期の人間活動の痕跡を示している。次いで13世紀初～中葉の段階は、西側・南側曲輪群とともに陶磁器類が皆無の空白期となる。空白期の後は、南側曲輪群では13世紀後葉、西側曲輪群では14世紀初頭～中葉頃から陶磁器類の出土が確認され、17世紀

初頭まで継続的に出土する。この17世紀初頭の陶磁器類については、西側・南側曲輪群において唐津焼があまり出土しない点と、景德鎮・漳州窯系青花のうち、芙蓉手（開光）タイプが認められない（森村健一氏御教示）ことから、塩見城は1600年よりも前に廃絶（廢城）された可能性がある。

17世紀初頭段階以後の17世紀前半～中頃の陶磁器類は、皆無に近い状態である。これは塩見城の城館としての廃絶（廢城）と連動した事象と考えられる。再び17世紀後半代から波佐見焼を主体とした近世陶磁の出土が確認されるが、量的に中世期と比べて圧倒的に少ない。この状態は19世紀末まで続き、近世墓地の存続幅と対応する。

なお、日向市教育委員会による主郭部の調査では、出土した陶磁器類の年代幅は13～16世紀後半という（『日向市史』2010）。西・南側曲輪群出土の陶磁器類の年代的消長と対応している。

b) 龍首水注

龍首水注の類例 龍首水注（342）は、曲輪Mで出土した青白磁である。管見の限りではあるが、宮崎県えびの市竹之内遺跡、鹿児島県出水市木牟礼遺跡、和歌山県高野山奥之院や神奈川県鎌倉市二ノ鳥居西遺跡に類例がある。

龍首水注の時期 注口の大きさから二ノ鳥居西遺跡出土の葡萄文付水注（高さ5cm・胸部径7cm）とほぼ同じ大きさとみられる。水注は、12～14世紀後半に盛行した磁器とされるので、塩見城跡の龍首水注もその年代幅の中で製作されたとみられる。

龍首水注の位置付け 龍首水注の出土した南側曲輪群では、12～14世紀中葉までの遺物は相対的に少なく、当該期の遺構も不明確である。しかし、14世紀後葉～15世紀前葉段階には、身舎面積40m²を越える「主屋（主殿）」と思しき大型掘立柱建物跡が出現する（F-SB10・17）。このことから龍首水注は14世紀後葉以降に入手されたものと考えられる。

つまり、龍首水注は南側曲輪群における「主屋（主殿）」の出現や屋敷地としての曲輪利用が活発となる14世紀後葉以降、梅瓶（201）や香炉（195・196）や酒会壺（197～199）とともに城主の威信が表微化された座敷飾りや室禮の道具として使用された「威信材」（小野2003）の一部との位置付けが可能である。なお、龍首水注を伝世品（骨董品）と捉えることも可能だが、道具としての意義は変わらない。

（今塙屋）

c) 中世土器と中世瓦

土師器A類 見込みに工具による螺旋状の沈線を施す土師器皿・环を「土師器A類」として報告した。

この手法は大分県大分市の豊後府内で多く出土する「ロクロ目土師器」との特徴が合致する。しかし、土師器A類はヘラ切り手法の底部調整である点が相違する。つまり、土師器A類は螺旋状の沈線の施文という「ロクロ目土師器」の影響と、ヘラ切り技法という在地的手法の地域的優越性という二面性を併せ持つと評価できる。土師器A類の時期は、豊後府内における調査成果（坂本2005）から、15世紀末～16世紀中葉となる。

京都系土師器 617の色調は白色系であることやその製作痕跡から、いわゆる「京都系土師器」の皿と判断される。しかし、搬入品か在地模倣製作かは不明である。年代的には九州での京都系土師器の流入時期から16世紀代と考えられる（佐藤2003）。617は、領国支配における権力構造を具現化・示威化する武家の儀礼や饗宴の器として使用されたと考えられ、それは武家儀礼といいう京文化の波及や受容を示した遺物とも評価される。（潤ノ上）

ケズリ調整の土師器皿 618は、底部切り離し後に底部周縁をヘラケズリ調整する特徴をもつ。

この種の土師器皿は、宮崎県都城市の都之城跡主郭部や鹿児島県霧島市の富隈城跡などで確認されており、島津氏の本拠地である地域で特徴的な器形といえる。土師器皿の時期は、岩元康成氏の土師器編年案（岩元2009）を参考にするならば、16世紀末～17世紀代と位置づけられる。618の出土は、戦国時代末期における島津氏による塩見城支配、ひいては日向国の領国化と連動したものと評価ができる。

瓦質・土師質土器 瓦質土器には、「和泉河内型」の羽釜（619～621）や「防長型」の鍋（625・626）や擂鉢（650）、「西長門型」と思しき鍋（629）、土師質土器には「播磨型」の鍋（624）など、15世紀後半～16世紀後半にかけて畿内・瀬戸内地域からの商品としての土器群が確認された。

これら瓦質・土師質土器は、若山浩章氏のいう「細島が畿内とつなぐ港」（第VII章第2節）の実相を端的に示す遺物であり、西国を中心とした国内流通システム上に細島港が基地として位置し、畿内・瀬戸内各地からの土器（商品）が海上ルートを通じて塩見城跡にも流通したものと評価される。

中世瓦 中世瓦はその特徴から16世紀代に属すると考えられ（第VI章第3節）、出土分布状況から曲輪B・E・F・L、水の手曲輪に16世紀代の瓦葺きの建物が存在した可能性が高い。今回の調査区内では屋根の荷重に耐えられる礎石建物は未検出であるが、掘立柱建物跡の柱穴は堅い岩盤面に掘り込まれているので、瓦葺き建物の建築は可能であったと考えられる。ただし、瓦溜りが確認されなかつたことから、総瓦葺きというよりは、限定的な瓦の使用状況が想定される。（今塙屋）

d) 「土製聖人像」（円盤状土製品）の評価

円盤状土製品（808）は、SG1-2区の造成（スロープ）面で出土した。本書では、この土製品を図像のモチーフからキリスト教関連遺物として「土製聖人像」と報告し、成形技法や使用方法等についても検討した（第VI章第4節）。この項では、さらに考察を加えて歴史的評価等を図ることとする。

(i) 図像の解釈

円盤状土製品が中世に属する遺物とするならば、この図像の人物は、背地の省略された人物頭部が表現される点から「聖母マリア」とみなされる女性聖人である可能性が高いとされる（長崎純太大学 浅野ひとみ氏御教示）。この図像は、16世紀前半頃に活躍したイタリア・ルネサンス画家のラファエッロやロットの図像を原型とした可能性があり、そのモチーフはセビリア大聖堂に描かれた『セビリアの聖母』と呼ばれる壁画に類似するとされる。

この『セビリアの聖母』と円盤形土製品を比較した場合、①図像の左右が反転する、②キリストの表現が見られない、③マリアの背面上に光輪等が描かれていらない、といった相違点が認められる。

従って、現時点では、円盤状土製品（女性聖人像）の図像は、「セビリアの聖母」を一つのモデルとしつつも、独自にアレンジされた聖母マリア像であると考えておきたい。

また、聖母マリア像の左右が反転する点を重視すれば、「マリア十五玄義図」との類似性も考慮される。この『マリア十五玄義図』の作画年代は慶長期（1596～1615）と比定され、前述の『セビリアの聖母』は、長崎県（1597年）や中国（17世紀初頭）で模刻されている。このことから、円盤状土製品の図像は、16世紀末葉頃から17世紀初頭にかけて日本、そして中国でのキリスト教布教に関わるモチーフの一つであったと推察される。

(ii) 製作時期の検討

共伴遺物から SG1-2区の造成（スロープ）面からは、「土製聖人像」に伴って約130点の陶磁器類の破片が出土した。その内訳は重量比で中世（92%）、近世（7%）、近代（1%）で、中世の陶磁器がほとんどを占める（第14表参照）。陶磁器の時期は中世では14世紀前葉～17世紀初頭、近世は1650～1780年代に位置づけられる。近代の遺物はごく小破片であるので、出土陶磁器の時期幅は、中世～近世前半の間にほぼ限定される。

このことから「土製聖人像」は、遺物組成の観点から中世～近世前半の間に所属すると導かれる。

図像の意匠と製作技法から 図像の原型と考えられる『セビリアの聖母』の模刻、『マリア十五玄義図』の作画年代や日本へのキリスト教布教の観点から、「土製聖人像」の製作・入手時期は少なくとも16世紀後半以降と考えられる。しかし、中世日本における中子を用いた型押し製作技法は、現時点では類例が見当たらないようなので、製作技法的側面からの検討は困難な段階である。

歴史的背景から 塩見城の位置する日向市域には、豊後府内への南蛮航路上に位置する貿易港である細島港が所在する。また、日向国の港町に住むキリスト（第Ⅷ章第2節）も存在することから、中世期に交易や信者を介してキリスト教関連の文物を持ち込まれた可能性は低くはないといえる。さらに、豊後国の戦国大名である大友義鎮（宗麟）は、日向侵攻（1578年）の際、日向国をキリスト教国にする意図で宣教師を伴っていた（福島1999）ことからも、塩見城跡周辺にキリスト教関連遺物がもたらされる環境は十分に整っていたといえる。

なお、塩見城を領有した伊東氏一族にはキリスト教武将が存在するが、その洗礼は日向国の退去（1577年）以後である。

一方、禁教令（1614年）以降のいわゆる「隠れキリスト」が「土製聖人像」を所有した可能性も考慮される。しかし、近世の塩見地区は寺請制度のもとで正法寺・光嚴寺・水月寺に宗門統制されており、宗門改めも厳しく実施されていた。日向地方には隠れキリストの伝承がない状況である。さらに、「土製聖人像」が出土した塩見城跡の南側曲輪群一帯は17世紀後半から19世紀末にかけて近世墓地化したことが明らかとなっている。よって、隠れキ

リシタンの存在は想定し難く、禁教令以後に「土製聖人像」が製作・使用された可能性は低い。キリスト教の解禁（1873年）以後に敢えて瓦質の土製品を作る必要性も低いとみなされる。

類似例との比較 塩見城跡出土の「土製聖人像」の類似例は、福岡県太宰府市觀世音寺出土遺物にある（九州歴史資料館2007）。この觀世音寺例は、平面がハート形で中央に女性聖人像、上部に2つの穿孔がある。女性聖人像と穿孔の点では塩見城跡例と共通する（第192図）。

しかし、①図像の女性像が上方を向く、②穿孔の位置が異なる、③中子を用いた型押し技法による製作ではない、等の相違点もある。觀世音寺例は鉛物粒が多く含まれ、土師質焼成で近世以降の土人形製品に類似しており、胎土が緻密で瓦質焼成に近い塩見城跡例とは異なると判断される。なお、觀世音寺例の製作年代は表土層出土遺物のために特定は困難なようである。

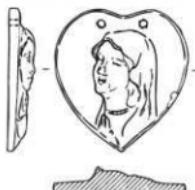
従って、觀世音寺例と塩見城跡例とは、モデルとなる図像や胎土、製作技術も異なるので同一時期の製品と捉えにくいといえる。

(iii) 「土製聖人像」の評価

表面中央の図像は、聖母マリアを表現したものと解釈され、土製のキリスト像と評価される。この「土製聖人像」は、図像の解釈と由来、出土状況や遺跡周辺の歴史的背景から、現段階では中世末～近世初めに属すると結論づけられる。具体的には16世紀末葉から17世紀初頭までの間に製作された、あるいは持ち込まれたとみられる。

使用方法は、上部に2箇所の穿孔が存在するので、身につける「メダイ」や、壁や箱の内部に掛け垂らして崇拜の対象とする等が想定される。

「土製聖人像」は、中世日向におけるキリスト教受容の実像を解く重要な遺物であり、中世の土製品としては、現時点で日本国内の初例となりえる。他



第192図 觀世音寺出土の土製品 (S=1/3)

方、ヨーロッパでもこの種の土製品は確認されておらず、世界的にも注目される遺物との評価ができる。しかし、本来の形状や製作技法、入手経路等については不明な点は数多く、今後の検討課題として残された。

(今塩屋・田中敏・潤ノ上)

e) 鎔治関連遺物

西側曲輪群（水の手曲輪）と南側曲輪群では鍛冶炉及び鍛冶関連遺物が検出された。

南側曲輪群の曲輪Mで検出された土坑（M-SC1）は鉄塊系遺物や羽口を含み、この鉄塊系遺物は鉄鋳（鍛冶原料鉄）と分析されたので鍛冶炉と解釈される。また、土坑内出土炭化物のAMS年代は14世紀末～15世紀中頃の結果が得られた（第VII章）。このSC1に隣接するSA1埋土面上で検出された焼土層と焼土層出土の鍛冶関連遺物は、SA1の廃絶後の鍛冶業（M-SC1）に伴う残滓と解釈される。

南側曲輪群内では、鍛冶炉（SC1）以外にもが壁・鉄塊系遺物・楕円鉄滓等の鍛冶関連遺物がSG1-2・3区内やその周辺の曲輪（H・G）で多く出土した。これらの鍛冶関連遺物は、金属分析の結果、精錬鍛冶～鍛錬鍛冶作業の途中に生成され、鍛冶原料は鉄鉱を脱炭したものと推定されている。鍛冶関連遺物には、廢鉄器の再利用または硬化処理の痕跡がある鉄塊系遺物も確認された（第VII章第5節）。

鍛冶関連遺物の分布と金属分析の結果から、南側曲輪群では曲輪H・Gと曲輪M周辺の、大きく2箇所で精錬鍛冶～鍛錬鍛冶作業が行われたと解釈される。その作業時期は14～16世紀代となる。鍛冶作業は鍛冶工人（職人）の手によるとされるので、曲輪H・Gと曲輪Mに鍛冶工人とその工房が存在した可能性が高い。この場合、工房跡にあたる遺構は、曲輪J・Mの竪穴建物がその候補となる。さらには、曲輪Hの掘立柱建物跡とした一部（H-SB31～34）は、柱穴間距離が密なので、本来は竪穴建物と判断されるので、工房跡群とも解釈できる。

f) 木製品

水の手曲輪では、生活用品や建築部材等の木製品が多数出土した。これらは、第II～IV期面の遺構に伴うことから16世紀代に帰属される。塩見城内における木材利用の様相や中世後期の日向における生活用具の組合せや土木建築技術の実態を端的に示す重要な資料と位置付けられる。

特に、生活用品においては容器類の存在が特色付

けられる。その容器類には製作技法から曲物・結物・刎物の3者が認められた。量的に多いのは桶や折敷といった曲物容器類である。木皮による綴目や木釘、ケビキ線等の製作技法の痕跡が読み取れる。結物容器は綴目のない底板（946・947）が該当すると考えられる。

例物容器類には漆器椀（934～938）と井戸杵（SF1）の井戸杵（983）がある。漆器椀は分析結果（第VII章）から、934・935・938は炭粉渋下地、936・937は漆下地という塗装工程が判明した。器厚は前者が肉厚、後者は薄手でもあるので、普及漆器と上質漆器というランク差が読み取れる。こうした漆器椀の出土は、中世日向における食器構成や食膳具のあり方、ひいては所有者の階層性を考え上で重要な資料と評価される。

さらに、木製品には漆が付着した容器も確認されている。それは漆器椀（936）や曲物の側板（973）で、漆容器として再利用されたと解釈される。わずか2点だが、紡糸具の一種である木製糸糰（976）やヰ（977）の存在と合わせて城域内で完結する自給的な生産活動の一端を示す遺物と評価される。このことは、塩見城跡が臨時の（戦時）ではなく恒常的に機能した城郭と意義付けることができる。

井戸杵（983）は、その上下端部の構造が腐朽しているので井戸杵専用に製作されたのか、他器種の転用なのかも不明である。仮に転用品とするならば大型の桶や樽、太鼓等と考えられる。

g) 石製品

五輪塔は、空風輪1、火輪35、地輪72、水輪6、宝鏡印塔の笠1や板碑の頭身6の合計121個が出土した。そのうち115個が水の手曲輪のSS1・2、SE1・2及びSF1の石積や側壁材に利用されていた。水の手曲輪内には、少なくとも地輪と宝鏡印塔の計73基の五輪塔や石塔が墓地から持ち運ばれたことになる。そのうち、地輪が最も多く転用材に用いられるが、空風輪は皆無である。そのまま建築資材として利用可能で、再加工の必要がない地輪が好まれた結果と考えられる。

これら五輪塔の転用は、城主の交代による城破りによる城郭の破却や城郭の再構成に伴う五輪塔群の破壊によるとも解釈されるが、単に手頭で積み易く耐久性のある資材に過ぎないかもしれない。

一方、茶臼や挽臼は打ち割られて複数に分割され

たことが遺物の残存状況から読み取れた。丁寧に周縁を打ち欠かれるものもあり（1150）、臼の使用停止点（廃棄時）には、打削・破碎行為といったある種の作法が存在したと解釈される。それは臼が單なる家財道具ではなく、神聖視されていたためと考えられる。また、堀切A3の埋め戻しや曲輪E2bの再造成時に臼を据え置く場合（1150・1151）も確認されているので、打削・破碎後には地鎮の意味も付与されたと考えられる。

h) 茶の湯文化と遺物

今回の調査では、褐釉陶器・瀬戸美濃焼の天目茶碗（300～309・478～480）や茶臼（1142～1151）等、茶の湯文化を象徴する遺物が出土した。さらに、香炉（482）を聞香炉、瓦質土器の火鉢（658・662）を風炉とするならば、これらも「茶の湯」文化に関する遺物といえる。

塩見城跡における茶の湯文化は、天目茶碗の編年観（藤沢 2008）や茶臼の形態的特徴（桐山 1996）から15世紀後葉～末葉には始まり、16世紀末葉まで存続したといえる。茶の湯は、武将の文化的教養や社会的地位を示すステータスとして嗜まれたとされ、中世日向においても『上井覺兼日記』にその記述が認められる。今回の発掘調査はその実態を示す具体的な成果といえる。

（2）遺構とその特徴

a) 1号石積遺構（SS1）

SS1の構築工法・技術と意義 SS1は、「石積み壁体」（石積み列）を数列にわたって1号堀側に向けて前進的に築きあげ、その間に盛土を施す作業を繰り返す工法で構築された石積遺構である。

SS1にこうした構築工法が用いられたのは、SS1が水の手曲輪を外部から遮閉し、堀線の補強や曲輪を構成する造成土の崩壊を防ぐ堅牢性を確保する機能を担わされたためと考えられる。さらに、SS1の最終段階（II期）において、新たな土壠と堀を追加して虎口構造に改修される。大手としての機能の付与のみならず、視覚的威圧性による城主（領主）権力の誇示も意味したと解釈される。

石積み工法の評価 塩見城跡 SS1 の内部で確認された「石積み壁体」の類似例には、群馬県太田金山城跡の「裏石積み」（宮田 2003）や北九州市小倉城跡の石垣（石積）等がある。「石積み壁体」や「裏

石積み」による構築工法は、東京都八王子城跡のように石積みが限界高に達すると、その奥手からセッタバックした位置から再び積み上げていく工法（宮武 2000）とは対比的ともいえる。

SS1の石積みは1.5～2m程度が限界高で、ほぼ垂直に積まれる特徴を有する。これは近世城郭の特徴である建物の荷重に耐えられる「高石垣」の構築工法・技術とは異なる。その脈絡においては、SS1の存在は「石垣」の導入、つまり織豊期城郭が全国的波及する以前の地域的様相かつ、中世日向における土木技術の到達点を示すと評価される。

中世期の石積遺構は、宮崎市清武城跡や都城市都之城跡（主郭部・中ノ城跡・池ノ上城跡）などに類例がある。しかし、塩見城跡のSS1はその追随を許さない突出した規模と構造的特徴を有し、石積部と堀・土壠や排水溝を巧みに融合させた構造物としては初例となる。その構築工法は、SS2における胴木構造も含めて、中世日向における土木技術の実態解明につながる新たな知見をもたらした。SS1・2と清武城跡や都之城跡における石積遺構の技術的相互の関連性、つまり石積技法や構築工法といった技術的系譜関係やその背景については今後の検討課題としておきたい。

b) 1号井戸跡（SF1）

水の手曲輪の井戸跡（SF1）の検出は、中世山城の機能維持に不可欠な「水」の確保のあり方や「給水と排水のメカニズム」（若山 1999）の具体例を示す重要な成果が得られた。この井戸には台形（SF1-b期）と方形（SF1-c期）の「洗い場」に係る石敷（脛）が付設されていた。

この種の類似例は、中世城郭においては宮崎県内では都之城跡の中ノ城跡（15世紀中葉～16世紀末葉）があり、県外では佐賀県名護屋城の山里丸（16世紀末葉）、福井県福井市一乗谷朝倉氏館跡（16世紀第3四半期）等がある。石敷を伴う井戸跡は16世紀後半代には出現した井戸の一類型といえるが、この種の井戸跡は全国的にも数少ない状況である。特に、塩見城跡のSF1-c期の石敷形態は、初例に近いものと考えられる。

また、石敷を伴う井戸には排水路が伴う場合が多いのも特徴の一つであり、塩見城跡のSF1(b・c期)においては、石敷の空間での作業と使用後の排水という一連のサイクルが読み取れる。（今塙屋）

(3) 西側・南側曲輪群における遺構の変遷
変遷過程と画期 今回の発掘調査で検出された遺構の主体は掘立柱建物跡である。約2,800基を数える柱穴から、掘立柱建物跡194棟が復元された。西側・南側曲輪群内では、掘立柱建物跡の主軸方向が同一方向にまとまる複数のグループ(群)が抽出できた。曲輪A3・F1・H1等では、掘立柱建物跡の「群」が主軸方向を変えながら連続的に建て替わる変遷過程を読み取れた(第III～IV章)。

さらに、道路状遺構(SG1～2)の改修・変更過程(SG1～III期)や水の手曲輪における計5面に及ぶ曲輪面の形成過程(第I～第V期面)も把握でき、堀群の掘削や改修等の時期もその大要を捉えられた。

これらの調査成果をもとに、西側・南側曲輪群における遺構の変遷を検討し、その画期を設定した(第69表)。なお、所属時期の捉えにくい掘立柱建物跡(群)の場合は、建物群の分布状況や建物主軸の方向性の相互比較等からその時期を推定している。

検討の結果、大きく8つの画期(塩見城Ⅰ～Ⅷ期)に概括される(第69表、第193～194図)。各画期における遺構のあり方について記すこととする。

a) 塩見城Ⅰ期(11世紀後葉～12世紀末)

曲輪A3・E2・F1では、11世紀後葉～12世紀末葉に位置づけられる景德鎮系の白磁碗や皿が出土した。塩見城跡の中世期における最古段階の遺物群である(第6・14・68表・第120～122図)。しかし、当該期の遺構は確認できなかった。貿易陶器である白磁を持ちえた階層は、在地開発領主等の有力者層と想定されるので、この時期を中世館成立の前段階とみて塩見城Ⅰ期としておきたい。「土持太郎信綱」の名が『建久園田帳』に塩見35町の地頭として登場する時期(第Ⅷ章第2節)と対応するものと考えられる。

b) 塩見城Ⅱ期(13世紀後葉～14世紀中葉)

今回の調査区内においては、塩見城Ⅰ期とⅡ期の間にあたる13世紀初頭～中葉の段階は、西側・南側曲輪群とも遺物や遺構の皆無な空白期となる。塩見城Ⅱ期以降は遺構や遺物の存在が確実となるが、遺構(掘立柱建物跡)の時期がより明確に把握可能なのは14世紀後葉(塩見城Ⅲ期)以降となるので、空白期と塩見城Ⅲ期の間である13世紀後葉～14

世紀中葉頃の時期を暫定的に塩見城Ⅱ期とする。

出土遺物の年代やAMS年代測定結果等から塩見城Ⅱ期に存在する可能性がある掘立柱建物跡は、曲輪A3の掘立柱建物跡①群や曲輪B3の⑤群、B4のSB1・2(第192図)がある。曲輪D～L群の柱穴では当該期の遺物が出土しており、掘立柱建物跡の存在が想定される。また、主郭部では13世紀代より遺物の存在が確認される(『日向市史』2010)。さらに、水の手曲輪の窪地状遺構では14世紀前半代より土器・陶器等が包含されるようになる。

この塩見城Ⅱ期の時期には、土持氏領(延岡)の拠点城郭の一つである井上城の築城(14世紀前半代以降)が想定されており(甲斐1999)、塩見城も中世山城として成立したものと考えられる。

c) 塩見城Ⅲ期(14世紀後半～15世紀前半)

西側曲輪群の曲輪A・B群及び南側曲輪群の曲輪D・F・H・J・M(群)において掘立柱建物跡や竪穴建物跡の存在が認められる。塩見城Ⅲ期は、今回の調査区内で遺構の存在とその所属時期がより確實性をもって把握できる段階とした。

西側曲輪群 曲輪A3・B3・B4では、塩見城Ⅲ期までは曲輪面として造成がなされ、掘立柱建物跡群が成立したとみられる。曲輪B3では幅列で囲まれた内部に身合面積10m²と20m²の掘立柱建物跡が並列する関係で、曲輪A3では5～7mの小型の建物跡が単独で建てられる。これらの掘立柱建物跡は、その重複関係から2小期程度に細分される。

なお、曲輪Cは曲輪面造成の時期を示す遺物に乏しいが、他の曲輪群と比べて起伏に富み、その堀切や堅堀の造作が難な特徴を示すことから、塩見城Ⅲ期までには形成されたと考えておきたい。

南側曲輪群 遺構主軸方向は尾根線上に平行しており、道路状遺構の掘削以前の地形に沿った遺構配置のあり方を示す。曲輪Fでは、二面庇で間仕切りを持ち、身合面積は約40m²を測る掘立柱建物跡(F-SB17)が出現する。曲輪F内では、主屋の建物(SB17)と身合面積(5～6m²)の狭くて構造の簡単な付属棟的な建物(SB25・29)の建物配置となり、曲輪内が敷地(居住地)として利用されたことが読み取れる。さらに、曲輪J・M群の竪穴建物跡と鉄滓を含む土坑(SC1)は、鍛冶を中心とした工房群が曲輪内に内包されていたことを示している。

第68表 陶磁器からみた曲輪の消長

曲輪名	遺物の年代	塙見城I期		空白期		塙見城II期		塙見城III期		塙見城IV期		塙見城V期		塙見城VI期		VIII
		11c後葉 ～末葉	12c後葉～初葉	13c初葉～初葉	13c中葉～末葉	13c後葉～末葉	14c初葉～初葉	14c中葉～末葉	14c後葉～末葉	15c初葉～初葉	15c中葉～末葉	16c初葉～初葉	16c中葉～末葉	16c後葉～末葉	17c初葉～末葉	
主郭部 主郭																
曲輪A	A1															
曲輪A	A2															
曲輪A	A3															
曲輪A	A4															
曲輪B	B1															
曲輪B	B2															
曲輪B	B3															
曲輪B	B4															
曲輪C																
水の手																
堀																
曲輪D	D															
曲輪E	E1															
曲輪E	E2															
曲輪F	F1															
曲輪G																
西側曲輪群																
曲輪H1	H1															
曲輪H1	H2															
曲輪H1	H3															
曲輪J1	J1															
曲輪J1	J2															
曲輪K1	K1															
曲輪M1	M1															
遺跡状況	S1															
遺跡状況	S2															
遺跡状況	S3															

凡例  一少ない (1個体程度)  一普通 (2~3個体)  多い (4個体以上) ←→ は出土遺物の年代の存続幅 (日向市史) 2010に基づく

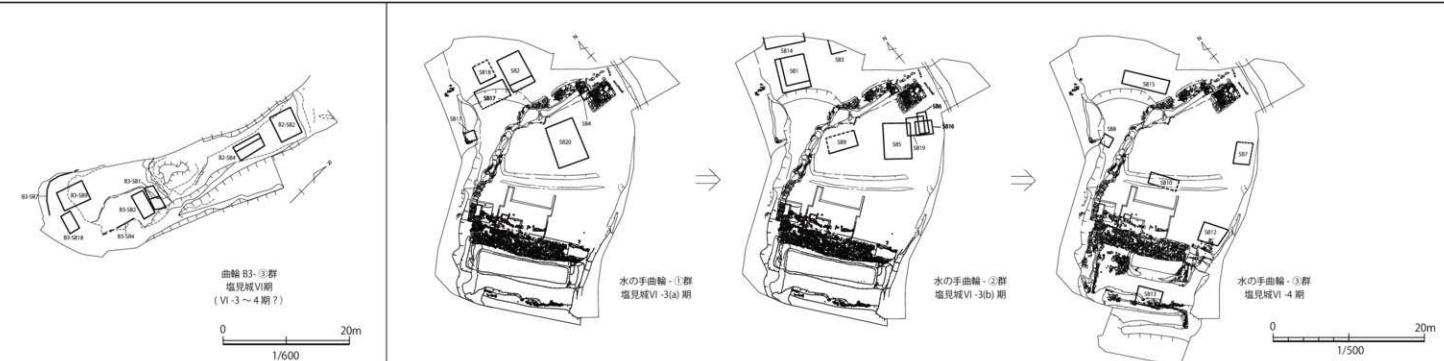
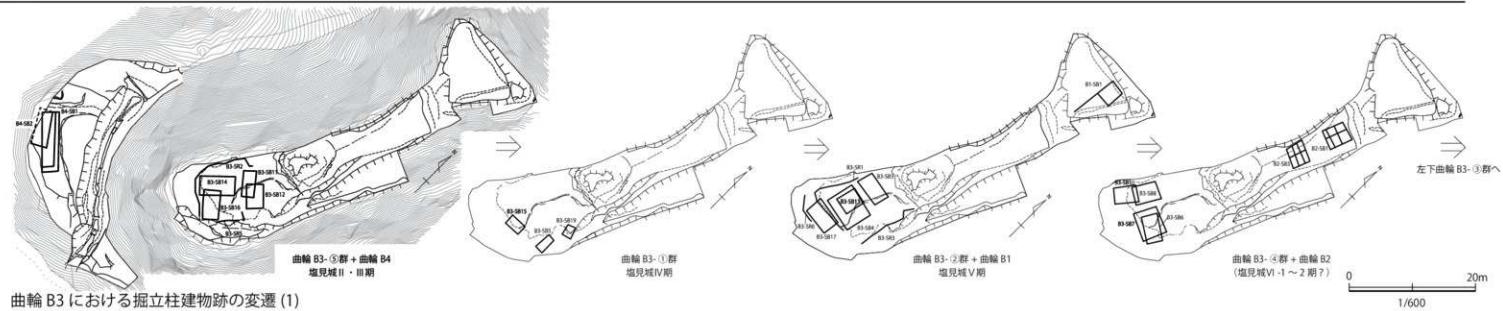
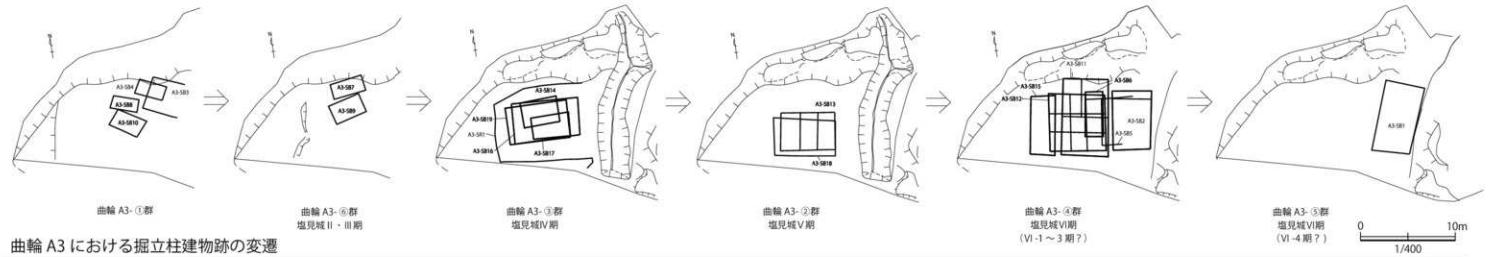
第69表 遺構の変遷と画期

画期	時代	A群 (塙見城A)	B-C群	水の手	堀群	浜側堀群
塙見城I期	11c後葉～12c末葉	(-)	(-)	(-)	(-)	(+)
空白期						
塙見城II期	13c後葉～14c前葉	(-)	(-)	(-)	(-)	
塙見城II期	14c後葉～15c前葉	曲輪A(SB1群) 曲輪A(SB2群)?	曲輪B(SB1群) 曲輪B(SB2群)?	曲輪C(SB1群) 曲輪C(SB2群)?	曲輪D(SB1群) 曲輪D(SB2群)?	曲輪D～Lに獨立柱建物跡の存在か?
塙見城III期	15c中葉～末葉	曲輪A(SB3群) 曲輪A(SB4群)	曲輪B(SB3群) 曲輪B(SB4群)	曲輪C(SB3群) 曲輪C(SB4群)	曲輪D(SB3群) 曲輪D(SB4群)	曲輪E1 (SB1群) 曲輪E1 (SB2群) 曲輪E1 (SB3群)
塙見城IV期	16c初葉～	曲輪A(SB5群)	曲輪B(SB5群) 曲輪B(SB6群)?	曲輪C(SB5群) 曲輪C(SB6群)?	曲輪D(SB5群) 曲輪D(SB6群)?	曲輪E1 (SB1群) 曲輪E1 (SB2群) 曲輪E1 (SB3群)
塙見城V期	17c初葉～	曲輪A(SB7群)	曲輪B(SB7群)	曲輪C(SB7群)	曲輪D(SB7群)	SG1～3期
塙見城V期	17c後葉～	曲輪A(SB8群)	曲輪B(SB8群)	曲輪C(SB8群)	曲輪D(SB8群)	SG1～3期
塙見城V期	17c後葉～	曲輪A(SB9群)	曲輪B(SB9群)	曲輪C(SB9群)	曲輪D(SB9群)	SG1～3期
塙見城V期	17c後葉～	曲輪A(SB10群)	曲輪B(SB10群)	曲輪C(SB10群)	曲輪D(SB10群)	SG1～3期
塙見城VI期	17c終葉～	(-)	(-)	(-)	SS1の確確?	(-)
空白期						
塙見城時期	17c後葉～19c末葉	(-)	(-)	(-)	(-)	曲輪H1 (SB1群)? 曲輪H1 (SB2群)? 曲輪M (SB3群)

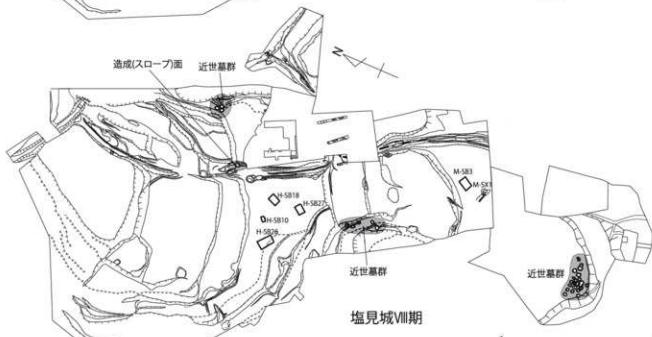
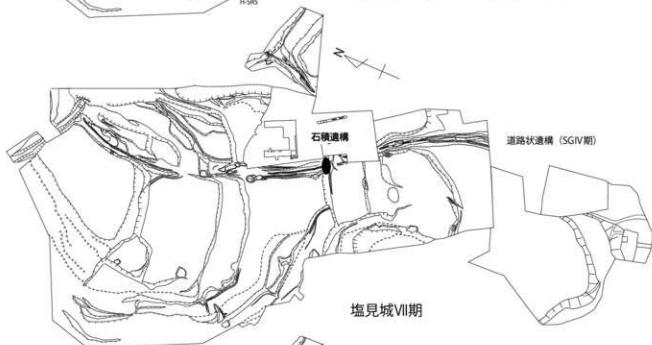
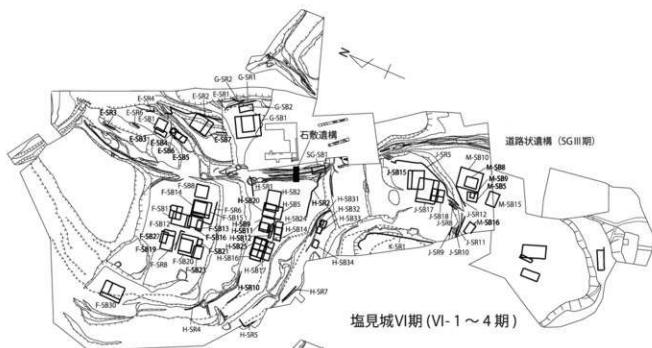
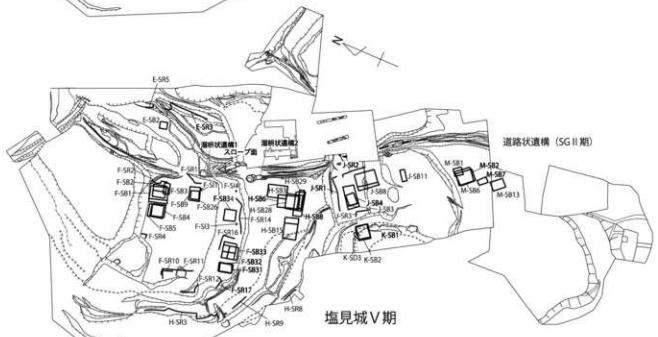
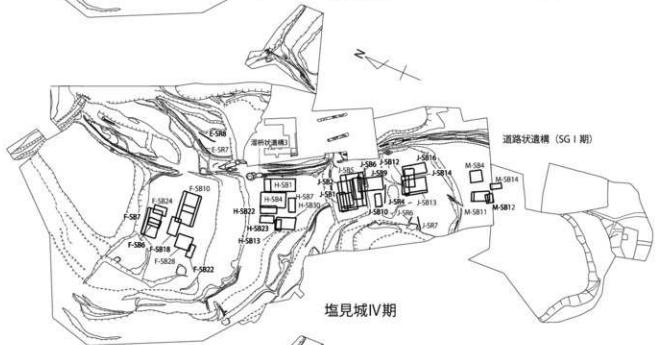
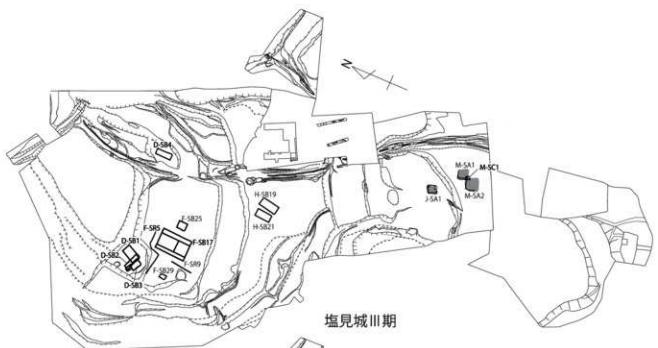
※ 内の線の長さは必ずしも時間的長さを表現していない。

・白抜けの矢印は遺構(独立柱建物跡等)の変遷を、斜掛けの矢印は遺構(切削跡)の存続幅を示している。

・(+) は遺構が存在する可能性があるもの、(-) はその可能性が低いものを示す。



第193図 西側曲輪群における遺構の変遷(曲輪A3・曲輪B群・水の手曲輪)



第194図 南側曲輪群における遺構の変遷

0
1/1200
50m

塩見城III期の特質 丘陵尾根を造成した曲輪面上に掘立柱建物跡等が立地するのが確認される画期であり、F-SB17のような主屋的建物が出現する時期である。従って、塩見城III期は、地域の政治的・軍事的拠点としての性格がより明確化した時期と理解される。15世紀中葉段階までは土持氏が塩見城を支配していたので（第Ⅶ章第2節）、土持氏の主体的関与があったものといえる。

d) 塩見城IV期（15世紀中頃～末）

塩見城IV期は、西側曲輪群の堀切A3の掘削と南側曲輪群では縱横に延びる道路状遺構（SG1～3）で方形に区画された段状の曲輪群が形成される段階でもある。西側・南側曲輪群の掘立柱建物跡群は、その重複関係から2～3小間に細分される。

西側曲輪群 曲輪A3では、狭い曲輪面の柵列（SR1）に囲繞された空間に25～30m大と10m大的掘立柱建物跡が建てられている。一方、曲輪B3では5～10m程度の小型建物が建てられる程度である。曲輪B群の西側裾部にあたる堀切C1・B4は、この塩見城IV期段階には掘削されたと考えられ、曲輪B4の新たな曲輪面造成も堀切B4の掘削と連動した土木事業であったと考えられる。

南側曲輪群 調査区全域に掘立柱建物跡群が展開する。曲輪Fの掘立柱建物跡群は塩見城III期とは異なり、その建物主軸は等高線に直交する方向で、梁行方向を曲輪東縁中央にある道路状遺構との出入り口部に向けた建物配置をとる。一方、曲輪H以南の掘立柱建物跡群は道路状遺構の主軸方向に梁行・桁行側を揃え、整然とした建物配置をとる。このように南側曲輪群では道路状遺構の開通が建物主軸や配置を規定しており、その計画性が読み取れる。道路状遺構は大手口から主郭部に至る城道という機能のみならず、城域の区分や曲輪の役割分担を意図したものと考えられる。

また、南側曲輪群における掘立柱建物跡の規模（身舎面積）は、40m²級（F-SB10、H-SB1・4、J-SB5）、30m²級（F-SB7、J-SB2・9・13）、20m²級（F-SB28、J-SB6・16、H-SB30）に15～17m大と6～10m大と階層的なあり方である。40m²級規模の掘立柱建物跡は庇や間仕切りを有し、曲輪F・J・Hに1～2棟ずつ配置されることから、各曲輪の主屋的建物と理解される。この主屋的建物と規模のより小さい掘

立柱建物跡群で構成される曲輪の集合体が塩見城IV期段階の南側曲輪群の特徴である。決して広大ではない曲輪面に掘立柱建物跡が林立する様相は、曲輪面が軍事・防衛的機能よりも平時の敷地（居住地）の性格を強く有していたと理解される。

さらに、掘立柱建物跡の建物面積が階層的に分離されること、掘立柱建物跡そのものの役割や機能の分化、居住者の身分や経済力を反映した構造性が表微されたものと解釈される。

塩見城IV期の特質 塩見城域内の整備拡充という明確な意図の下に造作・普請が進む時期で、臨時の山城ではなく、主郭部と麓に広がる屋敷・建物群が一体化して恒常的に維持機能する城郭（城館）の性格が確立した画期と捉えられる。さらに、日向市域の支配権が土持氏から伊東氏に移る転換期にあたり（第Ⅷ章第2節）、地域支配権の交代を契機として、「日向三城」の一つとして重要拠点化が進む段階と理解される。東側曲輪群内に現存する水月寺に光嚴寺（1457年創建）が存在したという伝承（第1章第4節）が事実ならば、中世寺院を内包した中世山城ともいえる。

e) 塩見城V期（16世紀初頭～前葉）

塩見城IV期とVI期の間に位置する段階を塩見城V期とする。西側・南側曲輪群では、前段階に引き続いて掘立柱建物跡が展開する。その重複関係から2～3小間に細分される。

西側曲輪群 曲輪A3では、塩見城III期に引き続き25m前後の掘立柱建物跡が建てられる。曲輪B3では、柵列に囲まれた内部に5～8mと10～15m程度の掘立柱建物跡が建てられる。また、曲輪B群の西側裾部にあたる堀群（堅堀C1・B4と横堀）は、塩見城VI期段階に箱堀状に再掘削されることから、塩見城V段階には存在したものと考えておきたい。この堅堀C1の底面は階段状に削り出されて、曲輪相互を結ぶ通路の性格を有する。この堅堀C1の掘削に伴い、堀切C1は大きく形状を変更される。水の手曲輪では竪地状遺構内に石積遺構（SS2）や木杭列が構築され（塩見城V-1期）、護岸面の改修（同V-2期）が施される。水に関する維持管理や防衛性の向上といった積極的な関与が図られる。

南側曲輪群 道路状遺構I（SG1-2区）の階段状の路面がスロープ面へと改修され、曲輪F3が造成さ

れて曲輪面の拡張がなされる。掘立柱建物跡は塩見城IV期と同様に調査区全体に展開する。

各曲輪の掘立柱建物跡の建物主軸は、塩見城IV期ほど道路状遺構の主軸に規制されず、むしろ略方形に区画された曲輪面の主軸方向に沿う。このためか、塩見城IV期では曲輪H以南の掘立柱建物跡の建物主軸は揃えられるのにに対し、塩見城V期では曲輪E・F・Hの群と曲輪J・Mの2つのグループにわかれる。それぞれのグループの掘立柱建物跡は整然とした建物配置をとる。これら掘立柱建物跡群は重複関係からさらに2小期に細分される。身舎面積は、40m²大の掘立柱建物跡がなくなり、30m²大(H-SB8)が最大面積となる。次いで20～25m²(F-SB1、H-SB6、SB15・28、J-SB4・8、M-SB2・6)と続くが、10～20m²大の建物が主体となる。

曲輪Fは、曲輪の外縁に沿って梁行と桁行の長さが近しい正方形プランの建物跡が立ち並ぶ特徴を持つ。居宅や兵舎というより作業小屋や倉庫といった性格の掘立柱建物跡と考えられる。反対に曲輪Jでは、方形に囲まれた柵列内にL字形配置をとる主屋の建物と付属棟の建物群(J-SB3・4・8)が認められる。柵列の道路状遺構2・3の結節部側は開放されて出入り口となる。

さらに、この曲輪Jの南側は、掘立柱建物跡の疎な空間が広がり、曲輪Fの中心部も空闊地となる。これらの空闊地は、広場や作業場といった様々な場面に用いられる「場」であったと解釈される。

f) 塩見城VI期（16世紀中葉～17世紀初）

塩見城跡における縄張りの最終形態となる時期である。塩見城VI期は、曲輪構造の改変や防護的遺構の構築といった、軍事機能の強化が明確になる。
西側曲輪群 曲輪A3では、堀切A3が埋め立てられ、その上に掘立柱建物跡群が展開する（塩見城VI-1～4期）。建物群の主軸方向は南北方向となるのが特徴的で、総柱建物(A3-SB12)を含む30～40m²の規模の大きい建物が配置される。建物群の重複関係や配置関係から3～4小期に細分される。この堀切A3の埋め立ては、可住地の拡大のみならず、堀底の雨水が流れ下る位置にあたる井戸跡(SF1)の構築と連動したものといえる。また、曲輪B2の掘立柱建物跡(B2-SB1～4)は、塩見城V期ないしVI期段階に位置づけられる。さらに、曲輪B群

の西側に沿う柵群（堅堀C1・B4と横堀）では、塩見城VI期段階に断面箱型へと再掘削されたと考えられる。堀切B4も築研堀状から箱型に再掘削されるので、大掛かりな改修が柵群全体に施されたものと解釈できる（第34・35図）。

水の手曲輪 第III期面の新段階（塩見城VI-1期）、第IV期面（同VI-2期）、第V期面（同VI-3・4期）と曲輪面の変遷が追える。塩見城VI-3期は第V面の石積遺構(SS1)の改修前、塩見城VI-4期はSS1の改修後の段階とした。塩見城VI-3期の掘立柱建物跡群は2小期(3a・3b期)に分かれる。

塩見城VI-1期（第III期面新段階）において井戸とその排水施設が設置され、「井戸曲輪」としての性格が顕在化し、塩見城VI-3期（第V期面1期）で防衛的機能の強化と可住地の確保が図られたといえる。塩見VI-4期（第V期面2期）では、SS1に虎口構造が付設されて、主郭部に至る新たな城道が成立し、閉鎖された空間から開かれた空間へと性格の転換が図られる。この虎口構造は、鏡柱を持つSB12と礎石を用いた掛け作りのSB13という2箇所の門状遺構と柵列が組み合って堅牢性を高めるので、SS1が大手口の一つとなったと考えられる。

掘立柱建物跡は、各小期[塩見城VI-3(a)・(b)、-4]とも整然とした配置関係にある。塩見城VI-3期の建物主軸は南北方向を基調とするが、VI-4期ではSS1の長軸方向に揃う。これらの身舎面積は20m²、10m²、3～5m²と階級的に分離される。

南側曲輪群 塩見城V期と同様に調査区全体に掘立柱建物跡が展開し、曲輪E・Gは造成されて平坦面が拡大する。掘立柱建物跡の建物主軸は、曲輪面の主軸方向に揃い、整然とした並びとなる。これら掘立柱建物跡群は重複関係からさらに2～3小期に細分される。また曲輪F・Hでは東西方向に列状に建物が並び立つ状況となる。調査区内の東西端では、物見櫓の機能のある掘立柱建物跡(E-SB7、F-SB30)が建てられたようである。道路状遺構I(SG1)の南面付近（曲輪Jの北半部）は、掘立柱建物跡のない空闊地と化す。

身舎面積は、35～40m²大の掘立柱建物跡が再び認められる(H-SB17、J-SB17、M-SB10)。次いで21～25m²大(F-SB27、H-SB2・5・16、J-SB15)の順となるが、10～20m²大の建物跡が主体的となる。建物の規格は、梁行と桁行の長さが近しい平面方形

の建物跡が多く、曲輪F・Hに集中する。

一方、道路状遺構1(SG1-3区)に改修・変更が加えられる。曲輪Hと曲輪Gを直接往来可能とする石敷遺構が設置され、曲輪面道路状遺構の南端には掘立柱建物跡(SG-SB1)が構築される。SG-SB1は、その建物構造と南側(曲輪J1)が空闊地となるので、櫓状の城戸(門)であったと位置づけられる。

このように南側曲輪群は、物見櫓的な掘立柱建物跡や城戸(門)が構築され、軍事的・防御的機能が強くなる。城戸(門)や石敷遺構の存在は、道路状遺構の機能の減衰と各曲輪面の等質的な段階から機能の分化や性格の変化が進んだ表れといえる。

城主との関係 塩見城VI期の段階は、塩見城の城主が伊東氏(右松四郎左衛門尉)、島津氏(吉利忠澄)、さらに高橋氏へと交代する(第VIII章第2節)。しかし、これら三代の城主と今回の調査成果との対応関係は、明らかにし得ない部分が多い。

ただし、水の手曲輪の第IV期面(塩見城VI-2期)と第V期面(同VI-3・4期)の間にある造成土中の土師器皿(618)が島津氏の本貫地に特有な製作技法を有する点と第V期面出土の香炉(482)の年代観(第VI章)を考慮すると、第V期面(塩見城VI-3期)時は島津氏の領有期であった可能性が高い。その場合、SS1を虎口構造に改修(塩見城VI-4期)時は島津氏または高橋氏の領有期となる。よって、第IV期面(塩見城VI-2期)までは伊東氏の領有期と考えておきたい。なお、SS1の虎口構造と主郭部土塁の虎口部の関連性等については、今後の検討課題となる。

g) 塩見城VII期(17世紀初)

今回の調査範囲内では17世紀前半の遺構や遺物が皆無に近く、曲輪面上の營為が唐突に終了した状況といえる。さらに、水の手曲輪の石積遺構(SS1)の崩壊と南側曲輪群SG1-3区の石積遺構の構築もこの時期の特徴である。SS1では中央部の石積みと背面の盛土層が大きく損なわれ、1号櫓周辺に石材が散乱する状況であり、自壊というよりは人為的な破壊行為によるものと解釈できる。同じくSG1-3区では石積遺構で道路状遺構の封鎖がなされていった。これらの破壊や封鎖行為を高橋氏の手による「城破り」の痕跡と読み取るならば、17世紀初頭頃を塩見城が廃絶(城)に至った画期(塩見城VII期)と捉えることができる。

h) 塩見城VII期(17世紀後半～19世紀末)

塩見城廃絶(城)後の土地利用が近世墓地や耕作地等へ変化する画期である。17世紀前半代の遺物の僅少さは、人間活動の希薄さの反映を意味するので、塩見城跡の廃絶後は、一定期間は、城地として保護管理または禁忌地とされていたと考えられる。

近世墓地の形成開始は、17世紀後半頃で19世紀末まで長期間造営が続けられる。古記録類や中山遺跡SX19出土の鋸杖は、修驗道活動の場の存在を示唆するが、発掘成果からは読み取れない。

掘立柱建物跡は数棟程度にとどまり、かつ身面積は6m²と規模も小さいので居宅よりは耕作に伴う小屋的な性格と考えられる。また、曲輪面は耕地利用の際に造成等(第111図)の改变を受けるが、曲輪面の区画は基本的にそのまま地割に踏襲されて現在に至っている。(今塙屋・川俣・田中達・田中敏)

第4節 結び

a) 発掘成果からみた塩見城跡の構造

今回の発掘調査では、13世紀後葉～17世紀初頭における塩見城跡の歴史の一端を明らかにした。

特に、南側曲輪群の調査では、方形区画の曲輪(屋敷地)群と曲輪群を貫く道路状遺構(城道)といった15世紀中葉段階に導入された計画的な築城プランが判明した。各曲輪(屋敷地)内の身面積が大きい主屋の建物を武士階級の居宅とするならば、主郭は城主(領主)、曲輪(屋敷地)群を家臣團の居住域と捉えられる。宮崎市宮崎城の例ではあるが、16世紀末葉の『上井覚兼日記』では、城内の城主館と有力家臣の屋敷の記載が残る。

従って、南側曲輪群内の各曲輪は「塩見衆」に代表される領主を補佐する有力家臣や在地の武士集団の屋敷地であったと解釈される。屋敷(居宅)に付属棟、隸属的な階級の住居や戦闘に備える兵舎(陣屋)、食糧・武器等を常備備蓄する各種の倉庫(方形・正方形)プランの掘立柱建物及び工房と思しき竪穴建物等が配置され、多目的な広場も備えたのが、南側曲輪群の姿であったと復元できる。

この南側曲輪群に特徴的な様相は、平時の館と山城の組合せの成立と軍事機能の強化と政庁機能等の一体化や「城下町の凝集」(千田2000)にあたると見える。西側曲輪群は、軍事機能の側面がより強化した構造性が読み取れる。

15世紀後半代以降の塙見城跡は、円環状に主郭周辺を取り巻く堀切・横堀・堅堀と帶曲輪と幅狭い平坦面で主郭を防御する内郭と、屋敷地や中世寺院や工房等で構成される外郭が結合した二元構造であったといえる。こうした曲輪の配置形態は、瘦せ尾根上に鎖状に曲輪群が有機的に結合する「丘陵立地型」(北郷1999)と独立・並立的な曲輪構造を特徴とする「九州館屋敷型」(千田2000)の折衷型のような様相と理解される。

b) 塙見城の歴史的特質

塙見城跡の歴史的特質については、若山浩章氏に御寄稿を頂いている(第Ⅷ章第2節)。詳細はそちらに譲ることとし、本項では、その歴史的特質をまとめて結びとしたい。

塙見城跡においては、輸入・国産陶磁器類や中世土器類など日向市域以外での生産品が多く認められた。この背景の一つには、若山氏が指摘するように塙見城や日知屋城が細島港に近く、海上交通の利点があったことが挙げられる(第Ⅷ章第2節)。

つまり、畿内・瀬戸内方面から南西諸島に至る広範囲な流通ルート上に位置する細島港で織り成す交流と交易でもたらされる物資や富を、城主(領主)層が入手できたためと考えられる。この物資や富の入手に際しては対価が必要となる。これに関しては、伊東氏の菩提寺である大光寺の造営(延文3年:1358年)に伴う資材(木材)を塙見から入手した記録(『日向市史』2010)から、中世期の塙見周辺は木材の集散地であり、加工品(板材)が対価(特産品)の一つであった可能性が高い。

従て、塙見城跡は、細島港という物資の集散地と流通拠点を掌握する経済的特性を有していたといえる。さらに、地域支配の政治的拠点や日向・延岡地域の支配権をめぐる軍事戦略的な前線基地の性格を帯びていた。その活動は城主や地域支配の状況によって多岐にわたる(第Ⅷ章第2節)。それは、塙見川と街道の要所を押さえて海と山を結ぶ情報や流通の十字路に位置する立地条件に起因していたと考えられる。このように、多面的な性格を有する塙見城は、有事の際に臨時に備えるための「詰城」の段階から恒常的に常駐・機能する中世山城へと時代背景とともに発展をとげたのである。

(今塙屋・田中敏)

【第VIII章第1・3・4節 参考文献】

- 福井県教育委員会 1979 「朝倉氏遺跡発掘調査報告書」 1
宮崎県教育委員会 1979 「城内遺跡(清武城跡)」 『九州歴史
自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書』 (3)
北郷泰道 1991 「日向の中世城館跡」 『宮崎県地方史研究紀要』
第20輯
日向市教育委員会 1993 「日知屋城跡」 『日向市文化財調査
報告書』
鎮西町教育委員会 1994 「名護屋城跡周辺遺跡」
北九州市教育文化事業団 1997 「小倉城跡」 2
神庭信幸・小島道裕・横島文夫・坂本満 1998 「京都大学所蔵『マリア十五玄義図』の調査」 『真立歴史民俗博物館研究
報告』 第76集 国立歴史民俗博物館
福島金治 1999 「大友・島津氏と耳川合戦」 『宮崎県の歴史』
山川出版社
宮崎県教育委員会 1999 「宮崎県中近世城館緊急分布調査報
告書」 II 詳説編
甲斐典昭 1999 「中近世の縣(延岡)の城郭」 『宮崎県中近世
城館緊急分布調査報告書』 II 詳説編 宮崎県教育委員会
若山浩章 1999 「中世城郭の「水の手」をめぐって」 『郡城
地域史研究』 5
千田嘉博 2000 「鐵農系城郭の形成」 東京大学出版会
藤木久志ら編 2001 「城破りの考古学」 吉川弘文館
宮武正登 2000 「検出遺構(主に石垣)から見た原城跡」 『原
城發掘』 新人物往来社
渡辺千尋 2001 「佛教の刻印」 小学館
小野正敏 2003 「威儀材としての貿易陶磁器と堀」 『戦国時
代の考古学』 高志書院
佐藤浩司 2003 「西国における在地土器の生産と流通」 『戦
国時代の考古学』 高志書院
宮田毅 2003 「東国戦国期石垣の実像」 『戦国時代の考古学』
高志書院
宮武正登 2003 「九州における鐵農系城郭研究 10年の現状
と課題」 『鐵農城郭』 第10号 織農期城郭研究会
外山隆之・原田英紀子 2004 「都城市における中世掘立柱建
物跡の類型化」 『宮崎考古』 第19号 宮崎考古学会
宮崎県埋蔵文化財センター 2004 「中山遺跡」 『宮崎県埋蔵
文化財センター発掘調査報告書』 第93集
坂本嘉弘 2005 「中世大友城下町出土の土師質土器編年」 『農
後府内』 2 大分県教育委員会
都市史編纂委員会編 2006 「都城市史」 資料編考古
浅野ひとみ 2003 「キリストン時代の图像受容」 『フェヌ
南蛮』 発表資料 大分県教育厅埋蔵文化財センター・大分
県先哲資料館・キリスト教関連遺物研究会
九州歴史資料館編 2007 「觀世音寺」
宮武正登 2007 「中世城郭の終焉」 『海路』 第5号 海鳥社
岩元康成 2009 「鹿児島県における12~17世紀の土師器」
『南の縄文・地域文化論考』 新東京一代表還記念論文集
南九州縄文研究会
日向市編 2010 「日向市史」 資料編
都城市教育委員会 2010 「池之上城跡」 『都城市文化財調査
報告書』 第99集
大石一久 2011 「日野江城跡階段遺構出土の転用石塔につい
て」 『日野江城跡 総集編I』 『南島原市文化財調査報告書』
第6集 南島原市教育委員会
都城市教育委員会 2011 「永田藤原遺跡」 『都城市文化財調
査報告書』 第102集

附編 池ノ下遺跡の調査とその成果

ここでは、平成17・18年度に実施した日向市池ノ下遺跡における発掘調査における成果を報告する。

1 調査の概要

立地と環境 池ノ下遺跡は、日向市大字塩見字権現原山添に所在する。塩見川右岸の比良山の東山麓に広がる海岸段丘上に立地し、標高は最高所で37mを測る。

調査の経緯と組織 平成17年11月14日から平成18年2月20日に第1次調査を行い、平成18年5月22日から同8月2日まで第2次調査を行った。

調査の組織は以下のとおりである。

【調査主体】宮崎県教育委員会

宮崎県埋蔵文化財センター

所長 宮園 淳一（平成17年度）

清野 勉（平成18年度）

副所長 加藤 恒朗（平成18年度）

副所長兼調査第二課長

岩本 哲夫（平成17～18年度）

総務課長 宮越 尊（平成17～18年度）

主幹兼総務係長 石川 恵史（平成17年度）

主幹兼総務担当リーダー 高山 正信（平成18年度）

調査第一課長 高山 富雄（平成17～18年度）

主幹兼調査第二係長・担当リーダー

音付 和樹（平成17～18年度）

（調査・報告書担当）

調査第一課調査第二担当

主査 土屋 雄毅（平成18年度）

同 主事 三品 典生（平成17～18年度）

2 調査の成果

調査の経過と基本層序 池ノ下遺跡の調査は、第1次（平成17年度）と第2次（同18年度）にわたり、調査区A（1,200m²）とその北側斜面の調査区B（100m²）および南側の水田部分の調査区C（24m²）の3地点を対象とした。遺物はトータルステーションによる記録後に取り上げた。

調査の手順は、重機による表土除去の後、第III層上面で遺構検出を行った後、遺物包含層である第V層を中心には包含層掘削を行った。調査区Aでは小規模な山塊の崩落が頻繁に起きたことが土層断面から読み取れ、北側ではその影響からか、層の堆積が良好ではなかった。

遺構は、第III層上面でピット、溝状遺構が検出されたが、いずれも出土遺物ではなく、詳細な時期及び機能の特徴は困難である。遺物は、第IV層で滑石片及び土製品、第V層で角錐状石器が出土した。

一方、調査区B・Cでは層の堆積が良好ではなく、遺構及び遺物は認められなかった。

出土遺物 調査区Aの第V層上部より出土した角錐状石器を図化掲載した。なお、調査区周辺では、打製石斧や剥片、弥生土器片等が採集されている。

角錐状石器（第195図）

後期旧石器時代の石器である。最大長7.4cm、最大幅2.0cm、最大厚1.4cmの珪質頁岩製で、重量は17.8gを量る。断面形は、三角形を呈しており、右側面に加工を施している。裏面基部に大きな剥離が見られる。右側縁上部に細かい調整が施され、右側面に裏面からの剥離と稜上からの剥離が見られる。外形は概ね左右対称である。先端部は欠損している。

3まとめ

後期旧石器時代の遺物として第V層上部（暗褐色土）で角錐状石器が出土したが、遺構は検出されなかつた。この角錐状石器は、様々な形態から船底形石器、三稜尖頭器などのいくつかの分類名称が与えられていた。最近の研究により、森先一貴氏は、角錐状石器の技術的形態的多様性を確認し、その特徴から角錐状石器を（1）角錐状尖頭器（2）複刃厚形削器（3）厚形石錐の3つに分類しているが、この分類に本遺跡の角錐状石器を当てはめると、左右対称形、正面觀・側面觀とも一端が尖鋭化しており、刺突機能が推定されるなどの特徴に当たはまる「角錐状尖頭器」に分類される。

日向市における角錐状石器の出土例は、寺ノ下遺跡で流紋岩製が2点、市町村合併により日向市となった旧東郷町のハッジ遺跡で頁岩製が1点出土している。日向市にも数多くの遺跡が所在するが、角錐状石器の出土例は少ないとから、本遺跡の角錐状石器は貴重な出土例となった。

層位	土層の特徴
第I層	黒褐色土 (Hue10YR2/2) 表土。しまりではなく、 ボロボロと崩れやすい。 北側ほど疊れを多く含む。
第II層	黒色土 (Hue10YR2/1) ややしまりがあり、弱い 粘性をもつ。第I層同様 北側は疊れを多く含む。
第III層	鬼界アカホヤ火山灰 (Hue7.5YR6/8) しまりがあり、下部には 橙色粒を含む。
第IV層	黒色土 (Hue10YR2/1) しまりがあり、粘性をもつ。 やや湿り気がある。 砂質層
第V層	暗褐色土 (Hue10YR3/1) しまりがあり、粘性をもつ。 角錐状石器が出土。
第VI層	にぶい黄褐色土 (Hue10YR4/3) しまりがあり、強い粘 性をもつ。白色粒子を 含む。

基本土層

本遺跡の角錐状石器を観察すると、わずかに先端部分が欠損しているが、欠損の状況から製作段階ではなく、使用段階に欠損した可能性がある。このような状況と周辺から剥片類の出土が認められないことを考慮すると、出土した角錐状石器は異なった場所で製作された後、本遺跡で使用され、再生されることなく遺棄されたものであると考えられる。そのような使用方法としては狩猟が考えられ、本遺跡は狩猟場として利用されていた可能性が高い。また1kmほど南の秋留遺跡からも槍先と考えられる剥片尖頭器が採集されており、周辺一帯に旧石器時代の人々の活動がうかがえる。その点では単独出土ではあるが貴重なものであると言える。
（土屋）

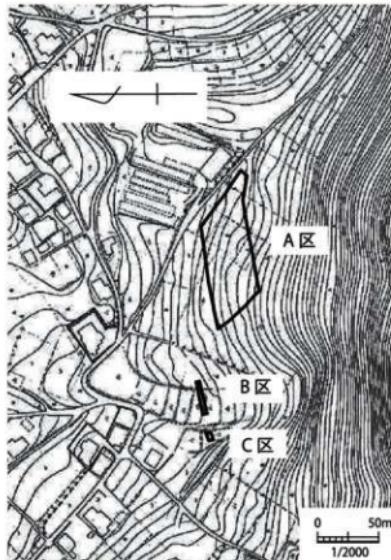
【参考文献】

宮崎県文化財センター発掘調査報告書第132集「北九州市門司区門司~日向町 門司城跡」2006

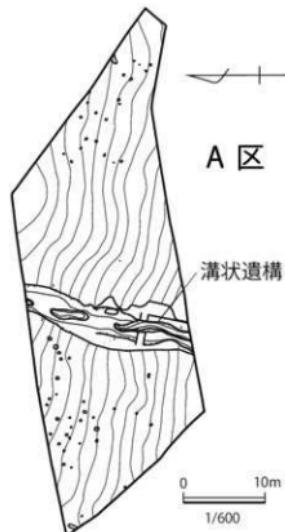
宮崎県文化財センター発掘調査報告書第139集「分岐遺跡」2006

宮崎県文化財センター発掘調査報告書第176集「般平遺跡」2008

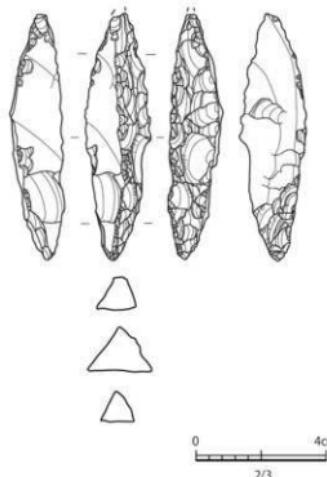
森先一貴「角錐状石器の分布範囲と地質変遷」田中石器研究第3号 2007



第195図 池ノ下遺跡 全体図



第196図 調査区A 平面図



第197図 角錐状石器 実測図

補記 コスト縮減に伴う未調査箇所について

東九州自動車道（門川～日向間）には、7か所の遺跡が確認されている。これまでにそのほとんどは記録保存の措置（発掘調査）等を終えているが、遺跡の一部が、暫定2車線化に伴うコスト縮減またはその他の事情により、記録保存の措置を執らずに残されている箇所が数箇所ある。将来の4車線化に備えて以下に記述しておく。

分蔵遺跡（門川町大字門川尾末）

いわゆる限定協議の結果、橋脚部分のみの発掘調査を行った。したがって、橋脚以外の用地内には遺物包含層が残存している。

塩見城跡・中山遺跡（日向市大字塩見 第198図）

この2遺跡は、本文中に記述してあるように、中世「塩見城」の城域の中にある。このうち塩見城跡（図中北半部分）は、本来4車線の高速道路が暫定2車線での開通となることから、東側のコスト縮減部分（網掛け部分）の調査を留保している。

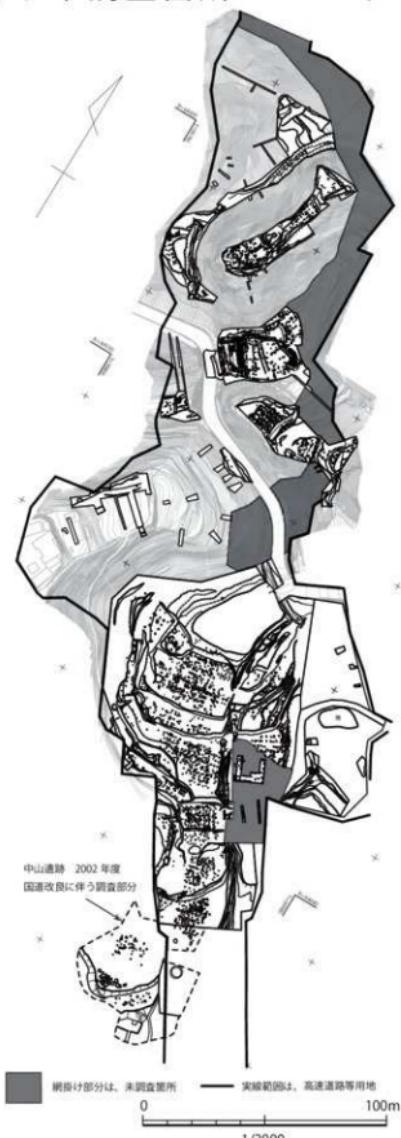
また、中山遺跡（図中南半部分）は、オープンカットに伴う4車線幅での発掘調査中に工事の設計変更が行われ、コスト縮減により約850mの調査が留保された。前者には空堀、帶曲輪、曲輪等が残存し、後者には道路状遺構、曲輪及びその中に多数のピット（柱穴）が残存している。ともに将来の4車線化時には記録保存の措置が必要となる。

板平遺跡（日向市大字富高 第199図）

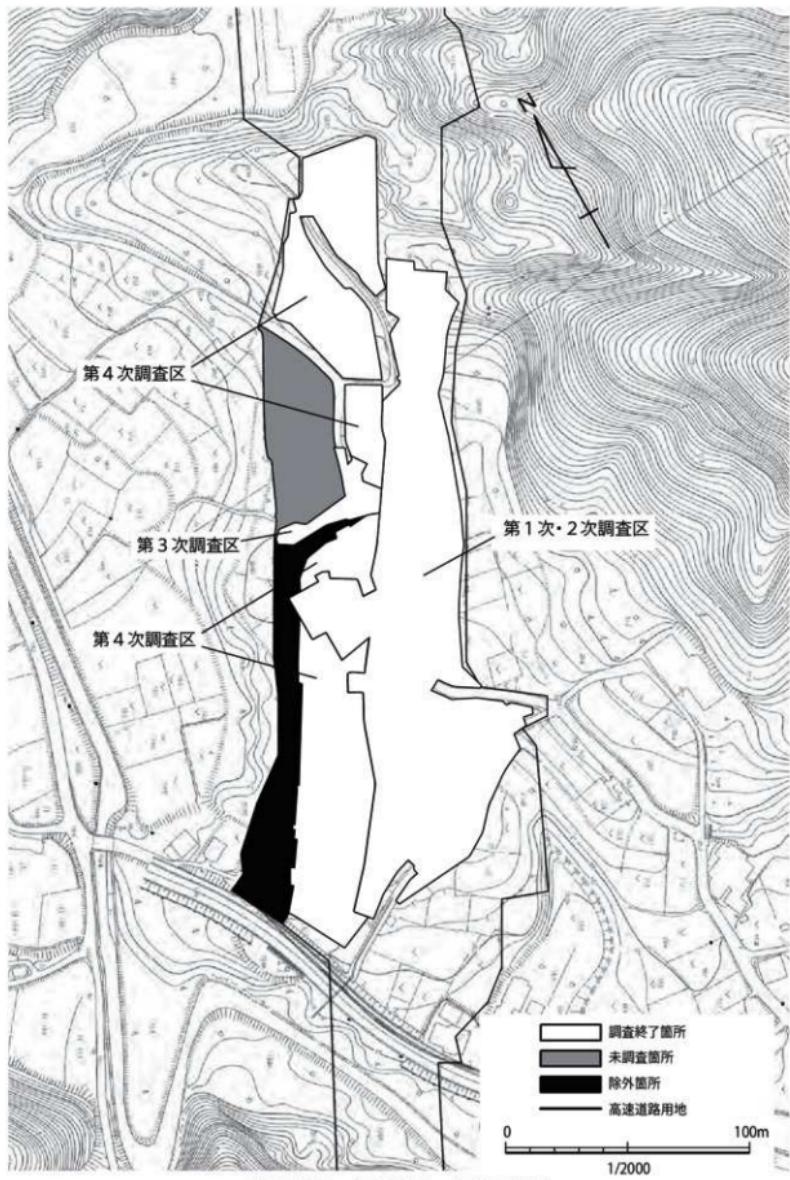
板平遺跡は、当初、暫定2車線部分及び側道部分の調査となっていた。その後、側道部分の計画変更や舗装工事に伴うソイルプランツ及び材料ストックヤードの建設等追加調査が実施され、4車線幅のほとんどが調査された。ただし、側道の変更に伴う未調査箇所（図中薄い網掛け部分）が一部残存している。将来、当初設計通りの側道施工や4車線化が実施される際は、記録保存の措置が必要となる。

なお、この第199図は、当センター刊行の発掘調査報告書第199集『板平遺跡（第3・4次調査）』の第2図に誤謬があったため、加筆訂正したものである。

（著付）



第198図 塩見城跡 未調査箇所



第199図 板平遺跡 未調査箇所

写真図版



塙見城から冠岳方面を望む (2006年11月)



西側曲輪群の俯瞰 (2008年8月)

西側曲輪群の調査 (1)



段状に連なる曲輪群（曲輪 A1-A3）



曲輪 A1 の土層堆積（北から）



曲輪 A1 検出の巨礫群と柱穴（南から）

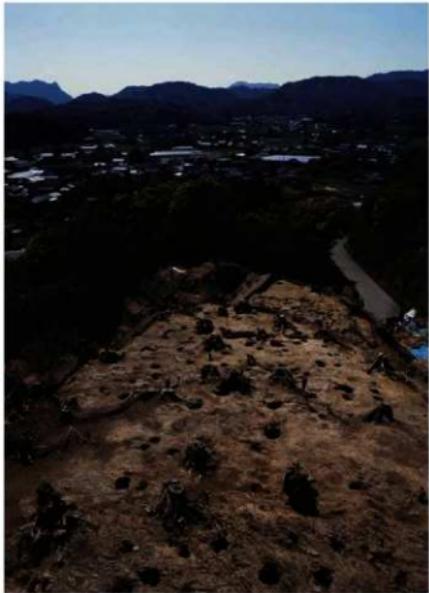


堀切 A1 の土層堆積（南から）



曲輪 A1 に到る通路面（南から）

西側曲輪群の調査 (2)



曲輪 A2 から曲輪 A4 方向を望む（東から）



曲輪 A3 の柱穴集中域と空白域



曲輪 A3 の柱穴群（曲輪 A2 側より）



曲輪 A3 の土層堆積（北側法面）



火を用いた痕跡（曲輪 A3 東から）



帯曲輪 A3a の検出状況（東から）

西側曲輪群の調査 (3)



堀切 A3 完掘状況（北から）



越えるに難し堀切 A3（西から）



堀切 A3 の土橋状部分（北から）



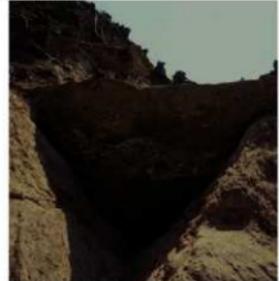
堀切 A3 を底面から望む（北から）



堀底の石臼(1151)出土状況（北から）



堀切 A3 の土層堆積（中央部分）



堀切 A3 の土層堆積（北側部分）

西側曲輪群の調査(4)



曲輪 A4 調査前の状況（北から）



曲輪 A4 の土壁と平坦面（西から）



曲輪 A4 南側斜面の帶曲輪 A4（南から）



曲輪 A4 の掘立柱建物跡（北から）



曲輪 A3 SB12 柱穴内遺物（236）



曲輪 A3 SB14 柱穴内遺物（243）



帶曲輪 A3b の構列（西から）

西側曲輪群の調査(5)

写真図版 6



曲輪 B 群全景

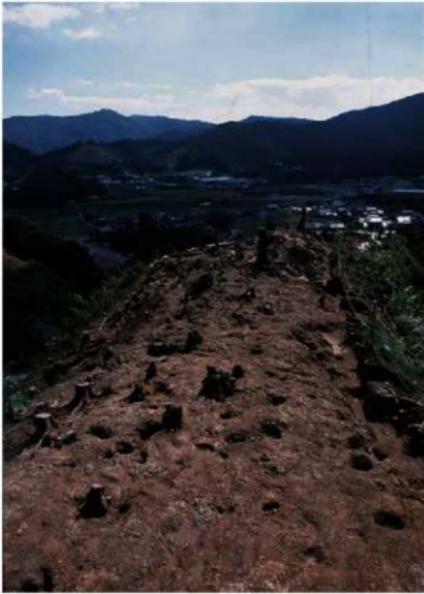


曲輪 B3 と曲輪 B4 の位置関係（水の手曲輪から）

西側曲輪群の調査 (6)



曲輪 B1～B3 の立地（南から）



曲輪 B2 全景（北から）



曲輪 B1 東側の通路面（南から）



曲輪 B4 全景（曲輪 B3 より）



曲輪 B4 SB1・2 検出状況（北から）



SB1・2 身舎内の焼土（南から）

西側曲輪群の調査(7)

写真図版 8



横堀全景 (堀切 B4 から豎堀 C1b 方向を見る)



豎堀 C1b から曲輪 B4 方向を望む



曲輪 C 群と曲輪 B1 との関係 (横堀・豎堀を間にはさむ)



豎堀 C1b の階段面 (南から)



堀切 C1 の土層堆積状況 (南から)



豎堀 C1a の完掘状況 (北から)

西側曲輪群の調査 (8)



横堀から曲輪 B4・堀切 B4 を望む（北から）



堀切 B4 の収束部分と土層堆積（北から）



堀切 B4 から豊堀 B4 を望む（北から）



堀切 B4 土層堆積状況（中央部）



曲輪 C 群全景



曲輪 C1 より北側の曲輪群（南から）

西側曲輪群の調査(9)



2号溝状遺構と2号石積遺構の位置関係（西から）



木杭の上に堆積する焼土・炭化物層（窪地状遺構Ⅰ区）



窪地状遺構内の土層堆積状況（Ⅰ区）



窪地状遺構内の土層堆積状況（Ⅰ区東端）



「やえん」を用いた排土の運搬（2008年2月）

西側曲輪群の調査(10)



2号石積遺構 (SS2) 全景 (東から)



SS2 全面の土層堆積状況 (西から)



SS2 石積み東端部と木杭列 (西から)



SS2 石積み中央部分の状況 (南から)



SS2 の胴木施設 (南から)

西側曲輪群の調査 (11)

写真図版 12



2号溝状遺構(SE2)全景(東から)



SE2内の木柱(杭)検出状況



SE2を覆う盛土層(北から)



SE2内の木製品出土状況(北から)



SE3北側の木杭(1037)



SE3北側の木杭(1030)



SE2内出土の木製桶(943-945)



現地説明会の様子(南側曲輪群:2006年2月)

西側曲輪群の調査(12)



木枠併用の石組井戸（SF1-a期）



台形状の石敷（疊）部をもつ井戸（SF1-b期）＊井戸枠はC期の井戸枠も含まれている。

西側曲輪群の調査(13)



水の手曲輪(第V期面)と曲輪A群(西から)



曲輪B3からみた水の手曲輪(第V期面)

西側曲輪群の調査(14)



1号石積遺構 (SS1) の石積み部 (東から)



SS1 とその周辺 (東から)

西側曲輪群の調査 (15)



平面構造



立面構造 (1号堀より)



立面構造 (2号堀より)

SS1 のオルソ画像

西側曲輪群の調査 (16)